

義又同胞相愛の我が國風に就いて感話をなし、日本國民精神の透徹作興を圖る

三 學校に在りては左記配意す
イ 十二月二十五日以前に於て冬期休暇となつた地方にありては、その學期最終日に感話

△十二月二十六日(火)
在支在滿の郷土將兵に感謝慰問狀、慰問袋等の發送及家族の近況、銃後の護の狀況等を通信す。

△十二月二十六日(火)
在支在滿の郷土將兵に感謝慰問狀、慰問袋等の發送及家族の近況、銃後の護の狀況等を通信す。

腸チフス	患者 一、五八	死者 二四三
デフテリア	二、三五	二八四
バラチフス	二、四三	三
痘瘡	二	三
赤痢	五九	一
流行性腦脊髄膜炎	一七五	九二

狹紅熱 一、〇五
計 五、八三
死産と性別と割合 七三

五歳以下幼児死亡
計 十二人
昭和十三年 十三人

計	二、〇三〇	四、〇〇八
男	二、〇三〇	三、六〇〇
女	四、四五四	三、八四〇
總死亡	五、六八	五、七〇
一歳	一、〇一九	八、九五九
二歳	五、三三〇	五、〇四
三歳	二、六三三	二、五九一
四歳	一、三三三	一、三〇九
五歳	八七九	八七〇
計	二〇、二八四	一八、七四三
總死亡百に付幼児死亡	三、五三	三、五三
醫師其他(十四年末)	男 一、九七九	女 六
醫師	一、九七九	六
齒科醫師	七〇二	五
藥劑師	六五	一
產婆	一四六	一
藥種商	八七五	一
製藥者	一五	一

病院 (十五年三月)

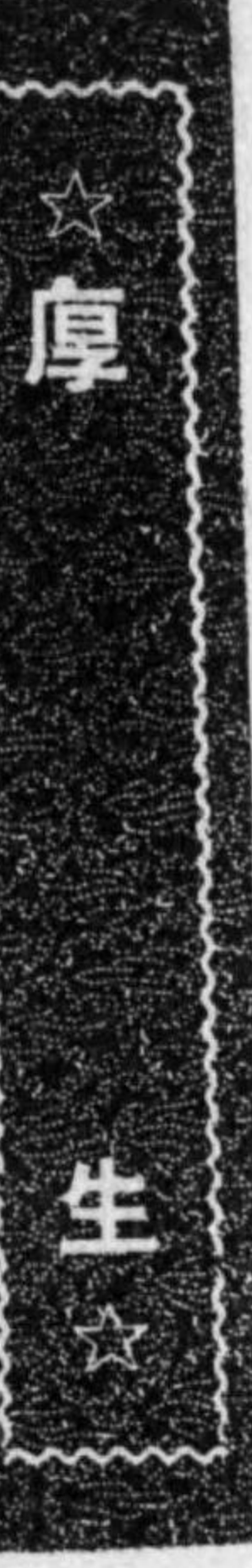
△普通	一、〇六
公立	一、〇六
私立	一、〇六
公私立施療	一、〇六
精神病院	一、〇六
結核病院	一、〇六
△傳染病	一、〇六
傳染病院	一、〇六
隔離病舎	一、〇六
公私立病院	一、〇六
附屬傳染病室	一、〇六

一萬人對比結核死亡

昭和十一年	同十二年	同十三年
帯廣市	三三、一八	三三、八七
旭川市	二四、九六	二五、九六
札幌市	三四、五一	二六、七四
小樽市	四四、〇五	四七、二〇
函館市	三七、五九	三五、九六
室蘭市	三二、二九	二九、三九
醫師の居らない村	三七、一五	二九、〇四
年七月末現在で、道内二百七十		
三市町村のうち、醫師のゐない		
村は二十五もある、これらの無		

診療所 (昭和十四年)

計	一、〇六
市	一、〇六
町	一、〇六
村	一、〇六
計	一、〇六
トラホーム(十四年)	一、〇六
接客業者	一、〇六
工場従業者	一、〇六
現住民(壯丁を含む)	一、〇六



寒冷期の疾病

農山漁村を診断す

恩賜財團濟生會の巡回診療は昭和十五年は本道の約半歳にわたる寒冷生活中最も酷寒の季節である一月及二月において實施せられたのであるが、その對象とした部落は、何れも交通不便で、醫療に恵まれぬ、いはゆる無醫村部落であつて、その結果は左の通り要約された。

一 農山村及び農漁村における部落當りの平均患者数は、農漁村の方がかなり多くなつてゐる。
二 患者数の男女別割合は、農山村及び農漁村共に女子は男子に比し遙かに多く、その多い割合もほぼ同じである。
三 罹患率を年齢階級別に見れば、農山村及び農漁村共に概ね乳幼児期及び兒童期の如き

四 罹患率の年齢的關係を男女別に見る時もまた農山村及び農漁村ともに同狀態で、乳幼児期及び學童期の如き低年齢階級では、男子において著しく高率であるが、青、壯、中、老の各年齢階級では、女子において高率であり、就中、青壯年期において著しい。
五 農山村及び農漁村における主なる疾病は、ともに消化器疾患、呼吸器疾患、神経痛、感冒、眼疾患等で、その他の疾病の罹患状態を見るも、兩地方ともにほぼ同様であつて著しい差異は認め難い。
六 主なる疾病の罹患率を男女別に見る時、農山村において呼吸器疾患、眼疾患、感冒、

七 各疾病の年齢的關係を注目すべき疾病について見るに、結核性疾患は青年期及び學童期、感冒は學童期及び乳幼児期、神経痛は老年期及び壯年期、眼疾患は學童期及び老年期、氣管枝炎は乳幼児期及び老年期、胃腸炎は老年期及び乳幼児期の如き年齢階級において夫々高率となつてゐる。
八 各年齢階級における疾病の罹患率を見るに、その主なるものを挙げれば、乳幼児期においては氣管枝炎、感冒及び胃腸炎、學童期においては眼疾患及び感冒、青年期においては鼻咽喉疾患及び神経痛、壯年期においては神経痛及び胃腸炎、中年期においては神経痛及び胃腸炎、老年期においては神経痛、高血壓及び胃腸炎等である。

優良多子家庭表彰
一 趣旨
堅實なる家庭を營み、子女を健全に育成するは、國民生活の根幹たる家庭の基礎を鞏固ならしめ、國本の培養に寄與する所以なり、殊に多數の子女を擁し、之が養育を全うするは、一般の龜鑑となすに足るものとす、仍て之等の家庭を表彰し、以て兒童愛護精神の昂揚を圖り、家族制度の確保と國運の隆昌に資せんとす。

被表彰者は左の各號に該當し他の模範とするに足る家庭の父母とす、但し父又は母なきときは其の現に在る一方とす。
1 父母を同じうする満六歳以上の嫡出の子女十人以上を自ら育成したること
2 子女(六歳未満の子女をも含む以上之に同じ)中死亡したる者無きこと、但し戦役事變に因り、又は天災

- 地變等避くべからざる事由に因り死亡したる者は、之を生存者と看做すこと
- 子女は何れも心身共に健全なること、但し戦役事變に因り、又は天災地變等、避くべからざる事由に因り健全ならざるに至りたる者は、之を健全なる者と看做すこと
- 父母及子女は何れも性行善良にして其の家庭堅實なること

乳幼児の保護

- 一 乳幼児の健康診査実施市町村に於ては、乳幼児診査名簿を作成し置くこと。
- 二 指導醫一人當半日の診査乳幼児は五十人を限度とする事、但し土地の状況又は特別の事由に依り本項に據り難き

- ときは、其の限度を超過するも妨げず。
- 三 疾病其の他特別の事情に依り一齊診査を受くること能はざりし者に對しては、後日指導醫の許に赴かしむる等、可成漏なく診査を受けしむること。
- 四 健康相談の實施
 - 1 健康相談の對象
 - イ 一齊診査を受くべき範圍の乳幼児
 - ロ 昭和十五年中の出生兒
 - 2 健康相談の實施方法
 - イ、に該當する者に付ては一齊診査實施後、適當なる時期を選定し年度内二回は三箇月毎に一回實施すること。
- 五 巡回指導醫の設置
 - 各市町村に於ては、母性及乳幼児の體力向上指導の爲め、巡回指導醫(以下單に指導醫と稱す)を設置すること。
 - 指導醫は市役所、町村役場を本據とし指導醫、保健所其の

他各保健施設と密接なる聯絡をとり、擔任區域を巡回し、母性及乳幼児の指導に努むること。

指導醫は各市町村に於ける開業産婆中より、左の諸點に留意銓衡のこと。但し其の區域内に適當なる指導醫を得難き事情あるものは、隣接町村に居住する産婆を委嘱するも可なり。

イ 指導醫の銓衡に當りては、克く市町村内に於ける産婆會又は産婆聯合會と連絡協調を遂げ、其の人選にして偏頗の識を受け又は物議を醸すが如きことなき様留意すること。

ロ 指導醫の数は乳幼児健康指導醫と同數たること、但し特別の事由あるものは其の數を超過するも妨げず。

児童愛護運動

恩賜財團愛育會と提携、道内に離乳期児童愛護調査村として左記十村を指定、昭和十四年十二月一日より三十一日まで一箇月に互り、小學校長教職員、醫師、産婆、巡回看護婦の外、小學校高等科女生徒、女子青年團員等を動員して、村内の乳幼児特別に生後、六箇月乃至一年六箇月の所謂離乳期にある幼児の榮養の種類、方法及びこれと直接關聯する事項に互り詳細な調査を行つた。

(石狩)厚田村(渡島)尾札部村、龜田村(檜山)貝取洞村(膽振)鶴川村、厚真村(日高)三石村、平取村(十勝)士幌村、御影村

一名 稱 紀元二千六百年紀念児童愛護運動

二 目的 光輝ある紀元二千六百年に當り、普く児童愛護精神の昂揚徹底を圖ると共に、児童に對

し、肇國の大精神を深く感受せしめ、以て國本の培養に資し、興亞の大業を冀贊せんとす。

- 三、期 日 昭和十五年五月を實施期間とし、五月五日前後を特別記念行事の中心とす、但し地方の實情に依り適宜伸縮す。
- 四、主 催 北海道社會事業協會、軍人援護會北海道支部、愛國婦人會北海道支部、市町村
- 特に留意せる事項
 - 1 戦及軍人遺族、出征軍人の家族の児童保護
 - 2 就勞婦人(内職婦人を含む)並に就勞少年の保護
 - 3 農山漁村に於ける母性並に児童の保護
 - 4 股販産業地帯に於ける母性並に児童の保護
 - 5 多子家族の保護
 - 6 児童に對する榮養品並に必需物資の補給
 - 7 児童不良化防止並に保護
 - 8 児童愛護に關する適正なる知識の普及、並に児童愛

- 護施設の活用を一般に周知徹底せしむる爲、各種會合、催物の開催等適當なる方法を講ずる。
- 9 妊産婦健康相談、児童審査會、児童健康相談會、教養相談會等を催す。
- 10 児童愛護上弊害ありと認むる地方風習を指摘し、之が改善の方途を講ずる。
- 11 要保護母性並に児童の實情を調査し、之が適正なる保護の方途を講ずる。
- 12 児童愛護に關する各地方特別研究會(又は座談會)を開催し、其の記録を適宜發表す。
- 13 児童を對象として保護、教養、慰安、娛樂等の爲、各種の催をなす。

兒童結核早期発見 聖旨奉體記念事業の一として昭和十二年四月より、指定尋常小學校第六學年の児童に對し結核の早期発見、早期治療を目的とし、健康診断を施行したるに十四年度に於て檢診兒童總數一六、九〇六名(市部一五、八二

四名、町村部一、〇八二名)中、病變者並に要注意兒童五六五名(市部五二二名、町村部四三名)を發見したる實情に鑑み、昭和十五年も引續き小學校を指定し尋常六年兒童の檢診を左記要領に依り施行した。

一 道廳より派遣の檢診班は道廳班、健康相談所班又は、保健所班とし醫師一名、看護婦一名を以て組織し、郡部小學校は出張、赤血球沈降速度の判定、咯痰の檢査及X線檢査を施行す。

二 結核罹患兒童並に要注意兒童に對しては、學校當局に於て學校醫及各家庭と緊密なる連絡養護に努め、本事業の目的たる早期発見と早期治療の實を擧ぐる様盡力す。

學校給食實施

昭和十五年五月二十八日、北海道廳訓令を以て、學校給食獎勵規程公布されたが、これは小學校児童體位の現狀に鑑み、學校に於て適切な榮養給食を行

- ひ、以て児童の榮養を改善し、體位の向上を圖らんとする趣旨で之が實施に關しては、左記事項に留意してゐる。
- 一 給食を必要とする児童は、概ね左の標準に據り學校醫の意見を徴し、學校長之を定むること
 - イ 榮養不良なる者
 - ロ 身體虛弱なる者
 - ハ 偏食の習癖ある者
 - ニ 其の他給食を必要とする者
- 二 食費は一食分凡ソ金六錢を標準とすること、但し市町村の狀況に依り單價を下げ、副食物のみを給食するも妨げなきこと
- 三 學校給食の實施は、學校當事者が直接之に當るの外、便宜保護者會其の他の團體をして之を援助せしむることを得ること
- 四 給食に要する食物の量は、兒童一日の所要熱量の三分の一を標準とし、且榮養上の缺陷に留意して之が補給に力むること

- 五 土地の状況、地方的習慣、食糧の生産等の關係を考慮し地方に於て常食とする食物の種類並に従来の慣行を尊重して、食事の獻立を作製すること
- 六 食器、鍋釜、調理場、食堂等は常に清潔を保たしめ、防蠅其の他の衛生事項に留意すること
- 七 給食に際しては食事の作法に留意し、咀嚼を十分にし偏食を矯正する等、食事の訓練の實を擧ぐるに努むるの外、廣く教育との關聯に留意し、其の教育上の効果を期すること
- 八 學校醫をして必要に應じ給食兒童の身體検査を行はしめ衛生養護に留意せしむると共に、獻立の作製に關しても適當なる指導を爲さしむること
- 九 全校の兒童に對し榮養給食を實施する場合に於ても前各項に準じて之を行ふこと
- 一〇 保護者の生活程度等を考慮し、食費の一部又は全部を徴收するも妨げなきこと

- 一 就學獎勵の趣旨を以て、學校に於て晝食を給する場合に於ても、成るべく本施設と併せて之を行ふこと
- 二 盲學校、聾學校初等部の兒童に對しても、小學校兒童に準じ、學校給食を實施すること
- 三 已むを得ざる場合に於ては、交付金の一部を以て食器鍋釜の類を調達し差支なきもなるべく本經費に依らざる市町村費を以て購入すること
- 四 調理に要する薪炭費等は本經費以外の市町村費に依ること
- 五 本交付金は學校給食に關する事務費には使用し得ざる

第三條 市町村は前條の交付金に相當の支出金を加へ給食を必要とする兒童に學校給食を行ふべし

第四條 市町村は第二條の交付金の一部又は全部を基礎鞏固にして學校給食を行ふに適當なる公益團體に交付し學校給食の施設を行はしむることを得

第五條 學校給食に關し必要なる事項の調査指導に當らしむる爲學校給食委員會を設置す(本令は北海道廳の手で昭和十五年度より之を施行す)

三九八

躁鬱病 八例
精神薄弱 五例
癩病 一例
計 四〇例

で、これ等家系中の精神病は二百七十一名に及び、これを内譯すると

精神變質者 八六
分裂病 七二
精神薄弱 五四
躁鬱病 一八
癩病 八
計 二三

診斷不明の精神病 三三

である、又前記家系中、罪を犯した者、或は酒精中毒等病的な者の例を見ると

自殺者 四名
浮浪行方不明 九名
酒精濫用又は中毒 二八名
賣笑又は酌婦 二名
犯罪者 四名
啞者 一名
死産兒 一三名
双生兒 二例
早死者 一八六名

等で、早死者最も多く、次がアル中、死産兒の順位となつてゐる

遺傳病の調査

北海道廳では昭和十四年中、一家系五代、四十家系につき遺傳病の實地調査を行ひ、就中、精神の遺傳事實及其の程度に主眼を注ぎ研究に當つてゐたところ、左の結果を得た。それによると、調査された總員は四十家系二千六百三十九人で、調査別に見ると

精神分裂病 二六例

る、一方これ等家系中、優秀な才能を持ち、普通人を凌駕した者も相當多く六十三名が社會的秀れた地位にあつた、此内優良兒童は二十九名、優秀者三十四名で、優秀者の中にはその後異常を起したものは八名であつた優秀者の職別を示すと

教諭 五名
技師 四名
醫師 五名
官吏(課長) 五名

村長、判事、及び銀行家、軍人、農學士各一名等で、面白いことは劣等兒、優秀兒共に同數の二十九名で、病者は、總員の一〇%以上を上り、平均一家五代についてみれば七人弱、優秀者は二人半で、この調査の結果は犯罪者、聾啞、盲人、畸形等が豫想外に少數であつた。

病勢調査實施要綱

一 目的及内容 國民の保健衛生並に醫療制度改善に資せんが爲、診療機關(齒科を除く)を通じて罹病状況を調査し、且其完備徹底を期す。

二 時期 昭和十五年四月十日

三 調査範圍 醫師會員並に官公署、各種會社工場、其の他醫師に非ざる者の經營に係る一切の診療所(健康相談所等を含む)の取扱ふ傷病者を

農村榮養改善運動

一 實施聚落の指導

イ 次年度に於て全町村に實施せんとする熱意と用意ある町村内關係團體(町村、農會、産業組合)一致の推薦に係る實施聚落代表者(又は關係團體代表者)に對し、各支廳毎に一ヶ所宛毎月一回實習會を開設し、六ヶ月間講師を派遣すること

ロ 實習代表者は實施聚落の主婦一同に對し、町村關係團體援助の下に再傳習をなすこと

ハ 郡農會に於て實習會を開設したる場合補助金を交付すること

ニ 實施町村の指導

イ 全町村に實施する場合は町村關係團體の開設する農事實行組合代表者實習會に對し毎月一回六ヶ月間講師を派遣すること

ロ 實習代表者は各農事實行組合に於て主婦一同に對し、町村内關係團體援助の下に再傳習をなすこと

三 農村榮養改善講習會の開催

北海道農會に於て農會職員に對し理論を主とした講習會を開催したる場合、補助金を交付すること

昭和十四年度農村榮養獻立實施聚落

戸數	實施期間
新篠津村	二四 六一十二月
砂川町	三五 五一十一月
江部乙村	一九 五一十一月
東鷹栖村	二〇 五一十一月
比布村	二二 五一十一月
俱知安町	一一 八一二月
泊村	二三 八一二月
長萬部村	二八 八一二月
壯龍村	一八 八一二月
鹿追村	一七 六一十二月
常呂村	一五 六一十二月
中頓別村	二一 六一十二月

結核豫防會の支部

長くも皇后陛下の優渥なる令

目を賜ひ御内帑金を拜受した北海道廳では、昭和十五年、財團法人結核豫防會北海道支部を設立し、各種の事業を目論んでゐるが、同年中、結核豫防模範地區を設定、札幌の一區域を劃して「結核豫防模範地區」と定め各般の施設を行ふ事となつた。その重なるもの左の如し

△健康相談△療養指導△虛弱兒童の養護△榮養の改善△住宅の改善結核豫防の智識普及△労働條件の改善△作業環境の改善△衛生細菌學的検査△病學的検査△消毒の實施及び指導

呼吸器系統の疾患

北大一學生一、〇二九
休學 七一 退學 八〇
死亡 一六(十四年冬の調)

十五年防疫施設

豫防注射並に内服薬の服用
腸チフス、パラチフスの豫防注射
右を奨励し注射し難き者に對しては内服薬を服用せしめること、注射液は道廳製品を無料交付す

三九九

ロ 赤痢内服薬
工業、鑛山地帯に稼働者の出入繁盛を極め居る現況より見て、十五年は赤痢の流行を豫測し、集團場所における豫防方法として内服薬の服用を奨励す

ハ チフテリア豫防注射
右注射を毎年第一期種痘該當者に施行する方法を執るときは容易に施行し得るものに付充分奨励す

ニ コレラ豫防注射
支那方面コレラ流行地との出入船舶増加しつつあるに付、海上生活者船舶關係者にコレラ豫防注射を施行せしむること

ホ 流行性腦脊髄膜炎豫防注射
本病豫防注射を施行し成績良好の事例あるに付、流行地に於ては之が注射を施行す

二 種痘施行
公種痘は未種痘者なき様注意し、支那滿洲方面と密接なる關係を有するものに對し、種

痘接種方奨励す

三 前年患家の消毒的清潔方法
昭和十四年中の患家の消毒的清潔方法を施行せしむ

四 消毒演習
消毒の徹底を期する爲、市町村吏員、衛生組合役員等關係者集合消毒演習を爲すこと

五 講習、講話會
衛生關係者教養の爲、講習會、又は一般に講話會等を開催せしむ

六 保菌調査
イ 患者發生の場合、患家々人及必要と認むる者の保菌調査を施行せしむ
ロ 患者轉歸の場合には必ず可檢物を最寄細菌検査所に送付し、病後保菌者を放任せざる様注意す

ハ 毎年四月、十月の兩月は集團場所の賄人接客業者の調理人に對し検査を施行し又之等賄人調理人及水道關係者等の交替に保菌調査を爲さしむる様奨励す

北海道廳學務部社會課技師林

信治氏の、北海道における工場鑛山並に交通勞務者の梅毒の蔓延状態に關する最近の調査を左に示す。

一 男子二、〇〇三名、女子三九一名のワ氏並にザ氏反應に依る陽性率は男子に於て一・四%、女子に於て七・九%なり。

二 業態別に依る男女の平均陽性率は鑛山の一九・二%最も高く次いで工場の九・二%にして最も少きは交通關係の七・一%なり。尙工場に在りては雜工場の一・七%最も多く最も少きは流石に飲食物工場に於て著しく高率なるは鑛山地帯の特種環境たるは勿論なるも鑛山勞務者は工場その他の勞務者に比し其の作業條件が然らしむる性格上の相違を窺知せしむるものと云ふべし。

三 居住地別に依る陽性率に於ても亦前述の如く鑛山地方最も高率にして一九・二%を示し都市及び農村地方は遙かに

四〇〇

少し。而して農村地方は八・九%なるを以て都市の八・六%に比し稍々多く、尙農村地方は女子が高率を示す。又十萬以上の都市に於ける陽性率は其の都市の人口に比例す。即ち函館市の一〇・五%が最高にして次いで札幌市の八・四%、小樽市の七・八%の順位となる。

四 年齢別に依る陽性率は二〇歳以下に於て既に男子四・七%、女子二・〇%を示し之等は概ね先天性梅毒を疑はしむるものと謂ふべく、陽性率は男女共に年齢の増加に比例し漸次高率となり其の最高率は男子にありては三六歳より四〇歳に至る年齢階級、女子にありては三一歳より三五歳に至る年齢階級なり。即ち男子一九・六%、女子一九・四%にして略々同率を示し、其の後は各年齢の増加に反比例して次第に低率となる傾向を示す。

五 既婚及び未婚との關係は男女共に既婚者に於て遙かに高

率を示し、就中女子に於ては未婚者僅かに一・六%に對し既婚者一七・一%の多きに達するも男子に於ては既婚者一三・五%に對し未婚者八・一%の如く比較的高率を示す。而して未婚女子の著しく低率なるは女子に於ける感染の大部分は結婚に依るものと解すべきなり。

六 教育程度と陽性率との關係は全く相反比例する關係にあり、即ち無教育者最も高率にして教育程度の進むに従ひ順次低率となり、中等學校卒業以上の者に至りて最も低率となる。但し男子に於ける中等學校中途退學者は尋常小學校中途退學者と略同様の高率を示すも此の理由に關しては前項に於て詳述せる故茲に省略す。

七 飲酒と陽性率との關係は酒を毎日飲用する者二〇・三%にして最も高率を示し、時々飲用する者之に次ぎ最も少きは全く飲まざる者の六・一%なり。故に飲酒は本病の感染

に密接なる關係有るを示すものなり。

八 男子陽性者と収入別の關係を見るに本調査の對象たる勞務者に於ける陽性率は其の収入に比例す。即ち収入の増額に比例し次第に高率となる。但し日額二圓以上の者にありて著しく低率となるも、之は恐らく其の収入に於ける經濟的餘裕が對者を選択せしむる結果と解すべきなり。

九 採血當時に於て認め得たる梅毒症候は其の先天性と認めたる者男子二・六%、女子三・四%にして後天性の者は男子三六・四%、女子四一・四%にして何等症候を訴へざりし者は其の半數以上に達す。即ち男子六一・〇%にして女子五五・二%なり。故に陽性者の半數は潜伏性に經過しつゝある者と謂ふべきなり。

一〇 陽性者の治療状況を見るに梅毒性疾患として比較的適正なる治療を受けたる者僅かに二六・一%に過ぎず、而して何等の治療を受けざる者四

年齢別身體検査表

年齢	身長 ㎝		體重 kg		胸圍 ㎝		坐高 ㎝	
	男	女	男	女	男	女	男	女
一三	全道平均	一四二・六	一四・四	一四・四	三六・二	三六・二	六一・三	七九
一四	全道平均	一四六・九	一四・八	一四・八	三八・八	三八・八	六一・四	八〇・四
一五	全道平均	一四九・四	一五・〇	一五・〇	四一・一	四一・一	六一・五	八一・九
一六	全道平均	一五〇・三	一五・一	一五・一	四二・二	四二・二	六一・七	八二・九
一七	全道平均	一五〇・八	一五・二	一五・二	四三・二	四三・二	六一・八	八三・〇
一八	全道平均	一五〇・八	一五・二	一五・二	四三・二	四三・二	六一・八	八三・〇
	全國平均	一五〇・〇	一五・〇	一五・〇	四三・七	四三・七	六一・七	八三・〇

農山漁村の罹病率

計	乳幼兒期		學童期		青年期		壯年期		中年期		老年期	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
計	二〇・九	一五・三	三・七	三・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七
農山村	二二・九	一七・三	三・七	三・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七
農漁村	二二・九	一七・三	三・七	三・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七

○・八%の多きに達し、その他は單に驅微療法に依らざる

對症療法を受けたるに過ぎざるものなり。

拓殖醫と拓殖産婆

昭和十五年度拓殖醫及び拓殖産婆設置場所左の通りである。

石狩	二	拓殖産婆
上川	一一	拓殖産婆
空知	一一	拓殖産婆
後志	七	拓殖産婆
檜山	三	拓殖産婆
渡島	一	拓殖産婆
胆振	六	拓殖産婆
日高	四	拓殖産婆
十勝	一五	拓殖産婆
釧路	一四	拓殖産婆
根室	一七	拓殖産婆
網走	一五	拓殖産婆
宗谷	八	拓殖産婆
留萌	六	拓殖産婆

十一月二十一日、第一回總會並に理事長會議を札幌に於て開催、規約、事業計劃、經費豫算等の協議、理事の選任等をなし、次で理事長會議を開催した。尙ほ聯合會の理事長に北海道廳は學務部長、常務理事に社會課長を推した。

○岩内の健康相談所 昭和十五年三月二十七日から左の簡易保険健康相談所を開設し、健康相談及び訪問看護事務を取扱ふ。

(名稱)岩内簡易保険健康相談所(位置)岩内町大字鷹臺町宇岩ヶ嶺一二番地(訪問看護受持區域)岩内町一圓但し大字老古美村を除く。

榮養改善實施聚落

- 一 全村實施町村(十二)
 - (渡島)長萬部(檜山)泊(後志)俱知安(空知)江部乙、妹背牛、一己、砂川(上川)東鷹栖、比布(宗谷)中頓別(網走)常呂(十勝)鹿追
- 二 實施聚落の設置を見た町村(四十九ヶ町村、五十二部落)
 - △渡島——大野

本道の國民健康保險組合は、昭和十五年八月現在において沼田村國民健康保險組合、新篠津村、喜茂別村、奈井江村、秩父別村、苦前村、音江村、狩太村、置戸村、色丹村、新十津川村、中頓別村、北村、音別村、北龍村、神樂村、楸法華村

の十七組合で組合員(戸數)は一萬三千八百八十四、被保險者(人員)は八萬三千二百二十六、申請中のものは前田村、一己村、江部乙村、新冠村の四ヶ村であり、計畫中のものは二十四組合となつてゐる。

○小學校優良健康兒 小學兒童の體位向上を期するため、道廳では全道各支廳長、市長推薦優良兒童四百九十一名につき審査を行つた結果、昭和十五年六月二十日、男女四十名を昭和十五年健康優良兒童として決定長官より表彰された。

- 後志——南尻別村、狩太村、眞狩別村、留壽都村、喜茂別村、京極村、赤井川村、大江村、余市町
- 檜山——利別村、上ノ國村、東瀬棚村
- 空知——美唄町、浦臼村、雨龍村、沼田村、三笠山村、音江村、多度志村
- 上川——永山村、上士別村、鷹栖村、上川村、中富良野村
- (二)
 - 網走——置戸村、端野村、渚滑村、佐呂間村、瀧上村、興部村(二)
 - 日高——荻伏村、三石村、門別村
 - 膽振——虻田町、安平村、厚真村
 - 十勝——新得町、御影村、芽室村、音更村、清水町、川西村、大樹村、本別町、幕別村、士幌村(二)
 - 宗谷——稚内町、歌登村
- 國民健康保險組合

★ 勞力紹介 ★

リンク制實行

農村側と鑛工業側

農村勞力強化の聲に、北海道應は、鑛工業部門への農村出稼者を一時歸村、農繁期の勞力不足を緩和することになつた。農村側の勞力難を緩和し、更に農繁期の鑛工業出稼者を確保するもので、各職業紹介所を動員し、空知、上川の米産地帯へ夕張、空知等炭田の出稼者を歸村させて耕作、收穫に當らせ、更に農閑期は鑛工業への出稼を固定させ、農村と鑛工業の勞力リンク制を實行に移したのである。

農業勞力調査

農作備賃銀

△常備勞銀 昭和十三年度、年額賄付勞銀に付き調査せるもので、日支事變動發以來一年

勞力紹介

★ 紹介 ★

餘を經過したる爲、その影響も顯著となり、前年度に比して男三割三分、女四割二分の昂騰を示し、全道平均男一人當り二三〇圓、女一人當り一四八圓となり、特に女の勞銀の昂騰が眼を惹いて居る。之を、支廳市別に見ると、男では札幌市の三三六圓、上川の二六九圓、釧路國の二六四圓、女では札幌市の二四〇圓、空知の二二九圓、上川の一九〇圓が高位であり、低位の方はり列挙すれば男で、函館市の一五〇圓、石狩の一八九圓、檜山、日高、室蘭市の各一九〇圓、女では函館市の六〇圓、室蘭市の九〇圓、檜山、渡島の各一一〇圓等である。尙常備に於ては契約終了後或は盆、正月等に契約賃金の他に五圓乃至三〇圓程度の現金又は現物を賞與として給與す

る慣行が一般的に存する。△季節備賃銀 各季節を一覽するに、男女とも秋期の勞銀が最高を示せるは、收穫期が最も繁忙なる爲であるが、然し農作期間中たる春夏秋の賃銀間には殆ど大差がない。全道平均では男に於て春三〇圓、夏二九圓、秋三二圓、冬二三圓、女では春二一圓、夏二〇圓、秋二三圓、冬一四圓で、四季平均を見ると男二九圓、女二〇圓で、前年度に比し男二割六分、女三割三分の騰貴を示してゐる。又、女子の賃銀は男子に比し三割一分低い。然し女子の勞銀が戦争勃發以來漸次男子の勞銀に近づきつつある事を看過してはならぬ。尙、本雇備に於ても、前項の如く、契約勞銀の他に契約終了後、現金又は現物を給與する慣行のある地方が見られる。

△日備勞銀 賄なし日額を四季別に見るに全道平均、男では春一圓七六錢、夏一圓七七錢、秋一圓九二錢、冬一圓五六錢

で、女では春一圓二三錢、夏一圓二五錢、秋一圓三五錢、冬一圓〇一錢となつており、前項同様秋の收穫時が最高を示してゐる。

四季平均にて男は女に比し四割四分高となつており、即ち男一圓七五錢、女一圓二一錢である。日備勞銀趨勢を窺ふに、昭和六、七年の谷を境として勞銀は漸次上昇の傾向を示し、十一年以降急激な昂騰を示してゐる。支廳市別に見ると、男では十勝の二圓〇一錢が最高で、以下網走の一圓九三錢、空知の一圓九二錢、上川、釧路國の各一圓八九錢が高額を示し、後志の一圓五七錢、札幌市の一圓五〇錢、檜山一圓四七錢、渡島一圓四四錢が低位にあり函館市の一圓が最低である。女では最高、空知の一圓四七錢、以下網走、上川各一圓四四錢、十勝一圓四三錢、留萌一圓三三錢が高位に在り、檜山の八七錢、渡島の八六錢、小樽市の七三錢が低位で、最

低は函館市の七〇錢となつてゐる。

勞働者使用戸數

全道の農業勞働者使用總戸數は八一、七五〇戸で、全道農家戸數(主業、副業)一九五、七六六戸に對し約四一・七%に當る。前年度の三七・七%に比し四%の増加で甚だ注目すべき數字を示しており、戦時體制下の勞働力問題に重要な參考となるであらう。

次に、常備のみを使用する戸數を見るに、全道總計一一、五二四戸前年に比し二七〇戸の増加で、その内譯は一人使用八、〇七九戸、二人使用二、四八五戸、三人使用六九三戸、四人以上使用二六七戸で、一人使用のもの最も多く全體の七割を占めてゐる。支廳別では上川の二、一六六戸が最高で最低根室の八六戸である。

臨時備のみを使用する戸數は五四、六三〇戸で前年に比して四、三五四戸の増加を示してゐる。其の内譯は三〇人日未満二六、七五九戸、三〇人日以上一

三、六六七戸、五〇人日以上一〇、三三四戸、一〇〇人日以上三、八七〇戸となつており、三〇人日未満が最も多くて全體の四割九分を占めてゐる。之を支廳別に見ると最高空知の一、九三三戸、最低根室の五五八戸である。

勞働從業者戸數

常備及臨時備兩者を併用する戸數は一五、五九六戸で、前年に比して、二、二二三戸の増加で、其の内常備一人を使用し且つ臨時備を使用する戸數最も多く全體の六割三分を占めて九、八五九戸に達し、常備二人を使用して臨時備を併用する戸數は三、六七〇戸で之に亞ぎ、常備三人を使用して臨時備を併用する戸數は一、四四八戸、常備四人以上と臨時備を使用する戸數は流石に甚だ僅少で六一九戸である。

之等戸數を支廳別に見ると上川の二、八〇一が最高で、根室の一、一七が最低となつてゐる。又常備使用者總戸數(臨時備を使用せる戸數をも含む)は二七、一二〇戸で前年に比し二、

五〇三戸の増加となつてゐる。又、臨時備使用者戸數(常備を使用せる戸數をも含む)は七〇、二二六戸で前年に比し六、五八七戸の増加となつてゐる。この數字のみを見ても農村に於て勞働力の不足が漸次増大しつゝある事が窺れる。

農業勞働者戸數

農業勞働者戸數は全道合計五、八五七戸で前年に比して三三三戸の減少を示してゐる。此の内譯を見ると一人從業者戸數が三、五六四戸で約六割の多數を占め、次いで二人の一、四六八戸、三人の四三三戸、四人以上の三九二戸である。

之を支廳別に見ると釧路國の九七一戸が最も多く、次に上川

の九二七戸、網走の八五四戸、空知の八四一戸の順で、少いのは渡島の一一〇戸、檜山の七二戸、根室の六八戸である。

臨時備のみに従事する戸數は二五、二五八戸で常備の約五倍に昇るも、前年に比して五、九〇五戸約二割の減少を示してゐる。其の内譯は三十人日未満一、〇八五戸、三十人以上七、四七四戸五十人以上、四、四九二戸百人日以上、二、二〇七戸の順である。

常備と臨時備の兩者に従事する戸數は全道合計三、〇五〇戸で、前年に比して四四六戸の減少である。以上の如く農業者に於ては勞働力の減少せる事變下に於て未だ自家勞働力を充分に利用し得るだけの耕地を獲得せられざるものが相當にあり

拓殖途上にある本道としては大いに考慮すべき問題が存するものと思考せられる。

農業者以外で農業勞働に雇傭される戸數は、一二、三一六戸で之を支廳別に見る時には、網走の一、八七一戸が最高で、空知の一、六一〇戸が之に次ぎ最低は宗谷の一三九戸となつてゐる。

農業勞働従事者戸數最近の趨勢を見ると昭和八年五五、〇九七戸、昭和九年五九、五〇五戸、昭和十年五九、一三六戸、昭和十一年六四、六七七戸で大體増加の傾向をたどつて來たのであるが、事變勃發の爲に激減を來し昭和十二年五一、五一戸、昭和十三年度、即ち本年度は四六、四八一戸と漸次減少の一途をたどりつゝあり。而して之を農業者と農業者以外の農業勞働従事者戸數に分けて觀察しても兩者共減少してゐるのである。

農業外の勞働

農業者にして農業外雇傭勞働に従事する農家戸數は二一、五二〇戸で全道農家戸數の一割一

分に上つてゐる。此の中、農閑期に農業外勞働に従事するもの相當多數ありとは考へられるけれども、之を農業者の農業雇傭勞働に従事する戸數三四、一六五戸と併せ考ふる時、農業者が何等かの雇傭勞働に従事する戸數は全道農家戸數の二割八分に及ぶものと思考せられる。之に依つても本道には勞働力不足に悩む農家の多い裏面に、農耕地を充分に占有し得ずして餘儀なく餘剩勞働を生ぜざる農家の今日尙多數存在してゐる事を物語つてゐる。此勞働の合理的利用は戦時下農村不足勞働緩和の鍵となるであらう。

次に常備のみに従事する戸數を見るに二、〇一四戸で、前年より三三四戸減じ農業外雇傭勞働従事者總戸數の九・四%に當り、支廳別には空知の三二四戸、網走の三二二戸、上川の二七〇戸が多く、宗谷の三四、根室の二六が少い方である。臨時備のみに従事する戸數は一八、一三一戸で流石に全體の八五%の多數を占めて居るが前年に比する

と三、六七七戸の激減を示してゐる。支廳別では最高網走の三、七四一戸で空知の二、三三五戸、上川の二、三三六戸が多く、根室の四一四戸が最低である。常備、臨時備兩者に従事する戸數は一、一六八戸で全體の五・五%を占め前年に比し四一五戸減である。

男子の従事する勞働の種類は多種多様で、其の中主なるものを挙げれば、昆布採取、魚粕乾、カムチャツカ出稼等の漁業關係の仕事、或は、土木工事人夫各種工場臨時人夫其の他各種の日傭人夫等もあるが、最も多く従事してゐる勞働は造材、伐木、木材運搬其の他山稼である。普通運搬に従事するものも多く、又除雪人夫水切人夫等もある。猶ほ近年鑛山への出稼が遽に増加してゐるのは注目に値する。次に女子の従事する雇傭勞働は女中漁業勞働其の他雑役夫で其中最も多く従事してゐるのは各種日傭勞働である。

移動勞働者數

自管内のみの雇傭勞働能力に

て不足を來す場合、管外(他町村)より移動し來つて出稼を爲し、或る期間農作業に従事する移動勞働者數(男女別)賃銀(男女別)主なる作業及び主なる供給地に就いて調査せる結果は左の如くである。

先づ其の數を見ると全道合計男一四、六〇二人、女一五、七二九人、計三〇、三三一人で、前年に比して男一、一五〇人、女一、三五四人、計二、五〇四人の減少を來してゐる。事變勃發後一年目なる前年の八、三四六人の増加に對し、かゝる減少に想を馳する時、勞働力不足が漸次、各地方に一般化しつゝある事を知ると同時に、之に伴つて鑛工業方面の勞銀が昂騰したるに反して、農業がその特異性の爲に急激に勞銀をあげる事が出來ぬ結果、必然的に從來自己の依存せる勞働力まで鑛工業方面に吸収される運命に落ちたものと思料される。さて之を支廳別に見ると、前年同様空知の八、〇六四人が最高を示し次に上川の六、七四六人の順であ

日高の六四人が最低である。勞銀を日給に換算して全道平均を見ると男一圓九二錢、女一圓四四錢で、前に示した日備勞銀より約二〇錢高となつてゐる。

之を地方的に見ると本道中部以北が比較的高額で二圓臺を示し、之に反し道南の各支廳勞銀は大抵一圓臺に止つてゐる。

雇傭する農作業は各地方の經營特質を反映してゐる。例へば石狩、上川、空知等の水田經營地帯に於ては水稻苗移植、水田除草、收穫等が主作業で、網走の薄荷栽培地帯に於ける薄荷の除草收穫、後志果樹經營地帯に於ては苹果の袋掛時期に於ける女子勞働者の大量需要、上川、後志、十勝、網走、宗谷、留萌等に於ける澱粉用馬鈴薯の收穫及び上川の除虫菊收穫、家畜經營地帯たる釧路國、根室の牧草刈等が多數移動勞働者を必要とする主なる農作業であることが觀察される。

増毛、天鹽、濱益等北部日本海沿岸の漁村地帯よりの出稼が見受けられる。又、道外では東北地方より相當数の移動勞働者がある點は見逃し得ない事實である。其の他は大略、近接町村よりの移動に依り充足してゐる。

斡旋者別移動

北海道に於ける移動勞働者の總数は三〇、三三一人の多數に及ぶが、之を他方面より見て彼等は如何なる方法により雇傭契約を結ぶかを八項に分けて調査した。

其の結果を見るに、個人契約のもの最大多數を示し全體の五七%を占め一七、二九八人に達し、次いで個人の斡旋に依るものが六、三六四人で全體の二一%、職業紹介所の斡旋に依るものが二、七六六人で九・一%を占め、其他が二、四八八人で八・二%となつており、以下は何れも極く少い。

農業者が雇傭勞働に依つて幾許の収入を得て家計の一端を補つてゐるかに就き調査した。

農業者が雇傭勞働により獲得する勞銀は全道、合計五、三〇六、五一八圓の巨額に達するが支廳別に見ると網走の九二二、二四八圓、空知の八八〇、一四一圓が最高で、上川の七六一、三八七圓が之に次ぎ、少いのは膽振の一七四、五四九圓、宗谷の一、二二九、一六六圓、根室の八二、五二九圓の順である。

其の内、農業雇傭勞働による賃銀取得高は常備に依り一、二六五、五九一圓、季節傭に依り六九四、九四三圓、日傭に依り一、二六一、五一〇圓、合計三、二二二、〇四四圓を占め、之を農業勞働従事者戸數三四、一六五戸で除し一戸當賃銀取得高を算出すれば九四圓である。

又、農業外勞働に従事して得る勞銀は常備五九五、六五四圓、季節傭七九一、七〇二圓、日傭七九七、一一八圓、合計二、〇八四、四七四圓であるが、之を其の従事者戸數二一、三一三戸で割れば九八圓となる。

依る賃銀取得高は五七圓、農業外勞働によるものは六七圓であるから、前者に於て三七圓後者に於て三一圓の所得増加となつてゐる。

轉業戸數の検討

農業者の轉業戸數は全道合計一、三九一戸で、前年に比し四五七戸約四分九分の激増を示してゐる、之を支廳別に見ると空知の二四〇戸が最大で、以下上川の二三九戸、十勝の二二二戸の順、少い方は宗谷の一七戸、檜山の六戸、宗谷の三戸の順である、又之を原因別に見ると、今次事變の影響を明瞭に示し、客觀的には左程農業經營の不良と認められざるに他産業の股賑と好景氣に幻惑され、或は鑛山、軍需工業等の高賃金に釣られて轉じたるもの（單純に他業の収入多しと觀たるもの）六四二戸、全體の四割六分を占め、次いで多いのは農業經營の不振によるもの五一四戸、勞力不足を原因とするもの一〇二戸等では左程多いものはない。次に轉じたる職業を見るに鑛山勞働

者となりたるもの六八四戸で全體の四割九分餘を占め、以下工業勞働者の二五七戸、日傭の二六三戸が目立つて多い。

勞力補強方針

甲 獎勵方針

事變の進展に伴ひ、農業勞働力の不足は益々深刻化し、生産力の維持擴充上洵に憂ふべき事態なるを以て、之か補強調整を圖るは、寔に現下の緊喫事なり、仍て北海道廳では左記事項を基本方針として、夫々地方の實情に即應せる綜合的調整計畫を樹立實行せしめ、以て農業勞力の補強調整

勞力紹介

乙 獎勵事項

一 現存勞力の確保

イ 轉業者若しは轉出せんとするものに對して、可及的其の事由を糺し、その排除に努め轉出の防止に努むること
ロ 農村よりの出稼者に對しては、出稼のため農業經營上障を生ぜしむることなき様指導誘掖に努むるは勿論、農閑期出稼と雖も、可及的戸主、長男は家に在りて春の農業經營設計其の他準備作業に衝らしめ、尙、就勞及歸郷に關しては、職業紹介機關等と連絡を緊密にし、之が措置に遺憾なからしむること。

二 現存勞力の能率向上

イ 經營設計による勞力分配の合理化を圖ると共に、作業能率の増進に努め、又婦女子の能力に適應せる勞働の配當強化をなすこと
ロ 各種農作業の共同化を圖るは勿論、共同託兒、共同炊事等に依り、勞務の節減に努むること

ハ 農事實行組合に於ける班

制度的確立及全家族組合主義の徹底を圖り、以て共同作業若しは共同經營實行組織の整備促進に資すること

イ 市街地又は最寄都市に於ける

非農業者及婦女子等の勞働員を圖り、農繁期に於ける勞力緩和を圖ること

ロ 應召家族は勿論、特に勞

力の不足せる農家の經營並に共同作業等に對し、可及的青年團、學校生徒、兒童をして協力せしむること

中等學校生徒の集團勞働誘致

につきは、豫め支廳は學校當局並に關係職業紹介所町村及農會其他官公署當務者と打合せを開き、之か計畫的遂行に努むること

水田地帯に於ける青年團、小

學校兒童をして、稗拔除草奉仕作業に動員せしむること

ハ 勤勞奉仕班の組織的活動

を一屬計畫的ならしむる爲め年度始めに班の活動計畫を具體的に決定し、必要に應じ奉

仕用器具を設置すること

農繁期に於ける集團勞働力の補給に方り、町村内に於ける農期の繁閑を異にする農事實行組合間の勞力移動の指導斡旋に努め、その實情を關係職業紹介所に通達して、連絡を緊密にし、又、職業機關の斡旋の下に、他町村（漁村を含む）より移動勞働の移入を圖るものとす、從て、從來農村に於ける直接雇傭の慣例を矯め、以て移動計畫樹立遂行上支障ならしむると共に可及的間隙勞力を生ぜしめざる様留意すること。

職業紹介所は馬鈴薯掘其の他

主要農作業の集團移動勞働力の補給に方り、關係機關と緊密なる連絡の下に、計畫的且積極的調整に努むるものとす

ホ 曩に設定を見たる町村勞

務動員協議會は、勞務動員の對象となるべき時局産業に對する勞務の供出に協力するを目的とするものにして、右の供出に當り、農業經營上より

觀たる農業者の供出數並に供出方法等につきては、予め町村經濟更生委員會に於て慎重検討を加へ、供出に困り、經營上支障を來すが如きことなからしむると共に、供出後の農業勞力の調整に關しては、特に委員會を充分活動せしめ遺憾なきを期すること

四 畜力の利用増加農機具の導入及其の利用率の高度化

イ 農耕馬の保有に努め、之が不足地帯は手間替式共同作業により之を補ひ、又、常に共同使役を訓練して、多頭式農機具の利用に備へ、以て勞働力の補給緩和と、農作業の懇到に資すること

ロ 共同作業用農機具の導入に努むること

ハ 農機具の地域偏在を調整せんが爲、共同利用農機具は可及的農會、産業組合若は農事實行組合に於て購入し、その共同利用に努むること

ニ 各種農作業と農機具との有機的連鎖を緊密にし、以てその性能發揮に努むること

ホ 農機具の使用管理に留意して、その維持年數の延長と性能發揮に努むること

ヘ 死蔵農機具の入手改修をなし、その利用に努め、資材配給不圓滑の緩和に努むること

五 經營組織の改善

イ 田作に對しては、冷温苗代の設置並に之と移直播法の適當なる配合により、勞力の調整を圖り、尙、勞力甚しく不足する時は、水田の一部を綠作畑に變更すること

ロ 畑作に對しては、冬期間中に經營方針を樹立して、勞力の按配を考慮し、尙、勞力不足の甚しきときは、作物の種類を考慮し、綠作休間地の設置に努むること

ハ 作物の早、中晩品種を適當に按配し、殊に綠肥作物並に夏秋收作物を適當に配合し其の他秋耕の實施により勞力の偏寄を避くること

ニ 農事實行組合内に作付不能の土地を生じたるときは共同經營畑とし、割當作物の作

付に充て、尙、餘剰を生じた場合は、收草を作付すること

六 勞力調整計畫樹立並に實施

イ 農事實行組合を基調として勞力調整計畫を樹立し、更に町村は之か綜合計畫を樹立して、其の經濟更生委員會の審議を経るものとす

ロ 調整計畫樹立上、左記に依り勞力事情調査をなすものとす

1 一般調査(年度始)人的勞力畜力農機具其の他勞力調整上必要な事項を調査すること

調査は農事實行組合戰時農業生産擴充計畫書に含め、之を實施すること、調査用紙は道廳に於て配付す

2 移動勞働調査 年三―四回、特に主なる農作業に對し町村外より移入すべき人的勞力量を調査す、調査は市町農會之に當るものとす

ハ 調査計畫樹立の爲、調査並に計畫の樹立に關しては、町村の産業獎勵合議に於て、

支廳及同經濟更生委員會より出席指導に努むること

ニ 勞力事情一般調査並に調査計畫樹立に要する昭和十四年度内費用に對し、左の通助成す

1 市町村經濟更生委員會に對し一ヶ所平均二十五圓

2 支廳は五十圓

七 助成施設

町村の實情に應じ、左記助成施設の適切なる實施を圖ること

イ 勤勞奉仕施設

ロ 農業機械移動配給調整施設

1 共同利用幹旋並指導

2 共同利用設備

3 移動調整施設

4 巡回修理班設置

ハ 農村共同施設

1 改良農具設置

2 共同畜力機具購入

3 小水力利用設備

ニ 農業勞力調整應急施設

ホ 農村勞力調整調査

勞務需給調整

一 當該市町村内に於て需給を圖る場合

町村及町村農會は、職業紹介所と協議の上、關係團體と緊密なる連絡を保持し、努めて自町村内に於て圓滿なる調査を圖ること、特に目下男子勞務者の拂底せる實情に鑑み、婦人勞務者に女子青少年の就業勸奨を積極的に行ふこと、尙勞務者の供出に付ては、努めて組織的計畫的に之を爲さざるべからざるを以て、左の點に留意すること

イ 勞務者にして當時農業勞務に従事する者に付ては、適當人員を以て集團的に移動を爲し、各農家に於ける農作の緩急等を考慮し、現實に適當なる配置を行ふこと

ロ 未就業婦人特に女子青少年に付ては、特別の事情なき限り、左の方法に依り「農業報國隊」を組織し、之が運賃上遺憾なきを期すること

1 組織の主體は町村農會又

は町村經濟更生委員會或は農事實行組合等とし、當該團體長之を統御すること

2 町村又は町村農會に於て短期間の技術的指導を爲したる後就勞せしむること、尙技術的指導の際には精神指導をも併せ行ふこと

二 他市町村より供給を受くる場合

自町村内に於て需給の調整を圖るとき、或は特に他地方より供給を受けんとする場合、左の方法に依ること

イ 町村農會は不足人員を調査し、各人別所要人員調査し、勞務需給調整上必要な書類を添附し、原則として町村農會長名を以て所轄職業紹介所に申込むこと

ロ 職業紹介所に於て前號申込を受理したるときは、先ず管内に於て充足の方法を講じ尙足らざるときは其の不足數に付北海道廳の指示を受け他管内に之を求むること

ハ 婦人勞務者に付ては可成、團體組織を強化し、輔導

上遺憾なきを期すること

ニ 自家或は自町村内に於ける季節勞務が閑散となりたるときは、努めて他の繁忙地方に供出すること

三 職業紹介所に於て措置すべき事項

イ 職業紹介所は町村、町村農會其の他關係機關と協力し待遇方法特に賃金の支給に付常時査察を爲し、之が適正を期すること

ロ 前二項に依り圓滿なる需給調整を圖ることを得ざるときは、左の方法に依り、農家或は農村以外に於ける勞力の動員を爲すこと

1 商工業者、官公吏、會社の協力援助を求むること、特に農村出身者にして鑛工業方面に轉出したる者の農繁期歸郷に付考慮すること

2 學生、生徒、兒童の勤勞奉仕

ハ 全期に涉り勞力の配分状況を査察すること

ニ 共同休業機械の共同利用

の勸奨等、農業經營の改善に依る勞力調整施設の遂行に關し、關係機關に協力すること

ホ 都市に於ける登録勞務者を臨時動員すること、尙一般自由勞務者も可及的に調査し置き、臨時移動し得る様豫め準備し置くこと

〇十五年度勞務需要 北海道廳調査による昭和十五年度勞務需要總數は、總計二十二萬五千六百六十八である。

〇小樽高商出の就職 昭和十五年新卒業の活動分野打診採用申込口數 三〇〇

卒業者總數 二二一

採用決定者數 一六四

内 譯

銀行 一八

商事及貿易 三三

工業 七八

鑛業 一五

運輸 一三

保險 一六

官廳 一

自營 五

進學 五二

勞力紹介

職業紹介(十四年中)

職業	求人数	就職数
工 業	七〇、〇〇七	一四、八六五
土 建	五七、五七	一〇、五七六
商 業	一〇、四五	二、三六
農 林	三三、六九	三〇、五五
水 産	九、五四〇	三、七五三
通信運輸	一三、八五〇	三、三四
戸内使用人	六、〇六〇	二、〇二
雑 業	一〇、三四	二、八四五
計	三〇三、一六一	九〇、一四

一般職業紹介成績

十四年中

求人数	男	女	計
△求職者数	二七、二四六	四〇、七四六	三二、九三
△就職者数	八、三九一	二九、七三	二一、三〇
△就職者数	六、九四七	三三、一九八	九〇、一四五

日傭労働紹介状況

十四年中

求人数	求職者数	就業者数
二〇九、八四一	二〇五、九六	一九五、五五二

厚生省下紹介所 本道における国立職業紹介所の所在地は左の通りである。

函館、小樽、札幌、旭川、室蘭、帯廣、釧路、江差、岩見澤、留萌、稚内、根室、浦河、野付牛

労働紹介所は函館、小樽、札幌に置かれてゐる。

〇移動労働の報國隊 函館職業紹介所に於ては、農漁村に於ける冬期余剰労働力の組織ある活用を爲すべく、一箇町村二〇名を標準とする「移動労働報國隊」を組織の上、管内の二十五箇町村より五百名を編成して鏡山開発労働に従事しむる爲、昭和十五年、渡島支廳と連絡を取り之が編成に關し管内町村の徹底的協力を求め、これを實施しな。

水産労働求人状況

昭和十五年

年度北浦道、樺太並に北洋方面に於ける鮭鱈鱈蟹漁業労働者求人申込は前年十月末現在に於て其の求人申込数は五一、六九九名にして、求人者数は九十九名であつた。

〇農業報國隊を組織 道廳は農業地帯の勞力自給策を中心として婦人労働の振興、女子青少年

の農業報國隊組織で生産力の擴充に對處する昭和十五年に通牒を發した勞力自給は、計畫生産を前提條件とするが、これに對

應して婦人労働の動員と、女子青少年の組織的活動が要求されるに至り、先づ未就業婦人と女子青少年を一體とする農業報國隊を、農事實行組合或は農會、經濟更生委員會を主體として結成、共同労働を移動させる方針で職紹、市町村當局の連絡下に運用させ、他方、自給勞力不足の地帯に集團移動を行ふところあつた。

二 趣 旨

募集半島人労働者 訓練強化週間實施

勞務動員計畫の實施に伴ふ募集半島人に対する訓練の強化徹底は、募集半島人をして、其の目的たる時局産業部面に定著せしめ、眞に産業戦士として報效の誠を效さしむるは刻下喫緊の要務たるに鑑み、茲に募集半島人労働者訓練強化週間を設け、以て一視同仁

一 趣 旨

勞務動員計畫の實施に伴ふ募集半島人に対する訓練の強化徹底は、募集半島人をして、其の目的たる時局産業部面に定著せしめ、眞に産業戦士として報效の誠を效さしむるは刻下喫緊の要務たるに鑑み、茲に募集半島人労働者訓練強化週間を設け、以て一視同仁

- 1 時局下の國民として滅私奉公産業報國の精神の涵養
- 2 産業戦士たる使命を自覺する美風の養成
- 3 遵法、報效、報恩の觀念の涵養
- 4 協和事業趣旨の普及宣傳
- 5 半島人を對象とするもの講演、講話、紙芝居、映畫等適宜選擇實施すること
- 6 内地人を對象とするもの前項に準じて行ふ外劇場映畫館等に於て幕合を利用し本週間の趣旨の徹底に努むること
- 7 其の他地方の實情に應じ

たる普及宣傳の方法を講ずること

ハ 國體觀念の養成

國體觀念の養成、忠君愛國の理解、敬神崇祖の念の養成、宮城遙拜神宮遙拜の訓練、神社、忠魂碑參拜の指導、神棚設置の理解並に實踐、國旗掲揚、國歌齊唱の訓練、銃後諸活動への積極的參加、皇國臣民の誓詞の朗讀

ニ 生活改善の強化徹底

日常挨拶の訓練、隣保相扶觀念の徹底、服装改善、禮儀作法の指導、宗教觀念の扶植、勤勞の美風の扶植、貯蓄の奨励、冠婚葬祭の内地化の徹底、節酒、賭博根絶、迷信に基づく諸行事の禁止、諸會合の無届缺席の禁止、時間勵行、諺文鮮語の使用の禁止、住宅の無斷改造の禁止

ホ 教育奨励に關する事項

- 1 國語 日常生活に必要な卑近なる言語、會話を授け進んでは片假名平假名を授けること
- 2 修身 國民道德、國體觀

勞力紹介

念の養成、時局に對する認識を指導すること

三 算術 日常生活に必要な計算を習得せしむること

(加減を主とし進んでは乗除を授け應用問題をも合せ授く)

四 體操 簡單なる普通體操より進んでは教練を授け且つ團體的訓練を爲すこと

五 勞務 勞務上必要な事項に付指導訓練を爲すこと

五 公共道德の涵養

社會の安寧秩序を維持し、其の福利を増進して眞に共存共榮の實を擧げしめんには、各人が個々の要求を節制し、氣儘なる行動を戒むるにありと信ぜらる、依つて社會の安寧秩序が維持せらるることによつて、各人の安居樂業生存の目的を達し得る所以を理解せしむること。

六 衛生思想普及徹底

衛生思想の普及、傳染病豫防思想の普及、住居内外の清掃訓練、各種豫防注射の徹底、日光消毒の勵行、驅蠅驅鼠の

獎勵、入浴の勵行、汚服著用禁止、洗面所、洗濯所、浴場、便所等の清潔、身體清潔

七 情操の陶冶

半島人の多くは感受性に乏しく、反面興奮性、附和雷同性に富む傾向あるを以て、之が教化上左記事項を實施すること。

讀書指導、趣味娛樂の改善指導、植木草花等の備付及栽培指導、動植物愛護思想の涵養、修養映畫會の開催並に觀覽の指導、内地習俗の普及、趣味の向上に關する調査研究

八 優良人物の表彰

主催協和會又は事業主に於て左記優良者の表彰を行ふこと。

九 研究會、懇談會開催

一〇 修養會慰安會の開催 勞務者の産業報國 參加者の範圍及其の構成

産業報國會等の組織を有せざる工場、鑛山以外の日傭労働者、仲仕、雇傭主、勞務供給業者、現場頭、人夫頭を以て懇話會を構成し、警察署長勞働紹介所(職業紹介所)所員、之が指導に當るものとす。多數の勞務者の集團就勞せる地方にして之を一括懇話會を組織するを適當と認めざるものは、雇傭主別現場別に組織する等、最も實績を擧げ得る方法に付て考慮すること。

懇話會、開催方法

一 警察署長(水上労働者に就いては水上警察署長)主催の下に所轄紹介所と緊密なる連携を採り、毎月一回以上適當時刻に開催のこと。

二 懇話會に於ては主として左の事項の強調に努むること。

- 1 時局認識の徹底 支那事變の意義歐洲動亂勃發は支那事變處理を必ずしも容易ならしめざること
- 支那中央政權樹立すると雖も東亞建設の途尙多難なること

2 産業報國の意義、皇國産業の本義、勤勞又は經營を通し國家に報ずる精神、勤勞倍加、能率増進、物資需給の現狀、生産擴充、産業戰士の責務

3 生活刷新貯蓄の奨励、奉公的生活の態度の強化、消費の節約、資源の愛護貯蓄の奨励

△實施上留意すべき事項

本懇話會は警察署長主催の下に所轄紹介所と緊密なる連携を採り指導に努むること、而して日傭労働者、仲仕等の労働事情は工場、鑛山労働者の夫とは自ら異なるものあるを以て、差當り本懇話會に依り産業報國の徹底強化に努むるものなるも、漸次自主的組織的なる實踐的母胎たらしむる様之が誘掖に力を致すこと。

土木勞務需給調整

昭和十五年二月十四日、札幌市に土木勞務需給調整協議會を開き、左の申合せをした。

一 北海道内に於ては、他産業並に同業者間に於ける摩擦を

避くる爲、勞務者募集規則に依る募集を認めず、専ら職業紹介機關の紹介斡旋に依ること。

二 道外に於ては、必要に依り勞務者募集規則に依る募集の許可を得せしむること、但し東京大阪兩府及愛知縣は職業紹介機關も完備し居るのみならず、労働者の娉集地にして、多數事業主の自由募集の競争を爲さしむるが如きは適當ならざるを以て、之に隣接する府縣と共に職業紹介機關の紹介斡旋に依ること。

三 前二號に依る職業紹介機關の圓滑なる運営を期する爲、北海道労働福利協會をして、職業紹介機關の補助を爲さしむること。

市町村經濟更生委員會運營要綱

勞力需給調整部は主として左記事項に付調査審議並に實施の指導督勵を爲すものなること。

と

口 右調査の結果に基き、農林漁業勞力の調整上必要なる計畫を樹立すること

ハ 右調整計畫實施の指導督勵をなすこと

ニ 勞務動員計畫上必要ある場合は市町村勞務動員協議會と連絡して、時局重要産業への勞力供出の方法を審議し、供出に伴ふ農林漁業への勞力調整上必要なる施設計畫を樹立すること

ホ 農林漁業勞賃に付適正基準を審議すること

二 部所屬委員は左の者より選定すること

役場吏員、農會、産業組合、漁業組合役員中、勞力調整事務に關係深き者、農事並に漁業實行組合長、職業紹介所職員、職業連絡委員、警察官吏但し部會開催に當り審議事項の内容に依り、委員外關係者を加ふるも差支なきこと。

三 部會は上級機關の指示に依る外、所掌事項に付必要ある場合、随時開催して機能の活

用に努むること。

四 當部所掌事項は他の四部の所掌事項と密接なる關係あるを以て、常任委員制を活用し、恒に連絡を緊密ならしむること。

五 部會の開催其の他部の運営上必要なる經費は、委員會に對する助成金其の他の適正なる經理を圖りて之に充つること。

町村勞務動員運營

町村勞務動員協議會では、農漁山村よりの供出に付ては左記事項及地方の實情を考慮し、之に適應したる供出計畫を樹立し、重要農林水産物生産の確保に支障を來すが如きことなき様留意してゐる。

一 供出計畫に付ては地方的偏倚に陥るが如きことは極力之を避くると共に大凡左の者を對象とすること

イ 未就業者及農漁業に従事する意志なき者にして他に就職の希望を有する者たること

ロ 當該農漁家に於て農漁業經營上家屋内に在る必要なき

者及經營の合理化等に依る節減勞力たること

ハ 前項以外の者に付ては特別の事情なき限り一戸を擧げて轉出し之が爲地方産業に著しき變革を來すが如き者たらざること

二 農漁閑期に於ける餘剩勞力は左の點に留意し努めて時局産業（勞務動員計畫産業）に供出すること

イ 農期終了後に於ても農繁期に於ける所要勞力保持の爲徒らに不就業を生ずるが如き傾向なからしむること

ロ 農期中閑散期に於ける餘剩勞力に付ても努めて之を活用すること此の場合に於ては事業場の地理的作務的關係を考慮し環境の激變或は過勞に陥らしむるが如きことなからしむること

小學卒業生の相談

一 職業紹介所は小學校と協力し、小學校卒業者に對し職業相談を實施し、其の結果に基き適職の斡旋に努むること。

二 職業紹介所は求人者に對し

職業相談に依り認定されたる適當作業に兒童を就業せしむる様指導すること、尙、兒童の銜は成るべく職業紹介所に一任せしむる様指導すること。

三 職業紹介所は小學校卒業者に對し職業相談を實施する爲、管轄区域内全小學校に出張相談の計畫を樹て、小學校と協力のし、所定期日迄に之が終了を期すること。

四 職業紹介所は就職を希望する兒童は勿論、家事に従業すべき兒童に對しても、他日雇傭さるべきことあるに付、成るべく職業相談を行ふこと。

五 職業相談に際し、國家的事情を第一とし、兒童の適性（身體並に精神）を重要視するの外、家庭事情、職業の將來性、福利施設、就業場所、其の他求人事情等を參酌して、其の選職を指導し、就業可能なる兒童には、適當作業及配置産業を認定指示すること、尙、職業相談に際し、兒童をして出來得る限り職業紹介所に求

職せしむる様勸奨し、相談を了したる兒童に付ては、之を職業紹介所に求職するもの、緣故その他に依り就職希望のもの、家事に従事するもの及その他に分類し、職業相談原票に記入すること。

六 適當作業は兒童の身體及精神の狀況により左の四種に分類し認定すること。

第一種 體力並に智力を必要とする作業

第二種 主として體力を必要とする作業

第三種 主として智力を必要とする作業

第四種 輕易作業

小學卒業後の輔導

昭和十五年春小學校卒業就職者に對し、左記事項を實施し、就職後の輔導に關し一層之が徹底を期した。

一 就職後の輔導の目標は、新職業生活に對する精神と身體の順應に關する指導保護に置き、之が實施に當りては、最も退轉職の多き職後三、四箇月間に重點を置くこと。

二 就職地の職業紹介所は、工場又は事業場に出張して就職者に付、勤務並に生活狀況の調査、精神指導、勤続奨励等を行ふと共に、工場及び事業場に於ける輔導狀況を視察して適宜之を指導し、其の結果を職業相談原票に記入すること。

尙、職業紹介所勤務の職業指導關係技術職員は、能ふ限り工場又は事業場に出張して、其の作業方法、作業環境、所要性能等を調査し、就職者の心理又は身體狀況に付、異常又は罹病者に對する保護方法を、其の他適當なる輔導方法を雇主に講せしむること。

右輔導の結果は之を取纏めて道廳並に供給地の關係職業紹介所に通報すること。

三 供給地の職業紹介所は就職すべき少年少女に對し、就職に關する適當なる指導を爲すと共に、文書等に依り自ら又は父兄、母校を通じて就職直後及適當なる時期に、就職少年少女に對し勤続奨励の爲激

一月	一〇八	七月	三〇
二月	一〇九	八月	三〇
三月	一一〇	九月	三〇
四月	一一一	十月	三〇
五月	一一二	十一月	三〇
六月	一一三	十二月	三〇

次にその損害額を一瞥するに、前年の三百四十六萬六千餘圓に比し、五百四十六萬三千餘圓と一躍二百四十萬圓の大増加を示し火災一回の損害額は實に五千餘圓となつてゐるのである。此のことは勿論火災に依つて消滅する物即ち燃草となるべきものの價格騰貴にも依ることであらうと見られてゐる。

火事

十四年十月より十五年五月まで

昭和十四年十月
 △九日 午前一時三十分、西興部村宇瀬戸牛市街産業倉庫から發火、六棟七戸焼失
 △九日 午前十一時、樺戸郡月形村宇新符若月賢方ストロブ飛火から發火、同家全焼、次女曉子(二)焼死す
 △十九日 午後一時二十分頃、鵜川村宇ケナシロ田中よせ(九〇)方火燧の不始末から發火、同人焼死す
十一月
 △四日 午前五時、留萌町原野二線五番地蒲鉾製造業大野市太郎方炊事用ストロブの煙筒の屋根を貫通する箇所の繼目が外れたため發火、同家一棟全焼、二棟半焼
 △十一日 午前十一時二十分、空知郡幌向村南十一線四十一號農業佐々木儀一郎方二女千代(五)三女スミ子(三)二名は家人留守中弄火し、草壁に延火、三棟一戸焼失、前記二名は焼死した
 △十三日 午前三時三十分、様似村大字幌満中本庄三郎所有

自動車々庫附屬鍛冶工場の殘火から發火、四世帯八棟焼失
 △十五日 午前九時三十分、中富良野東一線北七號、農業小西小太郎方ストロブの飛火から發火、同家二男三雄(三)焼死
 △二十六日 午前四時四十分、小樽市稻穂町東五ノ五菓子製造工場田母神安幸方製造場パシン釜爐より發火四棟七戸焼失
 △二十六日 午後六時五十分、根室町宇千島町保險外交員野瀬茂松方ストロブの過熱から化學ライト張ストロブ臺に引火、六十四棟七十六戸焼失、火元方長男(九)二男(七)三男(五)長女(五)二女(三)焼死、妻及び四男は重傷を負うた
 △二十六日 午前十一時三十分、黒松内村宇上來馬土工夫中山清治方から發火、同家一棟一戸焼失、三男清(一)は焼死した、原因は妻ハツエ(二五)が薪ストロブに落葉松を焚き外出後ストロブの火粉が座布團に飛火して大事に至つた

十二月
 △三十日 午後六時二十分、夕張町料理屋工藤祐藏方から發火し、當時は無風であつたが晴天続きであつた爲、家屋が乾燥してゐたので、忽ち附近に延焼し、十棟三十二世帯を焼失した、原因は酌婦海馬澤ミツル當二十年が火鉢に火を容れ障子を開放して置いたので、傍の座布團に飛火、火災となつた。
 △一日 午前三時十分、洞爺村川東葛蒲川左衛門方ストロブの飛火から發火、同家一棟焼失、母イワ(六三)は焼死した
 △二日 赤平村宇茂尻跡部源之助方茶の間から發火、同家一棟一戸を焼失した、此の際、源之助妻小春(二二)長男大平(七七)長女アサ子(四)は狼狽の餘り放心状態となり焼死した原因は煙筒の不完全より
 △十日 午後四時三十五分、爾志郡乙部尋常高等小學校小使西里倉吉(五七)は校長に叱責されたのを恨み、教室に放火

したるも發見され小火に畢る
 △七日 午前零時三分、小樽市若竹町三榮精機製作所より發火、二棟二戸全焼
 △十三日 午後七時枝幸郡中頓別村市街細谷勝益方から發火、四棟六戸焼失、火元方子供二名焼死
 △十一日 午後十時、福山町宇小松前町雜貨商宮崎健七郎方間借人齒科醫北村修一寢室炬燵から發火、五九棟四二焼失
 △十五日 午後一時五十分、室蘭市母戀南町一四家屋から發火、七棟二〇戸焼失、一四戸半焼、原因は炬燵から
 △十三日 午前六時、帶廣私立裁縫女學校から發火、同校二棟全焼、原因は炬燵の不始末
 △二十一日 午前七時五十分、斜里町小清水尋常高等小學校から發火同校全焼、原因は煙筒の繼目が外れた爲
 △廿七日 午前十時五十分清部村本間豆太郎(八一)方小屋より發火、豆太郎は身體不自由の爲焼死した

昭和十五年一月
 △一日 午後十一時十分、標津村川北北三線農業谷向ヨシノ(七四)方ストロブの不始末から發火、ヨシノは中風で歩行困難のため焼死した
 △十二日 午後六時三十分、厚岸町劇場巴座にて映畫興行中フィルムから發火、同劇場一棟の外二棟五戸を焼失した。入場者は三十五、六名であつたので死傷者はなかつた
 △十四日 午後三時五十分、靜内町宇東別農業谷口義郎方爐火の不始末から發火、同家全焼し、義郎の内妻松前ウキ(六五)は焼死した
 △十八日 午前三時三十分頃、中湧別市街地産業組合精米工場から出火、附近十戸焼失
 △二十一日 午前三時二十分、砂川町奈井江礦夫寄宿舎陸寮ストロブの不始末から發火、同棟焼失、此の際雜夫加藤要次郎(四六)は焼死した
 △二十四日 午後三時十分、厚岸町馬車追業菊地徳助方附屬建物から發火、同建物を焼失したが、同建物には役場から

預つた行旅病人遠藤文次郎(六二)は焼死した、原因は炬燵の不始末
 △二十九日 午前一時三十分頃、室蘭市輪西町一二一納谷謙藏方から發火し、九棟三十世帯を焼失した、此の火災で納谷トシエ(六)河邊和枝(六)は二階の押入にて遊んでゐたため焼死した、原因は七輪の飛火と見られてゐる
二月
 △一日 池田町西一條料理屋小林スズエ方から發火、二棟二世帯を焼失した、此の際、同家酌婦佐藤サヨ子(二三)は泥酔して就寢してゐたため焼死した。原因は火鉢の不始末
 △一日 午後二時三十分、留萌町禮受漁業石黒長太郎風呂場外煙筒の飛火から發火し、同家全焼、妻カメ(六四)は荷物を取りに家へ入り焼死した
 △二日 午前一時三十分、幌別村市街無職阿部松三郎方から發火、二七棟四七戸焼失、原因はストロブの不始末
 △四日 午前九時五十八分、函

館市千代ヶ借小學校便所廊下から發火、三十四坪焼失。原因は放火(休校中)
 △五日 午前一時、羽幌町羽幌炭礦鐵道工事場から發火、同堀立小屋全焼、雜役夫寺本義弘(三五)は焼死した、原因はストロブの不始末
 △九日 午前六時四十分、札幌郡手稻礦山瀧ノ澤従業員合宿所ストロブの不始末から發火同棟全焼
 △十二日 午前七時十五分、本別町市街山中商會木工場職工長屋から發火、二棟三世帯焼失、酒井ミドリ(四)は焼死した、原因は弄火
 △十三日 午前一時五十分、岩内町橋町漁夫濱岸長吉宅茶の間ストロブの不始末から發火同家一棟焼失、此の火災で同家孫勝昭(一)は焼死した
 △十五日 午後十時、小清水村浦士別農業片桐勇之助(四〇)方ストロブの不始末から發火し、同家勇吉(一四)勇三(一〇)勇太郎(八)スミ(一六)の四名が焼死した。

△二十日 午前零時、美幌町宇日並國有林内木炭小屋から發火、渡邊義美(三六)は燒死、村田美登(二〇)は重傷を負うた、原因は木炭

△二十四日 午前九時四十五分頃、室蘭市仲町土工業井上源太郎方よりストーブの火の粉が柵屋根に點火し發火、七棟全燒

△二日 午後十一時二十五分頃 余市郡余市町大字大川町六九七番地日雇業長谷川清一(四〇)方より發火し、一棟一戸を燒失したるも、同人妻フジ(三六)養女ヨシエ(一九)二女フミ子(二)の三名燒死した。

人就寢中のこととて逃げ遅れ燒死
△十一日 午後四時、札幌郡琴似村字新琴似帝國製麻株式會社琴似製線所試驗工場乾燥室内より發火し三百八十坪一棟燒失。原因アセチリン瓦斯銻接の火花が亞麻莖に點火したるもの

△十五日 午後十時頃、有珠郡伊達町字末永帝國製麻株式會社伊達製線工場内より發火し建物及び亞麻莖を燒失した

△六日 午前一時三十分、釧路市城山町、日刊大東新聞社社長野田頭鐵矢方より發火し、工場外住宅三棟二戸全燒した

原因放火
△六日 午後十時五十五分、空知郡歌志内町神威選炭場より發火し、同工場及び諸機械類石炭五百噸を燒毀して翌七日午後五時鎮火した、原因は職工白木和孝が煙草の吸殻を庭上に置忘れて大事に至りたるもの

△八日 午後九時三十分、上川郡愛別村德星礦山倉庫内より發火し、同倉庫一棟物品配給所二棟を全燒して九日午前二時三十分鎮火した、原因は火鉢殘火の不始末

△十一日 午後五時五十五分、根室花吹野齒舞村時孫瑠尋常高等小學校職員室より發火、校舍及び雨天運動場を全燒して同日午後七時十分鎮火した原因石炭灰の不始末

五月

△二日 正午頃、斜里郡斜里町字高戸狩方面に山火起り、山林五十丁歩を燒き、同日午後七時鎮火した。原因は同村在住金光植が開墾の火入を過りたるもの

△九日 午後四時頃、廣尾郡廣尾村字野塚、農業佐久間正康方より發火し、同家一戸を全燒し午後五時鎮火した、此の火災に因り、正康の四女ユウ子四歳は逃げ後れて燒死す、原因は開墾火入の殘火が再燃延燒したるもの

△九日 午前九時頃、十勝郡大津字湧洞地内に山火起り、山林四二〇丁歩を燒き、翌十日午前六時鎮火す、原因は焚火の不始末
△十一日 午後二時二十分頃、

四月

紋別郡紋別町在鴻ノ舞吉田要吉方より發火し、住家五棟十戸を全燒して同三時十分頃鎮火す、原因はストーブ煙筒よりの發火、尙此の火災は附近の山林に飛火したるため一時は相當混亂を呈した

△十七日 午前零時三十五分頃、靜内町字古川町大津次郎方より發火し、同家一戸は全燒したるも、孤獨者の大津次郎は逃場を失ひ燒死す、原因爐火の不始末

△二十四日 午前四時頃、根室國幌蘆島、村上灣水産試驗場孵化場より發火し、孵化場及びポンプ小屋二棟を全燒した原因はストーブの附近に置きたる揮發油に引火し大事に至りたるもの
△二十四日 午前十時頃、壽都郡黒松内村字モヨモリ山林よ

合計

所有者別山火被害
自大正十三至昭和十三迄十五ヶ年分
△國有林 面積 一、三六五、三四四 金 一、三三五、六七九
△地方費林 面積 一、一八〇、一五〇 金 一、一八〇、一五〇
△其他官有林 面積 一、一四三、一四三 金 一、一四三、一四三

△民有林 面積 二、〇〇、五七三 金 二、〇〇、五七三
△合計 面積 四、七六、一七二 金 四、七六、一七二

十四年山火被害調
△發火月別 面積 一、〇〇 金 一、〇〇
四一九

警防

Table with columns for month (四月, 五月, 六月, 十月, 十二月), 件数 (Number of cases), 面積 (Area), and 損害額 (Damage amount). Rows include categories like 煙草 (Tobacco), 製炭 (Charcoal), 無願火 (Unwanted fire), etc.

Table titled '森林防火組合' (Forest Fire Prevention Association) showing 組合数 (Number of associations) and 人員 (Personnel) for various locations like 檜山, 渡島, 日高, etc.

Table titled '各種營業調' (Various Business Survey) showing 件数 (Number of cases) and 人員 (Personnel) for categories like 網走 (Netsu), 津別 (Tsuno), 釧路 (Kushiro), etc.

Table titled '工場建築工事災害' (Factory Construction Work Disaster) showing 人員 (Personnel) and 死亡 (Deaths) for categories like 劇場 (Theater), 演藝場 (Performance Hall), 活動寫真館 (Photo Studio), etc.

十四年度雪害

昭和十四年度(自十三年十一月至十四年五月)雪害總額は九百六十九萬六千五百六十一圓の巨額にのぼり、前十三年度に比し、實に三百九十八萬二千三百圓の激増となつてをり、十四年度は如何に積雪量の多かつたかを物語つてゐるが、被害別に見ると

Table titled '水力發電工事災害' (Hydroelectric Power Project Disaster) showing 死亡 (Deaths) and 重傷 (Serious Injuries) for categories like 土石崩壊 (Soil Collapse), 運搬車輻落 (Truck Accidents), etc.

Table titled '都市交通事故' (Urban Traffic Accidents) showing 件数 (Number of cases) and 死傷 (Deaths and Injuries) for categories like 打撲 (Bruises), 骨折 (Fractures), 凍傷 (Frostbite), etc.

Table titled '強窃盜其他の被害' (Strong Theft and Other Victims) showing 件数 (Number of cases) and 人員 (Personnel) for categories like 強窃 (Strong Theft), 強盗 (Strong Robbery), 詐欺 (Fraud), etc.

警防

釧路炭礦株式會社

本社 東京市京橋區新川町一ノ五ノ六

電話京橋(56) 一七八八五番
七八一〇番

鑛業所 釧路國厚岸郡上尾幌

電話上尾幌 一 番

出張所 札幌市北七條西十三丁目

電話札幌 九四六番

釧路市川上町九丁目二

電話釧路 九四六番



ラジオと環境

事變による普遍化

昭和十五年七月七日、支那事變四周年を迎へたが、本道の放送事業も支那事變によつて、次の如き特徴づけられた。

- 一 ラジオ普及の普遍化——これは事變勃發によつて、ラジオの必要性が廣く確認された上に、工業地帯及農村方面に於ける好景氣によつて、新規加入が農工方面に急激に増加した。
- 二 廢止防止と開發運動——これは消費節約、貯蓄獎勵、配電線の不足等の影響によつて一時聽取廢止の激増をみるに至つた結果、廢止防止を計ると共に、ラジオの普及督進の積極的運動を開始したこと。
- 三 受信機内容の改變——受信機器資材の不足によつて、節

放送

約型受信機の出現したこと。現在もラジオの普及は、商業及公務自由業方面に頗る密で、農、水産、鑛、工、交通業方面に依然稀薄であるが一般的に見て、ラジオの普及は地方よりも都會に密なることは各地共同様で、郡部の劣る原因として擧げられてゐる事項は次の如きものである。

- 一 ラジオを娛樂機關と考へ贅澤視してゐること。
 - 二 配電線の不備、電力料金の高價。
 - 三 受信機器の高價と取扱操作の知識不足。
 - 四 プログラムの内容が都市中心主義なること。
 - 五 經濟的にゆとりのないこと
 - 六 新奇を嫌ふ因襲によること
 - 七 隣近所への氣兼ねのあること
- 然し、滿洲事變、殊に支那事變勃發後地方に於ける聽取加入は、日に月に増加し來る傾向を示してゐる。

ラジオ聴取者

札幌中央放送局管内昭和十四年末のラジオ聴取者数は十三萬四千三百三十一人で、この内譯は左の如くである。

札幌市	二〇、四七七
旭川市	七、八五六
石狩郡部	三〇、七四七
函館市	一四、三二一
渡島郡部	四、三一六
小樽市	一一、二一三
後志郡部	三、五三七
釧路市	四、四九三
釧路郡部	三、一三二
室蘭市	三、七五〇
釧路郡部	五、一五〇
帯廣市	三、九九〇
帯廣郡部	七、五一五
北見國	六、五五四
天鹽國	四、三五六
日高國	一、四六八
根室國	一、一四二
千島國	一一四

の水曜日の外に、必要の都度、月曜、金曜日にも放送することとした。

而して右資料は産業各部門に屬する事項で、業者の心得置かねばならぬ重要な資料を、斯界の専門家より提供を受け、又は各方面よりの投書により、産業上の質問照會等を受け、その中、公的内容を有するものを取捨選擇し、各専門家よりの回答を得て、問と答を同時に放送するものである。

札幌中央放送局下 電界強度別世帯調

△中電界以上	二七三、二一五
實數	四三・六
百分比	八二、九三九
△弱電界	一三・二
實數	九三、八九一
百分比	一五・〇
△極微電界	一七六、三二四
實數	二八・二
百分比	
△合計	

放送

實數 六二六、三六九
 百分比 一〇〇・〇
 (十四年三月三十一日)

官公衙公示の放送
 時局の進展に伴ひ官公衙、並に公共諸團體と、一般國民との連絡は愈々密なるを要するのでその一助として札幌管内各局では昭和十五年三月十日より毎日後〇、三〇の全中ニュースに引續き、右公示事項を放送した。

放送局所在都市別
 増加数及増加率

札幌	四、三〇六	五〇、五	一、八〇〇
釧路	九八四	四三、一	一、四七〇
旭川	八六六	四六、二	〇、八八
函館	二、一八六	三六、六	〇、八一
帯広	二七三	五〇、四	〇、六五

白衣勇士を慰問す
 聖戦に傷き、或は病める白衣の勇士達を慰問すべくIKでは昭和十五年五月十八日から七日間、札幌ほか七ヶ所の陸軍病院、同療養所に、木村若衛の浪花節、大和家かほる、宮川貞夫の漫才

四二六

許可率 一、八
 廢止数 五、六〇三
 廢止率 〇・八三
 市部郡別普及率

計	一四、〇三二	三三、七	三、三
市部	六、三三〇	四〇、七	五、六
郡部	七、七〇二	一六、三	二、九

地域別普及率

石狩	三、一	根室	一〇、九
空知	二九、三	網走	一三、〇
上川	一七、四	宗谷	八、六
後志	三、一	留萌	九、四
檜山	五、五	札幌市	五、二
渡島	一四、三	函館市	四、〇
胆振	一八、一	小樽市	三九、九
日高	一三、七	旭川市	五〇、一
十勝	二四、〇	室蘭市	三三、九
釧路	三〇、六	釧路市	四六、一
帯広市	五、二	計	三五、八

聴取規約を改正す

昭和十四年十一月一日、聴取規約を改正、聴取手續をより簡

十四年度放送回数と時間

易化し、又出願の際、逓信省に納付せる許可料も特殊の事由の

あるものを除き放送協會で負擔し代納することとなつた結果、

加入者は全然無料で出願することとなつた。

放送事項別	自局編成回数	放送時間	学校	実況	音楽	演藝	雑	計	
								回数	時間
札幌中央	四、一五九	三三二	五	八	一四	二七五	四、九五六	二	四三、三二
函館	一、四六三	三九	三	九	四三	一、六六	一、四九二	一	一、〇五〇
旭川	一、三五四	四〇	一〇	三	四三	一、四九二	一、三三八	一	一、〇五〇
釧路	一、二六三	二二	三	八	四三	一、三三八	一、三三八	一	一、〇五〇
帯広	二七三	三六	三	一	四三	一、三三八	一、三三八	一	一、〇五〇
放送事項別自局編成放送時間	三三、六一五	八、一〇一	一九、三〇	二七、三五	三七、三〇	四、五四	三、三五	四	四三、三二
札幌中央	五〇、三二	一一、四二	九、五七	三、三二	一四、三三	二、三四	二、三五	二	一一〇、五〇
函館	四三、一〇	一三、〇六	九、五五	二、三五	一〇、〇〇	二、四三	〇、五	二	八八、一〇
旭川	四四、〇九	六、三一	六、三一	一、三七	九、一〇	一、二〇	一、二〇	一	七四、七〇
釧路	一六、一八	一一、五八	五、一五	四、〇〇	一、一〇	〇、三	〇、三	一	四三、二四
自局編成	四、九五六	四三、三二	一六、六五	三、九五二	三、三五	二、五七三	四、四〇四	四	四三、三二
中継	一、六六	一〇、五三	一、六六	四、二七〇	四、二七〇	二、二四六	四、三六三	三	四三、三二
計	一、四九二	八、八一〇	一、九、八一〇	四、二九〇	四、二九〇	二、三〇一	四、三七八	三	四三、三二
計	一、三三八	七、七五七	二、〇、三三六	四、二九七	四、二九七	二、二五四	四、三七三	三	四三、三二
計	三、四	四三、二四	二、〇、三九〇	四、三六八	四、三六八	二、〇、七五四	四、三五九	三	四三、三二

ラヂオ相談所開設

本道、樺太に於けるラヂオ相談所は次の六ヶ所であるが、この外、隨時各地に巡回相談を行ひ、聴取者の便宜を計つてゐる。

△札幌固定相談所 札幌市南二西四北海道貯蓄ビル二階△小樽同小樽市稻穂町北海道貯蓄ビル二階△函館同 函館市松風町大門前拓銀ビル△旭川同 旭川市五ノ二十放送局内△帯広同 帯広市西四ノ七放送局内△豊原同 樺太豊原市大通南四ノ一二

ラヂオの普及開發
 ラヂオ普及開發のためIKでは、ラヂオ商組合供電會社等のラヂオ受信機賣出しに呼應して周知宣傳映畫講演會を開催してゐるが、昭和十四年度に於ては石狩、空知支廳管内の江別他八ヶ所、後志、膽振支廳管内の余市他十三ヶ所、樺太大泊他十ヶ所、夫々映畫講演會を開催した。尙同局備付のトーキー映寫機はローラー三十五ミリ二臺、光音十六ミリ二臺、レオ十六ミリ一臺で多數のフィルムに依り

普及開發に努めてゐる。

ラヂオ技術者検定
放送協會では、指定ラヂオ相
談所主任技術者たる資格を檢定
するため檢定規定を設け、隨時
試験を行つて居るが、札幌中央
放送局では、毎年右試験に先立
ち、初等科及び中等科のラヂオ
技術講習會を開催して、ラヂオ
商店員其他一般希望者に受講せ
しめてゐるが、昭和十五年で右
講習會は第六回を算へ、檢定
試験に合格せる者九十八名に及
んで居る。この中、指定相談所
の主任技術者として第一線に活
躍してゐる者は、昭和十五年六
月現在で二十八名であるが、目
下指定相談所を申請中のもの多
數あるので、近くこの數も倍加
するものと見られて居る。

指定ラヂオ相談所

放送協會ではラヂオ技術者檢
定試験に合格した技術者を主任
技術者とするラヂオ商店、また
は供電會社に對し指定規定に依
り審査の上相談所を指定し、料
金其他一切協會で規定し、廣く
一般加入者の受信機の相談診療

Table with 2 columns: Station Name, Location. Includes entries like 札幌、旭川、網走、深川、岩見澤、長沼、小樽、帶廣、瀧川.

ラヂオ塔増設

支那事變の戦況はもとより、
刻々に移り變る歐洲の戦況をい
ち早く電波に乗せて全國民に速
報するラヂオニュース或はまた
東都一流藝術家の多種多様な
演藝放送を、街の大衆に廣く聽
いて貰ふ爲め、IKでは既に全
道で八ヶ所のラヂオ塔を設置し
てゐたが、更に十四年度に於て
は、道内二十二ヶ所所轄太ヶ所

Table with 2 columns: Station Name, Location. Includes entries like 室蘭、旭川、江別、名寄、野付、苦小牧、函館、釧路、深川、瀧川、豊原.

放送回数漸増

昭和十四年四月一日から十五
年三月卅一日迄の放送回数は二
萬一五九七回で、放送時間は實
に四千四三三時間四分七分に上つ
て居り、今後は益々増加の傾向
にある。

ラヂオ技術者検定

普及開發に努めてゐる。
放送協會では、指定ラヂオ相
談所主任技術者たる資格を檢定
するため檢定規定を設け、隨時
試験を行つて居るが、札幌中央
放送局では、毎年右試験に先立
ち、初等科及び中等科のラヂオ
技術講習會を開催して、ラヂオ
商店員其他一般希望者に受講せ
しめてゐるが、昭和十五年で右
講習會は第六回を算へ、檢定
試験に合格せる者九十八名に及
んで居る。この中、指定相談所
の主任技術者として第一線に活
躍してゐる者は、昭和十五年六
月現在で二十八名であるが、目
下指定相談所を申請中のもの多
數あるので、近くこの數も倍加
するものと見られて居る。

指定ラヂオ相談所

放送協會ではラヂオ技術者檢
定試験に合格した技術者を主任
技術者とするラヂオ商店、また
は供電會社に對し指定規定に依
り審査の上相談所を指定し、料
金其他一切協會で規定し、廣く
一般加入者の受信機の相談診療

果を擧げて來たのである、報導
に、教養に、演藝に子供の時間
にと各方面の聴取者層に呼びか
けつつある毎日の放送は、文字
通り千差萬別複雑多岐になつて
行く。

ラヂオ受信機寄贈

札幌中央放送局では、今次の
聖戦に挺身皇國の爲めに奮戦中
不幸敵彈に傷き、或はまた病魔
に冒され、無念の涙をのんで戦
友をあとに歸還、再起奉公の日
の一日も早からん事を祈りつつ
専心療養中の白衣の勇士に慰安
を與ふるべく、札幌陸軍病院函
館分院他八ヶ所の療養所にラヂ
オ受信機を寄贈したが、この他
に、薄倅者又は收容者に慰安と
教養を與へる爲め、道内では札
幌無料宿泊所他二十一ヶ所、樺
太では慈惠院他五ヶ所の計二十
八ヶ所に受信機を寄贈した。

前納割引制の實施

放送協會では、昭和十五年四
月一日より、懸案の聴取料の前
納割引制を實施したが、これは
十二ヶ月分を一時に前納するも
のに對して、その最終一ヶ月分

五十錢を割引するものである。

○聴取料五ヶ月免除
昭和十五
年五月十一日午前九時半、北見
國枝幸村に起つた山火は同村市
街に延焼し、戸數五百餘戸の内
僅々三十二戸を残したるのみに
て、全市街を焦土と化した。ラ
ヂオ聴取者にして罹災せる者
は一〇三名中九十一名の多數に
達したので、札幌中央放送局で
は、之等罹災聴取者を慰問する
ため、五分より五ヶ月間の聴
取料を免除した。尙また罹災者
收容所二ヶ所に對し、旭川放送
局より技術員派遣し、受信機を
設備し慰籍の一端に供した。

貯蓄強調週間放送

昭和十五
年六月二十一日から同二十六日
まで實施の百二十億貯蓄強調週
間中左のラヂオ放送があつた。

貯蓄強調者

- 放送者 新篠津村東出太郎市
放送日 十五年六月二十五日
放送題 組合組織の體験
優良貯蓄組合
放送者 釧路市城田實行會
放送日 十五年六月二十五日
放送題 貯蓄組合の組織

に新にラヂオ塔を建設して、こ
れを當該市町村當局に寄贈した
が、其の設置場所は次の通りで
ある。

内各局合同開局記念演會(札
幌、旭川、釧路、帶廣、函館)
同七月には小樽新聞主催繼走聖
矛聖火奉納式、都市對抗野球道
樺大會、全國中等野球甲子園大
會北海道豫選會、同八月札幌三
井別邸傷病將士慰安會同十月全
道秋季防空演習同十二月札幌陸
軍病院、旭川陸軍病院同赤十字
病院、定山溪陸軍療養所、登別
温泉療養所、洞爺湖温泉療養所
に於て傷病將士慰安演會、十
五年一月札幌警防團開閉式、第
十一回中等學校スキー大會、第
十四明治神宮スキー大會北海道
豫選大會、同二月聖德記念豊平
館開館式、同三月大倉シャンプ
エ建設記念ジャンプ大會、女子
産業報國隊結成式、紀元二千六
百年奉祝子供大會等を實施、又
教養方面では昭和十四年五月よ
り七月まで「教師の時間」に教
科指導講座、十四年十二月より
十五年三月まで産業講座、昭和
十四年十一月二日から十二月三
十日まで補習講座連續放送する
等、教養方面に毎月約三十回に
上る單獨講演と並んで相當の效

受信機の安全週間

和和十五
年一月廿五日から札幌、旭川、
小樽、室蘭、釧路、帶廣の六都
市に於て「ラヂオ受信機安全週
間」を施し、街の故障受信機に
呼びかけ、受信機故障に依る廢
止を防止した。即ち各都市共一
週間宛周知技術者が出張、指定
相談所を動員して故障受信機を
診査し、修理は指定相談所で部
分品代のほかは一切無料で奉仕
した、尙週間中時間の許す限り
「受信機に故障がありませんか」
と訪問診療を行ふ外、電話其他
で診療申込の向に對しては、係
員が訪問診療をするといふ具合
で又これと並行して廢止申出加
入者のリストに依り自宅訪問を
し、故障受信機の修理を斡旋し、
聴取繼續を勧誘するの外受信機
の故障で廢止した加入者を訪問
再聴を勧むる等、これまた相當
の効果をあげた。

IKでスキー放送

札幌はオ
リムピックを失つたとは云へ、
白銀の山野は老幼男女のスキー
ヤーで從來以上に賑はひ、此の
間各種の大會、豫選會がいつも
のやうに行はれたので、札幌中
央放送局では之等の大會の内、
全國中等學校スキー大會及び、
全日本スキー大會北海道豫選を
中繼放送し、他日札幌に於て開
催されることあるべき冬季オリ
ムピックに備へるところがあつ
た。

熊谷業商會

熊谷利三郎

札幌市南九條西七丁目

電話 二七三四番
五四四一番

鑛業所 南蘆別・上夕張



都邑と名勝

函館市及其の附近

函館市 本市は本道開拓と幕末變遷史上最も古き歴史を有するのであつて、寛政十一年幕府が蝦夷地開拓の根據地としたる以來發達し、安政六年開港場となり、外國貿易を行ふこととなつてから更に繁榮を招き、今日の隆昌を見るに至つた。本市は本道の咽喉部に當り、附近沿岸諸港との航路の接續點たるのみならず、函館本線の起點である故に内外の交通盛んにして、船舶常に輻輳し、漁業貿易及支那貿易の樞要地である、従つて漁獲物及水産製品の大集散地である。名勝としては函館公園あり、驛より二十二町臥牛山麓にあつて、市街及港灣の眺望に適し、園内には圖書館及水産陳列所あり、又櫻樹多く其の花期は

觀光

五月上旬より始まり夜櫻は殊に有名である。

五稜郭公園

函館市より電車の便あり二十分にして達する。幕末維新史に著名なる箱館役に榎本武揚及大島圭介等が據つて官軍に抗し血戦せる所であつて當時洋式最新の設計により築成せる城郭、今尙當時の面影を殘し、星を型どり五稜形を成せる爲此の名あり、今は史蹟として保存されてゐる。城郭を繞る濠は清水を湛へ、夏は好個の水泳プールとなり、冬は結氷して函館隨一のスケートリンクとな

湯ノ川温泉

函館市を距る東北約二里にして、南方は海に面し土地高燥、風光頗る開豁で、閑靜の地であり、泉質は無色透明で、本道來遊者の旅塵を洗ふに適してゐる。附近には湯の川遊園地、柏野グラウンド及競馬場等がある。

トラビスト修道院

佛國天主教一派トラビスト團の經營であり、男子修道院は函館市を距る西方海路九哩の當別に在り、女

子修道院は函館市を距る東北約三里の上湯ノ川に在りて、共に敬虔なる祈禱と勞働との禁慾的宗教生活を送つてゐる。又此所より産出される牛酪及チーズは有名である。

大沼公園

函館市を距る六里十四町餘、龜田及茅部兩郡に跨る大公園で周圍八里餘、沼は大沼より成り、沼中大小無數の島嶼は樹木繁り、景致甚だ靜謐汽車此の水郭を走る時、碧水脚下に迫り、仰げば北に駒ヶ嶽の噴煙搖曳し、一段の雅趣を添ふ風光極めて雄大且明媚であつて此處に遊ぶ者の初印象をして遺憾なく嘆稱せしむる。

松前町

函館市の西方海路四十二哩、陸路二十五里の地に在り、本道開拓の發祥地として最も古く、松前氏累世の封地たりし所で、往時は富豪多く居住し繁盛を極めたが、維新後は港灣の不良なるにより、漸次衰退した。城址及寺院等舊蹟多く、今尙盛時の面影を殘し、賞覽すべき所少くない。福山城は慶長十六年松前慶廣の築造に係るもの

で、現今僅かに三層樓の一部を存するのみであるが、以て往年の宏麗を偲ぶべく、城春にして草木青き感慨を深くする。

江差町

函館驛より分岐せる江差線の終點にして、最近其の全通を見るに至つた。此の地は本道に於て松前町と共に最も古く發達した所で、昔時は運上所を置き、漁業の中心地として繁盛を極めたが、近年附近漁獲物の減少と、他港灣の發達により幾分衰退に陥つたが、今尙漁家多數存在し、盛時の面影を殘してゐる。

八雲町

噴火灣に臨み遊樂部川口に走る町で、附近一帯地味肥沃、各種農産物多く、殊に馬鈴薯栽培と澱粉製造は古くより知られ、八雲澱粉の名聲は市場に高い。徳川農場は八雲驛より南八町に在り、地積約四千町歩を擁し、其の特殊的經營によつて知られ、又日本乳製品株式會社工場ありて、附近生産の牛乳を原料として煉乳及バターを製造してゐる。

小樽市及其の附近

四三一

小樽市 函館市と共に本道の二大關門であつて、地勢は北西南の三方に丘陵を負ひ、東方一帯海に臨んで自然良港を爲し、遠く石狩及天鹽の諸山と相對して居る。明治初年の頃は一の寒村に過ぎなかつたが、本道拓殖の開發に伴ひ、漸次發達し、内外取引盛んに行はれ、且樺太航路の發着點であり、常に内外の船舶出入頻繁にして、函館と共に本道商業の主要地を爲す。小樽公園は市の後方丘陵上にあり地積十萬坪、天狗山を背景とし前面全市を望み、港内の景趣一眸に萃め、附近には優に數萬人を容るゝ一大運動場がある。而して、手宮の古代文字は手宮驛より北西數町、道路に沿ふた石壁に一種の彫刻あり、石器時代の事を記せるものなりと云ひ、又クルニークル古代の文字なりとも云ひ、其の説區々にして明かでないが、好古の人の看過すべからざるものである。

岩内町 函館本線小樽驛より分岐せる鐵道の便あり、西海岸中、小樽に次ぐ要港で、附近農産物の集散地たるのみならず、古くより鱒の本場として知られて來たが、近年は鱒不漁に陥り却つて他の水産物の爲め殷盛を見るに至つた。

余市町 此の地方有数の漁農地で、殊に林檎と鱒で有名である。又、海に臨みて北海道水産試験場があり、東方に蘭島海水浴場がある。

羊蹄山 函館本線比羅夫驛から東三十一町の所にあり、蝦夷富士と稱せられ、海拔六千餘尺、八面玲瓏たる山姿の美は、諸山に冠絶した北海道隨一の靈峯として仰がれてゐる。又山頂の眺望雄大限り無く、頂上には高山植物多く、珍木奇草に富み之れが學術研究のため登山する者が少くない。

後志地方のスキー地 此の地方の山岳特にニセコアンヌプリ・イワオヌプリ・チヌセプリ及び目國內岳は、冬季及初春季に於けるスキーの好適地として知られ、風景、雪質及山岳の配置等單にスキーの好適地なるばかりではなく、スキーヤーならで

設は年を逐ふて整備し、本道に於ける政治及學藝教育の中心地として、且工業地として本邦有数の地位に達してゐる。附近の遊覽地として驛の西南約一里、圓山公園あり、札幌神社は公園の北西側に隣して、神寂びて鬱蒼たる神域に鎮座する官幣大社にして、大國魂神・大那牟遲神及少彥名神の三神を祭る。境内は閑雅にして松杉參差の間、櫻樹散在し景趣に富んでゐる。而して神社境内の西方には最近施設に係る綜合グラウンドがある。植物園は道廳の背後に在り、北海道帝國大學の附屬にして地積三萬餘坪、園内芝生を以て歩道を劃し、幽邃閑雅の境にして、博物館及温室の設備がある。中島公園は市の南端に在り、背後に藻岩の翠巒を仰ぎ、豊平川の支流蜿蜒として流れて瀦して清池を爲し、冬はスケート場となり、市民の清遊地又娛樂場として喜ばれてゐる。又此の池の東南岸に應立の拓殖館があり、本道開拓の圖表、模型及物産等を陳列し、一般觀覽に供してゐる。

眞駒内種畜場 札幌より南二里の所にあり、地積約三千町歩にして、各種の家畜を飼育し、豊平川の清流に沿ひ、曠漠たる平原の綠草濃やかな所に牛馬の群遊する光景は、得難い情趣であつて本道獨特の勝景である。尙札幌市の東南二里にして、高燥なる原野に、農林省月寒種羊場がある。

定山溪温泉 札幌市豊平驛から十六哩二分、定山溪鐵道の終點にある。此の温泉は豊平川上流に跨り、山水の絶景を兼ね、旅館浴場完備し、春は櫻花咲き亂れ、夏は青葉滴り、秋は満山錦を織り、冬は白皚々の雪四邊を蔽ひて四季の眺め麗しく、又本道特有の椴松・蝦夷松及白樺等の林が山と溪谷を覆ふてゐる。温泉河岸に噴湧し、泉質は無色透明の食鹽泉で、四季遊覽療養の客が絶えない。又附近上流に豊平峽の勝地あり、兩岸に岩山屹立し、峽谷深碧を湛へ、紅葉の頃其の絶佳の景致を謳はれてゐる。

野幌原生林 札幌郡江別町野幌に在り、林業試験場の管理する所で、面積三千四百五十五町歩、椴松と蝦夷松の大密林で、天然記念物として保存されてゐる。近年此の原始大森林内に本邦最初の組織的キャンプグラウンドを拓き、林間夏期大學が催さるゝに至つた。

江別町 石狩川と江別川の合流點に在り、王子製紙工場あるを以て著名である。

岩見澤町 函館本線と室蘭線の分岐點で、本道交通の要衝に當り、附近能く開拓せられ、農産物の産出多く米、麥、豆及亞麻等の集散地で、空知支廳の所在地である。

札幌市附近のスキー地 札幌地方は地形上、逍遙地多く、従つて冬季スキーに依る遊歩と登山の快味を満喫するに頗る恵まれ、雪質の良好及設備の配置其他種々なる點に於て、他に類を見ない好條件を具備してゐる。附近の丘陵山岳一としてスキー地として適せざるはなく、要所々々の足溜りには十指に餘るヒ

ニツテ(山小屋)あり、設備極めて簡素にして快適、競技を樂しむ者に適はしく、白皚々たる山肌原始林の風韻に耳を傾けつゝ、暫くは此處に憩ひて身の塵外にあるを喜ぶであらう。札幌市の西方には日歸りのスキー行樂に適當なる百松澤山及砥石山があり、其の山に達する迄の圓山及藻岩附近は數時間の餘裕さへあらば、容易にスキーを樂しむことが出来るもので、札幌郊外は宛然スキー遊歩場の如き觀を呈してゐる。而して圓山附近は競技場として設備の全國第一を跨る大倉シャラツエを有し且レイスコースの中心をなす故競技季節には幾多のスキー遊手が此處に集る。

小樽市の、競技場としての設備は札幌に劣るが、札幌市附近と共に競技場としても亦一般スキーヤーの爲にも、全國的に見て實に秀でたる設備を有し、一般山岳登行者の爲に建設されたヒユツテは手稻パラダイスヒユツテを始めとし、十數箇所を數ふるに至つた。之等のヒユツ

テを中心として数々の山々、即ち白井岳、朝里岳、余市岳、手稻山、奥手稻及春香山等に一日或は数日の走行を試みれば、初心者も雪山の醍醐味を味ふことが出来るであらう。

又定山溪鐵道を利用すれば、札幌より日歸りで札幌岳、天狗岳或は無意根山へスキー登高が試みられる。特に無意根山は積雪期間永く、眺望頗る絶佳、靈峯蝦夷富士を望み得るし、且女流スキーヤーすら容易に登山し得る點に於て、最も親しまれてゐる。歸路薄別及定山溪温泉に一浴して歸る者も多い。

石切山又は簾舞より入る空沼ヒユツテを根據とすれば、空沼岳、狭薄岳或は札幌岳には容易に登り得る。尙此の山小屋は、秩父宮殿下御來道の御建設遊ばされたものである。又定山溪の奥に在る薄別温泉及奥無意根ヒユツテを足場としては、無意根山及喜茂別山の登行は容易にして、且スキーの仙境として有名な中山峠へも達することが出来る。

旭川市及其の附近

旭川市 本市は本道の中央部四周連山を繞らしたる高地性盆地の中央に位し、天産豊富なる上川沃野の中心地であつて、石狩川及其の支流の合流する所に井然たる街衢を連ねてゐる。本市は交通至便なる上、附近に廣大なる原料供給地を控へる關係上、之が貨物集散地として商工業良く發達してゐる。遊覽地としては市の中央に常盤公園あり、又驛の南方約二十町に神樂ヶ丘あり、上川神社の所在地である。

大雪山國立公園

本道の中央に位し、石狩國上川及空知二郡六箇町村、十勝國河東及上川二郡四箇町村に跨り、面積約二十三萬四千町歩の廣大なる區域を擁し、本邦國立公園中第一位の面積を誇るものである。而もその大部分は國有地及御料林に屬し、一部は公有林であるが、全然私有地を含まない。此の天然公園の雄大壯麗は到底筆舌に盡しがたく、山姿湖鏡頗る變化に富み、深淵溪谷其の岳麓を縫ひ

造化の妙を盡し、神秘高雅の至境である。即ち旭岳、北嶺岳及峻雲岳等二十數峯雲表に聳え、何れも六千六百尺に達する火山群で、北海アルプスの稱があり眺望雄大で、高山植物、昆蟲の多種と、地質構成の驚異は學術的研究の資料として全國第一である。此等山岳を發源地とせる石狩川に沿うて層雲峽あり、上川驛より六里定期自動車の便ありて、溪谷深く密林鬱蒼として茂り、双雲別温泉を初として温泉各所に湧出し、更に此所を遡ること十八町銀河の瀧、流星の瀧斷崖に懸りて五十丈、更に遡ると大函及小函の奇觀あり、即ち石狩川の碧流を扶け、兩岸幾百丈の奇巖屏風を立てたるが如き深峽の續くこと一里にして、環境宏大、實に天下の絶景である。更に忠別川に沿ふ所に勝仙峽あり、附近の松山温泉と共に知られてゐる。而して大雪山一帯の地域は、阿寒地帯と共に、昭和九年十二月、國立公園として指定されたものである。

神居古潭

上川及空知兩支廳の境界にあり、蜿蜒八十餘里の長江石狩川は狹つて兩岸相對峙する所、奇巖怪石碧淵に躍り、鐵道沿線溪谷の絶勝として古くより知られてゐる。こゝから數町、原始人の居住した堅穴あり石器及矢の根石等を出し史蹟記念物の指定地となつてゐる。

瀧川町

石狩川南東空知川に臨み、兩流の合する所で、附近地味肥沃な農村を控へ、將來益發展の餘地があり、尙附近に本道綿羊飼育の中樞機關たる北海道應種羊場がある。

深川町

函館本線より留萌及多度志線の分岐點として交通上の要衝に當り、石狩平野の東北端雨龍平野の中心地で、附近一帯地味最も肥え、農産豊富、従つて其の集散盛んである。

砂川町

石狩川の左岸に在り石炭の産地として著名な歌志内及上砂川に至る鐵道の分岐點であつて、上砂川には三井鑛業所がある。

本道中央部のスキー地

大雪山國立公園地帯を擁する此のスキー適地は、此處に重疊する數

數の峻峰が何れも二千米以上の標高を有する山であつて、スキー地としては最高級の技術を持つ者のみに與へられたる殿堂と云ふべきである。

十勝岳附近のスキー地は、既に中央に於ても知られてゐるもので、上高良野驛より約四里程、緩傾斜を登つたところに吹上温泉あり、而して其の附近に建てられた白銀莊並勝岳莊を根據として十勝岳、上ホロカメトツク及富良野岳等に登る事は普通にいはれてゐる。十勝岳は高いといふだけで、極めて登降に樂な山ではあるが、他の諸峯は何れも相當の技術、就中登山技術の優秀な人々にのみ許されたる山である。尙此の根據地はオプタテシケ連峯を越えて、遠く大雪山へ向ふ縦走路の基點乃至は終點として、冬季登山には重要な地點である。此の地方は後志、札幌地方と異り、二千米級の山岳が聳立相對峙してゐる爲、其の眺望雄大なる點で、冬季スキー地としては申分のない豪快さを味はふことが出来る。

大雪山附近は最近拓かれたスキー地であるが、其の足場となる愛山溪温泉は安足間驛を去る約五里の地點にあるため交通が至つて不便である。然し其の途中は造材小屋のための馬棧路が拓けてゐるので其の大半の路を馬棧で行くことが出来る。

旭峯を主峯として、北嶺、比布、永山及愛別等所謂北海道の屋根を形成する諸山が相競ぶて並んでゐる壯觀は、誠に北海道の最高スキー場としての價値があらう。併し乍ら此の何れの山の頂もスキーのみを以てしては容易に達する事の出来ない程の險しさを有してゐる。此の附近は所謂遊ぶ氣持では一寸行かれない。相當の準備と技術を以てして始めて快適なスキー滑行を樂しむ事が出来るものである。冬季に於ける此の附近の登山は歴史的に見て極めて最近に行はれ出したものであるが、國立公園の認定に依つて急激な勢で發展すると思はれる。

室蘭市及其の附近

室蘭市 本市は本道の南部に

當り、三面山を繞らし港口相迫り、港内水深く天然の良港である。明治初年の頃、道路開鑿の爲開きたる土地で、爾後漸次發達し、一般の商業は未だ函館小樽に及ばないが、内外船舶の出入多く、尙長輪線の開通以來、陸上交通極めて便利となり、更に海運に於ても青森、室蘭間の定期航路があつて海陸運輸交通の要地である。

登別及カルルス温泉

室蘭線登別驛より北方約二里にして自動車の便あり、温泉一帯は四圍峯巒を繞らし、谿流に臨み、且俱多樂湖、橋池及天然記念物登別原生林を包含する風光絶佳の地帯に介在し、泉質多種にして湯量豊富である。又設備周到にして世に聞えた名泉で湯元地獄谷は温泉市街の北方にあり、地底から噴出する熱湯は流れて河を成し、白煙濛々と四邊を罩めて凄絶の極みである。尙チエツコの名泉カルルスバードに湯質が類似してゐる爲其の名を採つたカルルス温泉は、登別温泉より西北一里半、自動車の便あり

旅館の設備も良く整ひ、附近は幽寂閑雅にして、橋池及オロフレ山、來馬山等がある。

洞爺湖

室蘭線虻田驛より入る、湖の周圍十里餘、深碧實に六百二十尺、紺碧にして明鏡の如く、中央に翠巒の中島を浮べ遙に秀麗なる羊蹄山を望む。湖畔丹温泉の背後には奇峰を以て名高い二重式活火山有珠岳聳立し、山頂よりの大觀は湖面を隔てて間近く羊蹄山と相對し、噴火灣の彼方遙に駒ヶ岳の雄姿を望み、洵に風光明媚であり、湖上にはモーターボート、發動機船等の遊覽設備があつて、周遊には極めて便利である。

白老舊土人の部落

室蘭線白老驛の南約四、五町位にあり、戸數八十餘戸、人口約三百六十餘人にして主として漁業に従事し、家屋の構造其の他生活様式は今尙舊態を存するものあり、研究資料に乏しくない。

苦小牧町

此地は漁業を先驅として開けたが、明治四十五年王子製紙會社分工場設立により、戸口頗る増加し、近時日高

地方の開発に伴ひ、之が交通の要衝に當る關係上、將來は益發展せんとする。

支笏湖 苫小牧驛より西北六里の位置にあり、同驛より王子製紙會社の専用鐵道が通じてゐる。湖は周回九里三十町、深さ千二百尺に及び、汪洋たる藍碧の清水を湛へて一面の大なる明鏡の如く、湖岸には樽前、惠庭等の火山連繞し、山紫水明にして、殊に樽前山は頂上の溶岩岳より白煙を噴出する様は實に壯觀の極みである。尙湖畔に鯉鱒人工孵化場あり、又、湖より、流れて行く千歳川には、鮭鱒人工孵化場がある。札幌より自動車道路の開鑿ありて、四時觀光の杖を曳くに至つた。

夕張町 西北海道と北九州は本邦に於ける二大産炭地であるが、私設鐵道夕張線は此の夕張炭産出の爲敷設されたものである。

釧路市及其の附近

釧路市 本市は釧路平野の南端に位し、釧路川の太平洋に注ぐ所にあり、東北海道隨一の良

阿寒國立公園

阿寒國立公園 阿寒國立公園は本道の東北部に位し、釧路國川上、阿寒及足寄の三郡並に北見國網走郡の一部に跨り、阿寒盆地、屈斜路盆地及摩周盆地を抱擁する八萬八千餘町歩に達する廣大なる地域を占め、其の大部分は千古斧鉞の入らざる針濶混淆の大原始林を以て覆はれ、雌阿寒岳、雄阿寒岳及摩周岳あり、阿寒湖、屈斜路湖及摩周湖あり、又其の間至る所に溫泉湧出し、釧路川及阿寒川は山間谿谷を縫ひ、蜿蜒として流れ、清流あり瀑布あり、其の風光の明媚なるは景觀の雄大なることは蓋し他に類を見ざる處である。

阿寒湖は釧路市から約十里にあり、釧路と北見の國境附近にあつて稍三稜形をなし、周回六里二十二町の火口原湖である。湖岸一帯は奇岩怪石蟠り、椴松、蝦夷松の原生林が水面に迫つて凄壯極りなき景觀を呈してゐる湖上には大島、小島、ヤイタイモシリ、チウルイモシリ等、翠巒の小島を浮べて一層の美觀を添へ、阿寒川の落口に於ける龍

港で、十勝、釧路、北見及根室地方物資の集散市場として榮え又各種水産物、雜穀、石炭畜産及木材等の移輸出が盛んである、市發達の始めは漁村であつた爲、往時は殆んど水産物に限られてゐたが、交通運輸の機關備はるに従ひ、漸次商工業地として擡頭し、輒近更に機械工業の發達に促され、製材、製紙及水産物加工等の工業に著しい變革を見、尙附近炭田の開發により石炭の産額は年々増加しつゝある。尙遊覽地としては市の東方約十町の所に春探湖あり、周回一里半、眺望幽雅にして湖岸の丘陵地は公園の豫定地であり、又附近には舊土人の遺跡が多い。

釧路市アイヌ遺跡地

釧路市 釧路市城山町(舊名茂尻町)に在るチャシ(御供山)はアイヌ語でポロチャシと言ひポロは大チャシは岩の義である。チャシは城山町背後の丘陵の一端に在つて一段と高く山形をなし、丘陵に續く後方に空濠を掘り、之に連なつて周圍に中段を設けて、遠

くより望むと大小二箇の鏡餅を重ねたやうである。僅か二十歩で盡きる頂上より眺めると、西北の釧路川を距て鳥取大原野及釧路港灣が展開し、東は丘陵匍匐して遠く阿寒の雄峯を指呼し得べく、風光自ら雄大である。チャシの築造は約二百年以前で、本道現在チャシ中最古のものである。岩内からは貝塚、土器、石斧石鏃及鐵片等が遺物として發掘されたが、保持の方法粗漏のため、地方人に持去られ小兒等の遊戯場と化してしまつた。昭和四年に至つて史蹟名勝天然紀念物假指定地に編入せられ、市内青年團に依り接續地に櫻樹其他が植栽され、市も禁札を掲げ取締をして居る。堅穴は市内高臺に散在し、就中上記チャシに接續する天寧驛南方の丘陵地帯に多く、又同地域には貝塚がある。

上述の如く本地域は史蹟名勝天然紀念物假指定地となつたが更に進んで積極的に道立公園として完全なる保存をなす必要を認めらるゝに至つた。

口は、點々十數箇の庭石の如き小島を浮べて宛然小松島の觀がある。本湖獨特にして有名なる蘗藻はシリコマンベツ・チュウレイ・ケネタンベツ附近にのみ棲生する。湖中には魚類が豊富で、鯉鱒は本湖が原産地であつて、十和田湖及中禪寺湖の鯉鱒は本湖から移植されたものである。

雄阿寒岳は阿寒盆地の中央活火山で、富士形の雄姿を示し、海拔四千五百尺餘、頂上近くまで針葉樹の密林に蔽はれ、頂上には偃松と無數の高山植物が密生してゐる。山麓には阿寒湖、パンケ湖、ベンケ湖等があり、何れも原生林に圍まれて今尙太古の面影を残し、大自然の威力に壓迫される感がある。登山道は南麓の雄阿寒ホテルより約二里餘に過ぎず、登攀せば自ら神祕幽邃の感を深くするであらう。雌阿寒岳は湖畔温泉から西南三里六町餘にあり、海拔約五千尺、山麓一帯は原始の密林に蔽はれ、山腹は珍奇なる高山植物多く、山嶺には暗綠色の湯沼

(青沼)・暗赤色の湯沼(赤沼)があり、其の四周には爆發龜裂があつて悽愴を極めてゐる。噴火口は青沼から約百二十尺離れ口徑約一千九百尺あり、常に硫氣を噴出し、其の上昇約百尺に及んでゐる。眺望すれば視野頗る廣く、群峯脚下に連りて雲海の如く、遙かにオホーツク海及太平洋を雲煙の間に指呼し、又目を轉じ釧路及十勝の平原を望めば、遠く石狩嶽、大雪山を指呼し得て、其の絶景は到底筆舌に盡し得ない。登山道は湖畔口、足寄口、ピリカネツプ湖の三道あり、登山容易である。湖畔口から登ること一番樂で、幅員六尺餘の立派な登山道(約三里二町)があるので、少年少女でも容易に登山してゐる。足寄口は網走線足寄驛から約十四里、ピリカネツプからは約三里餘である。

屈斜路湖は川湯温泉から僅に二十七町半、川湯驛よりは約二里の地點にあり、周圍十四里餘、水深四百尺あり、本道第二の大湖で釧路川の水源をなし

てゐる。碧水満々と湛へて海洋の如く、中央には密林に蔽はれたる周圍三里二町の中島(トウモシリ)を浮べ、頗る天然の風光に富んでゐる。又四圍には山嶺を繞らし、北方の湖岸は稍々山麓迫りて急崖をなし、海拔三千三百尺の藻琴山を頂點として左右になだらかな傾斜をなしてゐる。又湖の西南岸には到る處溫泉が湧出し、其の主なるものは池ノ湯、赤湯、砂湯及仁伏湯等である。

和琴半島は屈斜路湖の西南岸より突出せる周圍約一里の半島であつて、廣大にして單調に過ぐる湖景に變化を添へ、全島は熔岩丘で、鬱蒼たる樹林は水面に迫つてゐる。半島の北端と附近の湖中には無數の硫氣孔があつて盛に噴氣し熱泉が湧出してゐる。又半島の基部には良質の溫泉が天然風呂をなし、原始的の氣分が横溢してゐる。美幌峠は川湯驛より約九里餘で、展望の雄大と風光の明媚とを以て著名である。藻琴山の西方山麓に當り、海拔千七百尺餘

の高原で、視野頗る廣く、前方眼下に屈斜路湖を俯瞰し、遠く斜里岳、摩周岳及標津岳を望見し、後方には廣漠たる北見原野際涯なく、遙か地平線上一刷毛の白線を描いてオホーツク海を望見することが出来る。

川湯温泉は川湯驛より白煙濛々たる硫黄山の奇景を左に眺めて行くこと約三十町、赤蝦夷松の純林に圍まれたる溫泉旅館の市街地である。清澄なる熱泉は流れて大小數條の川となり、之を名づけて川湯と稱し、涼々の音は旅人の夢を驚かす程である。硫黄山は川湯驛の西北方十四町の地點に在り、海拔約一千七百尺の活火山であつて、全山爆發の殘骸を爲して、熔岩累々として一大壺觀を呈して居る。頂上中央火口丘の東方には所謂熊落しの爆發口があり、西方にも噴火口を存してゐる。又山麓から頂上に至る迄大小無數の噴氣孔からは百雷の如き大音響を發して鬼氣迫り、硫氣を噴出し、硫黄塔を築く狀はさながら造化

の奇術である。全山偃松、ガンカウランツ、イツツジ等の高山植物に蔽はれ、山麓の大平原には白樺點々たる中にイツツツジ、偃松密生し、其の自然美の配合には驚歎の外ない。

摩周湖は摩周湖の東壁に聳え海拔二千八百尺餘の休火山で、怪奇なる山容は迫つて一種悽愴の感を深くする。火口壁内は樹林が鬱蒼と繁茂してゐる。頂上からの視野は頗る廣潤雄大で、脚下數百米に紺碧の摩周湖があり、西方には雌阿寒岳及雄阿寒岳北東に斜里嶽、標津嶽を望み、眼下には釧路及根室の平原が際涯なく展開し、遠くは太平洋及オホーツク海の波光を見る事が出来る。

摩周湖は弟子屈驛の東方約二里餘の山間に在り、摩周嶽の中腹にある火口原湖で、長徑一里三十町、周圍五里三十町、海拔一千五百五十尺、水深六百八十尺あり、湖の中央に高さ約八十尺の小島カムイシユがあり、碧澄なる水は流出流入の一河川なく太古宛らの神祕を宿してゐる。

湖岸は約六百六十尺餘の絶壁を繞らし、千古の神祕境である。而も三方鬱蒼たる原生林に圍まると、至つては悽愴の氣に於て極まる。

弟子屈温泉は弟子屈驛より二千三百尺、鑛別川と釧路川との合流點にあり、国立公園遊覽の中心である。市街の旅館及び料亭には何れも内湯の設備あり、四季を通じて遊覽者と湯治客にて賑やかである。又鑛別温泉は弟子屈驛より約九町餘、鑛別川にのぞんだ閑靜な温泉場で、春は櫻の名所として賑つてゐる。

右は阿寒公園の代表的名勝の概説であつて、此處に遊ぶ者は恐らくは個々獨特の興趣を感得するであらう。

丹頂鶴の棲息 釧路、弟子屈間の中央部塘路驛の西方約二里の地點ツルハシナイは丹頂鶴の棲息地として有名であつて、日々鐵道沿線附近まで遊飛する。往復の遊覽客は時に汽車の窓より之を眺むる事が出来る。

厚岸湖 釧路と根室の間厚岸町に在り、厚岸灣に連る周圍

七里の鹹湖で牡蠣を多く産し湖中に數多の牡蠣島がある。附近には北海道三大古刹の一たる國泰寺あり、又北海道帝國大學の臨海實驗所がある。

根室町及其附近

根室町 根室本線の終端我が國鐵道の最東端に位し、開港の歴史は相當古いが、港灣は冬季結氷し、船舶航行の不便なる爲餘り發達しない。然し千島、カムチャツカ方面の出漁根據地であり、海産物の輸出港として重要な地位を占めてゐる。根室公園は驛の東北約十町、根室灣に臨み、晴天の日には南千島方面の島山を眺望することが出来る。

野付半島

中央はもとより、本道に於てさへまだよく知られてゐない勝地として野付半島がある。根室本線厚床驛より別海を経て春別に至り、こゝより標津に至る海岸並半島部を最も優れたる景勝地とするものである。

野付半島は砂丘によつて形づくられ、其の狭長なる地形は野に傳はるものなどあり、往時を偲び、今を思ひ、轉た肅然たるものがあらう。

網走町及其附近

網走町 網走は北見國斜里灣の西隅にあり、北見東海岸に於ける隨一の良港であり、函館、小樽から定期航路も開け、附近は木材及農産物の集散が多い。網走支廳及土木現業所の所在地であり、遊覽地としては、驛より西南三十町に三眺山ありて、前に網走湖、後に能取湖又、左に網走町及帽子岩を遠望するを得、殊に春季の櫻花、秋季の紅葉は賞すべきである。

野付牛町

網走線と湧別線の交叉點に位し、交通上の要衝に當りて、豊穰肥沃なる北見平野の咽喉を扼し、農産物特に薄荷の集散地であり、又木製品を産出し、新興活氣に満ちた地である。

置戸の大森林

網走線小利別驛より置戸驛に至る約十哩の沿線は針葉混淆の天然林多く、旅する人々は其の美觀を眺め、車窓近く之が崇嚴なる原始大森林

付灣を形成し、數箇の小島を基布してゐる。約七里に渉る本半島は、外面オホーツク海に面し海洋三里の彼方に國後島を望み草木鬱蒼とし特に蝦夷松及椴松等の老樹矮生し、特異なる景趣を呈し、紅葉の季ともなれば眞紅松の濃綠に照り映え、又四時三角帆を張れる漁船數十艘、眞に明鏡の如き灣内に浮ぶが如き景興に至つては、其の風光明媚にして雄大を極めたる様、大町桂月ならでも天下の絶景なりと三嘆するであらう。且灣内には魚介多く産し、又附近の農漁村は所謂名所化せざる素朴の寒村なれば、此の大陸的景勝地の興趣を味得するには頗る好適せる自然環境と云へよう。

養老牛温泉

根室國標津村に在り、温泉は未だ素朴閑寂を極めてゐる爲、都人士の俗腸を洗ふに適はしく、附近一帶標津岳麓の原始秘境であつて、奇峰峻岳數多く、極めて展望に富み、且阿寒公園の神祕境摩周湖に通ずる道路の完成を見るに至らば中央に其の秘境を知らるゝに至る

の靈氣に觸れることが出来る。

猿瀧湖

猿瀧湖の風光は大陸的雄大さと、北洋に面する荒涼寂寞さに於て特筆すべき價値がある。遠淺の湯は清澄の水を湛へ、岸に立ち並ぶ原始林の紫紺の影を浮べてゐる。春は赤き躑躅、夏は綠の樹々を映す清澄な湖であつて、秋の紅葉と觀月の遊は名物の牡蠣と共に多くの人に親しまれてゐる。

温根湯温泉

留邊蘘驛より二里半、清流武華川沿岸にあり、後方に山を負ひ、附近一帯の地は亭々たる針葉樹林鬱蒼とし四季常碧の樹海を爲し、其の雅趣は正に一幅の繪を見るが如く、殊に雪の眺望に勝れてゐる。秋は岩層に叢生する潤葉樹の紅葉美しく、春は附近一面に密生するイワツツジの花覆郁とし、且樹叢より鶯聲のまろび出づるを聞くに至つては、實に感興盡きぬものがある。

稚内町及其附近

稚内町は宗谷本線の終端、北海道最北の都會であり而して本道樺太の唯一の連絡港

るであらう。

帶廣市及其附近

十勝國の中央に位し十勝支廳の所在地であつて、此の地方は土地平潤にして面る廣く、附近耕地開け、農産物豊富にして、此等の雜穀の市場であり、又馬産地として有名である。尙附近一帯は工業地化し、昭和八年四月一日より附近村落を併合して市制が施行された。

狩勝峠

日本新八景の一で石狩、十勝兩國境に位し、海拔一千八百尺にして、本道沿線中の最高地に位し、瀧川から根室線により約五時間である。汽車が此の峠に入るや蜿蜒九折、眼下には曠漠たる十勝の大平原を展望し、其風光實に雄大で、全國第一の壯觀である。

然別湖

帶廣から北方約十四里にありて、然別川の水源地をなし、海拔二千六百尺の高所に在る湖水で、湖岸悉く原生林で中央に一小島があり、幽邃極みなき原始的山湖である。帶廣市よりこゝに至る間に、扇ヶ原の高原あり、展望面る宏潤である。

として重要視され、現今稚内大泊間及稚内本斗間の各航海の便がある。尙本町は宗谷支廳の所在地である。

利尻山 稚内港を距る西南十海里の海洋中に突起せる五千六百餘尺の死火山で眺望絶佳、利尻富士の名がある。其の沿岸には鱈、昆布、鱒、蟹其の他介類無盡に産し、本道の漁場として有數である。

留萌町及其附近 留萌町 日本海に面する樞要の港灣にして、小樽港を距る北方五十六哩、背後に鐵道の便を有し、海陸交通の要衝で、留萌支廳の所在地である。

増毛町 留萌町の北方約十哩の地點にあり、日本海に面せる港灣で、毎春鱈の豊漁で有名である。

浦河町及其附近

浦河町 日高國の中心地日高支廳の所在地であつて、由來日高の開發は其の緒は古いが海陸交通不便の結果、功程進まぬ憾があつたが、今や鐵道の開通と共に、將來繁榮するであらう。

義經神社 平取驛より入る、義經を祀れる村社にしてアイヌの崇敬が深い。尙此の地は本道中アイヌ族の舊都で、今尙舊土人の大部落を成してゐる。

新冠御料牧場 日高線靜内驛より約三里、自動車の便あり、本牧場は地積三萬三千餘町歩を有し、原野は牧草に富み、寔に天恵の牧場で洋種、雜種及内國産等の駿馬を飼育し、馬匹の改良を計り、牧畜業發達に裨益するところは夙に世人の知る所である。

庶野の櫻 日高國幌泉村大字庶野の裏手高臺地を以て櫻の勝地とするもので、日高國の西南端に位し、峰巒重疊し、襟裳岬に達する所、南は太平洋に面して海濱を距る五十米の箇所約三十町歩は天然の櫻樹を主林とし中に雜木密生して少數の赤黒松と本道の有用樹種根松を混淆してゐる。

天然櫻樹少き本道としては隨一の名所であり、三千本を數ふる櫻樹は五種あつて、太平洋の荒風によつて撓められたる樹姿は頗る雅趣に富むものである。

天然紀念物新指定 文部省では、昭和十五年二月十日、天然紀念物として左の通り指定した。

落石岬のサカイツツジ自生地 (根室郡和田村字落石)
植物群落指定解除

山越郡長萬部村字靜狩の天然紀念物靜狩泥炭形成植物群落地域中、國有未開地百七十二町七反七畝八歩三合は、昭和十五年一月二十二日、文部省告示で、その指定を解除された。

國立公園協會施設 厚生省體力局内、國立公園協會では、地方支部や觀光協會と共同の下にハイキング施設、山小屋、野營場シヤンツエ、休憩舎等々の設置に努めて來たが、昭和十四年度に於ては左の如く施設した。
△ハイキング施設(指導標建設)——括弧内は延長キロ數 阿寒アトサマブク線(16)大雪山、然別線(13)糠平線(16)
△山小屋、避難小屋、休憩舎、シヤンツエ、野營場施設——括弧内は所在地——大雪山——避難小屋(新得村トムラウシ)

溫泉協會支部總會 日本溫泉協會北海道支部では、昭和十五年五月二十七日、定山溪において第一回總會を開き、昭和十五年度事業を審議した結果左の事業を行ふ事に決定した。

一 夏期溫泉療養相談所開設 十月一日から二十日間弟子屈溫泉又は川湯溫泉において北大柳外科醫員擔當の下に湯治についての一般相談を行ふ
二 溫泉講演會 八月上旬登別並に湯の川の兩溫泉で一般、療養兩方面の講演會を開き溫泉利用を奨励する
三 溫泉座談會 九月中旬に阿寒、洞爺湖兩溫泉で開く
觀光バス運行減る 阿寒國立公園地帯の觀光バスは、ガソリン配給不足のため、昭和十五年は運轉回數を極度に減少せざるを得なくなり、辛うじて定期便の運行をなす程度なので、貸切や團體旅客の取扱ひは不可能な實情である。

東京市京橋區銀座八丁目壹番地

帝國產金興業株式會社

電話銀座(57)〇〇六八八番
振替東京八八、八〇〇番

△日程

二月四日 開會式團體レース
 五日 軍隊レース、新複合前半滑降競技(春香山)
 六日 新複合後半廻轉競技、繼走
 七日 長距離(兼複)
 八日 純飛躍(兼複)女子府縣對抗大廻轉
 九日 耐久、男子府縣對抗、中等繼走、閉會式
 △各種目團體レース、府縣對抗レース、軍隊レースを悉く全日本選手権種目とし、軍隊を除いて参加選手全部を聯盟へ加盟せしめる
 △飛躍競技における危険を豫防するため、豫選大會に三十米以上飛躍しない場合は、選手権大會出場権なし
 △少年、青年、壯年の各組別選手権を復活せしめる
 △第二十回全日本選手権會場は青森縣大鰐スキー場
 △複合飛躍臺の建設に努力する
 △一般スキー指導者檢定は女子にも開放する

ス キ

紀元二千六百年記念 第五回滑降廻轉大會

昭和十五年一月十三日、十四日(滑降手稻山、廻轉三角山)
 小樽新聞社主催
 △男子滑降
 1 片桐信四郎(樽商) 五分五六秒四
 2 近藤 壽(小樽市役所) 五分五七秒四
 3 橋本 茂生(樽商) 六分四秒四
 4 新谷 忠(北中) 六分四秒八
 5 中川 哲也(札商) 六分一〇秒八
 △女子滑降
 1 木元セツ子(樽市高女) 四分四七秒四
 2 南 惇子(同) 六分一四秒四
 3 室塚 俊子(岩見澤高女) 六分二〇秒〇
 4 瀧本 章子(同) 六分二三秒八

5 杉本 文子(樽廳高女) 六分三七秒〇
 △男子廻轉
 1 橋本 茂生(樽商) 一四四秒八
 2 渡邊賢太郎(北商) 一五四秒七
 3 高岡 國一(手稻鑛山) 一五五秒六
 4 松浦 未男(札鐵) 一五九秒三
 5 奥村 未男(同) 一六〇秒八
 △女子廻轉
 1 久保 麗子(樽廳高女) 一三七秒八
 2 木元セツ子(樽市高女) 一三八秒二
 3 山本 克子(同) 一四四秒五
 4 南 惇子(同) 一四九秒六
 5 關澤 靜枝(岩見澤高女) 一五一秒九
 △男子新複合
 1 橋本 茂生(樽商) 五八七點六
 2 新谷 忠(北中)

六〇九點三
 3 近藤 壽(小樽市役所) 六二二點四
 4 奥村 未男(札鐵) 六二三點〇
 5 高岡 國一(手稻鑛山) 六三二點二
 △女子新複合
 1 木元セツ子(樽市高女) 四六七點一
 2 南 惇子(同) 五六八點九
 3 瀧本 章子(岩見澤高女) 五八四點八
 4 久保 麗子(樽廳高女) 五八七點九
 5 山本 克子(樽市高女) 五九四點九
 第十一回中等校競技
 昭和十五年一月二十日、二十一日(宮の森、三角山、荒井山)
 △距離(十五軒)
 1 落合 力松(北商) 五十九分二一秒
 2 關戸 末弘(札商) 一時間二分二六秒
 3 河淵 薫(北商) 一時間三分一二秒

4 松下 幸義(樽商) 一時間三分一八秒
 5 瀧田 年夫(樽商) 一時間三分五〇秒
 △廻轉
 1 新谷 忠(北中) 一三〇點四(二分一〇秒)
 2 橋本 茂生(樽商) 一四四點八(二分二四秒八)
 3 中川 哲也(樽商) 一四八點六(二分二八秒六)
 4 宮本 智也(北中) 一五〇點〇(二分三〇秒)
 5 笹野 英政(北商) 一五三點〇(二分三三秒)
 △複合競技
 1 松下 幸義(樽商) 三三七・五五距離二一〇・七五飛躍一六六・八二七米 三〇米
 3 關戸 末弘(札商) 三七〇・五距離二一七・五飛躍一五三・〇 二九米 二二米
 4 德橋 勝美(札商) 三六八・九距離一八一・五飛躍一八

七・四 三一米五〇 三三米五〇
 5 藤澤 正二(北商) 三六〇・八五距離一六二・七五飛躍一九八・一 三四米 三
 △飛躍競技
 1 脇本 春吉(北商) 二二四點 九六〇米 六〇米五〇
 2 砂田 巖(樽商) 二一六米 五三米五〇 五七米
 3 大久保 正(光星) 二一四點 七五三米 五九米
 4 大場 正己(旭商) 二一三點 七五五米五〇 五八米五〇
 5 米谷 侃三(樽中) 二一〇點 三五一米 五八米五〇
 △繼走(二〇軒)
 1 名寄中學 二時間十分七秒 (廣島弘、神崎幸一、猿渡兼男、寺口春雄)
 2 小樽商業 二、一〇、二一 (高橋勝、瀧田年夫、松下幸義、柏倉俊春)
 3 旭川商業 二、一一、五二 (野中慶男、中島惟司、櫻田武次、濱田英男)
 北海道選手権大會

全日本北海道豫選
 昭和十五年一月二十七日、二十八日、二十九日(札幌郊外)
 △距離
 壯年組 1 駒井 三郎(三菱美唄) 一時三〇分二〇秒
 2 星 光平(新幌内) 一三一・〇九
 3 高田 三郎(三菱美唄) 一三二・〇五
 4 朝比奈敏男(頃望會) 一三三・二五
 5 内山 良夫(道廳) 一三四・四五
 成年組 1 井上 健二(札鐵) 一七〇・四
 2 關戸 力(同) 一七三・九
 3 落合 力松(北商) 一七四・五
 4 久慈 庫男(札鐵) 一七二・二三
 5 關戸 末弘(札商) 一七二・三四
 少年組 1 野中 慶男(旭商)

一・二三・〇〇
 2 小川原 昇(樽廳中) 一・二四・一三
 3 松下 幸義(樽商) 一・二四・二三
 4 佐藤 七郎(札選) 一・二四・二六
 5 中島 惟司(旭商) 一・二四・四六
 △滑降
 男子組 1 松浦 末男(札鐵) 四分四三秒二
 2 奥村 末男(同) 四分四五秒
 3 織笠 巖(後志支廳) 四分四九秒六
 4 末岡 達彌(小樽高商) 四分五二秒四
 5 相田 暢一(鶴裳) 四分五二秒八
 女子組 1 山本 克子(樽市高女) 四分二七秒六
 2 木元セツ子(同) 四分二七秒八
 3 佐藤 啓子(旭川營林區署) 四分三〇秒四
 4 南 惇子(樽市高女) 四分四二秒八
 四四五

體育

5 瀧本 章子(岩見澤高女) 四分四一秒四

△純飛躍

1 米谷 侃三(樽廳中) 二二二
一・三(六五米五〇、六七米)
2 大久 保正(光星) 二一九
六(六六米、六五米)
3 大場 正巳(旭商) 二一六
三(六三米五〇、六三米)
4 細岡 好明(樽廳中) 二二一
一・三(六〇米五〇、六二米
五〇)
5 安宅 啓治(樽商) 二一〇
二(五八米、六二米五〇)

△成年組

1 菅野 駿一(小樽高商) 二二二
五・五(六六米、六八米)
2 久保登喜夫(札鐵) 二二二
四(六四米五〇、六五米)
3 伊黒 正次(同) 二一九・八
(六四米五〇、六四米)
4 間宮 修(北大) 二一八
一(六三米五〇、六七米五
〇)
5 松山 茂良(同) 二一一・七
(六一米五〇、六二米五〇)

△複合

少年組
1 小川原 昇(樽廳中) 四三
〇・四(距離二四〇・〇飛躍
一九〇・四)
2 高野 榮(札商) 四〇一
五(距離一九六・五飛躍二
〇五・〇)
3 飯塚 慶治(旭商) 三八〇
九(距離二二九・五飛躍一
五一・四)
4 松下 幸義(樽商) 三七四
九(距離二三八・五飛躍一
三六・四)
5 米谷 侃三(樽廳中) 三七
一・四(距離一五四・五飛
躍二一六・九)

成年組

1 久慈 庫夫(札鐵) 四三二
一(距離二一九・〇飛躍二
一三・一)
2 竹見 忠孝(太平洋炭) 三九
二・五(距離一八三飛躍二
〇九・五)
3 石川 徹(三菱大夕張) 三
六六・七(距離一八三飛躍
一八三・七)
4 徳橋 勝美(札商) 三三八

四四六

4 南 淳子(樽市高女)

4 六五・〇點(二八一・四
四六五・〇點) 一八三・六
5 關澤 靜枝(岩見澤高女)
四六七・五點(二九二・〇
一七五・五)

△耐久

1 但野 寛(札鐵) 二時間五八分三七秒
2 關戸 力(同) 二・五八・五四
3 落合 力松(北商) 三・〇三・一八
4 佐藤 末義(三菱美唄) 三・〇八・五〇
5 鈴木 義雄(札鐵) 三・一一・〇五

△青年學校

1 小樽稻穂校 四一分四六秒
(中垣七郎、米倉竹雄、伊藤
薫、岩松養之助)
2 旭川朝日校 四二、四八
(狩野正雄、竹内七郎、土井
正、松田庄作)
3 小樽花園校 四二、四八
(加藤眞一、樋口治夫、山田
光榮、酒井一榮)
4 札幌西尾校 四九、〇五
第八回女子競技大會

昭和十五年二月十八日(宮の森、三角山)

△滑降

A 班
1 木元セツ子(樽市高女) 一分一四秒
2 南 伶子(同) 一分二〇秒
3 瀧本 章子(岩見澤高女) 一分二〇秒
4 笹田和嘉子(樽市高女) 一分二二秒

B 班

1 山本 克子(樽市高女) 一分一七秒
2 白岩 瑛子(同) 一分二八秒
3 勝木 蓉子(岩見澤高女) 一分四七秒

△廻轉

A 班
1 木元セツ子(樽市高女) 一分二五秒四
2 南 伶子(同) 一分二九秒六
3 村田 澄子(同) 一分三四秒
B 班
1 山本 克子(樽市高女) 一分三三秒六
2 白岩 瑛子(同) 一分三三秒六

體育

昭和十五年二月二十四日、二十五日(宮の森、大倉シャンプ)

△新複合

A 班
1 木元セツ子(樽市高女) 一分三九秒二
2 南 伶子(同) 一五九・九
3 瀧本 章子(岩見澤高女) 一七〇・一
4 村田 澄子(樽市高女) 一七七・三
5 笹田和嘉子(同) 一八二・五

B 班

1 山本 克子(樽市高女) 一七一・一
2 白岩 瑛子(同) 一八七・七
3 勝木 蓉子(岩見澤高女) 二二三・五
4 瀧本 玲子(同) 二二五・四
5 奥村 治子(樽市高女) 二二二・二

△繼走

1 北海A組(三好、筒井、森井、前湯) 二二二・〇秒
2 北海B組(大熊、藤原、志田、一戸) 二四四・〇九秒
第十一回宮様記念

〇(距離一九二飛躍一四六)

5 井上 未夫(旭鐵) 三一九・七(距離一二三飛躍一九六・七)

△新複合

男子組
1 松浦 未男(札鐵) 四六五・〇點(二八三・二
四六五・〇點) 一八一・八
2 近藤 壽夫(小樽市役所) 四八二・八點(二九二・八
四八二・八點) 一九〇・〇
3 橋本 茂生(樽商) 四八三・八點(二九七・六
四八三・八點) 一八六・二
4 成田 進(三菱手稻) 四九二・〇點(二九四・八
四九二・〇點) 一九七・二
5 渡邊堅太郎(北商) 四九二・二點(三〇六・八
四九二・二點) 一八五・四

女子組

1 木元セツ子(樽市高女) 四三七・〇點(二六七・六
四三七・〇點) 一六九・四
2 山本 克子(同) 四四六・一點(二六七・六
四四六・一點) 一七八・五
3 佐藤 啓子(旭川營林) 四六一・八點(二七〇・四
四六一・八點) 一九一・四

昭和十五年二月二十四日、二十五日(宮の森、大倉シャンプ)

△長距離

壯年組
1 朝日奈敏男(頃望會) 一時間二三分二六秒
2 佐藤 貫三(根松) 一時間二三分三五秒
3 森 徳一(札鐵) 一時間二四分五五秒
4 錦戸善一郎(札聯) 一時間二八分二七秒
5 太田 信吉(道廳) 一時間二九分二五秒

少年組

1 河淵 薫(北商) 一時間一三分四六秒
2 後藤 學(札師) 一時間一四分一〇秒
3 鹽垣 登(北中) 一時間一四分一六秒
4 田中 利夫(同) 一時間一四分二二秒
5 佐古 孝章(札師) 一時間一四分二七秒

落合

1 落合 力松(北商)

昭和十五年二月二十四日、二十五日(宮の森、大倉シャンプ)

△複合

少年組
1 藤澤 正二(北商) 計四一八・九(距離二一〇・〇
飛二〇・八・九)
2 脇本 春吉(同) 三九〇・三(二七一・〇
二一九・三)
3 奥村 末男(札鐵) 三八五・一(一七七・〇
二〇八・一)
4 小黑 秀男(光星) 三七九・三(一七一・〇
二〇八・三)
5 小笠原祐正(北中) 三七八・一五(一九五・七五
一八二・四〇)

青年組

1 徳橋 勝美(札商) 四〇〇・八五(二〇二・九五
一九七・九)

落合

1 落合 力松(北商)

四四七

△札幌對抗戦

2 久慈 庫夫(札幌)	二〇七・九五
4 〇〇・〇五	一九二・一〇
3 久保登喜夫(同)	一八一・五〇
3 九四・五	二一三・〇〇
4 伊黒 正次(同)	一六三・五五
三九・〇〇	二一五・五五
5 龜ヶ森 正(北大)	一九〇・七五
三四四・二	一五三・七五

△純飛躍

少年組	春吉(北商)	二一六・五	五一米〇
1 脇本	二一六・五	五一米〇	五
2 小笠原祐正(北中)	二〇六・八	四八・五	五〇・〇
3 砂田 巖(樽商)	二〇三・四	四四・五	四七・五
4 藤澤 正二(北商)	二〇二・四	四四・〇	五一・〇〇
5 青木 和實(同)	一九九・三	四三・五	五〇・五

全道女子迴轉大會

昭和十五年二月二十五日(小樽市天狗山)

1 安達 五郎(札幌)	五二米〇〇	
二二一・一	五六米〇〇	
2 松山 茂忠(北大)	二一九・〇	五三・〇〇
二二一・五	四九・〇〇	
3 伊黒 正次(札幌)	二二一・二	五二・〇〇
二二一・二	五二・〇〇	
4 野村 四郎(日鐵)	二〇六・六	四九・五
二〇六・六	五五・五	
5 久保登美夫(札幌)	二〇六・六	四九・五
二〇六・六	五五・五	

天狗山迴轉競技會

昭和十五年三月二十一日(小樽市天狗山)

1 有川梅次郎(ボーゲン)	二分五秒三
2 近藤 壽夫(同)	二・一〇・六
3 植田 英次(高商)	二・一・二・四
4 成田 進(ボーゲン)	二・一・三・〇
5 高岡 國一(手稻鐵山)	二・一・四・九

大倉飛躍記念大會

昭和十五年三月十日(大倉シヤンツエ)

1 伊黒 正次(札幌)	三九・〇
六一米	七一米
七一米	七二米
2 伊藤 英夫(明大)	三四・五
三四・五	七〇・五
3 野村 四郎(日鐵)	三三・三
五六	七二・五
六六・五	六六・五
4 松宮 金二(旭中)	三三・四
五九・五	六九
七〇・五	三二・九
5 安達 五郎(札幌)	三二・九
五一・五	六八

△女子組

1 木元セツ子(小樽市立高女)	二分一六秒六
2 山本 克子(同)	二二八・六
3 南 伶子(同)	二四九・九
4 笹田和嘉子(同)	二四九・五
5 南 惇子(同)	二五二・二

△少年組

1 柴田 信一(ボーゲン)	二分一三秒〇
2 千葉 毅(明大OB)	二・四二・五
3 栗山 巍(炭汽)	二・四三・七
4 成田文太郎(ボーゲン)	三・〇〇・一
5 西村 茂吉(小樽山岳)	三・〇九・七

△札幌對抗戦

小樽軍	札幌軍	分秒	分秒
橋本 一、四、九	佐藤 二、〇、七	二、〇、七	二、〇、七
河本 二、〇、三	成田 二、一、三、〇	二、一、三、〇	二、一、三、〇
有川 二、〇、五、三	高岡 二、二、四、九	二、二、四、九	二、二、四、九
近藤 二、一、〇、六	千葉 二、二、七、四	二、二、七、四	二、二、七、四
鈴木 二、二、一、一	針生 二、二、九、八	二、二、九、八	二、二、九、八
植田 二、二、三、四	阿部 二、二、〇、六	二、二、〇、六	二、二、〇、六
笹野 二、二、三、九	澁谷 二、二、〇、六	二、二、〇、六	二、二、〇、六
渡邊 二、二、七、七	溝口 二、二、三、三	二、二、三、三	二、二、三、三
荒谷 二、二、八、二	安達 二、三、〇、六	二、三、〇、六	二、三、〇、六
河合 二、二、九、六	藤川 二、三、三、六	二、三、三、六	二、三、三、六
柏倉 二、二、九、六	藤川 二、三、三、六	二、三、三、六	二、三、三、六
合計 三、三、六	合計 三、三、五	三、三、五	三、三、五

第三回馬スキー大會

昭和十五年二月二十五日(札幌市立綜合競技場)

△自馬班長距離(重種)四キロ

1 八紘學院(札幌)	九分十三秒
2 渡邊 政造(篠路)	九分十三秒
パンセイ號	一二分二八秒

△輕種八キロ

1 岡田 光夫(札幌)	一二分一五秒
ハヤチドリ號	一二分一五秒
△中間種八キロ	一二分一五秒
1 小關 幸治(札幌)	一二分一五秒

リイヤード號 一五分五九秒

2 松本 淳(同)	一八分五一秒
3 池内 源市(手稻)	一八分五四秒
初乙女號	一八分五四秒
4 八紘學院(札幌)	一九分二五秒
紘園號	一九分二五秒
5 井上 良照(元村)	二四分〇七秒
北海號	二四分〇七秒
△中等學生班五〇〇米	二分二七秒一
1 千葉 賢也(光星)	二分二七秒一
流星號	二分二七秒一
2 澁谷 信(札幌)	二分二七秒二
岩梅號	二分二七秒二
3 溝口 鐵藏(同)	二分二九秒
勝章號	二分二九秒
4 西澤 春夫(札幌二中)	二分三〇秒一
石英號	二分三〇秒一
5 村田 喜平(光星)	二分五六秒四
勝義號	二分五六秒四
△軍隊班速歩競技一キロ	三分〇九秒
1 松岡軍曹 黃名號	三分〇九秒
2 市原軍曹	三分五八秒五
グロスター號	三分五八秒五
△俱樂部班五〇〇米	二分三五秒一
1 川口 岩平 金駿號	二分三五秒一

△自馬班長距離(輕種)四キロ

1 岡田 光夫	二分二五秒二
ハヤチドリ號	二分二五秒二

△自馬班千米輕種

1 岡田 光夫	二分二五秒二
ハヤチドリ號	二分二五秒二

△中間種千米

1 小關 幸治(札幌)	二分〇一秒
リイヤード號	二分〇一秒
2 池内 源市(手稻)	二分一九秒一
初乙女號	二分一九秒一
3 八紘學院(札幌)	二分二九秒四
紘園號	二分二九秒四
△重種千米	二分三三秒四
1 龜村 正美(札幌村)	二分三三秒四
風水號	二分三三秒四
2 渡邊 政造(篠路)	二分四〇秒二
ダンテ一號	二分四〇秒二
3 石川 勇(札幌)	二分五〇秒
グレース號	二分五〇秒
△俱樂部班千米	二分〇八秒二
1 熊澤 洗 永韻號	二分〇八秒二
2 佐藤 信夫 宮武號	二分一二秒三
3 三橋誠一郎 金駿號	二分二九秒

スケート記録會

昭和十五年一月四日(苦小牧)

△女子千米(セパレート)	一分五六秒六
1 坂本(一般)	一分五六秒六

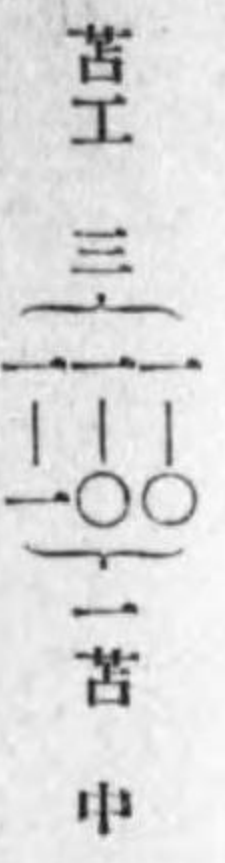
- 2野 澤(同) 一分五八秒二
- 3平 井(苦高女) 一分五十九秒二
- 4品 川(同) 二分一秒一
- 5北 澤(王子) 二分二秒一
- △男子千五百米(セパレット)
- 1伊 藤(苦工) 二分四秒三
- 2小 川(王子) 二分四秒七
- 3尾 形(苦中) 二分四秒七
- 4千 葉(王子) 二分四秒八
- 5津 田(同) 二分四秒八
- △女子千三百米(オープン)
- 1坂 本(一般) 六分一二秒六
- 2平 井(苦高女) 六分二〇秒六
- 3野 澤(一般) 六分二〇秒七
- 4北 澤(王子) 六分三〇秒四
- 5渡 部(苦高女) 六分三八秒五
- △男子五千米(オープン)
- 1伊 藤(苦工) 一分七秒九
- 2加 藤(苦中) 一分九秒二
- 3千 葉(王子) 一分一三秒七
- 4富 田(苦東) 一分一四秒七
- 4津 田(王子) 一分一四秒七

- 6秒 金(王子) 一分一六秒四
- △女子五千米(オープン)
- 1坂 本(一般) 一分三秒七
- (全道新記録)
- 2平 井(苦高女) 一分一秒一
- 3野 澤(同) 一分一秒一
- 3野 澤(一般) 一分一秒一
- 4品 川(苦高女) 一分一秒一
- 秒(同)
- △男子一萬米(オープン)
- 1尾 形(苦中) 二分〇秒二
- 2伊 藤(苦工) 二分二秒八
- 3小 川(王子) 二分三秒八
- 4加 藤(苦中) 二分三秒四
- 中等校選手権大會
- 昭和十五年一月七、八日(苦小牧)
- △女子五百米(セパレット)
- 1平 井(苦小牧高女) 五七秒五
- 2品 川(同) 五七秒六
- 3渡 邊(同) 一分〇秒二
- 4下 山(同) 一分三秒五
- △男子五百米(セパレット)
- 1安 保(苦小牧工業) 四七秒一

- 2伊 藤(同) 四八秒四
- 3尾 形(苦小牧中學) 四九秒五
- 4相 馬(同) 五一秒三
- 5加 藤(同) 五二秒六
- △女子千三百米(セパレット)
- 1品 川(苦高女) 二分五秒三
- 2平 井(同) 二分六秒四
- 3關 下(同) 二分九秒四
- 4小野田(同) 二分一七秒九
- △男子一萬米(オープン)
- 1能 登(北中) 二分五九秒七
- 2加 藤(苦中) 二分五九秒七
- 3伊 藤(苦工) 二分二七秒二
- 4安 保(苦工) 二分二七秒二
- 5尾 形(苦中) 二分二九秒六
- 秒六
- △男子千五百米(セパレット)
- 1安 保(苦工) 二分三九秒四
- 2伊 藤(同) 二分四〇秒九
- 3尾 形(苦中) 二分四二秒四
- 4相 馬(同) 二分四四秒四
- 5加 藤(同) 二分四九秒八
- △男子五千米(オープン)

- 1安 保(苦工) 九分五六秒四
- 2伊 藤(同) 九分五六秒五
- 3加 藤(苦中) 九分五六秒九
- 4尾 形(同) 一分〇分六秒二
- 5相 馬(同) 一分〇分一六秒二
- △女子三千米(オープン)
- 1平 井(苦高女) 六分九秒九
- 2渡 部(同) 六分三二秒八
- 3關 下(同) 六分四〇秒八
- 4小野田(同) 六分五五秒二
- △女子二千米(獨走)
- 苦小牧高女 四分一二秒
- △男子二千米(獨走)
- 1苦小牧中學 三分三五秒七
- 2苦小牧工業 三分四一秒
- 3札幌工業 四分二七秒六
- △ファイギュア選手権
- 男子——大 森 北海中學
- 女子——上片平 苦小牧高女
- △ホッケー准決勝
- 苦中一三 五三〇〇 ○北中
- 苦工 九 三四〇〇 ○札師
- △三、四位決定戦
- 札師 七 四一〇〇 ○二北中

△決勝戦

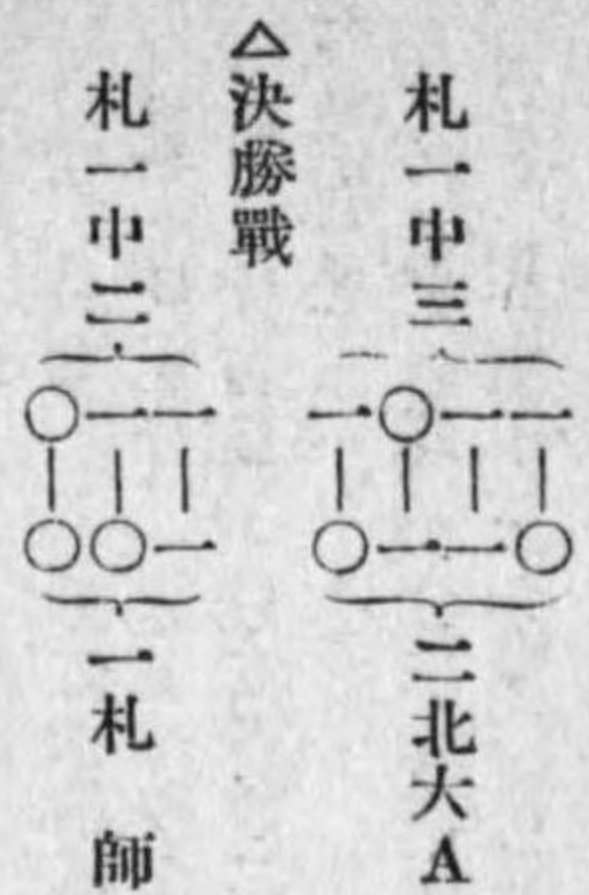


- 全道水上競技大會
- 明治神宮大會豫選
- 昭和十五年一月十四日、十五日、十六日(苦小牧)
- △女子五百米
- 1坂 本(一般) 五三秒八
- 2北 澤(王子) 五六秒四
- 3品 川(苦高女) 五七秒九
- 4平 井(同) 五七秒二
- △男子五百米
- 1安 保(苦工) 四七秒一
- 2伊 藤(同) 四九秒九
- 3小 川(王子) 四九秒九
- 4小 松(日鐵) 五〇秒九
- △女子千三百米(セパレット)
- 1坂 本(苦協) 一分五三秒二
- 2平 井(苦高女) 一分五五秒九
- 3品 川(同) 一分五六秒五
- 4北 澤(王子) 一分五七秒七
- 5野 澤(苦協) 一分五八秒二
- △千五百米(セパレット)
- 1小 松(日鐵) 二分三九秒四
- 2小 川(王子) 二分四〇秒五

- 3安 保(苦工) 二分四〇秒八
- 4津 田(王子) 二分四五秒八
- 5尾 形(苦中) 二分四六秒七
- △男子五千米(セパレット)
- 1小 松(日鐵) 九分四〇秒五
- 2小 川(王子) 九分五二秒六
- 3津 田(同) 九分五二秒九
- 4富 田(苦東) 九分五四秒五
- 5千 葉(王子) 九分五四秒八
- △女子三千米(セパレット)
- 1坂 本(苦協) 六分三秒四
- 2野 澤(同) 六分十三秒二
- 3平 井(苦高女) 六分十四秒二
- 4品 川(同) 六分二三秒四
- △女子五千米(セパレット)
- 1坂 本(苦協) 一分三秒五
- 秒五
- 2野 澤(同) 一分四分二秒八
- 3平 井(苦高女) 一分四分三秒一
- 4北 澤(王子) 一分五七秒二
- 5渡 邊(苦高女) 一分一秒一
- 秒二
- △男子一萬米(セパレット)
- 1小 松(日鐵) 二分六秒六
- 六(全道新記録)

- 2伊 藤(苦工) 二〇分一七秒(同)
- 3小 川(王子) 二〇分二九秒八
- 4千 葉(同) 二〇分四〇秒六
- 5津 田(同) 二〇分四〇秒八
- △女子總得點
- 1坂 本(苦協) 二三四・五
- 一六
- 2平 井(苦高女) 二四一・八二六
- 3野 澤(苦協) 二四四・一四六
- 4北 澤(王子) 二四五・五八六
- 5品 川(苦高女) 二四六・五四〇
- △男子總得點
- 1小 松(日鐵) 二二二・四一三
- 2小 川(王子) 二二四・〇五〇
- 3安 保(苦工) 二二五・七二〇
- 4伊 藤(同) 二二九・九八〇
- 5富 田(苦東) 二三〇・八一八
- △ファイギュア選手権

- 1辻村 眞吾(北大)
- 順位點三 得點八〇・九三三
- 2橋本 英俊(函館)
- 順位點六 得點五七・五八三
- △ジュニア(男子)
- 1葛西 峰男(函館)
- 順位點三 得點一七・一
- 2賀川 文雄(一中)
- 順位點六 得點一四・三
- △ジュニア(女子)
- 1小山セツ子(函館)
- 順位點三 得點一七・五六六
- △ホッケー准決勝
- 苦工 三 二一〇〇 ○札一中
- 王子 一 三六〇〇 ○札師
- △決勝戦
- 王子 七 六一〇〇 ○苦工
- ホッケー選手権
- 昭和十五年二月四日(札幌市中島公園スケートリンク)
- △准決勝
- 札師 四 二一〇〇 ○二北大B



陸上

日鐵記錄會新記錄

- 昭和十五年五月二十六日(室蘭市瑞之江競技場)
- △走高跳 谷 一米六五
- △圓盤 富盛 三九米七七
- △鐵槌 富盛 四三米一〇
- (北海道新記錄)
- △砲丸 竹田 十米八一
- △百米 谷 十一秒四
- △二百米 谷 廿四秒四
- △四百米 佐藤 五十八秒
- △八百米 陣上 二分三秒一
- △五千米 今 十八分四
- △走巾跳 谷 六米〇九
- 北大對三井砂川
- 昭和十五年六月九日(三井砂川)
- △百米 谷(三井) 一一秒四

- △四百米 田中(三井) 五三秒九
- △千五百米 小島(三井) 四分一一秒一
- △走幅跳 栗原(北大) 六米四三
- △砲丸投 川浪(三井) 一米八五
- △圓盤投 川浪(三井) 三三米二九
- △棒高跳 佐々木(三井) 三米四〇
- △槍投 中谷(三井) 四九米〇九
- △千米繼走 三井砂川(中谷、佐々木、清水、田中) 二分八秒八
- △走高跳 武谷(北大) 一米六〇
- △四百米繼走三井(中谷、三船、佐々木、清水) 四六秒五
- 三井砂川一〇三點北大九二點で三井砂川の勝
- 北大豫科・小樽高商
- 昭和十五年六月十五日(北大競技場)
- △百米 秋間(豫科) 一一秒四

- △走高跳 秋間(豫科) 一米九五
- (大會新記錄)
- △槍投 秋間(豫科) 四四米二八
- △千五百米 鈴村(豫科) 四分二五秒
- △走幅跳 秋間(豫科) 六米三七
- 六月二十九日再開
- △高障 秋間(豫科) 一七秒一
- (大會新記錄)
- △圓盤投 秋間(豫科) 二八米八六
- △四百米 柴(豫科) 五五秒一
- △棒高跳 山本(豫科) 三米
- △八百米繼走 豫科(柴、栗原、秋間、鈴村) 一分三秒八
- 六四對三一で北大豫科の勝
- 女子中等學校競技
- 昭和十五年七月二十四日(札幌綜合グラウンド)
- △走高跳 内山(函館大谷) 一米三五
- △四百米 碓井(札幌北海) 六九秒五
- △走幅跳 森井(札幌北海) 四米六二
- 七月二十五日
- △二百米 碓井(札幌北海) 三〇秒二
- △八十米障 淺見(札幌北海) 一四秒五
- △四百米繼走 札幌北海高女(佐々木、平泉、筒井、森井) 五五秒一
- △三段跳 清水(札幌市立) 一〇米三五
- △砲丸投 山木(札幌北海) 一一米F
- △百米 森井(札幌北海) 一三秒三
- △槍投 竹内(札幌北海) 三四米七九
- △八百米繼走 札幌北海高女(森井、平泉、上本、碓井) 一分五八秒四
- △圓盤投 山木(札幌北海) 三四米四一
- △六十米 森井(札幌北海) 八秒二

- △八百米 田中(野付牛) 二分四九秒五
- 男子中等學校競技
- 昭和十五年七月二十五日(札幌綜合グラウンド)
- △四百米繼走 北中(村中、宇野、須田、宮本) 四七秒五
- △走高跳 宮本(北中) 一米七〇
- △八百米 出村(空知農業) 二分九秒五
- △百米 宮本(北中) 一一秒三
- △棒高跳 白井(函師) 三米五一
- (全道中等新記錄)
- △砲丸投 藤谷(函中) 一二米八二
- △走幅跳 宮本(北中) 六米八一
- △千五百米 大崎(札師) 四分三五秒F
- △二百米 宮本(北中) 二四秒六
- △四百米 工藤(釧中) 五五秒九
- △低障 藤(釧中) 五五秒九

- 小岩(函師) 二七秒一
- △五千米 中田(樽商) 一七分二二秒F
- △高障 小岩(函師) 一七秒一
- △千六百米繼走 函館師範(羽二生、伊藤、間谷、佐藤) 三分四九秒二
- △圓盤投 太田(札一中) 三〇米三一
- △三段跳 宮本(北中) 一三米六〇
- △槍投 大野(函師) 四八米二〇
- △四百米繼走 函師(佐々木、山田、楡山、藤原) 四七秒八
- △百米 藤原(函師) 一一秒八
- △砲丸投 藤原(函師) 一一米三六
- △走幅跳 山田(旭師) 六米二三
- △四百米 中村(旭師) 五六秒三
- △低障 伊藤(函師) 二九秒二

- △千五百米 相内(旭師) 四分四二秒二
- △五千米 相内(旭師) 一八分一二秒八
- △走高跳 小林(札師) 一米五五
- △圓盤投 堤(函師) 二九米七七
- △三段跳 中村(旭師) 一二米九九
- 水
- 北大豫科・小樽高商
- 昭和十五年六月十六日(北大プール)
- △二百米繼走 高商(鳥切、平野、大石、能登路) 二分二秒六
- △四百米自由型 能登路(高商) 六分七秒五
- △二百米背泳 甲斐(高商) 三分一〇秒八
- △百米自由形 大石(高商) 一分一一秒
- △百米平泳 梶山(豫科) 一分二二秒三
- (大會新記錄)

- △八百米自由形 能登路(高商) 一二分二八秒七
- △百米背泳 甲斐(高商) 一分二五秒八
- △二百米自由形 鳥切(高商) 二分四二秒二
- △二百米平泳 梶山(豫科) 三分二秒五
- (大會新記錄)
- △八百米繼走 高商(能登路、平野、大石、鳥切) 一分二二秒八
- 東北帝大對北大
- 昭和十五年六月二十三日(北大プール)
- △二百米繼走 北大(佐々木、海老澤、市來、崎、川上) 二分四秒八
- △四百米自由形 海老澤(北大) 六分三〇秒九
- △百米背泳 大場(東北) 一分二六秒五
- △五十米自由形 佐々木(北大) 二九秒二
- △百米胸泳 吉田(東北) 一分三〇秒七
- △二百米自由形 川上(北大) 二分五四秒一

梅田村 四—二
八木橋
櫻井
北村 (不戰)
尾辻
崎廣

○個人

△准決勝
野水(札幌) 四—三 尾崎(函館)
北村(札幌) 四—三 辻廣(大谷)
山本(小樽) 四—一 栗谷(北海)
若松(市立) 四—一 市川(海)

△三、四位決定戰

尾崎(函館) 四—一 栗谷(北海)
廣辻(大谷) 四—一 市川(海)

△決勝戰

野水(札幌) 四—二 山本(小樽)
北村(札幌) 四—二 若松(市立)

全道選手權大會

昭和十五年八月十一日(札幌)
△准決勝
中島(協樽) 四—二 中村(札幌)
齊藤(協樽) 四—一 高野(鐵)

布川(鐵名)

熊澤(鐵名) 五—三 篠原(里豐)
布川(鐵名) 四—四 北條(里豐)

△決勝戰

中島(協樽) 五—三 布川(鐵名)
齊藤(協樽) 四—一 熊澤(鐵)

蹴球

△准決勝
北大本科對豫科
昭和十五年五月八日(北大)
北大一七(四—三) 一豫科

札幌俱樂部・高商

昭和十五年五月十四日(小樽)
高商グラウンド
札幌一八(五—八) 一高商

小樽高商對札幌

昭和十五年五月二十五日(北大)
大フイルド
札幌二五(九—〇) 三高商

札幌對北大豫科

昭和十五年六月一日(北大)
ラウンド
札幌二四(五—六) 六豫科

小樽札幌都市對抗

奔別二三(八—三) 六製鐵
中等學校競技大會
昭和十五年七月廿六日(札幌)

△准決勝

函師二 〇—〇 札幌師
室商三 〇—〇 旭商

△決勝戰

函師三 〇—〇 室商

ホツケイ

春季ホーナメント

昭和十五年六月九日(北大)
ラウンド
北大一 〇—〇 北大
本科一 〇—〇 豫科

全關東軍・全北海道

昭和十五年七月十四日(北大)
フイルド
全關東軍(六大學學生OB選抜軍)

全關東軍對北中

昭和十五年七月十四日(北大)
フイルド

全關東三 〇—〇 北中
全關東對札幌商業
昭和十五年七月十五日(北大)
フイルド

關東二 〇—〇 札幌商
全關東對北大豫科
昭和十五年七月十五日(北大)
フイルド

關東五 〇—〇 豫科

籠球

全道選手權大會
昭和十五年六月三十日(札幌)
北籠 三三—一六 帶廣
札幌 三九—三四 帶廣
北籠 四八—一一 札幌

一位北籠俱樂部、二位札幌俱樂部、三位帶廣俱樂部

女子中等學校大會

昭和十五年七月廿五日(札幌)
△准決勝
札幌立 一六—一〇 三女師
市立 三—三 野付牛
札幌立 三—二 六廳立

男子中等學校大會

昭和十五年七月十四日(札幌)
△准決勝
一中二 三—〇 二中B
旭商二 三—二 二中A

△三、四位決定戰

女師二(二—九) 三野付牛
札幌立(三—四) 九市立

男子中等學校競技

昭和十五年七月廿六日(札幌)
△准決勝
札幌商(三—八) 二七旭商
札幌師(三—五) 三函商

△第三、四位戰

函商四(二—〇) 四旭商
函商三(一—二) 四旭商

△決勝戰

札幌師(二—八) 二九札幌商
札幌師(一—二) 二九札幌商

排球

旭商二(三—二) 〇二中A
一中二(三—〇) 〇二中B

昭和十五年六月二日(小樽市)
花園公園グラウンド
小樽六(〇—〇) 三札幌
蹴球團六(六—三) 三S.V.C

札幌選手權大會

昭和十五年六月九日(札幌市)
北中グラウンド
△准決勝
北大二 〇—一 札幌師

△決勝戰

北大二 〇—一 札幌師
ベルグ二 〇—〇 一北大
ベルグ二 〇—〇 一豫科

△決勝戰

北大四 〇—〇 〇ベルグ
北大・札幌の接戰
昭和十五年六月九日(北大)
ラウンド
北大一四(三—三) 一札幌鐵

北大豫科・小樽高商

昭和十五年六月十五日(小樽)
山ノ上グラウンド
豫科 八(三—〇) 〇高商

佐友奔別・北海製鐵

昭和十五年六月三十日(奔別)
炭礦グラウンド

△決勝戰

旭商二(三—一) 〇一中
女子中等學校大會
昭和十五年七月廿五日(札幌)

△准決勝

札幌立二(三—三) 〇旭川
札幌立二(三—三) 〇旭川
根室二(三—三) 一札幌立

△決勝戰

札幌立二(三—三) 一根本室
札幌立二(三—三) 一根本室

卓球

都市對抗札幌優勝
昭和十五年五月十二日(札幌)
岩見澤 〇—〇 札幌川
小樽 〇—〇 札幌川
小樽 〇—〇 札幌川
旭川 〇—〇 札幌川
旭川 〇—〇 札幌川
岩見澤 〇—〇 札幌川

△個人准決勝

薄井(札幌) 三—一 高木(札幌)
藤田(札幌) 〇—〇 三水木(札幌)

△決勝戰

薄井一 七—二 三水木
薄井一 六—二 三水木

女子中等學校大會
昭和十五年七月廿五日(札幌)

第一位四點札幌△第二位三點旭川△第三位二點釧路△第四位一點岩見澤△第五位零點小樽

全道選手權大會
昭和十五年六月三十日(札幌)
△單式決勝
薄井 三—〇 水木
△複式決勝
水木 三—〇 本庄間

三都市對抗試合
昭和十五年七月七日(岩見澤)
旭川 〇—三 札幌
札幌 五—〇 岩見澤
旭川 二—三 岩見澤

男三段(三菱) 中等學校競技大會 昭和十五年七月廿六日(札幌)

Table of sports results for the 1946 national school sports meet, listing various sports like judo, wrestling, and tennis with participants and scores.

柔道

Table of Judo results, including individual and team matches, with names like 柿本, 中出, and 柿本 listed.

Table of Judo results for the All-Japan Judo Championships, listing participants and their respective grades.

Table of Judo results for the All-Japan Judo Championships, listing participants and their respective grades.

Table of Judo results for the Hokkaido Judo Championships, listing participants and their respective grades.

北大豫科・小樽高商 昭和十五年六月九日(高商道場) 豫科一〇一中一九三中高商

團體一般優勝 札幌 十七中 同學生優勝 北中 十一中 個人 中山(札幌) 五中

女子中等學校大會 昭和十五年七月廿五日(札幌) 團體射擊 1 函館大谷 二十一中

射擊

區を皮切りとし、八月一日、旭川、札幌、函館にかけて争覇の結果、左の如く決定した。

漆岡賢二(札幌商業)3坪木喬(真岡中學)4原弘(留萌中學)5國原敬二(旭川商業)

樺太廳撰定

樺太國境警備の歌

雲亂れ飛ぶ
男子ほまれの
護る一線
まつ先駈けて
見ろよ火を吐く

1
國境に
銃執りて
三十餘里
奉公の
大和魂

昇る旭に
正義の劍
双向ふ妖魔
鐵のみ盾と
堅い誓に

2
ふり翳す
光牙えて
打ち懲す
手をとつた
血が躍る

3
五十度直下
犬の遠吠え
無氣味に更ける
すはと睨んだ
空に瞬く

密林に
銜して
夜の警備
極寒の
七ツ星

4
あゝ感激の
御稜威輝く
燃える血沙の
しつかと大地
きつと護るぞ

菊の紋
國境に
華が咲く
踏みしめて
北の果

★ 樺

★ 太

靖國神社合祀

陸・海軍で十二柱

昭和十五年四月、靖國神社大祭に合祀された、本島關係の榮ある勇士は、陸、海軍合して左の十二柱であつた。

- 海軍 三整備兵曹 奥地 竹(敷香)
- 陸軍 歩兵伍長 根本 義久(眞岡)
- 同 宮川 利夫(惠須取)
- 歩兵上等兵 大島 勝彦(落合)
- 歩兵伍長 岩澤 喜市(知取)
- 同 高橋 俊雄(眞岡)
- 同 小林 喜市(名好)
- 同 山崎 喜藏(豊原)
- 同 松谷佐二郎(富内)
- 同 輜重特務 浅見 定矣(本斗)
- 一等兵 佐藤 文夫(本斗)
- 歩兵上等兵 脇坂 木松(豊原)

樺太遺兒代表

戦歿勇士遺兒、靖國神社参拜の樺太代表は、昭和十五年三月二十二日、軍人援護會樺太支部相澤書記の引率のもとに上京の途についた、遺兒代表福井光子、松谷昭二、富田千恵子、向富田千恵子は風邪のため参加不能となつた。

合祀二十九柱

樺太護國神社の合祀祭は、昭和十五年七月十八日夜に執行されたが、その英靈は左記二十九柱であつた。

- 工兵伍長 山崎 喜藤(豊原)
- 海軍三等整備兵曹 奥地 竹(敷香)
- 歩兵伍長 田原 益榮(豊原)
- 歩兵伍長 岩澤 喜市(知取)
- 同上 岩澤 喜市(知取)

樺太

四七三

- 同上 高橋 俊雄(眞岡)
- 歩兵伍長 小林 喜一(名好)
- 同 松谷佐二郎(富内)
- 歩兵伍長 蝦名 勇一(長濱)
- 同 細川 元松(長濱)
- 歩兵伍長 今 久五郎(敷香)
- 歩兵軍曹 相内 松雄(本斗)
- 歩兵伍長 森 三郎(三濱)
- 歩兵軍曹 杉村 勝雄(清水)
- 歩兵軍曹 千田 兼吉(内路)
- 歩兵中尉 樋口 幸一(大泊)
- 歩兵上等兵 柴田 重一(鶴城)
- 歩兵上等兵 高野 一(清水)
- 歩兵上等兵 花田惣之助(名好)
- 歩兵上等兵 脇坂 才松(豊原)
- 輜重兵上等兵 石川富太郎(惠須取)
- 歩兵上等兵 福井 志郎(長濱)
- 同上 村松 菊松(廣地)
- 同上 大島 勝彦(榮濱)
- 輜重兵上等兵 脇坂 才松(豊原)

神域擴張奉仕

紀元二千六百年記念事業、樺太神社神域擴張整備事業は、昭和十四年七月三ヶ年計畫を以て著手されたが、十五年もこれを續行、鍬入れ式は六月十五日午前七時外苑に於て執行され、小河長官によつて嚴肅裡に初鍬が下された。次いで島民による汗の聖業は、十七日、師範學校生徒二百四十九名を皮切として行はれ、十月七日迄の百十日間に全島の學校生徒、青年團員、一般の各般に亘り約四萬人が動員されて、緑濃い外苑に汗の奉仕がなされた。

紀元二千六百年 紀元節を奉祝す

紀元二千六百年の紀元節に當り、聖徳を欽仰し、聖壽の無窮を壽ぎ奉ると共に、紀元二千六百年の嚴肅なる意義を體得し、愈々肇國精神を發揚し、皇運扶翼の實を擧げ、以て國運の無限の發展に邁進すべき國民の覺悟を固むる趣旨の下に奉祝を行つた。

- 一 當日午前九時を期し「國民奉祝の時間」を設定し、各家庭其の他の場所に於て、夫々宮城遙拜を行ふ、此の爲同時刻には汽笛、サイレン、鐘を用ふる等適當なる周知方法を講ず、尙ラデオは同時刻に「國民奉祝の時間」の放送を行ふ
- 二 官公衙、學校、會社、銀行、工場、船舶等に於ては、前項の時刻に式典を行ふと共に、本文趣旨の徹底を圖る
- 三 神社に於て執行せらるる紀元節祭には、多數參列す
- 四 特に紀元節奉祝を目的とする團體に於て、市町村と密接

紀元奉祝記念

樺太縦斷走決定

紀元二千六百年を奉祝すると共に、時局下樺太青年の心身を鍊磨し、國民精神の作興を圖らんとする樺太體育協會の、皇紀二千六百年奉祝記念行事は、敷香より眞縫久春内を經、眞岡より大豊線を走破して豊原に至る樺太縦斷走と決定した。

期日は全島の綠濃き盛夏八月の一日から四日までの四日間、全コース四百三十軒三十七區間、一區平均十二軒、參加選手百名、本島空前の快舉である。

尙この大會は同年政府主催の下に、十一月十三日より十二日間に亘り、宮崎、畝傍間に於いて舉行の全國府縣對抗驛傳競走の樺太豫選をも兼ねた。

なる連絡の下に、町村民の爲神社其の他適當なる場所に於て、嚴肅に奉祝の式典を擧ぐ

式典には紀元二千六百年奉祝會撰定「紀元二千六百年頌歌」を齊唱す

- 大會要項は次の如くである
- △期日並日程 自八月一日至八月四日四日間、八月一日午前九時大會開會式午前十時敷香第一小學校出發八月四日午後二時樺太神社到着閉會式
 - △走路及區間 敷香より眞縫久春内を經、眞岡より逢坂二股豊榮を經て豊原に至る四百三〇軒全コース三十七區間平均一區十二軒
 - △參加範圍 各支廳、出張所、市より各一チーム宛選出各管内對抗驛傳競走とす
 - △參加人員 一チームの選手は十名宛、但し右の中、中等學校生徒を五名迄加へることが出來た
 - △參加者資格 數へ年二十一歳以下の男子で、同一支廳出張所市内に引續き三ヶ月以上の在住者
 - △優勝規約 各管内別に各々の所要時間を四日間累計して各管内の成績順位を決定
 - △表彰 團體成績は第五位まで各區間の優勝者は一位のみ個人表彰す

歴代長官

- 熊谷喜一郎(民政長官)
- 明治三・七二一—同四〇・四・一 楠瀬 幸彦
- 明治四〇・四・一—同四一・四・二四 床次竹二郎
- 明治四一・四・二四—同四二・六・二二 平岡定次郎
- 明治四二・六・二二—大正三・六・五 岡田 文次
- 大正三・六・五—同五・一〇・九 昌谷 彰
- 大正五・一〇・二二—同八・四・二七 永井金次郎
- 大正八・四・二七—同三・六・三三 昌谷 彰
- 大正三・六・三三—同五・八・五 豊田 勝藏
- 大正五・八・五—昭和三七・二・七 喜多 孝治
- 昭和三七・二・七—同四・七・九 縣 忍
- 昭和三七・九・一—同六・二・二七 岸本 正雄
- 昭和三七・二・二七—同七・七・五 今村 武志
- 昭和三七・七・五—同三・五・七

棟居 俊一

昭和三・五・七—同五・四・九

小河 正儀

昭和五・四・九

豊原聯隊區

從來、樺太は旭川聯隊區管下にあつたが、不便多かつたので、昭和十四年十一月二十四日、旭川聯隊區司令部豊原事務所が設置され、更に昭和十五年八月の兵制改革に伴ひ、豊原聯隊區が新設され、陸軍歩大佐鯉江正太郎氏が初代司令官として任命された。

綜合調査團

戦時下諸資源の重要供給地として、樺太の抱藏資源を餘すところなく探り出し、その實相を認識すると共に、將來百年の開發策を練るべく、樺太生産擴充共同調査團は、昭和十五年八月來島したが、一行は企畫院、商工、逓信、厚生、拓務各省の外、陸海軍兩省、對滿事務局、農林

樺太

省等の關係權威者廿數名から編成され、十數日間にわたつて全島を調査した。

位置及面積

樺太はオホツク海と日本海との間に介在して南北に延び、西は間宮海峡を隔て、沿海州に對し、南端西能登呂岬は北緯四十五度五十四分に位し、峽間約四十三軒の宗谷海峡を隔て、北海道の宗谷岬と相呼應す。北部は北緯五十度を以てソ聯邦薩哈連洲と境し、延長四五・六軒、幅員二七・五軒乃至一五・七軒、其の面積三六、〇九〇・三方軒にして臺灣より稍大きい。

地勢と三地帯

本島は地貌及地質に因り之を東部山地帯、中央低地帯及西部山地帯の三地帯に區分するを得る。

△西部山地帯 西部山地帯の脊梁を成せる山脈は所謂西樺太山脈にして、概ね南北に延び、平頂を有し、幾條の深谷を以て南北に連續す。本山脈は五十度以

度斷絶し、再び中知床半島を起し海拔約六百六米に達する山地となりて南走し、中知床岬に至りて海中に没す。

△中央低地帯 中央低地帯は東側に於ける東部山地帯の中絶するや、幌内川口附近より榮濱附近迄の間は海面下に没し南北二帯に分たる。北中央低地帯はツイミ、幌内兩河の流域にして其の長さ約二百八十軒、五十度以南邦領に屬する部分は長さ約百二十軒、幅約二十軒乃至三十二軒とす。其の大部分は所謂ツンドラと稱する一種の低濕地に於て、厚層の泥炭上に厚き蘇苔類密生し、倭少なる落葉松點々疎生するのみにして、沼澤多き増段的平地なり。然れども幌内川及其の支流の兩岸にはドロ柳、根松、蝦夷松及落葉松等叢生し或は増段的平地の乾燥する部分に於ては往々白樺の純林を見らる。斯くの如く幌内川の兩側に展開するツンドラは寂漠荒茫たる濕地なりと雖も、其の地方に居住するオロツコ族及ニクブン族に對して馴鹿の好放牧地であ

る。南中央低地帯は榮濱附近より鈴谷川口附近に至る約八十八...

河川 河川の主なものは概ね南流又は北流す。東海岸に注ぐものに幌内川、知取川、内淵川、亞庭灣に注ぐものには鈴谷川、留多加川、西海岸に注ぐものには北名好川、惠須取川、名寄川、泊居川、野田川、樺内川等がある。

湖沼 西部山地帯の東側には白鳥湖、西側には雄武洞沼、來知志湖、東部山地帯の西側には北部に於て多來加湖、南部に於て富内湖、遠淵湖、和愛湖、池邊沼等がある。

氣象と環境の影響 本島は日本海とオホーツク海との間に介在し、沿岸は寒暖二種の海流に洗はれ、内部は二條の山脈縦貫し、近く亞細亞大陸の影響を受けるものあり、氣象

は地方に依りて種々の狀況を呈す。

然れども之を概観するに、南西沿岸部は暖流に洗はるゝを以て比較的溫暖に、北東海岸は寒流の影響を受け寒冷にして、中部は山脈に圍まるゝを以て大陸的氣候を呈し寒暑の差甚し。而して世界同緯度の地に比し氣温の低きは、近海に暖流渺なきを其の一因とするも、主として亞細亞大陸の影響を受けることに因る。

土地の開発

邦領樺太の面積は凡そ三萬六千九百方呎にして、臺灣に比し稍廣く、北海道本土の約半ばに等しき面積を有す。

而して本島に於ける農牧適地面積は四千八百餘方呎にして、總面積の約四分に當り、又之を更に利用及目的に依り區分するときは、三千三百餘方呎の地味肥沃なる農耕地を得ると共に、殘餘の千五百餘方呎は、亦好適なる宅地及放牧地となすこ

とを得る。

△土地區劃 明治三十八年始めて大泊に宅地を區劃し、戰爭當時の移民を收容したるを嚆矢とす。爾來土地整理並に移住民の收容に便せんが爲、地味の良否と交通の便否とに鑑み、殖民地として區劃を施設したるもの昭和十三年末に於て三七〇、八三七町歩餘あり。其の主なるものを記せば左の如し。

農耕地は地味肥沃にして交通至便の地を選び、五ヘクタール乃至十ヘクタールを普通農家一戸の收容に充つることとして、明治三十九年より事業を開始し昭和十三年末に於て其の面積一九八、二〇八町歩に達した。市街地は樞要の地に之を施設し、普通二八八平方米を一戸分となし、明治三十八年本島領有後直ちに大泊に區劃を新設した。爾來新設又は増設を行ひたるもの大泊、豊原、眞岡、久春内、野田、泊居、敷香、名好、本斗、知取、内路、鶴城、落合、惠須取、留多加川口の十六箇所あり。昭和十三年末に於ける區

劃面積七一八町歩に及んだ。部落宅地は移住の密居を必要と認めたる土地に之を施設し、殖民地にありては一戸の標準を普通二八八アールとなして専ら農民の收容に便し之を農村宅地と通稱す。又海岸に於ける必要なる土地には一戸の標準十アール八となして専ら漁民の收容に便し之を漁村宅地と通稱せり。尙漁村には明治四十二年より百アール内外の附屬畑を測設し、漁閑を利用して農耕を奨励した。昭和十三年末に於ける區劃面積三、二七八町歩に達した。

△土地改良 本島の河川は概して迂曲蛇行せるもの多くして流水を妨げ、ために河水氾濫し農耕地を浸害するもの亦尠からず。大正十年より鈴谷川、留多加川、内淵川、列丹川及來知志川の五大流域に對し土地改良基本調査を開始し昭和十一年迄に九〇、三〇〇ヘクタール餘の調査を爲した。殊に地味肥沃なれども低濕地にして直接農牧に利用し得ざる土地に對しては、官營又は補助金を給し、大小排水

溝の開鑿を企圖して専ら土地の乾燥を計り、明治四十三年以來官營施設したる大排水溝の延長、昭和十三年末に於て四〇〇、七二三間に達し、又大正二年より農業者に補助金を給して各自の農耕地内に小排水溝を掘鑿せしめたるもの昭和十三年末現在に於て延長一、二一二、三一二間に及ぶ。

以上排水溝の施設と相俟つて一方農耕道路の開鑿を計畫し、先づ殖民地内及殖民地相互間に所謂幹線農耕道路を開鑿することとし、其の工事の困難なるものを官營となし、簡易なるものは農村住民に補助金を給し、之を開鑿せしむる等、専ら農村交通の便を計つた。昭和十三年末に於ける施設農耕道路延長官營七八八、〇四一、補助一、〇七五、五〇四間に達した。

△土地處分 樺太國有未開地は隨意契約を以て賣拂又は貸付することを得るも、直ちに賣拂を爲すは殆ど特殊の事業に供する場合に限り、他は何れも貸付の

際附したる一定の條件を成功したる後に於て、賣拂又は讓與に因り民有に歸するを通過とす。土地の貸付は有償を以て原則とするも農耕、牧畜、造林及之に直接附隨の用途に供する場合に、拓地殖民の見地より之を無償にて貸付し、専ら農牧業を目的とする移住者の便益を計つてゐる。

賣拂又は貸付すべき地積の制限は其の使用目的に依り一定せざるも、一人に付耕作及之に直接附隨の用途に供する土地は三萬坪、牧畜及之に直接附隨の用途に供する土地は五十萬坪、造林及之に直接附隨の用途に供する土地は五百町歩、市街宅地及部落宅地に供する土地は千五百坪、其の他の事業に供する土地は一萬坪を各限度とす。但し農耕目的の地は借地人に於て一萬五千坪に對し一戸の割合を以て移住農民を收容するときは九萬坪迄を貸付し、造林目的の地は公共團體、會社其の他の法人に對して前記面積の五倍迄、樺太廳長官の定むる重要産業を營む者に

地方自治制度

對しては五十倍迄、増加する事を得、其の他の事業に供する土地は公共團體、會社其の他の法人に對する場合其の所定面積の五倍迄増加することを得せしむ。昭和十三年末に於ける處分面積は貸付地六九、七六〇町歩、讓與及賣拂に依り民有に歸したる土地八〇、五〇六町歩餘に達した。

町村發達の現勢に鑑み、町村を一級、二級及附則第二項の舊制度を適用するものと三種に區別す。一級町村は大體人口五千人に達し、住民土着心に富み、且つ財政の基礎鞏固なる町村、又は之に準すべき村にして、之が制度も略内地町村に準ず。二級町村は爾餘の町村にして、大體人口千五百人に達し、獨立經營に堪え得るものとし、附則第二項の町村は特殊の事情存するものにして仍當分の内從前の規定を適用す。其の町村名を列舉すれば左の如し。

△一級町村 落合町、大泊町、留多加町、本斗町、眞岡町、野田町、泊居町、惠須取町、元泊村、知取町、敷香町

△二級町村 豊北村、榮濱村、白縫村、千歲村、深海村、長濱村、遠淵村、富内村、三郷村、能登呂村、内幌村、好仁村、廣地村、蘭泊村、清水村、小能登呂村、名寄村、久春内村、三濱村、鶴城村、帆寄村、泊岸村、内路村、名好村、知床村

△附則第二項の町村 川上村、海馬村、散江村 △市 豊原市

惠須取支廳開設

皇紀二千六百年の輝かしき新春と共に、本島西海岸の北都惠須取に、昭和十五年一月十日を以て、惠須取支廳の開設を見るに至つた。同支廳の管轄區域は、本島西海岸の北部に位し、從來泊居支廳、鶴城出張所の管轄に屬せしもので、東部は中央山脈脊梁部を境として散香郡及元泊郡と相接し、南方は久春内郡三濱村に隣

接し、北方は日蘇國境に及ぶ鶴城、名好の二郡を抱轄して間宮海峽に面し、其の面積約四、七九七方丈(三一一方里)に亘る廣大なる地域を占め、内地に於ける和歌山縣(四、七二四方方丈)より稍廣く、福岡縣(四、九四〇方方丈)よりは狭少である。域内は惠須取町、塔路町、鶴城村、名好村の二町二村に分ち、各種産業の振興に伴ひ、人口は益々増加の趨勢に在る。

今この地方に於ける行政機構の變遷を見るに、本島領有三十有餘年に亘る本島治政の進展に伴ひ、時運に即應する數度の改新變革が行はれてゐる。即ち領有後、島内の秩序漸く其の緒に就くに及び、明治四十年四月一日より樺太廳の設置に伴ひ、此の地方はマウカ(真岡)支廳の管轄として、北名好にはナヤシ(名好)出張所を設け、鶴城以北の地方は其の所屬と爲し、一般行政事務を處理してゐたが、拓殖の進展に伴ひ、漸次人口は増加し、諸般の行政事務亦増嵩するに及び、翌明治四十一年十二月

に至り行政機構を改め、従来の名好出張所は名好支廳に昇格すると共に、地方事務の遂行上、更に明治四十二年十月には鶴城に鶴城出張所を設け、地方民の便益を期すると共に、地方事務の迅速なる遂行を圖つたのである。次で大正二年六月に至り、全島的に地方行政機構は改變されるに及び、名好支廳は之を廢し、新に久春内支廳を設け、其の管轄として鶴城及名好には各出張所を置き、行政事務を執行するに至つたが、更に大正十一年十月本島統治の全體的改革が行はれ樺太廳官制の改正と共に、島内各支廳出張所は全廢され、新に鶴城支廳の設置となり、従來鶴城名好の兩出張所の所管せる鶴城郡、名好郡を管轄し、地方行政の圓滑なる執行を圖りたる處、僅か二年後の當時の行政財政整理の時期に際會し、大正十三年十二月、鶴城支廳は遂に廢止の餘儀なきに至り、更めて泊居支廳鶴城出張所として存置し、爾來今日に及んだのであるが、近時拓殖開發の事業益々進

展すると共に、一方各種産業の勃興に伴ひ、人口著しく増加し、交通又整備するに至つたので支廳の設置が必要となり、數年來の懸案なりしも其の機を得るに至らなかつたが、中央方面に於ても其の必要が認められ、昭和十四年度豫算に於て初めてこれが所要經費を計上され、樺太廳官制の改正施行と共に、従来の泊居支廳鶴城出張所は、昭和十五年一月九日限りこれを廢し、翌一月十日より惠須取支廳の開設を見るに至つたのである。

衆議院議員選舉法

昭和十五・二一九

松尾孝之氏 樺太に衆議院議員選舉法施行の意向を問ふ
小磯拓務大臣 樺太も御承知の如く漸次人文も開けて参り、交通も逐年完備して行つて居りますので、早晚衆議院議員選舉法を施行すべきものでありと考へまして、目下折角研究中であり、唯樺太に於ける行政組織、法律制度會計制度等色々關係するところが

樺太廳豫算

協賛を経た十五年度樺太廳特別會計豫算總額は六千七百萬圓

であるが、新規事業中の主なるものを挙げれば次の如くである。

昭和十五年度樺太廳特別會計豫算の説明

小磯拓務大臣(昭和十五・二・一七衆議院・豫分科會)
樺太の教育及び社會事業に關する經費と致しましては、樺太神社御造營に要する經費十萬圓、中學校の新設、工業學校の開校、公立水産學校官立移管、拓殖學校擴充其の他學校教育、社會教育、及び社會事業施設の充實に要する經費七十八萬一千餘圓を豫定致して居ります。警察機關充實、防空警備施設、中央試験所保健部設置、其の他醫療施設の充實に要する經費百三十二萬九千餘圓の計上が御座います。勸業に關しましては三十四萬四千餘圓を計上し、中央試験所の擴充、農産及び水産獎勵等を行ふ豫定であります。又林務に關しましては八十九萬六千餘圓を計上し、官行斫伐の擴張、森林資源の集約的利用等を行ふ豫定であります。更に交通及び通信

に關しましては、鐵道及び通信の事業増進、飛行場設置等に要する經費總計百六十九萬八千餘圓を計上致して居ります。樺太の追加を初め、道路、鐵道、船渠、河川、植民、土地改良、産業振興、水産増殖、國有林業經營、燃料資源調査及び開發の諸施設に要する經費總額一千六十四萬八千餘圓を計上致して居ります。臨事軍事費特別會計に對する繰入金と致しましては六百七十七萬六千餘圓の増加を豫定し、本年度繰入金總額は六百七十七萬六千餘圓と相成つて居ります。尙氣象觀測機關整備擴充に關しましては四十六萬四千餘圓、物資需給調整、物價調整、貯蓄獎勵及び國家總動員事務に關しましては二十萬六千餘圓、國勢調査に關しましては十一萬四千圓を、軍事援護施設に關しましては八萬四千圓を夫々計上致して居ります。

市町村の豫算

市支廳別十五年度分

△一般會計	
豊原市	八八一、二八四
豊原支廳	八七四、七六六
大泊支廳	九八、九六六
本斗支廳	四三九、五〇八
眞岡支廳	八八四、七六二
泊居支廳	六〇一、七四四
惠須取支廳	二、六四四、八八六
元泊支廳	六三六、五五五
敷香支廳	九六六、六〇六
計	八、九〇、七三二
十四年度分	六、三四六、二二二
△特別會計	
豊原市	三二六、九六六
豊原支廳	六四四、一三六
大泊支廳	六四、六七九
本斗支廳	一三九、四〇五
眞岡支廳	二五八、七二〇
泊居支廳	三五、四四三
惠須取支廳	三四〇、九三二
元泊支廳	三六、八八四
敷香支廳	二二、五六一
計	一、三五九、七〇七
十四年度分	一、一五七、五七三

町村の財政

町村には未だ基本財産の見べきものなく且使用料、手数料其の他の税外収入亦僅少にして町村費の大部分は之を稅收入に頼るの外なき現況で、而も本島拓殖の進展に伴ひ諸般の公共的施設益々多きを加へ、逐年經費の膨脹を來たし、財源の窮乏に苦んでゐる。而して町村稅として賦課し得べきものは、直接國稅の附加稅及特別稅にして、特別稅の種類は命令を以て次の如く定めらる。

△戸別割 町村内に住所を有し又三月以上の滞在者にして、構戶若は獨立生計者に對し、其の所得額及資産の狀況を標準として之を賦課す。

△建物割 法人及町村住民にあらずして其の町村に建物を所有する者に建物の構造、用途及敷地の地位に依り其の差を設け、坪數を標準として之を賦課す。

△所得割 樺太に住所又は一年以上居所を有せざる者の樺太に

於ける資産又は營業を有する者に對し、居住地の法令に依り賦課せられたる場合、其の所得税額中樺太に於ける資産又は營業より生ずる所得に對する所得税相當額を見積り、法人に在りては其の十分の五、其の他に在りては十分の三以内を限度として賦課す。

△土地割 市街地又は國より貸付、讓與若しは賣拂を受けたる後五年を経ざる土地を除き、土地臺帳又は土地貸付臺帳記名の土地の所有者又は貸付を受けたる者若しは國有地を使用する者に對し賦課す。其の種類左の如し。
部落宅地、工業用地、漁業用地、鑛業用地
△營業税 國稅營業收益税の賦課を受けずして左の營業をなすものに純益を標準とし之を賦課す。但し藝妓置屋業及貸座敷業は定額に依る。
物品販賣業、無盡業、金錢貸付業、物品貸付業、製造業、運送業、倉庫業、請負業、印刷業、出版業、寫眞業、席貸

租税制度改廢

樺太に於ける租税制度は明治四十年三月の制定に係り、當時戸數割、營業税及雜種税の三目に分類せられたしが、爾來數次の改廢又は増設に依り今日に至つた。現行主なる種目を示せば左の通りである。
△市街宅地税 本税は大正十年四月の制定に係り、特に指定したる市街宅地の拂下價格を以て地價と定め、課率は之を二級に分ち一級は地價千分の五、二級は地價千分の三を賦課す。

業、旅人宿業、料理店業、周旋業、代理業、仲立業、問屋業、兩替業、湯屋業、理髮業、寄席業、遊戯場業、藝妓置屋業、貸座敷業
△雜種税 左に掲ぐる營業、稼業又は行爲をなす者若しは物件を所有する者に之を賦課す。
船、車、棧、電柱、金庫、畜犬、狩獵、不動産所得、藝妓、酌婦、興行、遊興、流木、漁業

△所得税 大正八年度始めて法人所得(第一種)のみに對し賦課し、大正十一年度より新に第二種及第三種をも賦課することになり、猶ほ大正十三年、十四年及昭和二年一部分の改正を爲し、其の課率は第一種(同族會社に對する加算税率を除く)第二種は内地と同一なり。第一種中同族會社に對する加算税率及第三種は内地に比し概して低減し、猶昭和十二年より臨時増徴税を課し、昭和十三年より支那事變特別税令に依り増徴し且第三種所得税の免稅點を引下げた。

△營業收益税 本税實施前は營業税として明治四十年實施以來數回の改廢ありしも、昭和三年度より之を廢止し新に本税の實施を見た。營業税は外形的の標準に依り課税せられたるに依り各業體毎に其の標準を異にしたるりしも、本税は法人に在りては全部の營利法人に對し、各事業年度の總益金より總損金を控除したる金額に、個人に在りては營業の純益金額に課税し、個人

の課税營業種類は物品販賣業、銀行業、無盡業、金錢貸付業、物品貸付業、製造業、運送業、倉庫業、請負業、印刷業、出版業、寫眞業、席貸業、旅人宿業、料理店業、周旋業、代理業、仲立業、問屋業の十九種とし、其の課率は法人個人共内地と同一にして個人の課税最低限は内地より高く、昭和十二年より法人に對し臨時増徴税を課す。
△酒造税 本税は創始時代營業税中に加へられ三等級課税なりしが、大正五年より造石課税に改められ、大正十年四月より獨立税目となれるもの。之が課税は課率を異にする外略内地同様にして、昭和七年十一月一部改正せられ第一種清酒、濁酒、白酒、味淋、焼酎、麥酒及酒精は一石に付酒精分一度毎に七十五錢(但し一石に付二二・五〇圓を下ることを得ず)第二種酒精含有飲料は一石に付酒精分一度毎に一・八〇圓(但し一石に付四十二圓を下ることを得ず)の税率となりしも、昭和十二年臨時増徴に依り第一種酒造税は一石

實施。財産權の創設移轉、變更若しは消滅を證明すべき證書帳簿及財産權に關する追認若し承認を證明すべき證書を作製するものをして納付せしむ。
△噸税 本税は明治四十二年より實施。外國貿易の爲め外國に往來する船舶の開港に入港の都度、登簿噸數一噸又は積量十石に付七錢(但し右の三倍に相當する額を一時に納付する時は其の港に於て滿一ヶ年免除)の割合に依り課すものにして、船舶入港したる時船長より税關に納付せしむ。
△關稅 本税は明治四十二年より實施せるものにして、輸入貨物に對し關稅定率法に依り之を課し、輸入申告者より税關に於て徵收す。
△臨時利得税 本税は昭和十年度より實施せられ、昭和十三年の税制改正に於て支那事變に依る利得を新たに課税に加へ、従前の利得に對する税率を引上げる事になつた。
△支那事變特別税 昭和十三年支那事變の推移に連れ、軍事費

に付酒精分一度毎に八十五錢(但し一石に付二十五圓五十錢を下ることを得ず)となり、酒類の製造に付ては新に免許制度を採用し、造石數の制限は内地の清酒三百石、濁酒百石、焼酎五十石なるに對し、清酒百石、濁酒五十石なる等稍緩和せられた。

△出港税 本税は樺太に於て製造したる酒類を帝國内の他の地方へ移出するとき焼酎に在りては酒造税法、酒精及酒精含有飲料に在りては酒精及酒精含有飲料税法の造石税と同一の税率に依り課す。昭和十三年四月よりは支那事變特別税令の施行に伴ひ移出先に於ける内國税と同一税率に依り課する事に改む。

△消費税 砂糖消費税は明治四十二年度より、織物消費税は明治四十三年度より當該税法を施行、然れども樺太には製造者なく偶々北樺太方面より輸入取引ありたる際課税するの狀態であつたが、砂糖工場の新設に依つて頗る増加した。
△鑛業税 本税は創始當時は雜

種税中に加へられ課税したるも大正十一年四月鑛業法及砂鑛區税法の全部を施行し内地同様賦課することとなつた。
△漁業税 本税は從來租税外收入として漁業科の目にて徵收せるものにして、其の時代に屬する明治四十二年度の如きは歳入額實に七十八萬圓を算したりしが、漁獲高の漸減と一面大正十二年度より租税に改められ、同時に課率の改正ありたる關係上、其の實施初年たる大正十二年度歳入額は激減し一九九、〇二〇圓となり、其の後數次税法の改正ありて、昭和十四年度には豫算額九六、五〇九圓を計上した。

△資本利子税 本税は昭和十二年度より實施。樺太に於て支拂を受くる(甲種)公債、社債又は銀行預金の利子、(乙種)第三種所得税を納むる者が第三種の所得中非營業貸金又は預金の利子に對し賦課す。
△法人資本税 本税も昭和十二年度より實施。法人の資本に付之を賦課す。昭和十三年より支

那事變特別税令に依り増徴となる。
△相續税 本税も昭和十二年度より實施。課税標準は内地と同様にして税率は内地の臨時増徴を含まざるものと同率である。
△外貨債特別税 本税は内地同様昭和十二年度より實施されしが本島には課税物件僅少にして外國通貨を以て表示する國債及地方債並に日本法人の發行したる社債の利子に付賦課す。
△揮發油税 本税は内地同様昭和十二年度より實施された。
△骨牌税 本税は昭和六年度より實施。然れども本島には、製造者なく、内地より朝鮮に移出せられ更に本島に再移出せらるる骨牌に對し賦課する状態である。印紙を以て納入せしむ。
△登録税 本税は不動産、鐵道、工場財團、鑛業財團、漁業財團、商會社、辯護士、鑛業權、砂鑛業、漁業權又は入漁權等の登記に關し之を賦課す。大正十年より實施せられ印紙を以て納入せしむ。
△印紙税 本税は大正五年より

の一部を補充する爲北支事件特別税に代る本税が内地同様の課税法を以て實施され、所得税及法人資本税を増徴し利益配當税、公債及社債利子税、通行税、入場税、特別入場税及物品税を新設した。

市町村特別交付金

昭和十四年度、市町村特別交付金は總額十萬五千四百六十六圓で、前年の八萬九千二百七十圓に比して、一萬六千九百九十六圓の増加である、交付町村と交付金額左の如し。

豊北村	一、〇〇〇圓
大泊町	九一、二三〇
千歳村	一、〇〇〇
留多加町	一、二九六
三郷村	七二六
能登呂村	一、二四三
好仁村	七、〇〇〇
海馬村	一、九七一
計	一〇五、四六六

法制に地方色

本島は他の外地に比し内地の法令の施行せらるゝもの遙に多

各種行政警察

△保安警察 鐵道の開設、港灣、船渠の築造、道路の開鑿其の他鑛業、林業、工業等日を逐ふて隆盛に趨くに從ひ、労働者の需要も亦年々激増の勢を示す。而して土木、林業等に要する労働者は何れも季節的に、一時に需要増大する關係上、善良なる労働者を選擧すること困難にして、雇主側に於ても古き慣習に因はれ自由を拘束し、或は不當なる労働を強ひ、或は亦虐待する等諸種の弊害あるに鑑み、之が改善のため、労働者募集取締規則、周旋營業取締規則、勞務者使用取締規則及請負營業取締規則を制定し、以て極力之が取締を勵行してゐる。

しと雖も、内地と別個の法域を爲し、内地の法令は原則として樺太に施行せらるゝことなく、唯司法制度に關しては内地と其の法域を同じくし民法、刑法、裁判所構成法、民刑兩訴訟法の如き内地の法律は樺太にも施行せらる。内地の法律は其の規定事項の性質上當然内地と共に樺太にも施行せられたりと認むべきものゝ外は、特に勅令を以て其の全部又は一部を樺太に施行することを定むるに非ざれば樺太に施行せられない、而して勅令を以て法律を本島に施行する場合に在りては、一定の事項に關し勅令を以て特別の規定を設けることを得。尙本島に於てのみ施行せらるべき目的を以て制定せられたる法律施行せらる。現在本島に施行せらるゝ内地の法律は二〇八件の多きに達するが、其の中全部施行せらるゝもの一八一件、一部施行せらるゝもの二七件を算す。

般には本島に其の效力を有せず之に相當すべき事項は樺太廳令を以て之を定むることを得。即ち樺太廳長官は其の職權又は特別の委任に依り廳令を發し、之に三月以下の懲役若しくは禁錮、拘留、百圓以下の罰金又は科料の罰則を附することを得ることになつてゐる。

司法沿革と裁判所

明治三十八年八月本島を占領するや、軍令第二號を以て民政司を布くと共に、民政署に於て民事及刑事の審判を行ふこととなつた。

事項を除くの外殆ど内地と同一の制度となつた。而して昭和三年十月陪審法施行せられ、更に昭和七年十月金錢債務臨時調停法施行せられた。

更に昭和十年には落合、知取、敷香、惠須取の各市街地に屋上制限規則を實施し、火氣使用場の取締並に防火建築の實行を懲進してゐる。

△風俗警察 新興地の弊として本島各地には料理店飲食店其の他風紀上取締を要する諸營業極めて多く、動もすれば無節制に陥り、風俗頹廢の虞あるを以て特に之を取締を嚴にせる結果良成績を擧げてゐる。

△交通安全 海上交通は逐年發達し、航路の増設船舶の増加に伴ひ事故亦逐次増加の傾向にあるを以て、海上衝突豫防法、出入船舶届出規則、船隻及小廻船の各營業取締規則等に依り取締を勵行し、事故防遏に努め又、各地に於ける産業の發達に伴ひ各種交通機關漸次發達し、殊に道路の開鑿と共に自動車は各地に普及され、之等交通機關の増加と交通の頻繁は、自然交通事故を惹起するに至り、之を取締に付ては道路取締令、自動車取締令其の他に依り大體内地府縣同様に取締を爲し、以て交通の

安全を圖つてゐる。

△營業警察 警察取締を要する營業者は輒近異常の増加を來し其の主要市町村に於ては其の營業久しきに亘り、其の設備營業方法等逐年改善せられつゝあるも、新發展の部落には一攫千金を夢想し蠅集するもの多く、從つて之に伴ふ弊害亦尠からざるを以て、各營業共取締規則を制定し是に基き取締を勵行して、以て弊害を防止すると共に、營業の堅實なる發展を圖つてゐる。

△司法警察 本島は少數の土人、外國人を除くの外、大部分は内地人及半島人なるを以て、犯罪の手段方法態様等殆ど内地と異なる所なきも、拓殖の進展社會狀勢の推移に伴ひ逐年犯罪増加の傾向を示し、其の手段方法等漸次惡辣巧妙若しくは兇暴慘虐を極め、見聞する者をして慄然たらしむるもの多きを加へつゝあり。犯罪發生件数は之を内地各府縣に比較するに、約一倍半の高率を示す。之が原因は概ね土木事業、林業、漁業等のため周

期的に内地各方面より入込む労働者中には、犯置手配中の者及前科者、其の他視察取締を要する者多數ありて、之等は科刑を何等意に介せず、取締の間隙に乗じ隨時隨所に於て犯罪敢行の舉に出づるためである。

神社及び宗教

明治三十八年、本島領有後、住民の増加するに從ひ、神社の創立を企劃するもの各地に相繼ぐに至り、茲に於て人心の歸嚮を察して敬神の思想を涵養し、崇祖の信念を振作する爲め、明治四十四年全島鎮護の大祀として官幣大社樺太神社を建立せられた。爾來豊原、眞岡、大泊、泊居其の他各地に相亞で産土神社の建立を見、現在其の數百二十六社に及ぶ。

△官幣大社樺太神社 祭神は大國魂命、大己貴命、少名彥命の三神一座にして、豊原の東郊旭ヶ丘に鎮座し、幽邃絶佳の勝地である。明治四十三年起工、翌

明治四十四年八月鎮座。大祭日は樺太施政記念日たる八月二十三日である。

△縣社豊原神社 祭神は天照皇大神、豊受大神、明治天皇、照憲皇太后の三座四柱にして、豊原町字北豊原に鎮座す。明治四十一年の創建にして、例祭日は六月十六日。昭和三年十一月五日縣社に列格せらる。

△縣社亞庭神社 祭神は大國主命、事代主命、市杵島姫命、御食津神、譽田別命にして、大泊町神樂ヶ丘の高地に鎮座し亞庭灣を望む。大正三年創建、昭和五年七月五日縣社に列格せられる。例祭日は八月十日である。

△縣社眞岡神社 祭神は天照皇大神にして、西海岸眞岡町市街の高臺山手町に鎮座し、眞岡町を一眸に收む。明治四十三年の創建にかゝり昭和九年五月縣社に列格せらる。例祭日は七月十日。

△樺太護國神社 豊原町の東郊官幣大社樺太神社に隣接せる淨地に在り。日露戦争及昭和六年乃至同九年滿洲事變、及び支那

事變に於ける本島關係の戦病死者の英靈を祀る。昭和十年九月の創建にして、例祭月は八月二十五日。

△表忠碑 大泊中央高地に在り。明治三十七、八年戦役に際し、本島に於て不幸戦病死せる陸軍歩兵少佐西久保豊一郎以下軍人軍屬五十一名の遺骨を埋葬して其の英靈を祀り、最も激戦にして敵の主力を全滅したる七月十二日(西久保少佐戦死)をトして毎年祭典を舉行す。

△樺太戦跡記念碑 本島の我領有に歸するや、其の戦跡は徒に荒野に委棄せられ、漸次其の形態を湮滅するに至らんとするを恐れ、官民有志の組織する樺太戦跡保存會の手に依り一萬數千圓を投じて、彼我兩軍の輪贏を一舉に決せる交戦地たる豊原町字軍川を選び、花崗石を以て高さ二十四尺の碑を建設した。

本島領有後、各宗派の布教師續々渡來し、各地に寺院、布教所を設け、布教傳道に努めたる結果、歳を遂ふて盛んとなり、檀徒の數亦倍々増加す。宗派は

神道、佛教、基督教である。△神道 神道、黒住、天理、金光、大社其の他に於て、各地に布教所六〇箇所あり。

△佛教 眞宗、日蓮、曹洞、眞言、淨土其の他に於て、各派の寺院九〇、布教所一二一箇所に達す。

△基督教 日本聖公會、日本メソヂスト教會、天主教會、日本基督教會、救世軍、きよめ教會及び新教日本一致教會の七にして、教會數一三箇所ある。

學校教育概況

△初等教育 拓殖の進展人口の増加に伴ひ、學齡兒童の増加亦著しく、依て學校の増設、校舎の整備と共に、内容の充實を圖りて教育の改善振興に努めて居る。而して初等教育は概ね普及し、今や相當村落を形成する所學校の設置を見ざるなき狀況にして、從つて學齡兒童の就學率亦頗る良好である。尙、昭和十三年末で尋常高等小學校一〇二、高等小學校三、尋常小學校

校一四八、教員千五百十人、兒童五萬八千四百四十六人である。

△高等普通教育 小學校の増加に伴ひ其の卒業者にして更に中等教育を受けんとするもの年々増加の趨勢に在るを以て、明治四十五年五月、樺太廳は大泊町に中學校を設置し、次いで大正五年四月豊原町に高等女學校を設置した。昭和十四年三月末で樺太廳大泊中學校、豊原中學校、眞岡中學校、豊原高等女學校、大泊高等女學校、眞岡高等女學校、泊居高等女學校、師範學校等が設けられてゐる。

△中等學校入學檢定 昭和十五年實施 一 入學檢定は左の三項の綜合判定に依る 人物考査、學業成績、身體檢査 二 人物考査は出身小學校長の内申並中女學校に於ける口頭試問に依る 三 學業成績は出身小學校長の内申並中女學校に於ける考査の成績に依る

△軍人後援會支助 十五年度の事業 △授護事業實施 豫算四萬一千圓をもつて傷痍軍人、遺家族並に現役軍人應召者軍人遺家族にして軍人扶助法及び其他團體、國の授護を受くることの出來ないもの、又は受くるも不足なるものに對し、各種授護をなす △銃後奉公會助成 助成團體四十一、助成額三萬六千九百五十圓、專任職員設置費及び事業資金相談所維持費を助成 △大日本傷痍軍人會樺太支部助成 所要經費二千圓をもつて事業資金助成 △銃後教化指導 所要經費四千圓をもつて六月下旬より七月中旬にかけて全島二十ヶ所で巡回講演會並に映畫會を開催し、遺家族の教化指導の徹底を期す △銃後善行者表彰 經費四百五十圓、事變紀念日をトして表彰を行ひ、一層銃後授護の普及徹底を期す △樺太だよりの發刊 年十二回

四 内申は尋常科にありては尋常五、六兩學年分高等科にありては尋常六年よりの分を必要とす

内申に付ては學業成績に關する學級一覽表の外、改正學籍簿の趣旨に則り、各志願兒童の人物全體を察知し得べき詳細なる個人調査書を作成報告すること

内申作製に付ては各小學校(單級を除く)に學校長を主任とする教職員委員會を設け以て其の適正を期すること

中女學校に於て前項内申を審査するに當りては、一律に甲乙小學校間の等差を附するが如き取扱を避け、各志願兒童に付厳密なる審査を行ふこと

五 口頭試問は試問者の漠然たる主觀的印象に依ることなく周到適切なる設問を以て判定すること、設問事項は知識的方面を避け、兒童の日常生活に於て經驗する普通の事項に付ての綜合的人物考査(心性發達の將來への可能性、情操の深度、推理の適否等)たる

六 學業成績の考査は尋常小學校に於て履修せる範圍に就き之を行ふ、考査問題は必ず平明簡易を旨とし、其の内容は各一學科目に偏することなく數科目の綜合的應用能力に依りて解答し得るものたるべく且つ速成的受驗準備を排除すべき基本的普遍的なるものたるべきこと

七 身體檢査は疾病及異常、發育及榮養、運動能力に付き行ひ、特に疾病及異常の檢査に重きを置くこと

附則 一 入學檢定は概ね二月下旬施行し、結果發表は二月下旬とす 二 入學準備教育は之を嚴禁す

ハ 本規程施行に必要な細則は樺太廳長官の認可を得て學校長之を定む

Table with 2 columns: School Name and Number of Students. Schools listed include 豊原 (200), 大泊 (150), 中等學校 (364), 採用數 (291), 志願數 (364).

研究青年校を設定 (昭和十五年)

青年學校制度實施以來、校數の増加、就學出席率の向上など著しい整備を示しつゝあるが、本島でも近く義務制の實施を見る筈であるため、樺太廳學務課では青年學校の内容形式共に再検討を加へた上、慎重な研究を進めることとなり、昭和十五年度から學校を指定し、研究青年學校を設定することに決定した。指定校は

- 豊原、落合、長濱、河西、阿幸、野田、小田寒、惠須取第一、知取、敷香

の十ヶ所で、研究期間を十五、十六の二ヶ年、十六年十月に研究事項を發表せしめ、青年學校

Table with 2 columns: School Name and Number of Students. Schools listed include 眞岡 (150), 敷香 (100), 工業 (70), 豊原 (200), 大泊 (150), 眞岡 (150), 眞岡 (150), 眞岡 (150), 眞岡 (150).

發刊、一回發行七千部、經費二千圓で第一線將兵に銃後の状況を通知す

△事業資金調達 各種の援護事業を實施するには、恒久的財源を必要とするので、島内關係方面より約十萬圓の資金を寄附形式で募集造成す

△美談集編纂 銃後の美談を収録し、一般に頒布し、或ひは後に傳へるため、年數回にわたりて美談集を編纂發行

△事業記録編纂 事變發生以降の事態を記録して後に傳へるため、樺太廳では市町村をして事變記録編纂の計畫を樹て、あるが、支部でもこれに協力し、銃後々援の状況を詳細記録せんとす

△慰問慰藉 (歳末慰問) 十二月に各部會長を通じて市町村銃後奉公會々長をして慰問品を贈呈せしめる、經費七千圓(戰歿軍人遺家族慰藉) 八月二十五日樺太廳施政記念日を卜し、各部會長をして遺族に供物を贈り慰藉經費一千圓(戰傷病人慰問) 各部會長をして適當の日に戰傷病人

人に見舞品贈呈、費用一千圓

△婦人指導員設置 遺家族に對する物心兩方面に亘る援護の徹底を期するため、本支部に専任婦人指導員を設置し、市町村におけるこれ等の機關と連絡強調せしめる、人員は三名、費用四千圓

△遺家族懇談會開催 遺家族主婦の精神的援助を助長する策として、隨時懇談會を開催せんとす、費用千五百圓

△遺家族巡回診療實施 傷痍軍人及其の家族現役軍人應召軍人遺家族並に歸郷軍人中疾病の爲相當困窮してゐるもの尠からず依つて六月上旬より八月下旬にかけて、支廳出張所々在地毎に巡回診療を行ふ、費用五千圓で醫師一、看護婦一、事務員一を一組織とし二班を統制、東西兩海岸に派遣

△慰問團派遣 郷土部隊慰問のため九月十月の二ヶ月に亘り滿蒙中南北支にかけて約八名の慰問團を派遣經費一萬四千五百圓

△慰靈祭執行 七月七日の事變記念日を卜して、樺太護國神社

境内で慰靈祭執行經費二千圓

△遺品展の開催 七月七日の事變記念日を卜して、遺品展を開催、更にこの資料を八九の兩日各地に巡回參觀せしめる、經費二千五百圓

△軍事援護關係事業視察團派遣 内地における状況を視察せしめるため九月中旬に六名宛二班の視察團を派遣、經費一人に對し約一千圓補助

△小學校兒童に銃後々援思想普及の爲紙芝居配給 島内各小學校二百五十校に配給、經費一千圓

△武運長久祈願祭 事變記念日を卜し、市町村銃後奉公會をして武運長久祈願祭を執行せしむ一奉公會に二十圓宛助成

拂底の折柄、銅錢が不要となるから、旅客、鐵道係員相互の手續が省かれ、乗車券發賣の簡易化を計る上に益することになつた。

例へば従来の豊原、本斗間二圓七十一錢が二圓七十錢に切下げとなり、又豊原、泊居間三圓五十八錢が三圓六十錢に切上げとなるのである。

此の改正は百斤以下は通行税の免税區域である四十斤以下のものを除き運賃は殆ど値下げとなり、従つて鐵道としても地方鐵道としても犠牲である。

樺鐵買収案可決す

東海岸の動脈たる樺太鐵道株式會社線(落合―敷香間)の買収は、第五十七議會に於いて衆議院の協賛を経た。

即ち一樺太鐵道株式會社所屬鐵道買収のため公債發行に關する法律案一及び「樺太地方鐵道補助法中改正法律案」の二件は、昭和十五年三月六日、衆議員船員保險特別會計法委員會に併託され、同十一月、十二月の二日間の質疑應答の後、可決となり、

同十二日本會議に一括上程、委員長報告通り可決確定した。依つて直ちに同二法案は貴族院に回付され、十四日委員付託となつた。同鐵道は昭和二年十一月、落合―南新間間の建設を見、十一年八月更に敷香迄延長された、オホツク海に沿つて北走する唯一の幹線で、樺太廳では拓殖の進展並に地方開發上其の緊要性に鑑み、從來樺太地方鐵道補助法により補助金を交付してゐた。買収後の改良、擴充等により、同線の重要性は益々加重されるであらう。

同線沿線には白鳥の飛來で名高い白鳥湖、高山植物の咲き誇る突阻山、泥火山で知られたバケ沼、尖峰三ツ富士その他の北方的色彩豊かな名所がある。

經濟的にも人絹バルブ、石炭、木材その他の輸送に利用され、地方開發の動脈たる使命を果してゐる。

共勵振興農村

北方農業の確立と、樺太農村振興の方途として、昭和十四年

樺太

規格農家住宅

樺太文化振興會では、島民生

全島九部落を指定した共勵振興農村は、十五年、更に左の如く新に九部落を決定した。

市町村	指定部落	戸數
千歳	貝塚	一〇
留多加	小里	三五
本斗	阿幸	三五
蘭泊	羽母舞	二〇
泊居	杜門	六
鶴城	内胡	三
知原	東柵丹	三
泊岸	新開澤	六

指定部落には指導員を配置し第一次及び第二次の村民大會を開いた上、更に各部落共勵振興委員會を組織し、調査並に計畫を進めた。

尙、新指定によつて、全島の共勵振興農村は十八ヶ村となつた譯で、先進地に學び後進地を導く等、本島農村の共勵振興は一段と活潑化すべく期待されてゐる。

活文化の確立を目標とし、從來兎角住み難い樺太として世人にとんぜられてゐたこの種方面の研究に鉾を向け、生活に最も密接な關係を有する寒帯向き住宅の研究を進め、先づ農村に於ける模範住宅を建設することにした。

よつて同會では、樺太廳殖産部に、本島農業、自然等の特殊性を取り容れた計費二千圓前後を限度とせる農村模範住宅の設計を委嘱し、これが完成と同時に、更に廣く普及化を圖らんとし、同部の推薦による六戸の建築者を決定した。

農家住宅新築工事仕様概要は

- 一 建坪 二十三坪(内五坪は下屋作り)
- 一 軒高、軒出 軒高地盤線より軒桁上端迄十三尺(下屋九尺) 軒出柱真より極鼻まで一尺五寸とす
- 一 基礎 上臺下布掘りの上切込砂利搗固めとす
- 一 床 玄關、廣間、裏口は粘土叩き土間とし座敷廻り臺所は二重板張り、他は一重床板

張り座敷は疊敷きとす

- 一 天井 天井は中二階床を兼ねるものとし半丸太耳摺りの上張り立て、中二階廣間は石灰入り粘土叩きとす
- 一 小屋と屋根 小屋は和式小屋作りとし、小屋裏中二階とし、作業場、養兔、養鶏場に當て、屋根は葎葺き仕上とす
- 一 建具 二重窓内部紙貼障子同外部硝子窓、外部出入口腰高硝子戸、座敷入口腰高障子、押入は板戸に紙貼り仕上げとし、物置、浴室便所、入口は板戸、他は總て硝子窓とす
- 一 其他 ポンプ、流し、戸棚、便器、排水、その他必要な設備をなすものとす

右の設計書に基きそれら、昭和十四年十一月月中旬建築に著工、十二月下旬に竣工を見た。

本建築の生活者にとつて極めて實用性に富む、合理的と思料される點は、居間と炊事、浴場、便所、物置等が玄關口より裏口に至る一間幅の土間で區切られてゐる點で、野良仕事の多い農家の人たちが仕事の合間に一々

居間に上らずとも土足のまゝ用が辯ぜられ、夏などは炊事場で簡単な晝食もとれる仕組みになつてゐる。

居間は土足のまゝ、爐に踏み込んで暖をとれる十二疊で、爐の傍には揚板にて薪入れと室が設置されてゐる。

寢室は八疊、六疊、四疊半の三つで、殊に南面の縁側に續いた八疊間は、正面に床の間兩側に神棚、佛壇が附屬し、總硝子の縁側は南に面してゐるため採光によく、冬季といへどもよく太陽熱を吸収して採暖の役目を果すよう工夫されてゐる。

寒氣に耐える保温設備としては、床が二重張りとなつて居り、畳を敷かぬ居室でも何ら寒さを感じぬほどである。また壁はすべて内側にテックスを張り撻らしてゐる。

更にこの建築の特長ともいふべきは、中二階裏屋根が充分作業場として利用される廣さを持つてゐる點で、地階の温度で暖爐を置かずとも、ぬく／＼とした温さを感じ、養鶏、養兔には

理想的な効果を擧げることが出来る。副業を行ふには好適といへよう。

造林事業計畫

樺太に於ける天然林の蓄積は、領有當時二十餘億石と概算され、無盡の寶庫の觀を呈してゐたが、一度バルブ工場建設されるや、此の年大量の伐採行はれ、大正八九年頃より十一年に亘り南部地方に突發したる松蝨の蝕害は、大約面積に於て二十二萬町歩、材積實に八千八百餘萬石の美林を壊滅し、一方年々頻發する山火に依て伐採跡地の大部分は焼失し、當初豫定されたる天然更新は根本的に破壊せられ、數十萬町歩の荒廢無立木地を現出し、さすがの森林王國も一朝にして前途暗澹たる形相を呈した。

本島に於ける造林事業は未立木地の人工植栽と、天然更新地に於ける撫育作業とにより遂行されるものであるが、大體に於て、昭和十五年度以降急速施業

の要あるは、人工植栽にありては二十五萬五千餘町、天然更新撫育地は四十二萬四千町、併せて六十七萬九千町と概定されるも、此の外、固定國有林野内に十萬餘町と、農牧豫定地内に十萬餘町の要造林地の存するもの、如く想定されるものであるが此の部分については今後に於ける細密調査の上決定すべきものであるから、次期造林計畫の際考慮する見込みである。

本島造林は前記の如く既往の山火に依て生じたる未立木地と伐採其の他に因て生じたる天然更新地とを綠化せんとする方針の下に、第一期十年間に大約二十五萬町を綠化せんとする計畫である。その内容は各年當人工造林によるもの一、七〇〇町、天然更新一三、〇〇〇町計二四、七〇〇町、之に附隨して防火線三〇軒、林内歩道二〇〇軒を新設するにある。

人工造林中官行によるものは五、七〇〇町で、他は獎勵造林によるものである(市町村一、五〇〇、個人一、五〇〇、法人

三〇〇、重要産業二、七〇〇) 本計畫の目標とする所は、現在針澗併せて八億萬石程度とあり、之を自然に放置し何等人工的撫育を施さざるに於ては、近き將來に年伐量僅に八百萬石程度の少量となるを以て、廣汎なる未立木地に對し、可及的早急に人工植栽による施業を探ると共に、幼稚樹の發生地に對し手入除伐或は間伐等による撫育作業を施し、以て森林地帯の全機能發揮せしめ、他面不法な過伐を戒しめ、蓄積の増加をはかり、將來年伐量千七百萬石乃至千九百萬石程度迄に引上げる方針の下に、大規模の造林が計畫實行されるに至つた。

造林事業は大正九年より試験的に小規模に開始されたが、十一年度より大規模なる播種造林を實施するに至り、昭和二年よりは植樹造林を主とし、最近は特別の場合のみに播種を併用してゐる。

樺太現行の天然更新事業とは廣義の天然更新の意にあらずして天然更新地の撫育作業の意で

ある。

本島には伐採跡地、虫害跡地、山火跡地、其の他に於て多數の稚樹發育し、人工を以て新に植栽を要せざる大約四十餘萬町の天然更新地がある。

この天然更新地は本島の郷土樹種たる、とゞまつ、えぞまつ、ぐいまつ、かんば等より成立し、特殊の林地を除き、稚樹の發生は極めて良好にして、一陌當り本數多きは數萬本に達するものがある。

これ等の稚樹はその生長繁茂するに從て本數樹冠共過密となり、地上部地下部共に甚しき生存競争を起し、弱者は強者のため遂に壓倒せられ枯死するに至り、その強者即ち優勢樹とても勢力を消耗されるため生育は不振となり、その樹形は畸形化し健康木たること困難となる。

この森林を健全に仕立てるには、稚樹の生長に伴ひ、年と共に除伐又は間伐による撫育作業を施し、本數を適當に調節すると共に、稚樹生長上有害なるものを除く等の作業が必要であり

又本數の不足するやうな場合には、補植を行ふ必要がある。

以上は更新地状況よりの必要性であるが、本島林産資源造成方面よりするも同様重要にして、森林を健全ならしむると共に、生産機能を著しく促進し、林産物の早期收穫を圖るには、是非合理的撫育作業を爲さねばならぬのである。

本島に於ける撫育作業は、昭和四年豊原、泊居管内に於て施行したのが始まりで、年々三四百町づゝ實施し來れるが、年期契約完了後、標準年伐量八百萬石程度に激減する林力中斷期間を可及的短縮する目的を以て、昭和十一年度造林十ヶ年計畫を樹立し、天然更新事業を年當一萬町づゝ實施することとしたが坑木の需要に充つるため、ぐいまつ類の人工造林年當一、七〇〇町と共に、天然更新撫育間伐年當三、〇〇〇町を追加計畫し人工造林は順次増加し、昭和十五年度より年一、七〇〇町、天然更新は昭和十三年度より一三、〇〇〇町とし合計二四、七

〇〇町づゝ實行することとなつた。

林野火防組合規則

本島に於ける林野火防組合規則は、大正十一年國有林野火防組合規程制定後、屢次の改正を加へ今日に至つてゐる。抑々當初林野火防組合は各町村長又は部落總代に於て之を組織したる關係上、一町村内を以て其の區域とし、主として町理事者の事務的活動にして、實質的山火警防の成績擧げざるに鑑み、昭和五年林務署設置以來之を部落單位の林野火防組合區域に變更を爲さしめ、一般住民の愛林警火思想の普及徹底を圖り、眞に自警的活動としたる結果、漸次堅實なる林野火防組合の發達を見つゝある現状である。

然るに市町村が該組合と何等の關係を有せざるは、之れ即ち林野火防組合が國有林野の山火警防を目的としたるものなるを以て、自治體との關係薄きに依る所なるも、思ふに本島の國有林野は島民の利害休戚に最も深き關係を有し、殊に逐年公私有

林の擴張するに於ては、一層市町村と連繫を緊密ならしめ、山火の豫防及消防上長久の實績を收むるに努めなければならぬので、各部落毎に存立する林野火防組合を以て、各市町村區域内の林野火防組合聯合會を設立せしめ、尙現行林野火防組合中、山火消防隊關係を別途に規定し、其の組織のみならず各山火消防隊の向上を期するを緊要と認め、昭和十五年三月十六日、關係法規の改正公布を見たのである。

主なる畜産

△養豚 在來豚は樺太占領當時殆ど食用に供せられ今は其の跡を絶ち、從つて其の何種に屬するものなるや不明である明治四十年樺太廳に於てパークシャー種とチヌスターホワイ種との雜種を移入したるも、今は之に屬するもの殆どなく、其の後民間に於てパークシャー種及ヨークシャー種を移入し、現在殆ど此の二種

を以て占むる状況にして、蕃殖並に成育甚だ良好である。樺太廳に於ては獎勵品種としてパークシャー種及ヨークシャー種の二種を決定し、中央試験所畜産部に於て種畜の配付をなして居る。

△養鶏 占領當時より露助鶏と稱する在來種の系統と認むべきもの各地に分布した。されど其の起源不明にして、形状より推斷するにレグホーン種とハムパーク種との雜種なるが如きも、一定の形態を存せず。體軀一般に矮小、舉動輕快、體重僅に三百匁乃至五百匁にして、其の産卵數一箇年五十乃至八十箇を算し、一箇の重量十二、三匁内外。最近漸次改良せられつゝあるを以て將來其の跡を絶つてであらう。

領有後移入せられたる鶏種はレグホーン種を最多とし、ミノルカ種、アングルシャン種、オーピントン種、横斑フリマスロツク種、名古屋種其の他數種を數ふるも、飼養試験の

結果、冠白色レグホーン種並に横斑フリマスロツク種を本島に最適のもの認め、之を獎勵品種に決定し、一般に其の飼養を奨励したる結果、現在總數の約九割を占め成績亦佳良である。

△養狐 大正四年廳種畜場に於ける飼養試験を以て本邦に於ける嚙矢となし、爾來飼養者漸次増加し、樺太特有の有望なる産業たるを失はず。依つて樺太廳に於ては大正四年、養狐業のため其の用地として一萬五千坪以内の未開地を貸付するの途を開いた、然るに時恰も毛皮の市價暴騰し、需要亦激増せるを以て、養狐業經營者續出し、稍堅實味を缺くに至りたるが、大正十一年毛皮市價下落の結果、一時飼養者激減したりと雖も、爾後再び増加し來り、堅實なる發達を遂げてゐる。

蕃殖保護施設

本島に於ける養殖事業の主なものは河川養殖に屬する鱒、鮭人工孵化事業にして現在廳管孵化場六、水産會經營七ありて何れも平水式を採用す。輒近諸般事業の勃興に伴ひ鱒、鮭の天然蕃殖に障害を與ふるもの尠からざるを以て、年々廳管又は民

優良牝馬保留

優良牝馬保留獎勵規則は、昭和十四年十一月三十日、左の通り樺太廳令で出た。
第一條 樺太廳長官は優良牝馬の保留を獎勵する爲本令に依り毎年度豫算の範圍内に於て獎勵金を交付す
第二條 獎勵金は中間種又は重種にして優良牝馬保留検査に合格したる牝馬を蕃殖に供用する目的を以て飼養する場合

其の所有者に對し之を交付す
第三條 獎勵金の額は一頭に付年百圓以内とす

養殖獸皮販賣制限

養殖獸原皮の販賣制限に關し昭和十四年十二月二十日、左の通り樺太廳令が出た。
第一條 本令に於て養殖獸原皮とは左に掲ぐる獸類の原皮を謂ふ
一 狐(野生のものを含む)
二 其の他樺太廳長官の指定する獸類

第二條 養殖獸原皮の生産者は樺太廳長官の指定する者以外

の者に對し其の原皮を販賣することを得ず但し特別の事由に因り樺太廳長官の許可を受けたる場合は此の限に在らず

水産業の推移

本島に於ける鯨、鱒及鮭の漁業は、遠く松前氏の蝦夷に封ぜられたる時代に於て、既に邦人に依りて行はれたが、明治八年千島樺太交換條約の結果、本島

適とするも、現在副業的に之を飼養する農家各地に増加しつつあり。飼養管理は繁殖時期及仔狐の育成中最も困難にして、狐は驚怖心及猜疑心強きを以て、管理人は相當の經驗を有し、動物の習性を熟知するの外、特に細心の注意と鋭敏なる觀察力とを要す。熟知せる管理人は一人にて約五十個を管理することを得べく飼料は獸肉、魚肉を主食とし根菜類、麥粉、骨粉、果實等を適宜に給し、幼狐には牛乳を用ふ。飼料の配合蒐集貯藏等には細心の注意を要す。養狐種別は赤狐、紅狐、十字狐、青狐、黒狐、銀黒狐等である。

其の漁業組合員をして一般漁業に従事するの傍ら鱒、鮭及鮭の漁利に均霑せしめ以て漁業經濟の一端を補はしめた。越えて大正十年、専用漁業の數を増加し漁利の均霑に努め、更に大正十一年及同十五年、漁業法規改正に依り、漁業免許の入札制度を廢したる外、漁具漁法等、漁制上改革せられたる點多い。

主要漁業(昭和十四年)

許可漁業の種類は十六種に大別し支廳長の許可を受けることを要し、漁業の場所二支廳以上の管轄に亘るときは樺太廳長官の許可を受けることを要す。漁業制の概要斯くの如しと雖も樺太に在住する土人に對しては例外規定を設け、土人にして

土人以外の者を使用せずして漁業を爲す場合に於ては、免許を要する漁業を除き、鱒、鮭、鮭の捕獲に付ては慣行の區域及特に定められたる區域に於て、其の他の水族の採捕に付ては自由に之を放任す。
本島に生産する水産物の主なものは鱒、鮭、鮭、鱒、鱒、鱒、鮭、蟹、海鼠、帆立貝、北寄貝、鰓類及昆布等である。

昆布 樺太昆布は其の數量に於て又價格に於て北海道物の遙か下位に置かれ、従て一般關係筋では北海道物の補充的存在とする嫌が無いでもなかつた。然るに當局の確固たる信念による或る程度強制的改良指導は、其の狙ひ誤らずして聲價は年と共に揚り、忽ちにして單價の向上となり、當業者は愈々以て品質の改良に精進した結果、今や樺太昆布の存在は嚴として重きをなし、其の産額も昭和十三年の如きは實に二百萬圓餘の巨額を示し、漁業者の昆布に對する關

心は一層深まり、永遠の對策たる昆布礁の増設又は雜草除去の勵行等目覺ましい躍進振りである。

元來昆布は隔年毎に豐凶を繰返すもので、十四年は丁度亞庭灣不作なるに對し、西海岸の大部分は豐作年に相當してゐたのであるが、漁業者は前年の高値なりしに顧み、大馬力を以てこれが採取に努め、四萬九千石に達する良成績を挙げたのであるが、更に漁業者をして欣喜せしめたことは、北海道利禮昆布が入札が甚だしく高値であつたことである。即ち同方面前年の相場は一駄十四圓三十錢のものが十四年は最高二十八圓六十錢となつて現はれ、樺太昆布も當然更に高値相場を豫想することが出来たのである。果せる哉灣内昆布の第一回入札には最高三十八圓八十八錢なる未曾有の相場となり、次で本斗阿幸の入札に至つては五十圓八十八錢六厘と云ふ物凄じきことになつた。而して結局昆布の總生産は四萬九千五百餘石、其の價格は五百八十

七萬餘圓なる素晴らしい額に達した。過去に於て五百萬圓以上の水揚を示した漁業は僅を措いて他にこれを求め得ないののである。前年昆布で二百三萬餘圓を得たが、これは實に未曾有なりとして彼も我も喜んだのであつたが、十四年に比するときは略々三分の一に過ぎない。昆布が本島の水産業上如何に重大であるかは單に數的に見た丈けでも肯ける。

十四年飛躍的大漁をしたものに鱒がある。鱒も大體に於て隔年に豐凶があるが昆布程の正確さはない。過去十ヶ年間に於て昭和十年は實に豐漁で、其の價格は三百八十二萬餘圓で、領有以來の記録であり、其の次は大正八年の三百八萬餘圓、十四年は第三位の三百二萬餘圓であつた。其の殆ど大部分は鹽藏されて内地、回ブロッツク關係へ移輸出されてゐることに變りないが在支軍將兵諸士も此の北洋魚の味に舌鼓を打つたことであらう。十四年の漁獲増加は東海岸散江地方の豐漁と、西海岸特に眞

岡郡の大漁とが原因したものである。

從來鱒網に若干宛乗網して居たが、本格的に着手したのは十三年からであつて、同年は總數三千九百本を揚げて相當以上の利益を得た。

これを見て他の漁業者が黙つて居よう筈はない。素晴らしい熱と意氣込とを以て着業に乗り出し、眞岡、本斗兩郡で二十六ヶ統の落網が建てられた、而して終漁迄に得た數は落網で六千八百二十本、其の他で七百四十本、計七千五百六十本である。數字から見ると前年の約二倍近いが、網の統數が十四年は十數倍であつたことを見逃してはならぬ。一ヶ統當り漁獲數は本斗で最高一千五百五十二本、最低十六本、眞岡郡は最高七百六十七本、最低十九本と云ふ甚だしい距離がある。

樺太の魚族はと云へば誰でも即座に鱒、鮭、鱒と先づ口を切るであらうが、他漁業の進歩の爲め金額から見ると鮭は代表的魚族たる地位から下り落ち

ねばならぬ。然し何と云つても他の意味で人氣は十分に保持してゐる。前年は約一萬五千五百東で二十四萬八千圓弱を水揚し十四年は榮濱方面の好漁が原因して約二萬三千石、三十四萬五千圓である。殆んど總てが所謂新卷なる名稱を以て正月を前に内地各方面に羽振りを利かすのである。

此の魚は昭和十一年から俄然群來が多くなり、同年は實に百萬圓を突破して堂々と登場し、翌十二年には百八十萬圓と躍進して萬人の注目の的となり鱒を對照とする内地方面よりの投資相亞ぎ鱒の不安定なるに顧み、鱒が鱒に代るも近き將來にありと迄稱せられ多大の期待を以て迎へられたのである。而して十三年の如きは、大地を打つ槌は外れても確信を以て各方面準備を整へ待期したのであつたが、豫想は全く裏切られて僅に六百石餘と云ふ慘憺たる不漁を以て終末となつた。十四年の本漁業は、前年程の期待は拂はれなかつたにしても尙且つ諦め切

發展途上の工業

富有なる天産物、殊に林産物を如何に利用すべきかに就ては領有の初期に於て夫々斯道の専門家を招聘し調査研究を爲したるも、明治四十三年樺太廳に臨時工業調査所を設けると共に、大泊に附屬工場を設置し、主として林木の利用に關し、松脂よりテレピン油及樟腦製造、木材乾溜、割箸製造及パルプ製造等の試験研究を爲し、他方明治四十四年豊原に乾溜工場を設け瀾葉樹材を乾溜し醋酸、石灰、木精及タールを製造して之を移出し、其の副産物たる木炭は之を一般の需要に應ずるの外、鍊鐵工場を起し其の需要に充つる計畫の下に着手し、次で大正六年、工場を大倉組に拂下げ、之を経営せしめたるも、大正八、九年の經濟界の變動に依り化學製品下落し、爲に工場の維持困難となり、大正十年閉鎖するの止むなきに至りたるも、一方針葉樹の利用は建築材、鐵道用材の外、製紙原料たるパルプ製造用に充

れる筈がない、依然準備を完ふして漁期を待つたが例年の盛期に及んでも洶游なく、慘々焦らした揚句、終漁間近になつて稍順調なる漁模様を示し、結局五千石で終漁となり前々年の十二年に比すれば十三分の一量に手が届く程度に過ぎない。

新興漁業として極めて順調なる進展振りを示し健實なる漁業たるを失はない。本魚の凍乾品たる明太魚は朝鮮に歡迎せられ市場に確固たる地位を占め卵は鹽漬して紅葉子の名を以て各都市學校兒童の愛好物に能はぬところである。近時本魚を原料とするソポロ製造が本格的に開始せらるゝ等、本漁業の將來は實に洋々たるものである。前年の漁獲は約七百六十八萬尾で十四年は一千萬餘、其の價格は七十八萬五千圓を示して居る。

しい成果は收め得られなかつたところ、數年前から漸次販路も擴大せられ相場も亦高騰の氣配を示し、今日迄の努力が報ひられる日も遠からずと期待されて居た。處が十四年早々から俄然相場の奔騰となり、三十圓から五十圓、八十圓、二百圓を突破するに至つたのである。從來本島では亞庭灣が主産地であつたが散江方面にも棲息すること多し、又西海岸久春内、留久志等も極めて有望なるところから、着業者續出の傾向にあり一躍人氣漁業となり、恐らく此處當分は本漁業を中心に活氣を呈することであらう。十四年の生産は亞庭灣の減産と他地方の設備が本格的で無かつた爲め、其の量は敢て多しとは云へないが六千俵に達した。

鮭 鮭は昭和十年以降毎年百萬圓から百二十萬圓位宛の水揚であり、其の製品たる棒鱈は本邦唯一の優品として巷間に賞用せられ、無頭鹽鱈は粕漬となつて東都に噴々たる名聲を博して居る。開鱈が在支將兵諸士に

つるを以て策の得たるものとし之を奨励したる結果、遂に今日の盛大を見た。又他面、臨時産業調査所を設け、本島産業の獨立を得せしむべく調査研究を重ね、直接或は間接に其の助成に努めた。

而して年々漁獲さるる豊富なる水産物の利用に關しては、中央試験所を始めその他一般民間に於て研究の結果、種々の工作に依り逐年食料化の量を増してゐる。尙本島産甜菜は品質收量共に優良にして、含糖率亦多量なるを以て、之が工業化を計り工場を豊原に建設し、昭和十一年十一月より操業した。之を要するに、本島の工業は今尙發達の途上にあると言ふべく、將來の資本並に勞力の移入に依り漸次堅實なる發展を見るであらう。

石炭石油其他礦物

本島に於ける礦物は石炭を主とし石油之に亞ぐ。其の他の礦物にありては金、砂金、含銅硫化鐵及辰砂鐵等存在するも未だ重要な鑛床を發見せず。

非金屬礦物としては石灰石、海綠石及柘榴石等あり。其の中海綠石は製紙用原料として、又海綠石は硬水軟化劑として採掘せられてゐる。

無盡會社は七社

無盡會社に就ては、昭和六年四月より無盡業法の施行を見るに至り、一時四十有餘の業者數を算し、競争激烈を極めしが、現在免許を得たるものは七社にして庶民金融機關として堅實なる機能を發揮してゐる。

Table with 2 columns: Location (所在地) and Name (社名). Includes entries like 豊原無盡, 大泊無盡, 本都無盡, etc.

普通・貯蓄銀行

明治三十八年、本島の邦領となるや、北海道拓殖銀行は政府の命に依り直に大泊に派出所を設け、中央金庫事務の取扱を爲す。

す傍ら、預金及爲替業務を行つた。當時一般銀行業務は同行定款の許さざる處なるを以て、本島の拓殖資金の供給に對しては全然没交渉の状態に在りしが、明治四十年一月、右派出所を樺太支店となし、一面同行後援の下に大泊、眞岡の兩地に泰北銀行支店を設置し、一般銀行業務を營むに至つた。越えて明治四十一年大泊に於ける諸官衙の豊原に移轉するや、北海道拓殖銀行樺太支店(大正三年四月豊原支店と改稱)も亦豊原に移轉し依然從來の業務を行つたが、明治四十四年北海道拓殖銀行法を改正し、本島をも營業區域に加へた。其の後大正三年四月に至り本島に於ける泰北銀行の業務全部を繼承する事となり大泊、眞岡に出張所を設置し、前者は大正七年、後者は大正八年に各々支店に昇格した。爾來同行支店、出張所は一般普通銀行業務、不動産、漁業權、工場財團等の各種擔保貸付、農業者、漁業者等の十人以上連帶貸付及公共團體各種組合に對する貸付の外、

預金部地方資金の取扱を行ひ、以て本島拓殖事業資金の供給を計ると共に豊原、大泊及眞岡の各支店に在りては、日本銀行代理店として國庫金の出納保管の事務を掌り、其の業務極めて廣汎にして且營業所は全島に亘り現在豊原、大泊、眞岡、本斗、野田、泊居、落合、知取、敷香、留多加、惠須取の各地に支店を設く。

簡易保險積立貸付

本島に於ける産業資金の供給を圓滑ならしむる目的を以て、樺太廳の補助を得、大正三年五月設立せられたる樺太金融株式會社は、定款を變更し、大正五年十月大泊に資本金五十萬圓よりなる株式會社樺太銀行を創立し、銀行業を開始した。然るに各種産業の發展に伴ふ資金の需要漸次多きを加へ來れるを以て大正八年三月資本金を二百萬圓に増資すると同時に、眞岡に支店を設置した。

右の外、本島に於ける唯一の貯蓄銀行として、大正十一年四月支店を豊原に設置したる株式會社北海貯蓄銀行は、鏡意島民

貯蓄心の向上に努め、漸次其の業績を擧げてゐる。

銀行預金(十四年末)

Table showing bank deposits for 1925. Categories include 當座預金, 特別當座, 定期預金, 別段預金, 貯蓄預金, 其他, 計, 前年, 銀行貸付, 手形貸付, 證書貸付, 當座貸越, 割引手形, 荷付爲替, 計, 前年, 銀行爲替取扱高, 送金爲替, 島内, 島外, 代金取立, 島内, 島外.

△各地より受けたる分

Table showing deposits from various locations. Categories include 島内より, 島外より, 代金取立, 島内より, 島外より, 郵便貯金, 人員, 金, 貯蓄增加日本一, 昭和三十四年十二月末現在を以て貯金局の計算したる處による, 昭和三十四年現在に對する増加率の高い地方(最高より十位迄).

△内國爲替

Table showing domestic remittance. Categories include 宮崎縣, 岩手縣, 青森縣, 長崎縣, 振出, 拂戻, 外國爲替, 振出, 拂戻, 簡易保險, 保險金額, 郵便年金, 件數, 金額.

△簡易保險積立貸付 昭和十三年度 末迄の累計額

Table showing accumulated amounts for various social welfare projects. Categories include 小學校建設, 町村廳舍建設, 公設火葬場, 上水道建設, 町營住宅建設, 傳染病舍建設, 道路建設, 公設質屋資金, 中等學校建設, 下水道建設, 公設防火設備, 農村電氣事業, 授産及鋪道, 各種公共事業, 會議所事務所建設, 郵便局建設.

一般社會事業 本島に於ける社會的事象は、從來甚だ單調なりしを以て、慈善救済及釋放者保護を主とし、社會事業の發達亦著しきものなかりしも、晩近本島の人口増加

過失傷害	1
通貨偽造	1
墮失致死	2
業務上同	2
同致死	2
逮捕監禁	2
脅取誘拐	2
騙取誘拐	2
名譽に	2
信用業務	2
窃盜	3
強盜	3
詐欺	3
背任	3
恐喝	3
横領	3
業務上同	3
其他	3
毀棄及隱匿	3
計	3
陸軍刑法	3
特別法犯	3
(罰金以上)	3
廳令違反	3
(同)	3
警察犯處罰令	3

内務省 七九 七四三
 廳令 一七〇 一五七
 △其他規 一、四三三 一、六〇九
 則違反計 八、八六一 八、七九五
 ラチ才聴取加入者
 十五年五月末
 加入者 普及率
 豊原市 一九三 二五、九
 郡部 一〇、三五 一七、八
 計 二、三四〇 一八、七
 豊原放送局地鎮祭
 豊原放送局の地鎮祭は、昭和十五年六月十八日に擧げられたが、放送開始は翌十六年の秋の豫定である。

史蹟名勝天然紀念
 昭和六年一月、史蹟名勝天然紀念物保存規程を公布し、同時に史蹟名勝天然紀念物調査會を設置した。現在までに該規程により指定せられたるもの史蹟三箇所、天然紀念物百十七種である。

△史蹟
 自主勤番所趾(本斗郡好仁村大字自主字南自主) 鷓城元會所趾(鷓城郡鷓城村俗稱鷓城)

澤)松川辨之助堀割趾(長濱郡長濱村大字長濱字長濱)
 △天然紀念物概記
 白聖系化石(アンモナイトの類) 頭場湖の蘚藻(大泊郡富内村) 馬群潭泥火山(元泊郡帆寄村大字馬群潭) 其他高山植物百十種
 全日本明治神宮
 棒太スキー競選
 昭和十五年一月十二日―十五日(豊原市)
 △長距離
 少年部
 1 三輪 徹夫(豊聯) 一時間八分五三秒
 2 古川正三郎(泊中) 一時間十四分三十秒
 3 須賀 隆夫(豊聯) 一時間十五分八秒
 4 山内 敬造(三井川上) 一時間十六分三十秒
 5 平野 文雄(三井内川) 一時間十七分四秒
 成年部
 1 伊藤 弘(豊聯) 一時間十分二十五秒
 2 佐藤 忠義(豊聯)

1 菊地 儀(三井川上) 一時間卅九分廿一秒
 2 奥寺 庄助(豊聯) 一時間四十二分三十二秒
 3 葛西 清(三井川上) 一時間四十七分三十三秒
 4 山崎 達夫(豊聯) 一時間五十一分十七秒
 △廻轉
 女子部
 1 田村 靜子(豊聯) 二分四十秒一
 2 石井 良子(豊女) 三分十三秒
 3 上田 和子(同) 三分三十二秒
 4 佐藤 一子(同) 三分五十五秒
 5 中島キミ子(同) 四分三十五秒一

男子部

1 若本松太郎(豊聯)	二分二十五秒二
2 波岡 利(廳鐵)	二分三十五秒二
3 平賀 末藏(川上)	二分四十八秒八
4 平賀新八郎(同)	二分四十九秒
5 館 學(豊中)	三分十五秒六
△耐久	
1 佐藤 忠義(豊聯)	二時間三一分三秒八
2 小笠原與一(同)	二時間三二分三秒四
3 蛭子 千富(同)	二時間三三分七秒
4 遠藤 恭治(同)	二時間四〇分二〇秒
5 伊藤 弘(同)	二時間四一分三秒八
△繼走	
1 豊原 聯盟A組	三時間三分五二秒
2 蛭子 伊藤	四四分一〇秒
3 遠藤	四八分九秒

佐藤忠 四六分二一秒	2 豊原 聯盟B組 三時間六分三七秒
小笠原 四五分五秒	三輪 四四分三秒八
向井 五一分四六秒	大橋 四五分七秒
△純飛躍	
少年部	
1 高橋 幸二(泊中) 二二、二、四	2 山崎 秀夫(真中) 二〇九、九
3 中川 嘉晴(泊中) 二〇二、〇	4 林 富三(真中) 二〇二、〇
5 清水 嘉爲(泊中) 二〇一、七	最長不倒 高橋 幸二(泊中) 三十七米
成年部	
1 若本松太郎(豊聯) 二一六、三	2 佐藤 利司(廳鐵) 二一五、〇
3 金谷 正夫(豊聯) 二一四、四	

4 伊藤 博明(同) 二〇四、九	5 佐々木 清(豊聯) 一九九、八
最長不倒 佐藤 利司(廳鐵) 三十八米	△複合
少年部	
1 中川 嘉晴(泊中) 四三五、七	2 伊藤 行雄(豊中) 四三〇、五
3 佐藤 信茂(泊中) 四一八、五	4 岡崎 秀夫(真中) 四一六、九
5 田中勇次郎(泊中) 四〇五、〇	成年部
1 佐藤 利司(廳鐵) 四五六、四	2 金谷 正夫(豊聯) 四五三、八
3 佐々木 清(同) 四三五、四	4 伊藤 博明(同) 二四七、一
5 千葉 小六(師範) 三八六、〇	

スキー選手權大會
 昭和十五年三月九日、十日(豊原市)
 △長距離
 高等科男子(八軒)
 1 後藤 勝信(豊四) 四九分四九秒
 2 木村 寅夫(同) 五十二分三十七秒
 3 佐藤 智(真岡) 五十三分二十一秒
 4 小西 健治(豊四) 五十三分四十五秒
 5 樋渡 金夫(落一) 五十四分二十一秒
 尋常科女子(一軒)
 1 瀬戸 幸子(豊一) 一三分一九秒
 2 白鳥ツヤ子(同) 十三分三十一秒
 3 多田 一子(同) 十三分三十四秒
 4 櫻庭 愛子(同) 十四分五十二秒
 高等科女子
 1 久保 和子(豊一) 十二分三十秒
 2 安藤 千代(同) 四九九

- 3 柴山 登美(同) 十三分〇九秒
- 4 佐藤 キミ(同) 十三分十五秒
- 尋常科男子(二軒) 十三分二十一秒
- 1 筑野 章(豐四) 十三分二十一秒
- 2 寺下 猛(同) 十三分二十五秒
- 3 菅原賢二郎(豐三) 十四分
- 4 丸山 茂雄(同) 十四分
- 5 根岸 宏(豐四) 十四分十八秒
- 壯年(十八キ口) 十四分二十七秒
- 1 奥寺 庄助(豐聯) 十四分二十七秒
- 2 山崎 達二(豐聯) 一時間十分一秒
- 3 菊池 儀(川上) 一時間十四分十九秒
- 少年部
- 1 三輪 徹夫(豐聯) 一時間十四分十九秒
- 2 三浦 兼造(知取) 一時間十四分十九秒
- 3 山内 敬造 五十九分十六秒

- 4 加藤 良(川上) 一時間三分五秒
- 5 井上 敬吉 一時間三分十四秒
- 中等學校
- 1 古川正三郎(大中) 五十九分〇二秒
- 2 中川 嘉晴(同) 一時間一分六秒
- 3 南 儀市(豐中) 一時間二分二十六秒
- 4 杉本 久雄(大中) 一時間三分三十四秒
- 5 岡崎 重光(真中) 一時間三分四十四秒
- 一般男子成年
- 1 蛭子 千富(豐聯) 五十三分十九秒
- 2 小笠原與一(同) 五十四分〇二秒
- 3 伊藤 弘(同) 五十四分十八秒
- 4 遠藤 恭治(同) 五十七分十一秒
- 5 和田 豊(麻鐵) 五十七分三十秒
- △廻轉

- 尋常科女子
- 1 林 靜(豐一) 四十四秒二
- 2 野上カネ子(豐一) 四十八秒二
- 3 寺門惠美子(豐一) 五十一秒六
- 尋常科男子
- 1 小笠原末藏(川上) 三十七秒二
- 2 山形 正志(川上) 四十二秒二
- 3 德光 晴男(落一) 四十四秒六
- 4 赤羽 正(川上) 四十五秒八
- 5 太田 幸雄(豐三) 四十七秒二
- 高等科女子
- 1 中村千榮子(豐一) 六十二秒
- 2 石井 春江(豐一) 九十二秒二
- 3 神代ミユキ(豐一) 一一五秒
- 中等部女子
- 1 石井 良子(豐女) 八十九秒四

- 5〇〇
- 2 中島キミ子(豐女) 九十一秒六
- 3 清水 靜枝(真女) 九十七秒八
- 4 門間 婦美(真女) 一〇五秒
- 5 森田 慶子(真女) 一一四秒八
- 高等科男子
- 1 佐藤喜佐男(川上) 六十一秒四
- 2 山本 安治(豐四) 六十七秒
- 3 曾我 好文(豐四) 七十三秒五
- 4 渡邊 松人(豐四) 七十六秒六
- 5 木村 重門(川上) 七十八秒七
- 中等部男子
- 1 柳田 進(泊中) 一〇五秒
- 2 清水 嘉爲(泊中) 一〇六秒六
- 3 上原 繁男(泊中) 一一五秒
- 4 山崎 秀夫(真中) 一一七秒八

- 5 湯之惠正行(豐中) 一二六秒
- 一般男子
- 1 尾崎 武輝(真岡) 九十九秒五
- 2 平賀新太郎(川上) 一〇八秒
- 3 平賀 末藏(川上) 一五四秒五
- 一般女子
- 1 田村 靜子(豐聯) 七十五秒
- 2 橋場 久榮(大女) 一〇九秒二
- 3 福山 照子(豐女) 一一一秒二
- 4 伊藤 幸子(大女) 一一九秒二
- 5 岩田田鶴子(大女) 一五四秒六
- △純飛躍
- 尋常科男子
- 1 小笠原米藏(川上) 一一五三點
- 2 山形 正志(同) 一二八・五點
- (第一回轉倒) 一二八・五點

- 3 三浦 宏壽(同) 一二一・五點
- (第一回轉倒) 一二一・五點
- 4 岡崎 富三(落一) 一一四・〇點
- 5 德光 晴男(同) 七〇・五點
- 最長不倒二一五・〇
- 小笠原米藏
- 高等科男子
- 1 渡邊 松人(豐四) 一二三米
- (二四米五〇) 一七九・二點
- 2 片岡 三郎(同) 一二二米五〇
- (二〇米) 一六九・七點
- 3 佐藤喜佐男(川上) 一二八點
- (第二回轉倒) 一二八點
- 4 木村 重門(豐四) 一一七・六點
- 5 多田 實(川上) 一一七・六點
- 最長不倒二八米 佐藤喜佐男
- 中等學校
- 1 伊藤 行雄(豐中) 三一九米五〇
- (三一九米五〇) 二〇八・九點
- 2 高橋 幸二(泊中) 三一九米五〇

- (三一五米五〇) 一九八・六點
- (三一米) 一九八・六點
- 3 筒井 美明(真中) 一九三・六點
- (二七米五〇) 一九三・六點
- 4 中村 典雄(豐中) 一九一・六點
- 5 萩原 義一(泊中) 一六八・七點
- 最長不倒 三一五・〇
- 伊藤 行雄
- 高橋 幸二
- 一般成年
- 1 伊藤 博明(豐聯) 二一九米
- (二八米) 二〇一・九點
- 2 金谷 正夫(同) 二一九米
- (第二回轉倒) 一五三・四點
- △複合鏡技
- 中等學校
- 1 田中勇次郎(泊中) 四四四・二點
- (距離二〇四・二) 四四四・二點
- 2 中川 嘉明(泊中) 四三五・〇點
- (距離二二四・五) 四三五・〇點

- 3 加藤 政行(泊中) 三九一・二點
- (距離一九〇・二) 三九一・二點
- 4 伊藤 行雄(豐中) 三八〇・一點
- 5 吉田 克俊(真中) 三六五・九點
- 一般少年
- 1 溝上 輝德(豐中) 三四二・三點
- (距離二〇二・三) 三四二・三點
- (距離二四〇・〇) 三四二・三點
- 一般成年
- 1 伊藤 博明(豐聯) 三四四・八點
- (距離二〇八・三) 三四四・八點
- (距離二四〇・〇) 三四四・八點
- 2 金谷 正夫(豐聯) 三四二・三點
- (距離二二四・五) 三四二・三點
- △繼走
- 尋常科女子(四軒)
- 1 豐一校 四九分四六秒
- 2 瀬戸 幸子 一二分一八秒
- 3 白鳥 ッヤ 一二分一九秒
- 4 多田 一子 一二分二七秒
- 5 櫻庭 愛子 一二分四二秒

高等科女子(四軒)

1 豊一校 四七分四二秒
安藤 千代 一分四七秒
石本トミエ 一分三六秒
佐藤 キミ 一分〇五秒
久保 和子 一分一六秒

尋常科男子(四軒)

1 川上校 四分四三秒
佐藤 治美 一分一〇秒
鳴海藤太郎 九分五七秒
帶谷 鐵男 一分四八秒
小笠原米藏 九分四七秒

高等科男子(三十二軒)

1 豊四校
三時間一五分五二秒
木村 寅夫 五〇分一〇秒
笠原 仙 五〇分四〇秒
小西 健吾 四九分三三秒
後藤 勝信 四五分二九秒

中等男子

1 眞岡中學
三時間二二分二五秒
二川 一美 五三分〇一秒
岡崎 重光 五一分
岡崎 秀夫 四七分五四秒
大塚 浩 五〇分三〇秒

1 豊原聯盟

乙組優勝者(二段以下)

二段高木満(眞岡)
甲組(二段以上参加十七名)
四段竹中(豊原)同川俣(眞岡)
三段小林(留多加)善戦し決勝に残つてリーグ戦となつた結果、四段川俣正明(眞岡)優勝。

傳染病最近五箇年發生狀況

Table with columns for disease types (腸チフス, 猩紅熱, 赤痢, 流行性腦脊髄膜炎) and years (昭和一〇 to 一四). Rows show '發生' (occurrence) and '死亡' (deaths) counts.

二時間五八分四七秒
伊藤 弘 四分六一〇秒
向井 喜雄 四分六〇五秒
遠藤 恭治 四分二〇秒
蛭子 千富 四分二二秒
中學武道リーグ戦
昭和十五年六月廿三日(豊原)

△劍道

泊中四—二眞中
渡邊 前田
住友 鎌田
山崎 足立
江刺家 菊地
金澤 黒澤
川人 福永
湊谷 池田
豊中三—三眞中
菅原 前田
大原 田

△柔道

眞中二—二泊中
裕川 西藤
川村 工藤
坂口 加澤
住吉 相澤
竹田 木村
文田 相澤
伊藤 木村
八重樫 細井
佐々木 木村
遠藤 相澤
山本 相澤
植村 相澤
佐々木 相澤

全島演武大會

大日本武徳會榊太支部主催第七回全島演武大會は、昭和十五年四月二十八日、豊原市の武徳殿において開催された、参加するもの二百餘名、剣道は十九チームを四組に分ち、團體戦に入る、豊原、落合、敷香、留多加の四チーム始終善戦して他を壓し、准決勝に入る。

落合三—〇豊原
敷香三—二留多加
△決勝戦
落合五—三敷香
四段石井 三段遠田
三段五十嵐 同菅原
二段齋藤 二段佐藤
同野尻 同大神田
同大原 三段森口

△准決勝

眞岡三—一豊原
大泊三—一豊中
△團體決勝
大泊一—〇眞岡
荒野四段 岸三段
川口初段 齋藤三段
金澤五段 玉見四段
清谷同 鹿取五段
八條同 加島同
△個人優勝者
1 乙組(二段以下) 播磨光廣(二段、本斗)
2 甲組阿部正幸(五段、豊原)
△柔剣道紅白試合
柔道の部(上は勝)
五段鎌士 八條静夫
加島米三郎

△柔道

五段能取源太郎 五段清谷郡造
同 阿部正幸 同 金澤徳雄
四段松山省太郎 四段荒野壽
同 中鉢昇 同 竹越金次郎
同 佐々木彌作 同 中島隆
同 溝中柳太 同 三宅瀧夫
同 玉是豊 同 溝手實夫
同 志村玄三雄 三段齋藤武雄
同 小川進 同 岸巖
同 久野定雄 同 正木武雄
同 齋藤牛之助 同 八木揚是
△劍道の部(上は勝)
主將四段 主將五段
竹中敬吉 藤下守夫
四段石井義雄 四段川俣正明
同 柴崎正 三段平根正一
三段遠田繁 同 梅津正二
同 山口利弘 同 中本茂政

米穀糶精等制限令

昭和十五年四月二十四日、榊太廳令で、小麦其の他の米穀以外の穀物又は穀粉にして、榊太廳長官の指定するものは船用品を除くの外、榊太廳長官の許可を受くるに非ざれば之を輸出することを不得ることとした。

援助者には給與金

昭和十四年十一月二十四日の勅令で、左の通り定められた。
第一條 榊太に於て職務に依らずして警察官吏に協力援助し因りて死傷したる者に對しては本令の定むる所に依り給與金を給す
第二條 給與金を分ちて左の四種とす
一、葬祭料 二、遺族扶助料
三、傷痍扶助料 四、療治料

市町村別戸口 (十四年末)

Table of population by municipality for 1925. Columns include: 全管 (Total), 豊原市 (Toyoharashi), 豊原支廳 (Toyoharashi-chō), 川上村 (Kawakami), 落合町 (Ochiwa), 榮濱村 (Ehama), 白籬村 (Shirahisagi), 大泊支廳 (Ōshimo), 千歳村 (Chitose), 深濱村 (Fukahi), 長濱村 (Nagahama), 遠淵村 (Tohon), 知床村 (Tompe), 富内村 (Tomun), 留多加支所 (Rumōka), 留多加町 (Rumōka-cho), 三郷村 (Sanjō), 能登呂村 (Nodoguro), 本斗支廳 (Mōto), 本斗町 (Mōto-cho), 内幌村 (Uchihirai), 好仁村 (Kōjini), 海馬村 (Umaguma). Rows show household counts (戸數), male (男), female (女), and total (計).

十五年春鯨漁獲高

Table of whale catch statistics for 1925. Columns include: 郡別 (Municipality), 十五年度 (1925), 十四年度 (1924), 對比増△減 (Change from 1924). Rows list municipalities: 散江 (Sanjō), 敷香 (Fushū), 元泊 (Genpoku), 榮濱 (Ehama), 富内 (Tomun), 東海岸 (Tōkaigan), 長濱 (Nagahama), 大泊 (Ōshimo), 大泊支廳 (Ōshimo-chō), 留多加 (Rumōka), 留多加支所 (Rumōka-chō), 亞庭灣 (Adama), 本斗 (Mōto), 眞岡 (Mingō), 野田 (Noda), 泊居 (Ushiro), 久春 (Kuchū), 久春内 (Kuchūuchi), 鶴城 (Tsurugaki), 名好 (Nagō), 西海岸 (Seikaigan), 土人 (Dojiri). Rows show fixed stone (定置石) and special stone (専用石) counts for both years, and the change in total catch (對比増△減).

(備考) 昭和十五年度 二十六萬二千八百八十五石
同 十四年度 二十六萬三千三百三十石

Table of commodity prices by municipality. Columns include: 眞岡支廳 (Mingō-chō), 廣地村 (Hirochi), 蘭泊村 (Ranpoku), 清水村 (Shimizu), 小能登呂村 (Shōnodoguro), 野田町 (Noda-cho), 泊居支廳 (Ushiro-chō), 泊居町 (Ushiro-cho), 名寄村 (Nagasaki), 久春内村 (Kuchūuchi), 三濱村 (Sanbama), 鴉城出張所 (Karakusa-chūsho), 鴉城村 (Karakusa), 惠須取町 (Esumi-tori), 塔路町 (Tōro), 名好村 (Nagō), 元泊支廳 (Genpoku-chō), 元泊村 (Genpoku), 帆寄村 (Fukayoshi), 知取町 (Tompe), 敷香支廳 (Fushū-chō), 敷香町 (Fushū-cho), 内路村 (Uchiro), 泊岸村 (Ushiro), 散江村 (Sanjō). Rows show prices for various categories: 飲食 (Food), 衣服 (Clothing), 燃料 (Fuel), 建築材 (Building materials), 雜品 (Miscellaneous).

品種別の小賣物價

Table of average commodity prices. Columns include: 月 (Month), 總平均 (General Average), 飲食 (Food), 衣服 (Clothing), 燃料 (Fuel), 建築材 (Building materials), 雜品 (Miscellaneous). Rows list months from 一月 (January) to 十二月 (December) with corresponding price averages.

郵便・小包引受配達

Table of postal rates. Columns include: 引受 (Collection), 配達 (Delivery), 小包郵便 (Parcel Post). Rows list various postal services and their rates for 1925. Includes a note: (備考) 昭和八、九年の二ヶ年平均物價を基準とす (Reference: Based on average commodity prices of 1921 and 1922).

各種體育競技場(十三年末)

Table with columns for sports (陸上, 野球, 庭球, 水泳, スキ, スケート, 演武) and rows for locations (支廳, 別, 大, 本, 斗, 泊, 真, 泊, 元, 數). Includes numerical data for each category.

最近結核死亡者數

Table showing tuberculosis deaths for 1921, 1922, and 1923 across various locations (支廳, 別, 大, 本, 斗, 泊, 真, 泊, 元, 數). Includes sub-totals for '呼吸器の結核' and '其他の結核'.

鑛業勞務員を表彰

樺太鑛業會の第十一回優良模範勞務員表彰式は、昭和十五年八月十五日舉行、全島の受賞者左の通りであつた。

- List of award recipients including names like 松田清三, 碓武男, 藤寅雄, etc., and their respective positions or companies.

文平 有馬萬太郎 金本治郎 魚肥等級統一實施

昭和十六年一月から左記によつて魚肥の等級が整理される。一 等級の名稱は一等、二等、三等、等外の四階級とする。

標準品は毎年一回適當なる時期に關係者を以つて査定會を開きこれを決定すること。一 惠須取鐵道を認可 惠須取鐵道株式會社は昭和十五年六月二十五日、拓務大臣の許可を得て創立準備のところ、東京で創立總會を開き、出資、役員を決定し、八月十六日登記を完了した。

五年八月十六日、敷香において開催されたが、主なる提案左の通りであつた。

- 一 掛金表改正の件
時局下における庶民金融機關としての使命達成を圖るため掛金表の改正を圖る
一 無盡協會内規設定の件
協會結成の趣旨に則り内規を設定する
一 無盡講取締方陳情の件(眞岡、豊原、泊居提出)
一 北海道、内地方面優良會社見學の件
一 樺太協和會を結成 内鮮融和の目的で、樺太協和會結成式は昭和十五年七月十八日に舉行された。

△成犬壯、特良第一席アヤツクスフオン、フクヤマ小樽壽原外吉同第二席ベルゲランドフオン...

席マリ同齋田治三郎、良第三席アリフオムハウスノダ網走原鐵二郎、△幼犬壯、良第一席...

△若犬壯、良第一席エリアナ辛夷莊札幌藤田川氏賞エリアナ辛夷莊札幌藤田...

△樺太廳東京出張所の機構擴充
 △物資確保を期するため中央に業者の連絡幹旋機關設置の件
 △商業振興協議會活用方要望の件
 △東海岸海上交通充實方要望の件
 △大泊敷香間夜行列車運轉方要望の件
 △大泊敷香間鐵道の貨車及客車増配方陳情の件
 △久春内珍内間鐵道急速開通方要望の件
 △輸送機關の整備擴充に就て廳當局に要望の件
 △郵便物の集配回数増加要望の件
 △敷香豊原間市外通話回線増設方要望の件
 △僻障地越年物資の補給確保に關する件
 △雜穀移入に關しその筋に對し急速幹旋方樺太廳に要望の件
 △米穀倉庫設置の件
 △物價對策に關する件
 △物價決定に當り關係地方會議所、商工會に諮問せらるるよ

△重要の件
 △地方に於ける物資配給事務取扱機關の限界とこれが統制に就て
 △生活必需品の切符制徹底に就て
 △産業組合の過當なる進出防止に就て
 △勞務賃銀統制強化に就て
 △地方用備林存置方の件
 △製材工場資材の拂下個所を便宜な個所に指定方の件
 △島内漁業用函材需要充足のため資材拂下方針緩和の件
 △經濟統制強化に伴ふ轉失業者救済根本對策樹立方要望の件
 △商工報國運動強化に關する件
 △司法保護事業大會
 北海道樺太司法保護事業大會は昭和十五年七月北海道室蘭市に開催されたが、主なる議案は左の通りである。
 △司法保護委員に對する訓練
 一 司法保護委員の指導訓練を爲すの件
 二 司法保護委員の講習會開催の件
 三 時局下保護の責に在る者

に指導訓練を痛感す、これが良策如何
 △警官練習所における司法保護の教育
 一 警察官吏練習所において司法保護に關する教科目を加へらるる様にしたし
 二 警察官に對し司法保護に關する理解を深からしむる一助として、警察官練習所に司法保護の講演教科を加ふるやう取計ふこと
 △保護に要する費用の補助又は免除
 一 直接保護團體の收容保護設備に要する費用につき補助を求むる件
 二 司法保護團體より各市町村に對し被保護者の戸籍謄本等を請求する場合においては手数料を免除せらるる様本會の決議をもつて當局に要請しては如何
 三 司法保護委員會運営資金の國費負擔の件
 四 司法保護のために要したる實費はこれを國庫において支辨せらるる様司法大臣に建

議するの件
 △司法保護委員と被保護者との連絡關係
 一 觀察保護開始の冒頭において擔當保護委員と對象者とを連結せる適當なる方策如何
 二 司法保護委員の引受有無により檢事の起訴猶豫の決定及び公判の執行猶豫の言渡につき特別の考慮を拂はれ度し
 三 被保護者の就職保證の件
 四 司法保護委員の身分關係
 △司法保護委員の身分關係
 一 保護委員の門標及徽章制定の件
 二 司法保護機關の一元化に考慮せられたし
 三 保護委員選定に付ては廣く既設團體と協定せられたし
 △被保護者の身分關係
 一 區司法保護委員會長より具申あるときは前科者たるの身分を消滅せしむべき特別の方法を考慮せられたし
 △保護の期間
 一 保護期間を明瞭にせられ

たきこと

△少年保護の方法
 一 少年の起訴猶豫者にして適當なる保護監督者なき者は一定期間内引受保護會より離るべからざる誓約を爲さしめては如何
 △少年保護機構の擴充
 一 少年審判所設置なき地方における少年保護機構擴充對策の件
 △少年法施行の促進
 一 少年法の全面的施行方を促進せらるる様司法大臣に建議の件
 二 控訴院管内に少年審判所並矯正院設置促進の件

陸軍管區表

昭和十五年七月二十四日の軍令で、陸軍管區表が左の通り改正された。
 北部軍管區―旭川師管
 札幌師管區
 札幌市、室蘭市、石狩支廳
 釧路支廳、日高支廳、空知支廳

函館師管區

函館市、小樽市、渡島支廳
 檜山支廳、後志支廳
 釧路師管區
 釧路市、帶廣市、十勝支廳
 網走支廳、釧路國支廳、根室支廳
 旭川師管區
 旭川市、上川支廳、宗谷支廳、留萌支廳
 豊原師管區
 樺太

教育勅語の渙發

五十周年記念
 教育勅語渙發五十周年記念式は、昭和十五年八月十七日豊原市で舉行され、左記、島内教育勤続二十五年以上二名、三十年以上十四名、島内外通算勤続二十五年以上（島内十年以上）五十三名、同島内二十年以上）二十八名が表彰された。
 第一種表彰者
 △島内二十五年以上勤続者 佐藤彌八 佐藤藤一 計二
 △島内外三十年以上勤続者 和田勇全 横田良一 河村悦彌

小島繁勝

菅原弘治 高橋幸高 青木眞一 小笠原馨 成澤榮治 上田光暉 瓜田友衛 谷内讓 高橋周一 落合源七 計一四
 第二種表彰者
 △島内、外二十五年以上勤続者（但島内十年以上勤続者）
 渡部賢三郎 渡邊信市 横澤文太 渡邊亘 山本竹次郎 菊池其次男 北館榮吉 小鹿久治 小池正夫 川岸與四郎 唐澤武八郎 菊池定七 佐藤虎五郎 佐藤哲 佐藤清三郎 佐竹賢太郎 佐藤眞二 進藤棍三 田村榮一 高橋強 高橋由造 田野崎忠雄 大槻基家 天野采雄 上野正之 江利山豊吉 伊藤忠雄 大村茂 鷲澤直人 幅口仁三郎 福田忠正 齋藤了雄 佐藤八重肝 根來毅 中村貫一 根津友一 長瀧昇一 中坪啓次 内藤武雄 益子文夫 松山淡 水野重俊 三上信吉 中江時助 柳澤軍一 花田康三 山口徳平 岡田宜一 有江巖 三島利義 松永幸市 田中久雄

竹田信弘

計五三
 △島内二十年以上勤続者 山内艸 横田唯男 渡利マサエ 木村正雄 北澤計三 小林そら 佐賀平藏 三枝二郎 杉内六藏 佐野重一 祐川英四郎 清野文吾 武井健吉 小野寺儀平 飯田吉次郎 飯岡英三 阿部半三 有馬秀廣 原子啓 布施伊治 箱崎義江 西川賢三 増田信一 森本忠夫 諸口彬 最上壽次郎 蓮田佐吉 黒木憲忠計二八
 全島青年動員大會
 紀元二千六百年と令旨奉戴二十周年を奉祝して、樺太聯合青年團では、昭和十五年八月二十日より三日間豊原市で動員大會を開催した、参加團員は全島單位團より代表一名宛、計二百五十五名で、日程行事は次の如くであつた。
 △大會前日（二十二日）
 受付午後五時半より班編成打合六時四十分より夕食後青年の夕七時半より樺太神社境内夜の行事九時四十分宿舎、就寝

△大會當日(二十三日)
起床、朝の行事午前四時より合同體操後四時半より公園グラウンド、神社團體參拜同四時四十分樺太神社護國神社外苑勤勞奉仕同五時神社外苑(朝食)開會式午前八時團分列奉祝式典(詔書令旨御言葉奉讀天機奉伺御機嫌何宣言決議、訓示並祝辭)詔書令旨頒布、表彰、體験發表、講演、閉會式午後四時、奉祝市内行進同六時自由參拜、點呼夜の行事、就寢

△大會二日目(二十四日)
起床、朝の行事、合同體操午前五時公園グラウンド青年歌謠朝食、神輿渡御奉仕同十時、閉會式午後四時樺太神社境内解散

銃後の力強し

昭和十五年、樺太廳で調査の結果、拓務大臣に申告した銃後の篤行左の通りである。

△樺太眞岡郡蘭泊村大字蘭泊八六番地和田ハル(當五十六年)

品代として献金一般の賞讃する所なり(野田署)

△本斗郡本斗町中通五丁目兒童大辻スズ子(當十四年)事變來戰地將兵の勞苦を思ひ學用品代を節約し或は愛國箱を設けて献金報國を十五年四月札幌靜修學院に入學する迄前後四回に亘り十六圓餘を献金す(本斗署)

△本斗郡本斗町濱通六丁目(漁業)川本チヨ(當三十八年)夫和一是昭和十二年九月出發十四年二月歸還せるが其間子女二人を養育し養父に孝養を怠らず且午前六時、午後十時の二回毎日日本神社に參拜し夫の武運長久と皇軍の戰勝を祈り風雪降雨の日も一日として缺かしたることなく一般の賞讃する所なり(本斗署)

△豊原市北二線東八番地(會社員)杉本孝作(當五十二年)本人は現に樺太評議會評議員豊原市會議員、豊原商工會議所議員等の公職を有しをるものなるが事變以來手當金一切を私用せずその全部を國防献

住所右同八七番地紙澤キサ(當六十六年)外九名右十一名は國防婦人會員なるも貧困の爲常に家業に追はれ會員たるの務めを充分盡し得ざるを以て協議の結果國防献金を爲さんとし鯉漁期勞働を申合せ同地松山漁場に働き勞賃五十五圓を得蘭泊村役場を通し軍部に献金したるものなり(眞岡署)

△札幌市中卯商會中村卯太郎右は造材事業經營の爲樺太元泊村字樫保に在住中の處今回事業切上の際に元泊銃後奉公會に一千圓、其他の團體に一千九百圓、合計二千九百圓を寄附したるものなり(元泊署)

△豊原市宇大通北七丁目五〇(勞働)坂本大郎事金洪奎(當五十五年)大正十一年三月渡島勞働に従事するが性質素行善良にして一般の信望あり今回豊原警察署に出頭し帝國臣民の一員としての義務を果すべく金二十圓の献金を申出なほ向ふ五ヶ年間毎月白米一俵代の献納を申出たるものなり

金として市役所を通し提出しをり十五年四月迄その額四百二十七圓に選したるが係員以外は嚴秘とし今後引續き實行せんとす(豊原署)

△豊原市西三條南十一丁目庄内貞行(當四十四年)同人の借家に居住せる竹田光正、末永敬藏兩名出發するや爾來遺家族に對し家賃を無料にて貸與しあり(豊原署)

△豊原市西六條南一丁目一九(建具職)谷榮太郎(當四十二年)宮永延一郎は、十四年五月出發したるが間もなく父常次郎は病死し實母ナカ當五十七年は心痛の餘り病臥し一家破滅の状態となりたるが谷は何等縁故關係なきに不拘入院看護及び衣食住の全部の世話をして銃後國民としての本分を盡しをり(豊原署)

△豊原市東一條南四丁目(新聞記者)八木橋徳藏(當三十七年)郷土軍人澁谷兼造遺家族は妹フツ外三人の女暮しにて頼る人なく生活上不安を伴ひをるを知るや十三年秋より自

り(豊原署)

△元泊郡帆寄村中馬群潭六四(屠殺夫)池田助次郎(當五十八年)日支事變勃發以來何等かの方法を以て國家の爲に盡さんとせるも老夫婦二人のみにて如何とも爲し得ずとし僅かの益金を貯へ百圓に達したりとて元泊警察署を通し國防献金を爲したり(元泊署)

△榮濱郡落合町大字落合字中通二五(料理屋、請負業)金徳鎬(當四十三年)右は事變以來在住半島人に對し時局の認識を説き率先して献金を初め李圭王と協力し毎月在住半島人宅を訪問し献金を慫慂し昭和十三年七月以來現在迄合計六百四十一圓を國防献金せしむると共に自己は毎月五圓宛献金繼續中なり(落合署)

△榮濱郡落合町大字落合王子社宅乙一六六工藤ノリ(當二十九年)夫清は昭和十二年八月勇躍出發せるが工藤ノリは夫の留守中後顧の憂なからしむる爲家政を極度に切詰子女三名を養育すると共に妹イナ當

宅に引取り扶養し妹フミエ病氣の際に關係當局に交渉入院加療せしめ軍事扶助料一圓二十錢とフツの賃仕事に依る僅かな収入の外一切自費を以て授護しをり(豊原署)

△豊原市西一條南六丁目四徳太郎妻佐々木マリヤ(當五十六年)本人は國婦豊原支部幹事として事業に活動中なるが事變以來支部の旗手として出征軍人歡迎、武運長久祈願祭英靈の出迎等一回も欠かしたることなくその他諸會合等一回も出席せざることなく銃後婦人の龜鑑として推賞に價するものなり(豊原署)

△豊原郡川北村川上炭山(寫眞業)安藤勘三郎(當五十八年)事變以來郷土軍人の壯途に際しその状況を撮影し或は遺家族を訪問無料撮影を爲し出征軍人に慰問品として發送しをり遺家族は勿論一般の感謝せる所なり(豊原署)

△大泊郡大泊町本町東一條北一丁目一九(鮮魚商)中田米次(當四十九年)本人は特別の酒

二十二年を嫁せしめ郷里青森の老母に對しては毎月十圓乃至二十圓を送金扶養の義務を怠らず且つ、遺家族の故を以て安逸を貧るは申譯なしとて同所渡邊組雜役夫として稼働し收入の中二十圓を國防献金にする等節婦として賞揚に價するものなり(落合署)

△野田郡野田町小學校自治團一同右は事變以來皇軍將士の武勇と勞苦に感激し聊かたりとも御奉公すべしと十四年九月以降與亞奉公日を期し廢品回收と一錢貯金を勵行し七十三圓七十六錢を献金すると共に數度に涉り慰問袋を作成、又郷土出身將兵に對しては毎月郷土事情或は作文等發送する等涙ぐましく活動を續けつゝあり(野田署)

△野田郡野田町野田尋常高等小學校五年生須永忠次、三年生須永テル子、一年生須永昇右三名兄弟は献金のため納豆賣を相談十四年末來之を實行その利益金七圓二錢を、野田町役場を通し出征將兵の慰問

好家にして十數年來晩酌等續け來りたる所事變發生以來禁酒は銃後國民の責務なりとして禁酒献金に依る微力の御奉公を思ひ昭和十二年八月廿日以來禁酒大泊銃後奉公會を通し十錢、十五錢の献金を毎日繼續し現在既に百餘圓に達しをり(大泊署)

△大泊町旭町三條通二丁目番外地(藥種商)水本外造(當三十九年)本人は大正七年頃より上記住所地において藥種商を營み現在三萬圓の資産を蓄積しをれるが今次事變勃發に際し銃後の一員として赤誠を披瀝すべく昭和十三年八月より現在迄四回に涉り合計六千圓を國防献金及び大泊銃後奉公會に寄附したるものなり(大泊署)

△大泊各中、小學校生徒大泊中學、大泊高女及び各小學校生徒は事變來フレップ採取その他に依り得たる益金を以て献金運動繼續中(大泊署)

水産製造物の統制
樺太廳では、昭和十五年八月

十六日、水産製造物統制規則を定めた。

第一條 樺太廳長官の指定したる水産製造物は樺太廳長官の指定したる團體以外の者に之を譲渡又は販賣の委託を爲すことを得ず、但し特別の事由に因り樺太廳長官の許可を受けたる者は此の限に在らず

第三條 統制物品を輸出若は移出せんとする者又は輸出若は移出の目的を以て之を譲渡若は販賣の委託を爲す時は樺太廳長官の許可を受くべし。

農村新體制の促進
昭和十四年から部落興農會の農事實行組合改組運動が起り、開始前の

農事實行組合 一二六
部落興農會 二二四
に對し改組運動後翌十五年八月には

農事實行組合 三〇〇
部落興農會 五〇〇
と云ふ好成绩を示した。

北千島沿海に於ける水産業は最近頗る勃興し、我が國の漁業振興に對して大なる貢獻を爲しつゝあるも、未だ積極的施設なく、朝野に於ても其の開發策を焦眉の急務として論議するに至り、漸く之が施設の實現を圖るため、昭和十五年度より之が調査を開始した。

北千島は北緯五十度以北に位置し、函館より約一千哩、根室より約六百哩の地點に在り、幌筵占守、阿頼度及志林規の四島を總稱するもので、占守島は僅かに七哩を距て、蘇國領嶺察加に相對してゐる。

而して其の近海は各種の魚族及貝藻類の棲息繁茂に適し、就中勸察加沿岸に向つて洄游する鮭鱒は頗る豊富にして、且蟹及鱈其の他の魚類も饒多なること判明し、従つて之等の漁業は逐年躍進し、正に北千島漁業の黃金時代を現出しつゝある。

邦人の蘇國領漁業が、蘇國側に壓迫されつゝある今日、北千島に我が國北方漁業の一大根據地となるべき適當の設備を爲す

は北千島自體の開發のみでなく北洋に於いて従来の沿岸漁業より公海漁業に方向を轉じ、所謂沖取漁業を盛ならしむべき喫緊事となつてゐる。然るに從來は魚族貝藻類の豊富なるにも拘らず、其の位置あまりに僻遠に位置する爲、事業家の觸手動かずして充分なる發達を見るに至らず、數年前迄は僅かに鱈漁業の外、蟹及帆立貝漁業が著手されたるに過ぎなかつた。従つて生産總額に於ても百五十萬圓内外にして、昭和八年より鮭鱒沖取漁業の勃興に依り劃期的發展を見、鮭鱒漁業に於て九年は前年の約三倍に當る八百七十四萬圓といふ驚くべき産額を示し、更に十三年は躍進し、鮭鱒漁獲高のみにも三千八百三十萬餘圓其の他を合し生産總額は四千三百七十萬餘圓に達し、實に本道水産總額の三分の一に相當するの盛況である。従業者は一萬六千餘人を算へ、漁船數は昭和八年以前に於て僅かに八十隻(動力船)内外に過ぎなかつたが、十三年度に於ては六百隻となり何れも

激増してゐる。之を漁業別に見れば鮭鱒流網漁業根據地は幌筵島及占守島を主とし其の數二百隻に達し、又鮭鱒定置漁業も著しく盛んとなり九十八箇統の著業を見、鮭及鱒の總漁獲高は八千二百十三萬尾に上る。而して白鮭及鱒の大部分は鹽藏され紅鮭及銀鮭の大部分は鱒の一部は罐詰原料として九箇工場十九ラインの工場に供せられるが、之が罐詰製造高は五十七萬圓に達す。

鱒漁業は大部分占守島及幌筵島を根據地として行はれ、之に従事する船舶數は發動機船及川崎船百十二隻、従業者は二千二百人にして漁獲高は一隻當平均四、五萬尾にも上る。之等は主として開鮭及鹽鮭に製造せられ、又肝臟からは肝油が製出される。

蟹漁業は罐詰工場四箇所、是に所屬する漁船數十六隻にして昭和十三年度は極めて豊漁にして六萬餘圓の生産を擧げてゐる。

北海道

北海道廳

- 長官 戸塚九一郎
- 文書課長 寺崎 藤吉
- 總務部
 - 部長 後藤 耕造
 - 庶務課長(兼)工藤 太郎
 - 統計課長 内館 泰三
 - 地方課長 山川 滋
 - 會計課長 北村 奥松
 - 拓殖計畫課長 永山 政能
 - 國民精神動員課長(兼) 山川 滋
- 學務部
 - 部長 平本 義隆
 - 學務課長 高田 正己
 - 視學官 日下 恒
 - 體育運動主事 小林 武夫
 - 青年教育官 佐々木毅一
 - 社會教育課長(兼)高田 正己
 - 社寺兵事課長 前田豊次郎

- 社會課長 若木 作藏
- 職業課長 中田 重吉
- 經濟部
 - 部長 青柳 秀夫
 - 農政課長 岡田 聰
 - 畜産課長 佐藤 退三
 - 調整課長 半田 芳男
 - 水産課長 高田 浩運
 - 商工課長 今松 治郎
 - 土木部
 - 部長 齋藤 靜修
 - 勸任技師 山口 一夫
 - 監理課長 杉森 文彦
 - 河川課長 町田 利臣
 - 港灣課長 平尾 俊雄
 - 土地改良課長 大川 義男
 - 拓殖部
 - 部長 永野 芳辰
 - 勸任技師 三戸 卓助
 - 殖民課長 林 徳欽
 - 林政課長 川西 輝昌
 - 森林規畫課長 藤島喜久男
 - 造林課長 石原 供三
 - 林産課長 三戸 卓助
 - 地方林課長 津村 昌一
 - 拓地課長 大島外三雄
 - 警察部
 - 部長 大島外三雄

- 警務課長 齋藤 亮
- 警防課長 尾形 半
- 情報課長 中尾 金藏
- 特別高等課長 渡部 信平
- 外事課長 大園 清二
- 保安課長 榎田 武男
- 經濟保安課長 佐々木信愛
- 刑事課長 苦米地重男
- 勞政課長 松林 新治
- 衛生課長 山本 高雄
- 健康保險課長 清水 光治
- 越智爲五郎
- 工場試驗場
 - 長(琴似) 林 嘉吉
- 農事試驗場
 - 長(琴似) 浦上啓太郎
- 支場
 - 渡島(大野)場長 山口 翠
 - 上川(永山)場長 山口 謙三
 - 十勝(帶廣)場長 玉山 豊
 - 北見(野付)場長 市村 三郎
 - 根室(標津)場長 山田 忍
 - 試作場
 - 榎山(厚澤部)場長 有賀 文平
 - 俱知安場長 金 鐵司
 - 釧路(鳥取)場長 齋藤 傳七

- 美深場長 齋藤 亮
- 天鹽場長 松下 常雄
- 瀬棚(利別)場長 中村 齊
- 日高(静内)場長 星野 武
- 稚内場長 伊藤 潔
- 美瑛場長 本間 一衛
- 林業試驗場
 - 長(江別)兼 石原 供三
- 水産試驗場
 - 長(余市) 倉上 政幹
- 函館支場長 永田 米作
- 根室支場長 杉 孝政
- 稚内支場長 田中 林藏
- 鮭鱒孵化場
 - 場長事務取扱(豊平) 半田 芳男
- 支場
 - 虹別(標茶)場長 石井 久治
 - 北見(上湧別)場長 小林 教司
 - 國後(泊)場長 道上 永吉
 - 擇捉(留別)場長 水戸部勝次
 - 渡島(八雲)場長 石川 博
- 蠶業取締所
 - 長(札幌) 佐々木晴吉

種畜場
長(真駒内) 中城 通

種羊場
長(瀧川) 宮川 直衛

牛酪検査所
長(札幌) 佐藤 退三

拓殖實習所
十勝(大樹)場長 熊博彦
北見(置戸)場長 富田正保
釧路(弟子屈)場長 佐藤平四郎
天鹽(幌延)場長 弓田晃

土木現業所
札幌支所長 山岡茂
旭川支所長 淺尾基彦
留萌支所長 永井雄毅
網走支所長 篠原節郎
帶廣支所長 田中彦敏
小樽支所長 細川祐次郎
室蘭支所長 池田一男
釧路支所長 土谷實

江差支所長 松井孝一
函館支所長(代)西興英
森支所長 稻垣善藏
室蘭支所長 久保田貢
浦河支所長 入間川秀雄
廣尾支所長 清水次郎
釧路支所長 大内忠治
根室支所長 小杉玉吉
紋別支所長 山市安次
稚内支所長 柴田吉之助
留萌支所長 小林貞一郎
近藤藤一郎

函館支所主任 金山富美
支所長(道廳) 永田峰吉
札幌(兼)清水健三
函館 岡崎竹三郎
小樽 相川珠貴
旭川 島田兵治
室蘭 石丸勝任
釧路 土井養吾
千島調査所
長 平田秀雄

石狩支務所長 高田善藏

函館支務所長 大塚市十

福山支務所長 西小四郎

留萌支務所長 古館新一

旭川支務所長 島田喜四郎

釧路支務所長 廣瀨寅藏
池田支務所長 關庸治郎
厚岸支務所長 笠原憲二郎
浦河支務所長 笠原憲二郎
釧路支務所長 笠原憲二郎
旭川支務所長 廣瀨寅藏
天鹽支務所長 廣瀨寅藏
稚内支務所長 廣瀨寅藏

中央商工相談所
所長事務取扱(兼)高田浩運

自治講習所
所長 村上壬平

石狩支廳
支務課長 廣田忠雄

渡島支廳
支務課長 森本正雄

檜山支廳
支務課長 伊藤信義

支務課長 吉野直行

支務課長 齊藤重一

支務課長 定森悦雄

支務課長 青山美乘

支務課長 町田利兵衛

支務課長 金丸器次郎

支務課長 岩間勝久

遠輕支務所長 松原周助

野付支務所長 須山八百三

網走支務所長 渡邊兵左衛門

根室支務所長 等々力榮

釧路支務所長 高野光彌

釧路支務所長 川岸滋次郎
根室支務所長 川岸滋次郎
網走支務所長 川岸滋次郎
野付支務所長 川岸滋次郎
遠輕支務所長 川岸滋次郎

空知支廳
支務課長 高尾善次

上川支廳
支務課長 能勢清市

留萌支廳
支務課長 荒谷勇次

支務課長 武富文義

支務課長 能木喜七

支務課長 澤崎松四郎

支務課長 安井博惠

支務課長 荒井信勝

支務課長 松浦義通

支務課長 田中耕輔

支務課長 千葉菊三郎

支務課長 遠藤研知

支務課長 伊藤雄康

農産物検査所
以上事務取扱

根室支務所長 川岸滋次郎

釧路支務所長 武政健亮

網走支務所長 千葉胤正

野付支務所長 須山八百三

遠輕支務所長 松原周助
野付支務所長 須山八百三
網走支務所長 桑畑胤正
釧路支務所長 千葉胤正
根室支務所長 川岸滋次郎

釧路支務所長 谷野吉太郎

小樽支務所長 澁谷勝太郎

函館支務所長 鈴木彌一郎

苦小牧支務所長 阿部太五郎

岩見澤支務所長 山田傳藏

旭川支務所長 山田廣志

名寄支務所長 本橋正良

野付支務所長 加茂徳太郎

帶廣支務所長 森岡富吉

釧路支務所長 大關信雄

小樽支務所長 佐々木盛太郎

岩内支務所長 藤田周吉

西崎源司

釧路支務所長 齊藤昂一

支務課長 中村久松

支務課長 朝井貴麓

支務課長 金野貴麓

支務課長 織田信知

支務課長 吉川義勝
支務課長 中村彌四郎
支務課長 佐藤貞雄
支務課長 松川清
支務課長 常田榮吉
支務課長 石田初太郎
支務課長 西里新一郎
支務課長 榎本一雄

支務課長 北原寅吉

支務課長 佐々木寛三

支務課長 大槻豊

支務課長 井上浩

支務課長 藤森四郎

支務課長 片岡松郎

支務課長 松丸勇

支務課長 田中末松

支務課長 田中末松

支務課長 田中末松

支務課長 田中末松

支務課長 田中末松

支務課長 田中末松

札幌警察署長 塚本 馨
江別警察署長 山田 正人
石狩警察署長 佐藤勝四郎
函館警察署長 豊田 清
木古内署長 浅田 正明
福山警察署長 小松久次郎
八雲警察署長 井上 正一
森警察署長 上村 眞策
函館水上署長 大島 義孝
江差警察署長 山田 正
久遠警察署長 梁川 啓治
瀬棚警察署長 遠藤 武雄
俱知安署長 多海本好文
壽都警察署長 葛木幾太郎
岩内警察署長 井上 清造
小樽警察署長 山田 正
余市警察署長 田中喜一郎
古平警察署長 中川 東
小樽水上署長 時之内 一登
岩見澤署長 佐藤 慶吉
美唄警察署長 澁谷 淳造
由仁警察署長 宮野 嘉吉
夕張警察署長 永井 財一
瀧川警察署長 久安 正朔
深川警察署長 合林 龜造
旭川警察署長 太田 盛
比布警察署長 佐藤 勇吉
名寄警察署長 青木今朝次郎

士別警察署長 志田 義雄
富良野署長 田中 徳藏
留萌警察署長 小座間田一郎
天鹽警察署長 和泉 末治
羽幌警察署長 上西 盛藏
増毛警察署長 小野寺泰藏
室蘭警察署長 黒木 行義
室蘭水上署長 佐藤 例藏
伊達警察署長 合林 秀吉
苦小牧署長 石川 橋彌
浦河警察署長 下郡山喜代吉
静内警察署長 山田 明
帯広警察署長 本田 武男
新得警察署長 木下 冬太
廣尾警察署長 安本 勇
池田警察署長 千葉 豊
本別警察署長 勢渡 逞男
釧路警察署長 佐藤幸四郎
厚岸警察署長 本橋 英一
根室警察署長 三澤 武男
標津警察署長 瀧野澤兼吉
國後警察署長 石川 昇榮
紗那警察署長 丹治金四郎
網走警察署長 長谷部理雄司
美幌警察署長 岩間 庄八
斜里警察署長 新津 眞一
野付牛署長 眞邊 眞一
紋別警察署長 西澤 勇一

興部警察署長 阿部 幸吉
遠輕警察署長 山本 加藤
稚内警察署長 武石 勇
中頓別署長 佐々木豊三郎
枝幸警察署長 伊藤 耕平
鬼脇警察署長 犬飼 竹治
香深警察署長 佐藤 始馬

神 社
札幌八幡宮 北島 邦彦
函館八幡宮 太田 紀
小樽市住吉神社 星野 一彦
室蘭市八幡神社 奈良 瑞穂
福山町松前神社 稻川 菊造
江差姥神大神宮 藤枝 尊廣
根室金刀比羅神社 前田 修
函館市東照宮 大谷 長秋
釧路市嚴島神社 菊地 安三
旭川市 柴田 直胤
上川市 鈴木 八郎
余市市 池田 勇
岩内市 佐藤 八郎
札幌市三吉神社 大野 桂
帯広市 植田 吳朗
岩見澤神社 島海 昇
留萌神社 橋本不二政
美唄町空知神社 金田 茂一
網走神社 金田 茂一

瀧川神社 石丸 幸雄
樽前山神社 田川 淨
北海道護國神社 藤枝 修衡
函館護國神社 太田 邦彦
札幌護國神社 北島 邦彦
札幌管區氣象臺 八畝 利助
函館測候所長 中野 猿人
旭川測候所長 星川 信吉
釧路測候所長 長谷川 徳太郎
帯広測候所長 高橋 秀雄
網走測候所長 近岡外治郎
壽都測候所長 種市 石藏
根室測候所長 梅田 三郎
紗那測候所長 小林 清次
羽幌測候所長 高信 保
室蘭測候所長 尾森仙太郎
浦河測候所長 佐藤 善吾
幌廷測候所長 下川 二郎
稚内測候所長 柳谷喜太郎

職業紹介所

札幌所長 桐越 信雄
札幌労働所長 井上 操
函館労働所長 山下嘉次郎
函館労働所長 佐々木 謙三郎

小樽労働所長 川口 勇吉
旭川労働所長 池田 孝教
室蘭労働所長 赤澤 滋雄
釧路労働所長 川合 喜一
岩見澤労働所長 有坂 極
帯広労働所長 蛭田仲三郎
野付牛労働所長 細井伊三郎
留萌労働所長 佐藤惣五郎
江差労働所長 野村 太市
浦河労働所長 川岸富士郎
室蘭労働所長 澤田 春治
根室労働所長 眞鍋 清忠
稚内労働所長 池田登喜男
出張所 祐村勇次郎
森市所長 三浦 治朗
余市所長 三浦 治朗
名寄所長 河端與次郎
瀧川所長 清水 敏郎
岩内所長 清水 敏郎
網走所長 三升由太郎
仲 留治

時任 一彦 吉町太郎一
高岡 熊雄 星野 勇三
農學部長 半澤 正夫
醫學部長 中村 豊
工學部長 小野 諒兄
理學部長 小野 諒兄
豫科部長 服部 品吉
土木專門部長 西田辰三郎
醫學專門部長 中村 豊
主事 中村 豊

立 中學校長
札幌第一中學 加勢藏太郎
札幌第二中學 中村 友平
函館中學 水上 正廣
小樽中學 小野徳四郎
旭川中學 元木 省吾
釧路中學 大澤 作次
室蘭中學 樋口 佐平
室蘭中學 岡部 金夫
瀧川中學 藤井 幸永
俱知安中學 河田 馨
岩見澤中學 大根田資雄
名寄中學 石川利三郎
野付牛中學 藤田 節也
網走中學 藤田 節也
八雲中學 山本 梅雄
帶広中學 安宅喜太郎
稚内中學 松田金五郎
余市中學 鈴木喜代馬
留萌中學 鈴木喜代馬
其他 金木 正雄
小樽市立中學 山川 源三
北海中學(札幌) 戸津 高知
苦小牧中學 渡邊 富治
北空知中學(深川) 古野 俊清
札幌夜間中學 中村 友平
旭川夜間中學 元木 省吾

夕張中學 岡部貞三郎
函館市立中學 岡村 威儀
遠輕中學 木村 六郎
旭川市立中學 水田 登
函館夜間中學 水上 正廣

實業學校長

函館商業 立野與四雄
小樽商業 吉岡 良信
根室商業 太田金次郎
室蘭商業 岩本 寛
旭川商業 大和田誠壽
小樽水産 飛鳥 貫治
函館水産 萩原 貫治
空知農業 小笠原龜一
十勝農業 吉水 續
永山農業 渡邊 梯藏
美幌農業 古田 秀雄
札幌農業 西野 金助
函館工業 瀧澤 一馬
苦小牧工業 三橋藤太郎
釧路工業 佐藤 憲士
小樽工業 窪田 長松
其他 札幌商業 戸津 高知
北海商業(小樽) 西岡 重義
札幌光星商業 河村 謙

小樽市立商業 吉田彌之助
帶廣市立商業 松浦政雄
小樽女子商業 小河成美

高等女學校校長

札幌市立 江原玄治郎
函館市立 奧村季吉
小樽市立 西本俊雄
旭川市立 濱田源六
室蘭市立 盛山兵衛
釧路市立 北浦延治郎
網走市立 尾崎覺賢
根室市立 青柳賢治
岩見澤市立 小橋樹住
苦小牧市立 石原惣六
名寄市立 山崎猪作
深川市立 加藤良太
瀧川市立 大澤幸平
池田市立 大野新六
江別市立 江刺庄藏
稚内市立 佐々木健雄
富良野市立 中平太郎
帶廣市立 鎌田正忠
岩内市立 藤原菊藏
江差市立 原菊藏
野付市立 小野栖平

其他

札幌市立高女 伊坂員維
小樽市立高女 阿部忠次郎
旭川市立高女 齊藤正
北海高女(札幌) 寺本惠真
札幌高女 寺本惠真
北星高女(札幌) 新島善直
小樽高女 西岡重義
留萌高女 久慈治信
余市高女 北村隆三
遺愛高女(函館) 小畑信愛
帶廣高女(函館) 松山信亮
小樽雙葉高女 高橋覺惠
函館大谷高女 新郷法灌
函館聖保祿 瑪麗キ
夕張高女 大野清兵衛

兼任小學校校長

札幌市立 渡邊永助
札幌市立 小島保太郎
空知郡 幾春別校 一ノ瀬運次郎
虻田郡 虻田校 白井柳治郎
小樽市立 古谷四方五郎
札幌市立 藤野謙助
札幌市立 高橋季雄
札幌市立 大村榮三郎
石狩郡 白石校 小松隆之
石狩郡 石狩校 佐藤兼吉
上磯郡 木古内校 佐藤兼吉

上磯郡 上磯校 佐々木重助
松前郡 松城校 工藤福次郎
山越郡 八雲校 齊藤豐藏
龜田郡 大中山校 對島榮一
松前郡 根部田校 田鎖郁太郎
上磯郡 釜谷校 佐々木源太郎
瀬棚郡 江差校 加藤作治
爾志郡 雲石校 針谷爲治
岩内郡 岩内西校 狩野豊七
東俱知安第一校 五十嵐仁三郎
余市郡 余市校 太田又藏
壽都郡 壽都校 渡邊哲藏
空知郡 美唄校 松本末吉
夕張郡 真谷地校 服部斌二
空知郡 余井江校 入江虎太郎
空知郡 三笠中央校 井上森太郎
雨龍郡 深川校 高橋英造
空知郡 芹別校 尾崎政市
夕張郡 夕張第一校 高橋種三郎
空知郡 聖園校 佐々木末太郎
空知郡 常盤校 齋藤慶男
雨龍郡 一己校 飯野達太郎
夕張郡 栗山校 狩野盛秀
上川郡 名寄校 佐藤健治郎
中川郡 思根内校 川田得之助
上川郡 士別校 弘田秀義
上川郡 鷹栖校 草浦達治

札幌市立 秋澤興四郎
札幌市立 久田儀兵衛
札幌市立 岡田忠著
札幌市立 林直榮
札幌市立 椎木久男
札幌市立 小川善太郎
函館市立 宗像敏英
函館市立 下河原清
函館市立 鈴木尚
函館市立 久慈慎一郎
函館市立 坂本衆平
函館市立 田村胤次郎
函館市立 輪島良作
函館市立 池田忠男
小樽市立 羽下靜吾
小樽市立 渡邊鐵三
小樽市立 高山友次郎
小樽市立 横山友次郎
小樽市立 横山友次郎
小樽市立 村住豊作
旭川市立 大和田俊
旭川市立 永松種藏
旭川市立 横澤吉秋
旭川市立 工藤清
室蘭市立 吉田増一
室蘭市立 三谷忠義
釧路市立 石川忠義
釧路市立 小川吉雄
釧路市立 田中信一

札幌市立 越田勝三
札幌市立 佐藤良也
札幌市立 池田庄太郎
札幌市立 村井秀三
札幌市立 小森庄吉
札幌市立 阿波武二
石狩郡 當別校 大橋由男
千歲郡 厚田校 遠藤喬
厚田郡 厚田校 羽磨市吉郎
千歲郡 千歲校 長澤榮
札幌市立 久永善治
上磯郡 泉澤校 丹野利吉
龜田郡 七重校 小林義郎
函館市立 湯川校 濱口一
函館市立 湯川校 野木力藏
函館市立 湯川校 高橋次四郎
龜田郡 日新校 館英太郎
龜田郡 砂原校 三浦嘉七
茅部郡 砂原校 大立目仁止
茅部郡 落部校 落合武夫
山越郡 長萬部校 關屋盛八
久遠郡 久遠校 伊藤正
瀬棚郡 今金校 中野正一
爾志郡 乙部校 須田勝造
檜山郡 上ノ國中央校 須田勇一
檜山郡 日明校 煮雪浩三
磯谷郡 蘭越校 中村寅吉

雨龍郡 惠比島校 藤田龍吉
余市郡 大川校 吉田利吉
虻田郡 留壽都校 本間守柔
岩内郡 岩内校 一柳直枝
古平郡 古平校 竹林源次郎
美國郡 美國校 間谷多悦郎
岩内郡 足尾第一校 加藤雪松
余市郡 澤町校 谷村由太郎
小樽市立 高島校 小川原毅負
小樽市立 高島校 板内謙三郎
空知郡 岩見澤校 藤本才助
空知郡 瀧川第一校 大森市三
空知郡 瀧川第二校 西山昇一
空知郡 瀧川第三校 十河與太郎
空知郡 瀧川第四校 寺島達道
空知郡 夕張校 深澤一
夕張郡 夕張校 佐々木久五郎
雨龍郡 沼田校 田中秀次郎
雨龍郡 沼田校 泉廣遠
夕張郡 角田校 及川滋度
空知郡 北辰校 長谷川俊藏
雨龍郡 石橋校 下川部勝太郎
雨龍郡 秩父校 中村鶴吉
空知郡 歌志内校 河上幸壽
夕張郡 長沼中央校 松本三千樹
夕張郡 由仁校 加藤豐吉
空知郡 南校 稻童丸謙二

樺戸郡 月形校 北村正次
空知郡 神威校 後藤誠一
上川郡 多寄校 赤川又十郎
上川郡 比布校 菊田孝吉
空知郡 富良野校 鈴木寅之輔
中川郡 美深校 今野良助
上川郡 東川校 佐藤薫
上川郡 神居校 鹽野谷信次
空知郡 上富良野校 梅田鐵次郎
上川郡 富山校 關田正平
上川郡 永山校 松本繁
上川郡 美瑛校 鈴木敏武
上川郡 風連校 牧野敏勝
上川郡 旭川第三校 星野眞二
中川郡 譽平校 田口金治
空知郡 中富良野校 串崎重雄
上川郡 神樂校 原田悅朗
上川郡 下川校 山本廣海
上川郡 劍淵校 中田卓三
上川郡 下愛別校 三上彰
上川郡 和寒校 岡統一
苦前郡 羽幌校 永滿利八
留萌郡 禮受校 泉谷象吉
留萌郡 鬼鹿校 小島宇一
留萌郡 幌糠校 高山重郎
天鹽郡 幌延校 渡邊清太郎

留萌郡港北校 佐藤 宮人
留萌郡留萌校 金澤 豊三
天鹽郡天鹽校 上田 與作
増毛郡増毛校 津田 稔
苫前郡苫前校 佐藤 懋
天鹽郡問寒別校 千葉 猛雄
苫前郡風連別校 松山 孝雄
留萌郡小平中央校 八谷 貫一
苫前郡築別校 佐々木 一郎
苫前郡燒尻校 伊藤 軍司
枝幸郡枝幸校 對島 榮六
利尻郡杵形校 吉川 定
枝幸郡中頓別校 石川 右太郎
枝幸郡中頓別校 淺水 辰藏
禮文郡禮文校 宮部 卓造
枝幸郡濱頓別校 近藤 茂
常呂郡野付牛東校 石原 傳平
常呂郡野邊藥校 角田 韓一
利尻郡網走校 湯佐 定平
網走郡網走校 小林 金太郎
紋別郡紋別校 宇佐美 庫二
常呂郡佐呂間校 細木 秀太郎
網走郡女滿別校 松樹 美代治
紋別郡瀨戸牛校 高橋 泰雄
常呂郡訓子府校 柴田 貞治郎
斜里郡清水校 齋藤 常松
常呂郡端野校 力石 幸八
常呂郡常呂校 遠藤 慶介

常呂郡秋田校 三好茂三太
虻田郡洞爺校 奈良 眞樹
勇拂郡追分校 伊藤 榮太郎
有珠郡伊達校 寒水市太郎
三石郡三石校 片倉 三郎
檜似郡檜似校 星川 賢吉
靜内郡高靜校 北村 浩
浦河郡荻伏校 竹内 鼎
新冠校日新校 櫻田 章賢
沙流郡厚賀校 尾崎 良太郎
沙流郡門別校 牛島 義人
廣尾郡大樹校 德永 元助
中川郡幕別校 齋藤 福太郎
中川郡清水校 西川 興三
上川郡本別校 阿部 清治
中川郡芽室校 丹代 三千郎
廣尾郡廣尾校 高島 米藏
中川郡西足寄校 永原 信悟
上川郡屈足校 石川 定之助
中川郡仙美里校 北村 貞藏
上川郡佐幌校 石川 清人
中川郡御影校 伏見 六郎
河東郡音更校 松川 芳治
河東郡下音更校 星 辰雄
河西郡旭校 河野 宇三郎
中川郡茂岩校 鈴木 保
阿寒郡雄別校 宮原 重成

厚岸郡眞龍校 岩崎 巖
釧路郡共榮校 横澤 宇宙
足寄郡陸別校 青木 京太郎
白糠郡音別校 紅林 鐵雄
野付郡上風連校 春日 鐵作
根室郡北斗校 高橋 正男
標津郡標津校 佐々木 孝
根室郡厚床校 土岐 明
花咲郡華岬校 飯田 作太郎
札幌市中央創成校 若木 勝藏
札幌市東校 湊 謹造
札幌市山鼻校 明石 一郎
札幌市北九條校 三浦 秀夫
札幌市東橋校 笹原 健三
札幌市幌北校 肴倉 福藏
札幌市桑園校 阿部 蕃
札幌市女子校 五十嵐 齋衛
函館市柏野校 若林 嘉次郎
函館市常盤校 外崎 初五郎
函館市函館女子校 金子 茂人
小樽市色内校 岩崎 重人
小樽市緑校 沖垣 寛
小樽市堺校 千住 光雄
小樽市手宮校 五十嵐 鐵
旭川市大有校 竹下 豫五郎
旭川市中央校 中山 德治

室蘭市女子校 栗田 寛太郎
室蘭市鶴ヶ崎校 中村 眞雄
室蘭市武揚校 伊勢 昌浩
室蘭市北辰校 場崎 喜義
釧路市東榮校 大沼 保徳
帯廣市啓北校 三ッ谷 三藏
龜田郡大野校 神谷 如意
瀬棚郡馬場川校 高岡 種義
磯谷郡昆布校 大島 嘉津衛
虻田郡喜茂別校 今野 利吉
空知郡茂尻校 魚住 周治郎
上川郡上川校 佐藤 文治郎
空知郡山部校 今野 兼次
苫前郡古丹別校 奥口 廉二
常呂郡相内校 白川 泰司
網走郡美幌校 小川 豊作
函館市高盛校 成田 惣八郎
札幌市輕川校 小野 三男
雨龍郡雨龍校 大野 大輔
虻田郡豐浦校 原 五郎
常呂郡置戸校 永村 幸一
札幌市北光校 吉尾 末次
旭川市青雲校 堀川 辰夫
小樽市湖見臺校 朝枝 文裕
函館市東川校 森 萬藏
帯廣市柏校 高橋 秀一郎
帯廣市帯廣校 村瀬 岩尾

札幌山監督局

局長 酒井 喜四
總務部長 鈴木 義雄
監理部長 檜崎 研治
支所 伊藤 政一
瀧川支所長 鈴木 俊夫
夕張支所長 鈴木 俊夫

放送局

札幌中央局長 樋口 卯太郎
總務部長 福島 老一
放送部長 落合 守平
技術部長 草間 貫吉
函館放送局長 大橋 主計
旭川放送局長 一瀬 前光
帯廣放送局長 矢野 壽夫
釧路放送局長 松山 清

函館區司令部

司令官 田村 理七

釧路區司令部

司令官 堤 起
門司 昇一
旭川聯隊區司令官 北 海道

札幌遞信局

局長 遠藤 又太郎
庶務課長 水谷 彌一
監督課長 加藤 桂一
規畫課長 堀内 浩哉
工務課長 吉田 武治
保險課長 加藤 四郎
電氣課長 石丸 豐
經理課長 武田 源一
部長(函館) 池田 清之
小樽出張所長 庄司 清之
釧路出張所長 庄司 清之

札幌稅務監督局

局長 橋本 昂藏
總務部長 吉村 丈三
直稅部長(兼) 深川 孝隆
間稅部長(兼) 吉村 丈三
經理部長(兼) 深川 孝隆
鑑定部長 長沼 篤次
稅務署 岡本 靜雄
函館稅務署長 前田 義隆

貯金支局

小樽支局長 小川 竹松
函館支局長 桐生 一二

郵便局

札幌郵便局長 長嶺 修五郎
函館郵便局長 菅井 義昌
小樽郵便局長 中村 房吉
旭川郵便局長 和田 自成一
釧路郵便局長 小笠原 幸雄
室蘭郵便局長 牧 光雄
稚内郵便局長 近藤 岸雄
札幌鐵道郵便局長 藤田 光夫
帯廣郵便局長 福田 篤三郎
野付牛郵便局長 田中 星也
根室郵便局長 山内 庫夫
岩見澤郵便局長 松坂 一雄
網走郵便局長 信本 孫吉
苫小牧郵便局長 青山 普志保
留萌郵便局長 岡 泰二郎
石狩深川郵便局長 船戶 秀一
札幌電話局長 富田 銳雄
函館電話局長 冷泉 茂
紗那郵便局長 伊藤 末太郎

國後郵便局長 坂本 恭平

無線電信局
落石局長 藤田 義雄
函館局長 竹村 脩治
札幌局長 才津 喜平
札幌局長 柴田 義次

函館稅關 榎谷 孝典
稅關 榎谷 孝典
監稅部部長 福田 信一
兼總務部部長 福田 信一
鑑査部部長 玉木 正治
植物檢査課長 野依 正治
會計課長 淺岡 文夫

支署
小樽稅關支署長 中山茂三天
根室稅關支署長 松井 秀雄
釧路稅關支署長 大西 三郎
留萌稅關支署長 高橋 正吉
室蘭稅關支署長 磯見 秀吉

札幌地方專賣局
局長 吉瀬 時次
小樽出張所長 淺地 保
函館出張所長 野仲健一郎

札幌專賣局

野付牛驛長 田中 幸吉
美幌驛長 島谷 揆一
網走驛長 土肥 二郎
斜里驛長 高橋仁左衛門
留邊蘆驛長 木村 和平
遠輕驛長 佐々木市右衛門
士別驛長 梁田 茂
名寄驛長 油井 豐
美深驛長 相良 恒彦
音威子府驛長 白土 龜一
幌延驛長 富永 龜一
下富良野驛長 村戶 庄藏
砂川驛長 太田字八郎
紋別驛長 大住元智賀

小野寺島夫 一二
森脇 哲男
飯島 俱治
木村 豐吉
大島 卓
津田 卓
太田 弘一
森 眞一
荒井 喜義
種市 六郎
宮井 平八
富井 恭一
大森 恭一
小栗富三郎
本村 榮六
安居 豐治
橋本 武雄
山崎 文一
齋藤 那作
森 菊次郎
竹田 友吉
藤田千代治
渡邊 昇
藤館重太郎
小國 孝臣
井上 久
羽田 金一
高館恒三郎
間村 熊助

釧路出張所長 山路 童二
根室出張所長 松山 精二
野付牛出張所長 諸住源之助
帶廣出張所長 佐藤 輝
帶廣酒精工場 三輪 大作
野付牛酒精工場 小池 嘉之

札幌鐵道局

局長 吉松 喬
總務部長 安田 裕
運輸部長 平野 重雄
運轉部長 河崎篤三郎
工務部長 小田製治郎
工作部長 坂本 駒雄
經理部長 松本 清治
船舶部長 矢野 鐵夫
電氣部長 中島 和敏
監督部長 內山三四治
運輸事務所 武井 敦通
釧路事務所 鈴木倉之助
旭川事務所 加藤 成友
函館事務所 三輪 則成
野付牛事務所 高橋 重逸
室蘭事務所 熊谷 綾雄
保線事務所 坂部 勝夫

帝室林野局

日高種馬牧場長 橫屋 潤
小樽米穀事務所長 鈴木 義勝
札幌支局 岡本 隆次
支理課長 北原 禎一
支務課長 大久保寛一
出張所
苫小牧出張所長 立花 和雄
新冠出張所長 川村太郎次
札幌出張所長 工藤 昇一
定山溪出張所長 清水 禮三
夕張出張所長 征矢野餘所夫
岩見澤出張所長 渡邊 恒雄
上蘆別出張所長 田中 重五
下蘆別出張所長 岡島 吳郎
大夕張出張所長 森田 直正
函館出張所長 近岡彌三雄
江差出張所長 福川 正三
樽前出張所長 鶴田 作男
旭川支局
支理局長 坂井 三吾
支務課長 橫重 賢博
監理課長 東 賢男
業務課長 大沼 省三
出張所
深川出張所長 大沼 省三

衆議院議員

留萌出張所長 淺沼 清吉
羽幌出張所長 下山 丈志
富良野出張所長 佐賀五代吉
旭川出張所長 加藤 知重
第一士別出張所長 八戸 三八
第二士別出張所長 軍地 誠造
名寄出張所長 嶺本 孝治
下川出張所長 原田 十郎
弟子屈出張所長 佐々木準長
貴族院議員
室蘭市 栗林 徳一
小樽市 板谷 宮吉
衆議院議員
第一區
小樽市 山本 厚三
小樽市 板谷 順助
札幌市 澤田 利吉
第二區
上川郡比布村 村上 元吉
旭川市 坂東幸太郎
中川郡美深町 松浦周太郎
第三區
函館市 大島 寅吉
函館市 渡邊 泰邦
函館市 田代 正治
第四區
五二三

道會議員

札幌市 赤松 克磨
東京市 手代木隆吉
東知郡砂川町 北勝太郎
夕張郡夕張町 松尾孝之
空知郡音江村 深澤吉平
第五區
札幌市 木下成太郎
網走郡網走町 東條貞
釧路市 南雲正朔

室蘭市 山中日露史
釧路市 菊地三之助
帶廣市 小川掌二郎
石狩支廳管内
札幌郡江別町 河合才一郎
千歲郡惠庭村 田中菊治
札幌郡圓山町 宇野秀次郎
渡島支廳管内
松前郡松前町 松本隆
上磯郡上磯町 廣部太郎
茅部郡森町 岩田留吉
山越郡八雲町 米澤勇
檜山支廳管内
檜山郡江差町 北林屹郎
瀨棚郡東瀨棚村 大東勝市
後志支廳管内
虻田郡俱知安町 田中信夫
虻田郡俱知安町 小川原政信
岩内郡岩内町 佐藤彌十郎
余市郡余市町 藤田淳一
空知支廳管内
樺戸郡新十津川村 香川兼吉
空知郡三笠山村 村田要助
雨龍郡北龍村 北政清
夕張郡夕張町 吉野五郎次

雨龍郡深川町 兒島銀藏
空知郡砂川町 川口常作
空知郡美唄町 岡田春夫
空知郡栗澤村 山田利忠
上川支廳管内
上川郡比布村 明田儀一
中川郡美深町 高橋日出男
旭川市 反橋信一
上川郡東鷹栖村 武田信之助
上川郡名寄町 太田鐵太郎
上川郡和寒村 松本六太郎
留萌支廳管内
留萌郡留萌町 蒔田余吾
苫前郡羽幌町 堺太一
宗谷支廳管内
宗谷郡稚内町 西岡斌
禮文郡香深村 戸田達元
網走支廳管内
斜里郡斜里町 山田正元
紋別郡下湧別村 谷虎五郎
常呂郡野付牛町 永井勝次郎
網走郡網走町 林好次
紋別郡遠輕町 林由一
紋別郡興部村 多田輝利
釧路支廳管内
釧路郡豐浦村 正源次作
白老郡白老村 伊東軍治
日高支廳管内

靜内郡靜内町 吉田貫一
三石郡三石村 坂東秀太郎
十勝支廳管内
河東郡音更村 平田助市
帶廣市 高倉定助
河西郡芽室村 安達辰壽
中川郡本別町 川人源市
釧路國支廳管内
厚岸郡厚岸町 柿崎惣太郎
釧路市 高野源藏
根室支廳管内
根室郡根室町 梅谷周造
根室郡根室町 竹原平太郎

司法

札幌控訴院 日高要次郎
部長 伊部榮治
部長 德永榮吉
札幌地方裁判所 柳澤雅休
部長 加納實
部長 菅原二郎
部長 熊谷誠
札幌區裁判所 杉本晉
監督判事 内田實
同 檢事 中島大智

岩見澤區裁判所 太田周作
室蘭區裁判所 荻原竹儀
小樽區裁判所(支部) 森信一
監督判事 池ノ内一郎
岩内區裁判所 坂井五郎
函館地方裁判所 島津二郎
伊佐早信
本田等
菊地庚子三
有坂堅三
函館區裁判所 多賀谷惠司
監督判事 森鋼平
旭川地方裁判所 谷忠治
野本豐
飯澤高
旭川區裁判所 澤野多三郎
監督判事 鬼形六七八
名寄區裁判所 川越利兵衛

稚内區裁判所 飯田松五郎
釧路地方裁判所 渡邊秀平
和田作太郎
釧路區裁判所 小林右太郎
小森信二
兒玉庄藏
監督判事 松岡武雄
長木肇
帶廣區裁判所 永根義雄
林幹二
網走區裁判所(支部) 佐藤三郎
木下猛雄
野付牛區裁判所 宮本譽志男
原長榮
監督判事 中川毅
根室區裁判所(支部) 原長榮
札幌區裁判所 批杷田源介
旭川區裁判所 守田千松
名寄區裁判所(兼)守田千松
函館區裁判所 香椎豐次郎

網走刑務所 鈴木英三郎
釧路刑務所 宮古友次
室蘭刑務所 吉岡薰太郎
苗穂刑務所 中濱亥三郎
帶廣少年刑務所 伊藤祐之
市長・市會
帶廣市 渡部守治
市會 大井啓一
市會 山本謙悟
市會 佐藤龜太郎
市會 小川掌二郎
市會 中村雅一
市會 栗山伊三郎
市會 江口芳作
市會 小松幸七郎
市會 柴田幸七郎
市會 森嘉太郎
市會 堀江彌吉
市會 田中山十郎
市會 酒井章太郎
市會 藤森茂登惠
市會 喜多儀太郎
市會 森久彌市
札幌市 三澤寬一
市會 伊澤廣曹

市會 遠藤喜四郎
市會 本間久三
市會 若狹由次郎
市會 上口外吉
市會 井川伊平
市會 村田不二三
市會 石川剛三
市會 笹沼孝藏
市會 南部多三郎
市會 佐野春吉
市會 本間久三
市會 三浦才三
市會 若狹由次郎
市會 關根仙次
市會 高田富與
市會 村岡勝惠
市會 小谷義雄
市會 齋藤俊次
市會 柏野忠八
市會 梅津藤吉
市會 許士善太郎
市會 齋藤興一郎
市會 阿部平三郎
市會 當作小一郎
市會 登坂良作

元木 三平 野島 民助
 旭川商會社 (石田常次郎)
 三輪喜一郎 內藤 義信
 稻月 九郎 小泉 恒吉
 旭川市街軌道 (黒田 岩吉)
 山崎清軒商店 (山崎 清軒)
 山本孫次郎 福居清兵衛
 富岡 吉助
 松岡木材會社 (眞弓 政一)
 上川倉庫會社 (松家圓次郎)
 旭川肥料會社 (吉田 朔二)
 瀧野商店代表 (瀧野 常吉)
 中保商店代表 (中保 恭一)
 川島 清夫
 山岡工作所 (更谷 眞清)
 岡澤彦太郎 世木澤 登
 長谷川吉造 谷口 甚角
 山本 英一 高桑美三郎
 沼澤 長吉 山崎 與吉
 島岡猪源太 谷口 勇
 青山千次郎 尾田 作藏
 北海道運送社 (成田 篤次)
 山田屋商會 (山田 新)
 鶴間 禮藏 田中 秀一
 室蘭
 會 頭 栗林 徳一
 副 會 頭 田中 義高
 同 白井 郎三郎

理事 多田光太郎 竹内 勝次
 土居梅二郎 松岡 喜八
 小幡 久 白戸 敏男
 吉川 市次 門脇 豐藏
 長木谷 喜代助 津田喜平治
 加藤藤太郎 伊部 連一
 増岡 織三 中川 孫一
 若林隆太郎 金澤 常吉
 星井 鐵藏 中村芳治郎
 西田周次郎 米光 長藏
 白井 郎三郎 山崎 康三
 山口 定吉 今野專三郎
 安富幸四郎 富田 作市
 藤兼 一 横山 寅次
 小林 武治 藤田 三郎
 和田 周策 田邊虎三郎
 栗林 徳一 田中 義高
 製鋼製鐵代表
 會 頭 兩角 榮治
 副 會 頭 金井 重喜
 理事 竹田 正一
 村上商店代表 (村上 祐二)
 高木 泰藏 國松太四郎
 鈴木 康嗣 進藤 毅
 淺野 善作 佐藤 兵吾
 松田商店 (松田力次郎)

山一商會社 (松本 敦雄)
 山下 良治 橋本 文平
 瀧澤喜由三 館 徳藏
 太田 芳市 高橋 有一
 池田保次郎 岩堀 氏康
 千葉商店 (千葉 功)
 橋本辰之助 (深谷助太郎)
 朝日酒造會社 馬場 佐治
 金澤 定市 大久保行雄
 小松 傳三 三ッ輪運輸會社 (淺井春太郎)
 宮地 米造 奥村 利藏
 三洋商會 (杉浦 正賢)
 正置 富藏 宮本 正吉
 中西六太郎 金井 重喜
 丸三鶴屋 (兩角 榮治)
 石狩支廳 (代表者)
 江別商會 岩田外喜男
 當別商會 横濱 慶雄
 空知支廳
 栗山商會 小林米三郎
 長沼商會 牧野 善一
 夕張商會 吉野五郎次
 岩見澤商會 三谷榮次郎
 美唄商會 徳田 康作
 奈井江商會 藤井 義繼

砂川商會 西 孝太郎
 歌志内商會 村本 尙之
 瀧川商會 龜谷 虎藏
 芦別商會 大西駒太郎
 妹背牛商會 高田喜太郎
 江部乙商會 大崎 利吉
 深川商會 杉澤 通正
 納内商會 面 彌作
 秩父別商會 植田稻四郎
 沼田商會 小泉 虎吉
 新十津川商會 植西彦二郎
 雨龍商會 米田 萬吉
 清真布商會 小山 辰雄
 上砂川商會 大櫛 順一
 美唄炭山商會 小林太三郎
 由仁商會 小林 龍吉
 赤平商會 岸 與吉
 南美唄商會 信藤 熊策
 上川支廳
 富良野商會 清水 一雄
 和寒商會 小林 正雄
 劍淵商會 横井彌兵衛
 士別商會 寺木辰次郎
 名寄商會 田村 寛定
 美深商會 元木 松右衛門
 上富良野商會 山本逸太郎
 後志支廳
 岩内商會 佐藤 鐵松

狩太商會 木皿甚之助
 俱知安商會 上井 堅一
 余市商會 阿部 鶴松
 渡島支廳
 森商會 坂元 來助
 八雲商會 鈴木 永吉
 檜山支廳
 江差商會 高橋 兵市
 瀬棚商會 瀧澤 秀吉
 膽振支廳
 苫小牧商會 宮武 義則
 伊達商會 伊藤政治郎
 虻田商會 守谷 忍
 十勝支廳
 新得商會 高井 善一
 御影商會 藤枝 種一
 幕別商會 小尾 寅平
 清水商會 生本半三郎
 芽室商會 松本 武
 池田商會 高森與三吉
 本別商會 齋藤 榮吉
 音更商會 吉本松太郎
 鹿追商會 寺島喜一郎
 廣尾商會 土谷奈治郎
 大樹商會 高井淺次郎
 浦幌商會 石田竹次郎
 根室支廳

根室商會 佐野忠三郎
 網走支廳
 網走商會 田邊 村次
 斜里商會 武田靜太郎
 美幌商會 山本 大三
 野付牛商會 伊谷半次郎
 置戸商會 玉川 俊次
 留邊蘆商會 谷川元太郎
 遠輕商會 石井 濱吉
 上湧別商會 熊澤助三郎
 中湧別商會 立野 末松
 下湧別商會 武藤 富平
 紋別商會 池澤 憲一
 瀧上商會 板東 文武
 小清水商會 上田 實
 生田原商會 北野吉五郎
 興部商會 多田 輝利
 津別商會 佐藤 久作
 下渚滑商會 中田 岩藏
 釧路國支廳
 弟子屈商會 小野 幹
 宗谷支廳
 杓形商會 田中 千吉
 稚内商會 辻 力三
 香深商會 田中 政一
 枝幸商會 村山 喜作
 中頓別商會 森谷正太郎
 留萌支廳

留萌商會 堺 太一
 増毛商會 加納次太郎
 羽幌商會 江野 力
 天鹽商會 若松 友三
 苫前商會 長島武四郎
 日高支廳
 浦河商會 奥田惣兵衛
 靜内商會 金子 忠助
 町村長・町村會議員
 石狩支廳
 △札幌村 (村長) 藤木與次郎
 馬場慶太郎 佐藤 吉藏
 徳橋 春吉 宮口 與作
 大坂 門喜 島谷佐一郎
 岩田 徳治 橋場 文藏
 山下 源作 水上兵二郎
 豊田 藤吉 法邑 久平
 △篠路村 (村長) 紺谷元次郎
 竹内 榮吉 大萱生吉郎
 大沼三四郎 宮西 頼一
 鈴木 萬吉 黒田 義夫
 那須伊佐久 田中 友藏
 横田 秀春 鶴島 良助
 渡邊寅次郎 松岡 源一
 △琴似村 (村長) 清水 涼
 小谷 幸勝 笹山 卯吉
 久木 保 山本長三郎

中山 武雄 小野 義友
 齋藤 帶刀 寺田千太郎
 三谷源太郎 小林 末藏
 和田 久藏 我滿六太郎
 麻野 幸平 吉村左太郎
 宮城 仲助 三戸部軍治
 △手稻村 (村長) 星野 毅
 大崎 綱一 鶴岡 篤治
 内馬場伸造 蓑輪早三郎
 原田眞砂男 藤川 豊勝
 野村 村榮 保谷 愛吉
 前鼻松次郎 三本管軍治
 佐藤喜一郎 片岡 頼義
 玉井 武夫 大能長次郎
 竹内 專一 乙黒 定七
 高橋 友藏 三浦 貞雄
 △圓山町 (町長) 飯田 誠一
 境田喜代吉 竹本禮太郎
 上田 守藏 三上權右衛門
 武田 典 武田 忠幸
 安齋 幸作 上田勝三郎
 三關 武治 三浦 吉次
 上田 萬平 小野 高治
 宇野秀次郎 小西 開三
 梶川新次郎 吉留 馨
 田中三太郎 石川 富治
 石崎豐次郎 横關 近治
 田中 宇吉 井川 源藏

田邊金四郎 柳澤 善作
 △豐平町 (町長) 松崎 龜二
 渡部 又吉 小須田治朗
 山崎初太郎 石丸 猪藏
 中井 久作 駒崎喜久男
 新井 長治 大久保清太郎
 沼田 由吉 吉田 庄藏
 本間與三郎 藤原 安
 中川 由吉 平山匡二郎
 西村 稔夫 上田 長松
 石田佐次郎 五十嵐民治
 高橋新次郎 水野 廣
 三佐川 幾太郎 矢代 廣一
 砂金 耕平 嵯峨 要
 △白石村 (村長) 鷺田彌太郎
 朝倉 捨吉 清水 友一
 小林正五郎 西内 寅吉
 小島 莊七 伊藤 作一
 稻垣 福松 越知 役治
 木内 彌市 橋本吉之助
 中野 常吉 伊藤 政榮
 小森徳次郎 長田 保
 兒玉 傳吉 樋口家次郎
 山口 徳一 渡邊米太郎
 △廣島村 (村長) 山田 爲吉
 間野 祐治 細川 藤作
 坂井 澤松 赤倉 治作
 高橋松三郎 田中 善作

湯淺 久見 大谷俊次郎
 小谷 米造 大瀬戸國寶
 青山 徳一
 △江別町 (町長) 坪松唯三郎
 長谷川長太郎 桑原 秀吉
 長津吉太郎 平本 相吾
 河合才一郎 加藤 閑哉
 上出 善松 佐藤 北士
 中山 富造 保倉又次郎
 菅原 金郎 西山 豊吉
 久木 平吉 泉 拙藏
 久田朝三郎 加賀魁太郎
 山田朝三郎 伊藤五郎右衛門
 鹽野菊太郎 上野 孝義
 山崎 銀一 松田 清一
 吉原兵次郎 梶野 三郎
 三好 岩吉 鈴木 勝二
 山口 正
 △石狩町 (町長) 高野 金作
 堀部 銀藏 林 喜佐吉
 鈴木 信三 石井立之進
 山田 義男 嘉屋 徳光
 横山玉太郎 筒井豊次郎
 關戸金三郎 金子清一郎
 吉田 茂一 赤山 岩吉
 吉田 庄助 田口 與八
 國重 歳助 寺尾政次郎
 渡邊 善祐 伊藤 清

△當別村 (村長) 鹿野 惠造
 山田 茂 戸田 安雄
 辻野辻太郎 百石重太郎
 横濱 慶雄 松田忠太郎
 吾妻阿蘇男 千葉 好美
 野尻 清松 倉知 由秋
 鍛冶 銀二 山田貞三郎
 近藤角右衛門 水野龜次郎
 森 豊藏 高橋平次郎
 石田 由松 佐藤 養助
 佐々木藤吉 田畑萬太郎
 長谷川榮吉 伊藤 捨造
 藤井 清次 山崎 善間
 △新篠津村 (村長) 串田 靜夫
 宮城源十郎 東出太郎市
 宮田 一正 松本 貞藏
 市川 末吉 横山權太郎
 西井忠次郎 北口與三衛門
 高田 政吉 黒壁權次郎
 植島豊次郎 佐藤 仲藏
 △厚田村 (村長) 松本 長吉
 江本源太郎 西村與太郎
 西木 次作 吉永 雄亮
 國行 爲助 山本 吉明
 宮岸 仁三 藤林 嘉悦
 村本定三郎 酒井 寛道
 住谷 治 戸田 善作
 早川 幸作 和泉 留吉

仲田 實 佐藤常三郎
 河合 武雄 高橋 一藏
 △濱益村 (村長)
 岸木 巖雄 上野 多市
 熊谷常三郎 八木澤 重太郎
 笹原 貞八 内山 末造
 佐々木與吉 池田 佐吉
 小里平三郎 羽二生 佐與吉
 岡崎 直一 柴野八十八
 平川 貞作 武安平次郎
 木村勇之助 秋田一次郎
 釣兼 末吉 中田三太郎
 △惠庭村 (村長) 光富 松衛
 林 愛助 田中 菊治
 出倉 平教 長谷川民治
 田中 善松 赤崎政次郎
 河尻與九郎 玉川徳次郎
 淺野留次郎 嘉屋辰十郎
 福本 豊一 北岡 善作
 龜田榮次郎 福本磯次郎
 宮田早太郎 谷内 惣次
 寺西伊三郎 溝 新之助
 △千歳村 (村長) 岡本 幸信
 中川種次郎 渡部 榮藏
 瀧川 亮次 山崎 友吉
 高橋 徳久 鈴木六三郎
 清水 市郎 細川 孫作
 井上 榮作 戸田 平一

吉田 峯藏 窪田與三右衛門
 甲斐莊正顯 藤本 音市
 堤 丈太郎 鈴木恭次郎
 二瓶 千信 木立 利雄

△大島村 (村長) 山本 勇作
 高橋梅太郎 北山松三郎
 可香金太郎 田中 定之
 中江久三郎 渡邊喜一郎
 木村 力松 三上國太郎
 長谷川 與三郎 林 松三郎
 佐々木 重太郎 横山半次郎
 佐々木末松 佐々木西松
 佐々木仁三郎 茅森榮太郎
 齋藤 春吉 齋藤領三郎
 △小島村 (村長) 齋藤 照藏
 川合多一郎 竹野 彌吉
 堀川源三郎 川守田大作
 藤田勘次郎 西村 賢藏
 阿部 吉松 工藤 末吉
 小林 富藏 小野寺勇藏
 高橋 要吉
 △松前町 (町長) 柳谷 慶吉
 中山 清茶 武田 勇作
 菊池勝三郎 三上邦太郎
 藤田信太郎 矢田伊左吉
 小平榮次郎 梅岡大治郎
 松谷 徳藏 藤田 隆三

旭 佳明 佐々木治一郎
 椎名市太郎 川内 精作
 松葉 兼藏 坂井昌五郎
 早瀬元太郎 敦澤 造作
 △大澤村 (村長) 小野寺金助
 小本長五郎 中川 定吉
 近江谷 由五郎 伊藤 廣吉
 山本三之助 野戸 留吉
 大野吉太郎 近江谷兼吉
 近江谷慶吉 佐々木啓助
 橋畑良太郎 村上 嘉七
 △吉岡村 (村長) 宇野與三五郎
 石倉平太郎 山田佐之吉
 船木 武夫 能戸吉兵衛
 三鹿 初造 加納豊三郎
 新山 米松 原田儀三郎
 鍋谷市太郎 工藤 秀藏
 福田榮次郎 新山 友吉
 △福島村 (村長) 劍地作太郎
 金澤 孫作 阿部 善左衛門
 木村 重雄 石川勇治郎
 西田鐵治郎 築田 龜藏
 鳴海慶次郎 中村 西松
 杉澤百太郎 山田繁太郎
 要田 政利 花田清三郎
 荻野吉之助 矢野 泰次
 村田多右衛門 大井川 榮太郎
 中塚 久彌 村山 由藏

△知内村 (村長) 東出快次郎
 伊藤 政榮 五十嵐靈爾
 敦澤 五郎 宮上 仁作
 伊藤 完一 西山仁三郎
 永田 虎雄 金澤市之丞
 高野佐治郎 松井 榮作
 仙場末太郎 田中小一郎
 佐藤松三郎 岡田清一郎
 藤谷 岩作 岩間 武藏
 佐藤末次郎 筒井 明松
 △木古内村 (村長) 田中 謙治
 南部 市松 岡山 勝美
 熊谷富太郎 藤田勘次郎
 堺 松太郎 輪島菊五郎
 細野 辰治 齋藤武太郎
 本庄 末吉 小石石太郎
 原田 圓治 西村三三太郎
 佐藤 翁 吉田幸太郎
 木元綱次郎 鞠山儀兵衛
 岸 與三松 鞠山儀兵衛

△茂別村 (村長) 木村順一郎
 箱崎小太郎 菊地 佐助
 野口勇太郎 千田 勇藏
 笹谷 友市 梅内石太郎
 佐藤 源藏 佐藤 利一
 池田甚右衛門 星野 立
 吉田兼太郎 松岡 勇作
 △上磯町 (町長) 茶谷 幸一

廣部 太郎 金澤 武雄
 澤田 藤吉 種田 幸右衛門
 竹内 實 落合平三郎
 吉田由之助 長谷 茂男
 磯田 敏男 高橋太一郎
 長岡 玉吉 木村竹太郎
 東 正義 木村儀三郎
 大村和志理 杉山脩次郎
 堀口宗一郎 鈴木 延平
 福士銀三郎 鍵谷 房藏
 濱谷長次郎 杉田 常吉
 △大野村 (村長) 端本市三郎
 野村淺五郎 高田 松藏
 小林 文作 武田 重吉
 小林萬次郎 仙庭 豊作
 澤村吉三郎 松原孝太郎
 本村丈太郎 稻川 廣光
 吉田 勇藏 鈴木 清
 佐々木菊松 吉川清之助
 櫻田 喜助 佐藤官之助
 福田清太郎
 △七飯村 (村長) 上村浩太郎
 田中松次郎 宮川 三郎
 恒吉與次郎 大竹幸次郎
 岩崎恒右衛門 安田政次郎
 中村 謙治 小松新次郎
 竹田伊三郎 池田 健爾
 川村秀次郎 宮田 廣吉

池田 榮吉 海藤 一郎 佐藤與五郎 柴田梅太郎 尾札部村 (村長) 荒木 龜雄 岩井久太郎 安藤 義衛
 奧長 源藏 庭田 藤作 濱谷重次郎 石田 玉藏 古俣萬太郎 中村 忠作 河村 鶴松
 富原忠太郎 澁谷 健次 丹羽 和八 池田 六助 長谷川 忠次郎 小納 與太 木村 直作
 中條長十郎 藤田金次郎 金澤 藤吉 松田富三郎 藤本 種八 藤本 忠藏 阿部 正直 坂本吉三郎 井岩 岩藏
 若山熊太郎 片山幸治郎 芋川 親造 高田 留藏 山崎 要作 佐藤圓太郎 坂本 卯吉 三浦 長北 岡本甚太郎 糸谷 義男
 △龜田村 (村長) 坪山 照次 水島辰三郎 佐藤榮太郎 砂子 賢造 田中 二一 田名部 石太郎 坂本 卯吉 佐藤 哲郎 (町長) 砂子賢次郎
 本谷勝太郎 菊谷安之助 小熊 龜藏 永井 繁太 吉田熊次郎 佐藤伊豆之助 杉谷堅次郎 菊地 靜吾 橫山平治右衛門 西川留三郎
 橫山 毅夫 櫻田 淺藏 島本石五郎 水戸 敬藏 白尻村 (村長) 鈴木丑之助 姥谷 金作 二本柳文平 熊谷喜久造 磯谷三五郎 藤崎 伊作
 上野 金吾 工藤德次郎 野呂斧右衛門 野田吉三郎 伊勢勝太郎 宮川 米吉 川井 金作 津田 辨吉 大場又二良 岩田 留吉 落合稼久藏 西川 幸作
 谷上 喜作 龜井 榮吉 福澤 留藏 中野由太郎 原田 與七 伊勢勝太郎 宮川 米吉 川井 金作 津田 辨吉 大場又二良 岩田 留吉 落合稼久藏 西川 幸作
 內田由太郎 川井 藤吉 北村智恵司 成田市太郎 筆村由之助 田原 榮作 土田 節藏 長崎辰兵衛 大谷安兵衛 (村長) 宮島 與作 和泉 寅吉 川村 澤藏 川島 邦彦 村田平太郎 松井 菊松 山田德五郎 澤田義三郎 川村 弘
 △錢龜澤村 (村長) 宮島 與作 和泉 寅吉 川村 澤藏 川島 邦彦 村田平太郎 松井 菊松 山田德五郎 澤田義三郎 川村 弘
 大谷安兵衛 九島喜代吉 福島平次郎 中宮 龜吉 九島喜代治 岩田久次郎 高野福三郎 村下又四郎 高野福三郎 村下又四郎

川内松三郎 佐久間 實八郎 石橋 留清 渡邊 駒治 齊藤鐵次郎 舟橋 九右衛門 金谷 繁一 長谷川 繁三郎 溝口鎌太郎 水野順五郎 瀧山龜三郎 富田岩三郎 (村長) 田中 作平 富田岩三郎 三木勝太郎 圓城寺君治 近藤 豐吉 吉田常三郎 金谷勝次郎 竹内彌治郎 竹田安三郎 永井小四郎 辰巳 章一 高橋 傳藏 近藤 仲次
 △檜山支廳 (町長) 佐野 勇松 能登 馨 橫山宗右衛門 小梅 豐吉 岡田 茂 辻 誠之 增田勝次郎 鐵口良太郎 坂内千代吉 棚橋 忠藏 堀井 安則 高橋 兵市 向山長五郎
 永井市太郎 田附長五郎 古野 久治 關川 嘉彦 武田治三郎 久末庄五郎 三戸 末藏 市山 富作 高橋 由藏 若狹鐵四郎 柳原 正治 花田 順導 澤田梅五郎 小笠原林藏 (村長) 今 榮吉 飯田富五郎 岸田 雄治 小笠原三郎 川村勝太郎 板谷 鶴吉 龜川金次郎 佐藤 安平 能代 正治 清水專太郎 厚澤部村 (村長) 熊谷 甚藏 工藤百太郎 吉田初太郎 中島 審 清木松次郎 納田 恒吉 上戸 悅郎 石岡貞五郎 澤口松太郎 津山 秀雄
 △尾札部村 (村長) 荒木 龜雄 岩井久太郎 安藤 義衛 古俣萬太郎 中村 忠作 河村 鶴松 長谷川 忠次郎 小納 與太 木村 直作 遠山 清治 藤本 種八 藤本 忠藏 阿部 正直 坂本吉三郎 井岩 岩藏 竹原長太郎 土肥 岩藏 三浦 長北 岡本甚太郎 糸谷 義男 佐藤圓太郎 坂本 卯吉 田名部 石太郎 坂本 卯吉 佐藤 哲郎 (町長) 砂子賢次郎 杉谷堅次郎 菊地 靜吾 橫山平治右衛門 西川留三郎 姥谷 金作 二本柳文平 熊谷喜久造 磯谷三五郎 藤崎 伊作 成田 市郎 大塚政太郎 津田 辨吉 大場又二良 岩田 留吉 落合稼久藏 西川 幸作 川井 金作 津田 辨吉 大場又二良 岩田 留吉 落合稼久藏 西川 幸作 二木柳快四郎 藤浪勇四郎 鎌田己之松 菊地喜三郎 落部村 (村長) 南部 湧藏 中村市五郎 大澤 與藏 長谷川 孝治 角谷 作平 岩間 勝三 岩間 勝三 林 政次郎 齊藤吉之丞 林 兵造 八雲町 (町長) 宇部貞太郎 米澤 勇 高見儀三郎 山内初太郎 島田 末吉
 △乙部村 (村長) 山内 禎介 鈴木 倉吉 若山芳五郎 中川小之八 鳴海 平太 坂本 柴門 坂田 吉松 菅田 豐作 大橋 豐作 能代勝四郎 森 益太郎 西田 豐平 大塚忠五郎 平崎 千秀 武田 廣治 杉村 恭三 齋藤 幸治 西田 市藏 佐野 幸作 田村秀三郎 福岡 義一 中條 長吉 三上市太郎 田中市四郎 近藤覺太郎 高橋 定雄 高橋 幸市 河野 幸市 清原 廣吉
 △貝取潤村 (村長) 中條 長吉 三上市太郎 田中市四郎 近藤覺太郎 高橋 定雄 高橋 幸市 河野 幸市 清原 廣吉
 △久遠村 (村長) 國頭自由吉
 杉森石太郎 澤田三五郎 上田貞太郎 山内 禎介 鈴木 倉吉 若山芳五郎 中川小之八 鳴海 平太 坂本 柴門 坂田 吉松 菅田 豐作 大橋 豐作 能代勝四郎 森 益太郎 西田 豐平 大塚忠五郎 平崎 千秀 武田 廣治 杉村 恭三 齋藤 幸治 西田 市藏 佐野 幸作 田村秀三郎 福岡 義一 中條 長吉 三上市太郎 田中市四郎 近藤覺太郎 高橋 定雄 高橋 幸市 河野 幸市 清原 廣吉
 △奥尻村 (村長) 柿木 孫一 澤田 長藏 坪谷 聖三 西本 幸吉 牧口 文一 府金 謹彌 坂本源次郎 坪谷 忠治 佐々木 新太郎 山下傳之助 山下 彰司 仁木 堯存 白川竹三郎 粕谷寅太郎 太田文太郎 宮本 正勝 田脇藤太郎 瀨棚町 (町長) 宮下 和平 阿部 政衛 津國庄三郎 瀧澤 秀吉 桂田富太郎 河野 幸市 結城竹太郎 清原 廣吉 松本耕三郎

船木鐵之助 佐藤 武
 大西 作松 眞田龜治郎
 伊藤 義澄 安住 藤松
 永澤松之助 後藤竹次郎
 福島新治郎 梅津梅次郎
 △歌棄村 (村長) 外島 冬三
 水江 英一 堀 湜
 武石 辰治 名畑 寅藏
 井上藤次郎 小川 孝治
 龜谷 留藏 西村佐太郎
 蛇名 才助 佐藤次郎吉
 佐々木又一 佐藤 眞輔
 △熱郭村 (村長) 小林榮三郎
 岡部 直吉 葛西 政吉
 竹井 賢一 扇谷金太郎
 後藤芳五郎 奈良市三郎
 千葉 信助 北村幸太郎
 山根 仁平 水上喜一郎
 鈴木 倉治
 △黒松内村 (村長) 増田 定衛
 高橋千代吉 鈴木 四郎
 高橋榮治郎 仁藤 總吾
 小原 士磨 深森 豊吉
 阿部角太郎 二階堂庄司
 木村 博介 小山内藤治郎
 鈴木 四郎
 △椴岸村 (村長) 鈴木仁治郎
 △空知支廳
 古城 政一 富田伊三郎
 寺岡 榮 磯濱才次郎
 金子 宥法 三上 勇
 鹿内爲次郎 成田 政吉
 青柳 久七 小林 太一
 渡部庄太郎
 △壽都町 (町長) 高野 敬孝
 安田隆次郎 内山喜兵衛
 畑 金吉 三原安太郎
 上杉六左衛門 三浦角太郎
 中村 久作 寺門 守治
 大野 三吉 齋藤 萬作
 藤島藤五郎 田中 鋤夫
 △東島牧村 (村長) 今井 七司
 金子由太郎 佐藤伴次郎
 川内菊太郎 四反田久松
 北見 甚吉 藤田寅之助
 坪三之助 千引 鶴松
 三春粕太郎 泉澤正太郎
 長谷川兼吉 右近 雅治
 △西島牧村 (村長) 瀧谷菊太郎
 増川 松助 河上増次郎
 渡邊駒次郎 仁藤富太郎
 田口 重藏 藤田 吉松
 中田 正雄 大瀧 菊藏
 伊藤 傳八 米坂 榮二
 佐藤市太郎 三味政之助
 △岩見澤町 (町長) 高柳 廣藏
 横田安太郎 吉田清右衛門
 前田 肇 菅野常一郎
 山口宗太郎 成澤慶太郎
 河原吉太郎 橋本 元藏
 金井友三郎 朝山和一郎
 武部豊次郎 吉井 清吉
 山本三四郎 宮本 仙松
 西村又次郎 庄野雪次郎
 長利卯之八 山根 秀雄
 天野 清信 莊司 常吉
 津神 忠義 萩原惣一郎
 西川直次郎 原田 民藏
 菅 善治 風間 智恵
 菅井勝太郎 和田 理吉
 荒井勝太郎 本間 權平
 靈山 一宗 和 權平
 △北村 (村長) 曾我 武美
 中川 藤吾 池田 慶造
 高田彦三郎 岩田 龜吉
 三島 實藏 平 重藏
 島山 長藏 金森保太郎
 北村 長藏 鳥井 英一
 入谷 藤市 小西 四郎
 田中 善作 淺野 琴治
 星野 貢 坂井久四郎
 片岸 米吉 白戸慶次郎
 △栗澤村 (村長) 貝田 保治
 有澤初太郎 富塚庫太郎
 山崎作之助 三澤 清
 山田 利忠 岩崎國治郎
 織田 泰守 川森 太郎
 植村 貞吉 坂井 忠
 柴 辻五郎 本田榮三郎
 有澤角次郎 玉山 終
 西 秋藏 伊達山甚市
 池田 潜龍 石田 平三
 房川喜代太郎 澤田權兵衛
 小川 英雄 上北 數榮
 小松兵之丞 赤松清一郎
 △幌向村 (村長) 伊藤 清吉
 長谷川源之丞 佐藤 藤吉
 南部 誠七 前田平次郎
 多田 等 小山 兼一
 大栗 又吉 久保富太郎
 佐藤 治朗 竹内 乙藏
 野村宗太郎 川合 重内
 △三笠山村 (村長) 村田 要助
 鈴木長之助 須川 甚松
 小林 茂 原野 米作
 中島 慶助 中村 久吉
 古田房之助 高橋 三郎
 松尾謙太郎 太田 龜壽
 庵 義太郎 更科 熊治
 加藤 岩雄 德田 稔
 小林 秀治 相澤留五郎
 相場 春雄 山本 清躬

横山巳代吉 谷口 良平
 佐藤 要藏 小原 慶松
 高橋喜太郎 木村 勘吉
 庄司 米治 山貫 松次
 榎本 金藏
 △美唄町 (町長) 本庄 英次
 櫻井 省吾 宮崎友次郎
 齋藤徳太郎 小島 豊作
 岩城 邦平 加藤 軍司
 池田 千治 齋藤 眞一
 坂東 浩一 長内 定吉
 大西 茂 石谷 壽子
 中野 與作 中野 忠司
 村山宗次郎 熊谷善次郎
 杉野竹次郎 鈴木 勝重
 土榮 新助 高橋吉次郎
 小林太惣二郎 徳田 康作
 吉澤喜惣次 山田 康作
 劍持寛一郎 加藤 時藏
 鈴木 太藏 諸留 良助
 田中 要助
 △砂川町 (町長) 佐藤伊久馬
 西川但三郎 大櫛 順一
 北 勝太郎 長谷川長七
 佐藤三太郎 永井 新吉
 川口 常一 山内 喬
 山本 政道 中村 小佐
 倉本富四郎 成田 恒太
 川口 常作 大西 仲次
 渡邊 好 工藤 浅八
 笹島 米藏 湯浅 繁吉
 藤井 義繼 星 俊雄
 高田竹二郎 尾形 折吉
 山本 浅吾 山口 忠三
 酒谷辰次郎 松田 由藏
 澤田富士太郎 加藤 武男
 島 弘一 明圓 一郎
 △瀧川町 (町長) 神部 爲藏
 堀田 平二 前田 吉藏
 山本 庵 次田 秀彦
 大江 芳雄 塚本 信一
 阪本 茂 浦部 金藏
 石渡 寛 小林儀三郎
 龜谷 虎藏 柳井清太郎
 小川 政男 笹川 繁志
 樋口 隆治 郷 作太郎
 細川 寅平 齋藤 欣峰
 高橋與四藏 吉田 儀作
 奥山 與作 染谷 幸吉
 △江部乙村 (村長) 鞍田 武夫
 大崎 利吉 高桑 又一
 佐藤專之助 藤田 利雄
 高谷 秀松 山本 宗平
 虎谷宗三郎 吉田 元吉
 本所久太郎 吉田 清作
 成田 甚作 三笠 彌藏
 村上寅之進 森浦牛之助
 松儀 一男 吉本 道良
 村井安太郎 福永 正賀
 △音江村 (村長) 大島 立一
 八木 隆 東 米作
 朝妻 勇吉 井上 正男
 小西 大三 高崎 丑治
 本田伊太郎 林 定吉
 後藤五郎治 中田清太郎
 廣瀬喜代三 大野 善七
 石井 慎作 住友 吉平
 香川 嘉藏 坂東 千二
 前田 與作 野上 寧宗
 △芦別村 (村長) 豊嶋龜三郎
 谷口 與作 鈴木 蓮亮
 石川喜太郎 杉森榮次郎
 茶畑 長藏 中内 光枝
 内 俊友 前田次七郎
 村上徳次郎 森川 殖
 神田初次郎 大谷儀三郎
 大西駒太郎 井川 常太
 齋藤 平作 小塚源一郎
 多賀五三郎 得原 範次
 廣島淺次郎 片岸増次郎
 大橋 留吉 上野次郎吉
 加藤 正博
 △歌志内町 (町長) 阿部 秀雄
 村本 尙之 長谷 太二
 山岸圓次郎 山田忠次郎
 佐藤 鶴治 岡崎 兵夫
 松尾竹次郎 高野幸治郎
 島内 種徳 桑原 須介
 大橋 庄造 西原 勉
 松下 秀雄 塚田 次彦
 長尾 定義 寺山 朝
 藤田 龜松 下出 信芳
 宮崎 勇治 笠松 寛
 武田重次郎 大場喜一郎
 新谷 八次 増田房之助
 △赤平村 (村長) 河崎 八郎
 瓜 吉太郎 瀧山修一郎
 葛井傳與門 白井徳次郎
 菊地 西吉 神山 盛像
 田湯 善作 山田 謙吉
 山田興三太郎 幸松 幸作
 宮崎 清一 三上 貫一
 笹川喜代策 三島 勇松
 富山寅之助 孫崎 義光
 田中吉太郎 河西 達司
 笹川貝治郎 佐藤 正藏
 佐藤 安平
 △由仁村 (村長) 梶 次郎
 池田孫十郎 原田 友吉
 水上 齊 小林 龍吉
 澤田芳次郎 宮西才一郎
 吉本 初次 宮下 比數

龜淵 丈平 鳩 理作
大島市太郎 吉毛 利外男
松井清三郎 谷川 鶴次
近藤利一郎 杉本 長作
長崎 清吉 長島 久義
△長沼村 (村長)
健名與一郎 乃木千太郎
常本 仁助 阪 正太郎
越路 市平 田中 盛造
前田 清一 清水 與作
山田 貝藏 牧野 善一
稻井 庄市 大關 精一
前田喜三九 鳥井 清吉
白川 榮 伊與甚三郎
角谷卯之吉 荒井三太郎
田村 博 新木嘉太郎
高田 源藏 東郷喜代治
吉崎 團吉 小西松次郎
△角田村 (村長)
上坂 次一 田中 兵藏
澤田 與吉 坂東 彌平
中西 秀雄 中榮作太郎
小林米三郎 中井覺四郎
北川喜代治 今井平次郎
山下 久七 谷田可思三
池田 信孝 藤田 作藏
兩角 保次 秋田 竹市
尾崎清太郎 鷺尾作次郎

金森 兼吉 山田新右衛門
高山 金作 今井 宇平
寶田義三郎 氏家利右衛門
△夕張町 (町長)
近田留四郎
小西太一郎
能勢 莊吉
島山友次郎
中岡信四郎
齋藤 秀次
石井 安市
江端 寅松
深澤 末松
菅原 秀五
高橋善次郎
深谷 二郎
櫻田總之丞
齋藤仁左衛門
前川 宇之吉
三浦 孝成
聖 鶴吉
△月形村 (村長)
荒川 宗藏
清水彌惣平
重本 源左衛門
新關 權一
西山 廣吉
長谷川長次郎
秋保 清作
高橋 誠
大江 森友
小鹽 喜作

佐々木藤之助 奈良坂 盛
△浦臼村 (村長)
中山 喜作 平井寅太郎
中村 正治 尾花 兵藏
則本 正治 楠本米太郎
田村彦次郎 佐々木 彦次郎
須藤 五老 杉野 金藏
須藤 連治 友成 又六
後藤 元吉 山岸 友吉
岸 兵二郎 笹木 與三
鎌田德太郎 千田 二一
△新十津川村 (村長)
浦上 彰恭 岡本 勝信
浦重 和吉 上谷 秀明
松重 和吉 田中 由忠
笹木 衆雄 中川 長吉
高桑源次郎 中井松次郎
杉浦 順孝 松井隆太郎
栗山 久松 中垣隆太郎
五十嵐 少之助 有馬 權太
井上 祐一 菅原 清八
關口 容三 定塚 和平
菊田馨太郎 金戸外次郎
伊藤 達吉 植西彦治郎
山内 駒吉 堀川 兼藏
△深川町 (町長)
能登作次郎 津田 源衛
村上儀三郎 福土邦三郎
市田重三郎 船越宗太郎

坂本 長八 坂本 北夫
市橋 竹男 越智 今平
挽地儀三郎 田中 浪次
鬼川 俊藏 荒木作次郎
若原 讓 井上 三郎
上田 初次 河野 甚吉
長繩正太郎 浦瀧 津衛
東野伊之吉 矢野 劍一郎
齋藤 勇吉 森口 宗吉
△妹香牛村 (村長)
川上亭四郎 杉村 政常
稻木小千太 木澤佐之助
山本庄次郎 寺崎 直二
五井 耕介 篠原馬太郎
篠原馬太郎 林 德藏
松下 勝一 木元 信一
村上 民治 德本 要作
太田 吾平 石田國太郎
藤田 茂富 中島 定藏
△秩父別村 (村長)
大西又五郎
吉田美彌治 造田 信男
田中原太郎 早川由太郎
稻場龍次郎 佐々木 正
岡内 徳市 戸川 秀男
高崎助次郎 浦川 重雄
小原 明 山崎 林藏
川原 榮作 石山 孫作
榎本 勳 伊藤 光治

西田 正一 橋本 岩應
△一巳村 (村長)
吉田 四郎 神原 八右衛門
垣谷 玉吉 徳田 與吉
西村 茂勝 水谷伊三郎
近藤 好松 山口勇次郎
篠田 良藏 北村福太郎
土井 千海 宮田 貞吉
太田 清義 須田 悦次
萩野 藤太 平田乙次郎
大森 已範 山田 作次
△納内村 (村長)
竹田 榮松 古賀 要作
水田常五郎 松田淺次郎
本田 俊三 中村孫二郎
川西清太郎 村上 清孝
服部 義信 川西新太郎
鬼崎 敏夫 鹽田 喜文
△多度志村 (村長)
岩寺 與一 伊藤重太郎
寺本仙次郎 辻本 彌吉
潮見 務 狩野 卯吉
板垣 忠藏 尾崎秀三郎
中村 末吉 長谷川長左衛門
高桑 守儀 桶谷 榮吉
水谷 隆毅 池田藤次郎
水田文太郎

△雨龍村 (村長)
岩田宇太郎 松平菊次郎
後藤 喜男 前川 正治
山本 彌八 佐々木 市五郎
三宅 六郎 伊藤 清藏
大窪政次郎 河野 義勝
宮西 延治 榊野 正種
佐々木榮松 伊藤菊次郎
後藤 武雄 谷本佐次郎
島山 作治 米田 萬吉
△北龍村 (村長)
林 爲三郎 神藤 惣助
小松伊勢一 木村 鼎一
加地彦太郎 細川政二郎
松本 勘次 淺木 福松
横尾 熊六 沼田重次郎
渡部 仙吾 村上 朝夫
竹林 伊作 新谷 政二
和泉才市郎 青木 新助
長澤 健吉 後藤三男八
△沼田村 (村長)
野中 保久 土田 與三
大塚繁次郎 棚橋延太郎
稻垣 源一 尾田 常作
田島 佐七 佐々木 兵作
橋爪新次郎 橋爪 藤市
黒田 榮藏 高石藤四郎
長谷川理八 嘉谷 正義

野上 利平 横田八十次郎
高橋 喜作 稻田卯一郎
岡村 廣一 金山 義雄
大西 貞一 三谷 義規
中川 喜文 田島五三郎
△幌加内村 (村長)
内山 將夫 山崎久太郎
長尾 宇八 名取 信吉
玉置 竹松 山下與三郎
新田 次郎 花輪留重郎
鈴木 四郎 佐藤 初藏
多田 東一 梅木 勝介
古屋 作造 瀧谷 榮吉
大瀧 宣三郎 研谷 艶内
高久保重一 半澤 喜助
吉田 政吉 森 春一
古屋筆三郎 政本 雷
栗津 清藏

△東鷹栖村 (村長)
小林 松一 笠原 石松
黒崎 平治 加藤 榮作
上島安次郎 山本安次郎
中山 穰 新村 長七
關 仁三郎 川島留五郎
西田安太郎 大河原萬平
青木 幸助 軸原 良夫
筒井 松三 桑田 絹次

鉢呂 千松 工藤 傳助
△鷹栖村 (村長)
澤田仁三郎 山元仁太郎
上谷 菊松 佐野 磯次
谷口 由松 宮野金次郎
山口幸太郎 舟根 久作
神部 忠治 畑山 長作
辻 貞 清水金太郎
秦 龜一 廣瀬仙太郎
大谷 萬藏 長谷川貞次郎
及川 諭 濱川長右衛門
△江丹別村 (村長)
永見 清藏 丸山 虎治
小林慶次郎 藤原 頼篤
西谷喜太吉 米田 久雄
中村 藤義 菊澤 玉吉
安田 眞一 鹿野 直
島津 金作 土田 庄治
△東旭川村 (村長)
土田松太郎 小岩 安美
大崎 庄一 菊田 繁八
高橋甚四郎 入江 卓彌
荒明丑太郎 光澤 幸一
上代菊次郎 小谷 勝治
廣田豐次郎 金谷由次郎
木幡 元惠 合田 清七
外山 與平 鈴木 元藏
酒井 榮吉 谷村 實治

山地 巖 中山喜次郎
 戸島 富松 木村百次郎
 井川 秀夫
 △神樂村 (村長) 安達利三郎
 國澤美代次 妹尾 彦平
 武田次郎吉 野村 與作
 松永團三郎 高橋與三郎
 増子 小次 森崎 米作
 鈴木 國英 種田作次郎
 熊谷 惠 一村 伊平
 坂口 金次 岸田萬太郎
 松永彌三郎 松浦徹太郎
 河村 傳 長瀬由次郎
 林 吉次郎 前田 清信
 布村助次郎 奥村 政憲
 樋爪 政一 岡澤榮太郎
 △神居村 (村長) 前田 利濟
 久保田伊三郎 阿部 定七
 坂上 貞吉 石崎 清藏
 窪田 要 畠山松次郎
 瀧口 定作 吉本 文助
 相川 一吉 三木 森藏
 佐藤 和吉 本間 伊助
 △永山村 (村長) 能代 慶治
 武田 善藏 鎌田 貞長
 宮崎 清作 黃木七五郎
 山本儀十郎 庄司貞一郎
 茨木 太郎 橋本 林吉
 乾 咲次郎 安川 温宗
 中橋 勇市 清野 能正
 齋藤六三郎 齋藤 勝三
 加藤徳太郎 幅崎文次郎
 奥野鹿之助
 △當麻村 (村長) 藤本 幸一
 木下六三郎 石王 理吉
 安藤 昇 中島藤五郎
 二瓶 清七 伊藤庄五郎
 岸山甚兵衛 細野 龜平
 小坂橋靱負 嘉屋 誠一
 野口末太郎 窪 四郎作
 伊藤 時松 村上 勝司
 山根 保儀 溝口 清春
 加藤長次郎 森田盛之助
 △比布村 (村長) 明田 儀一
 鈴木貞三郎 合田熊太郎
 廣瀬滿壽喜 今井秀次良
 谷 一 佐々木忠太郎
 谷藤 國治 大出 久助
 中野 伸治 川口 國市
 篠原 定吉 辻 繁義
 堀部美之助 高橋政次郎
 八巻 健吉 太田 友七
 岡崎豊次郎 小川 善一
 △愛別村 (村長) 原 多市
 丸山秀次郎 本多 吉江
 鞠古常三郎 野村 淺一
 前佛 豊作 船橋銀次郎
 鈴木 常治 木村朝治郎
 堀 勝太郎 岡本才二郎
 伊藤 藤一 田宮 只助
 山口美之助 植本 榮一
 井口 寅一 片山 増一
 岡田 清實
 △上川村 (村長) 中江庄三郎
 井上 信次 西本 嘉一
 明石 幸輔 辻井喜一郎
 鶴野辨太郎 河野 判治
 佐藤堅太郎 坂本 西治
 森瀬治之助 橋脇助次郎
 片岡 清吉 北原 信實
 鷺見 信義 北村常二郎
 保坂 貢三 富塚 慶吉
 遠藤 宮松
 △東川村 (村長) 佐藤政之輔
 長澤 寛 紙谷 直吉
 米山三郎右衛門 宮野 清造
 山田孝太郎 小西 清藏
 山下麻次郎 太田 善助
 永江 天亮 石原 喜作
 洞 銀市 宮崎 筆一
 秋山 勇藏 小坂 清作
 難波 茂夫 富田 長七
 高見勝次郎 岡村 四郎
 △美瑛町 (町長) 佐藤敬之助
 水上 源 黒松 秀夫
 井上 俊三 今城 政一
 山崎 梅吉 高橋重太郎
 保田 陸利 金屋 六助
 矢島谷之助 春日 一義
 富樫龜之助 三田 元由
 山下 糸吉 山岸 與松
 水口 市郎 堀田 末松
 菅野 義信 野村 鶴松
 馬場 孫作 越智 市藏
 △上富良野村 (村長) 金子 浩
 和田松衛門 山本逸太郎
 西谷元右衛門 久野 春吉
 萩野 源作 小林八百藏
 道井太十郎 四釜卯兵衛
 松原 照吉 小川 總七
 仲川善次郎 白井 彌八
 田中勝次郎 多湖 房吉
 金子 全一 北原 稔
 松島卯之吉 海江田武信
 福家 敏美 村上 國二
 伊藤七郎右衛門 村上 盛
 石田 榮松 床鍋 了作
 △中富良野村 (村長) 安井 慎一
 岡田 長榮 松藤 宇吉
 泉 虎吉 太田金之丞
 松元 傳吉 内田 熊吉
 坂本清太郎 大瀧繁太郎

北 太吉 磯山 秀夫
 幸田 太一 松永 定雄
 安喰 彦六 市村 邦二
 野澤 正行 瀬戸 文助
 △富良野町 (町長) 松崎品治郎
 相田 長吉 堀田保太郎
 古東 久平 笠木 末吉
 田中 三三 兒玉 定一
 西村 准治 執行 藤洋
 唐澤 千尋 高橋 儀弘
 名取 孝 野口辰之助
 藤田喜代作 中山 清一
 泉 安郎 梅下 榮助
 植崎昇二郎 平山 源彌
 高見 仙助 藤原 宗信
 五十嵐謙四郎 長尾 政彌
 山坂 準藏 清水 一雄
 山部村 (村長) 奥山 萬藏
 高橋卯之吉 植木吉太郎
 榎本要之助 田中徳太郎
 田中松太郎 吉岡 春治
 尖戸 三治 吉田己三郎
 志賀三五郎 關野 清松
 伊藤 倉吉 加茂 一雄
 △東山村 (村長) 安藤 照文
 前田 勝治 今西新太郎
 松野 助八 長谷川 新次郎
 地引 千吉 藤木己三郎
 大屋 直市 川村仙太郎
 岡部 秀男 根子孫次郎
 蜂谷六之助 松平 藤藏
 △南富良野村 (村長) 佐々木幸男
 定塚 孫右衛門 伊藤 勇
 山田 久光 角谷辨次郎
 佐野 茂康 佐藤市太郎
 湯原 榮吉 田中 文吾
 佐々木慶一 谷村 秀吉
 山名 林藏 磯江 仁平
 川島 房吉 堤 茂市
 中林 金作 高橋 一夫
 山田毎四郎 今井 美之
 △占冠村 (村長) 森 一
 板谷 新作 小林甚八郎
 堂坂 房吉 山崎 力太
 山内半次郎 木村 佐泰
 井出忠次郎 森 數三郎
 堤 仁八 伊藤喜久治
 山田 榮問 長淵 菊松
 鈴木 知次 日野 正一
 △和寒村 (村長) 川越 武躬
 橋 八十八 阿部 清吉
 佐藤 勉 鷺見松右衛門
 海老原 武 淺野 義賀
 岡 傳四郎 二口佐太郎
 小島 圓 川島 衛三
 上田兵太郎 加藤 徳次
 田中久右衛門 小川 義雄
 乗田 新七 小笠原 福次郎
 舟橋 要 南雲源一郎
 △剣淵村 (村長) 今江 武雄
 鳥本 慶一 保喜千代松
 眞鍋 榮作 阿部 銀一
 三野田照一 中上 久臣
 兒島 平吉 氏家 村治
 原藤右衛門 小沼 誠
 小林 爲吉 花山 仙吉
 藤原 嘉平 鍵谷熊五郎
 芳賀 實 淺野 鶴市
 原 芳太 北澤 與三郎
 △温根別村 (村長) 猪川 武一
 宇都宮 芳太郎 中山與四郎
 田西由太郎 田中 舞吉
 市田 弘 高橋 三郎
 宮崎清治郎 本田 次平
 近藤 貞喜 三宅鐵之助
 和田 誠 稻葉 正義
 △士別町 (町長) 伊藤仙五郎
 土山爲治郎 濱下 市郎
 山口 保吉 久光 鷹士
 藤野 長作 徳長徳三郎
 深澤 喜由 宮本今朝七
 安川 篤 千葉 正重
 高橋 役次 武山 東三
 田口 政信 北村 勇作
 永峯 只七 笠井庄太郎
 堀井 利夫 松川萬次郎
 清水 孫三 三浦 満吉
 宮武 徳平 館田賢次郎
 近野 徳市
 △上士別村 (村長) 中田 熊雄
 小野 幾太 岡 笹一
 岡崎 平藏 大原 北輝
 伊藤留次郎 藤原 柳吉
 石川留太郎 千田 清
 谷内田昌夫 乾 雄次郎
 辻本 石松 五十嵐清之助
 今西清一郎 中谷 方久
 堀田松五郎 小西彦次郎
 鈴木 新吉 栗林 五作
 菅野 昌吉 織戸 三松
 熊谷 直吉 庄司 傳七
 赤川千代松
 △風連村 (村長) 高橋榮太郎
 勇佐馬太郎 大久保助次郎
 中川 長藏 高橋 近次
 三輪 清正 中島 祐一
 飯田由太郎 渡邊 庄吉
 田中 貞三 佐藤 泰藏
 桶谷 利男 渡邊 庄司
 安谷 近次 渡邊 甚之丞
 田中 徳一 島田源治郎
 川田 民治 西川安次郎

伊賀龜太郎 大久保外次郎 近勝 久吉 安原 丈平 山下 清八 代藏元次郎 對馬 藤 八幡 小一 原田 太八
 川上 藤助 小西 太作 平 忠勝 上田 喜一 西野治郎作 小池 勝藏 澤井 政一 內堀 博治
 高嶺 三千太郎 村中佐太郎 箕島庄次郎 稻森 元吉 佐々木西松 奧村 繁吉 赤松 遙祐 高見 由松
 △多寄村 (村長) 後藤 良作 田邊孫四郎 伊藤傳次郎 加藤石太郎 古田 紋吉 長屋 治平 小畑 與一 立花德太郎 山本 仁次
 岡 千賀次 北野 作松 三好 忠次 加藤石太郎 高橋 清一 福本作二郎 小畑 與一 小澤 久吉 伊藤 熊吉 井藤 鶴一
 岸梅 佳三 野原 甚吉 今野國次郎 (村長) 高橋 常松 遠藤 梅吉 下村 常信 遠藤 嘉藏 日置美濃助 小野寺享二 村川 三郎
 古市新太郎 井口直次郎 清水 正直 野原助太郎 北野七郎右衛門 熊谷 清 吉田安太郎 福島 達雄 金子 長次 春日 清作
 土橋 信江 近藤峯三郎 花井 石松 安東 利正 高田 貞男 濱本 亮藏 佐藤 正夫 遠藤 彦太郎 岩腰 義市 伊佐津和平
 近藤 門平 上總 薰 鷺田 捨吉 水野悅次郎 松永 義行 吉田 德松 松田 德松 小岩惠三郎 岩腰 義市 菅 藤吉
 松本 米吉 (町長) 石丸 瀧藏 戸井 諺 水野 悅次郎 松永 義行 吉田 德松 松田 德松 小岩惠三郎 岩腰 義市 菅 藤吉
 △名寄町 (町長) 荒瀨 宗二 戸井 諺 水野 悅次郎 松永 義行 吉田 德松 松田 德松 小岩惠三郎 岩腰 義市 菅 藤吉
 酒井榮太郎 米永 外二 久富 熊雄 谷口榮三郎 十龜 善一 平野菊太郎 內田定治郎 菅野 利雄 尾作 洪
 高橋啓次郎 今西 武 上田 龜一 蓮沼 善一 石井 富士 池田 良作 佐野藤次郎 岡田 半助
 岡田 新一 山本太之助 宮原 玉一 豐島 淺吉 土橋石五郎 山本 秀雄 堂坂 幸間 阿部 義政 阿部 義政
 有山庄太郎 入倉 又門 原田 信夫 服部 鹿藏 石田 露松 由浪安治郎 藤原 繁藏 中野 厚 山口 由藏 阿部 庄吉
 神山 玉吉 大友 稱胖 樋渡 秀雄 中村金太郎 元木松右衛門 坂井 春作 佐藤 善作 水戸 徳司 吉田長左衛門 大友 榮吉
 中島 長造 名取 忠夫 元木松右衛門 坂井 春作 佐藤 善作 水戸 徳司 吉田長左衛門 大友 榮吉
 片井 義人 石崎國三郎 角館祥二郎 加野島安太郎 藤守 徳義 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏
 野坂清太郎 角館祥二郎 加野島安太郎 藤守 徳義 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏
 佐藤八太郎 加野島安太郎 藤守 徳義 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏
 平間 庄八 茂木 清一 嵯城 遠二 池田 清治 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏
 △下川村 (村長) 森岡 幸作 藤守 徳義 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏
 末武次郎吉 上村喜代松 藤守 徳義 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏
 山本 米藏 神成 作治 藤守 徳義 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏
 吉井 純彌 村上貞次郎 藤守 徳義 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏
 山下 徳左衛門 今丸岡宗八 藤守 徳義 阿部 孟 小松宗太郎 鹿内彌一郎 山口 惣三郎 荒原 愛藏

山村 峰壽 小笹與三松 △天賣村 (村長) 木下太一郎 湯澤 昌 今野 寅治 廣瀬竹太郎 岡田 義胤
 △苦前村 (村長) 山田末五郎 戸田 欽助 八尾 力松 小林 久作 野々村國治郎 上田 義雄 高橋 常治 下田 直治
 下窓石太郎 小島友太郎 川村徳太郎 濱畑 久作 原田龜太郎 (村長) 石山千代治 高橋久太郎 中田 惣吉 岩泉淺次郎
 古谷 吉雄 濱畑 久作 原田龜太郎 (村長) 石山千代治 高橋久太郎 中田 惣吉 岩泉淺次郎
 加藤 磯吉 山田 憲藏 大淵 寅吉 加勢 廣吉 小納 政吉 伊藤 兼藏 遠別村 (村長) 熊谷 與吉 福地 八作 中島 吉郎 北出幸太郎
 水谷 良一 山田 憲藏 大淵 寅吉 加勢 廣吉 小納 政吉 伊藤 兼藏 遠別村 (村長) 熊谷 與吉 福地 八作 中島 吉郎 北出幸太郎
 石川梅三郎 矢作桂治郎 村本 常美 △遠別村 (村長) 熊谷 與吉 福地 八作 中島 吉郎 北出幸太郎
 小丹保市太郎 村本 常美 △遠別村 (村長) 熊谷 與吉 福地 八作 中島 吉郎 北出幸太郎
 廣瀬仁三郎 (町長) 小山 英次 紙谷榮太郎 片岡作太郎 早川徳三郎 山崎 三藏 淺沼磯次郎 原 幸吉 宮川榮之助
 逢坂 利八 早崎留次郎 高野恒次郎 江野 力 小野榮太郎 神川 久平 野宮徳次郎 水橋榮次郎 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 水上才次郎 早崎留次郎 高野恒次郎 江野 力 小野榮太郎 神川 久平 野宮徳次郎 水橋榮次郎 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 本間藤右衛門 高野恒次郎 江野 力 小野榮太郎 神川 久平 野宮徳次郎 水橋榮次郎 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 寺田榮次郎 江野 力 小野榮太郎 神川 久平 野宮徳次郎 水橋榮次郎 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 荒木健太郎 小野榮太郎 神川 久平 野宮徳次郎 水橋榮次郎 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 武田源之助 神川 久平 野宮徳次郎 水橋榮次郎 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 松井 正龜 野宮徳次郎 水橋榮次郎 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 高瀬重次郎 水橋榮次郎 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 胸井 松若 有澤 理一 △天鹽町 (町長) 梨澤 環
 △初山別村 (村長) 越後谷源藏 草刈 直 水野 一雄 寺本 錦城 佐藤佐惣治 初山 米藏 本田 善助 眞田 熊夫
 内生藏麟作 上田吉次郎 麻里 梯三 竹島 萬吉 林 長吉 岩崎 宇一 加瀬 豊 眞田 熊夫
 大井戸秀藏 麻里 梯三 竹島 萬吉 林 長吉 岩崎 宇一 加瀬 豊 眞田 熊夫
 海津杉右衛門 竹島 萬吉 林 長吉 岩崎 宇一 加瀬 豊 眞田 熊夫
 長坂 榮作 林 長吉 岩崎 宇一 加瀬 豊 眞田 熊夫
 長谷川 直次郎 岩崎 宇一 加瀬 豊 眞田 熊夫
 三宅 幸作 岩崎 宇一 加瀬 豊 眞田 熊夫

△中頓別村 (村長) 佐藤友太郎
八木源七郎 水上喜一郎
安川 榮吉 森谷正太郎
米田喜一郎 森川 喜作
山田 勉 阿部 龜松
片山善太郎 常本 勇松
宮田 晉吉 代藏惠三郎
橋本 正義 田中 柳藏
尾本兼次郎 石毛豐次郎
荒木淺次郎 谷口 市雄
△枝幸村 (村長) 石川 誠治
吉野嘉三郎 天野 佐市
三岡 平一 引地 平右衛門
山本 與吉 加賀谷 與三郎
山本 五郎 岩谷 弟吉
山下 一郎 佐藤 定次
上野 貞作 藤田 文毅
石山 傳助 小川 正敏
扇谷 源吉 粕谷 龜治
濱田 綱吉 小野木 豐治
△歌登村 (村長) 鈴木 五郎
藤木 國雄 田邊 谷勝太郎
安田 才吉 矢野 淺一
內藤 茂一 中井 茂一
安田 金助 深井信太郎
妻野八百藏 赤池利吉郎
向井地政徳 佐古 忠吉
佐久間 卯之松 清水 喜七

吉田 實治 西澤 太郎
合田 遷佐 大津 貢
△香深村 (村長) 熊谷 廣太
田中 政一 小坂 乙吉
金田一福次 和泉 佐吉
木村 末吉 若林文太郎
柏谷 重雄 笹山 榮
向瀬 秀雄 瀨川 由藏
茶木 久次 柳谷 石松
△船泊村 (村長) 相田 平作
中島 永松 小川信太郎
武田 岩藏 細川 清
杉山石太郎 岩田 徳二
平井 昇 吹越定五郎
大谷 金藏 三上平四郎
柏谷 廣吉 小笠原勝藏
△鴛泊村 (村長) 高田文四郎
工藤 豊作 渡邊 信榮
工藤由太郎 林 市藏
山田 松一 巖築 竹松
綿木 元吉 佐藤 省三
竹内光太郎 箕谷 惣吉
林 多藏
△香形村 (村長) 田多 嘉吉
高島金次郎 佐々木 萬次郎
濱本 岩吉 吉田三治郎
田尻多一郎 神田甚三郎
濱邊石太郎 川崎 松平

小島嘉之助 笹谷角太郎
小辻圓次郎
△仙法志村 (村長) 諸橋良太郎
竹内菊次郎 馬淵彦太郎
砂田彌一郎 玉村添次郎
高野 清 石川 熊吉
正座 正吉 能登龍太郎
干場勝三郎 上田 精次
宮下 要一 山本 良吉
△鬼腸村 (村長) 吉田 晋吉
原田 幸市 板坂 又二
濱邊 松藏 横内喜一郎
石川 政治 長谷川武助
平川 彰治 日野澤 徳太郎
加納 嘉藏 崎谷 茂平
中山富三郎 三橋 平吉
新谷 嘉右衛門

○網走支廳
△網走町 (町長) 大橋千次郎
山崎秀之助 阿部 幸作
田邊 村次 宮津恂太郎
杉本 辰治 北條 慎吉
高橋 政芳 鈴木 芳吉
阿部 忠治 青木 邦輔
岡田友太郎 瀨尾 利作
垣川松次郎 原本 亮一
吉井 重作 坂垣 吉郎
富岡 勝平 加々見 參義

松本 重徳 林 好次
白井仁太郎 鈴木 由平
中村 雄作 千村 辰造
谷口徳兵衛 瀧 清三
伊藤 清 野鳥 專吉
芦田 三郎
△女滿別村 (村長) 内藤 周平
松家辻五郎 高薄 繁次
平野 與八 山本 岩吉
大隅幸二郎 中田 貞治
岩原松太郎 吉田 禮文
森 藤平 泉田 元
旭 市松 牛渡 剛
高橋萬右衛門 藤澤綱太郎
二川清三郎 石田淺太郎
重成 多平 岩崎 政治
△美幌町 (町長) 林 利博
石川清之進 鳥井 米吉
鶴野定左衛門 榎田五郎平
市川 芳藏 川田 行雄
中西 新作 安藤日出雄
池津 一重 加藤金之助
矢口 清藏 宮脇政太郎
坂東 佐助 田子作次郎
柳瀬 一郎 日並 準一
葉佐 利松 高橋 甚吾
平野 稔 蜂谷 光
高橋 石松 前田 靜治

背戸 謹吾
△津別村 (村長) 小野寺 勇
石川良三郎 土田 富松
青木 超勝 和田松太郎
中山 富藏 三好伊三太
安部 末吉 佐々木千太郎
鴻上 岩造 信清 輝雄
小西 佐市 佐々木 茂太郎
久保 信一 高島甚太郎
松本 榮藏 西原 協太
△斜里町 (町長) 中山 勝雄
馬場 退藏 羽廣 二吉
羽生田太一 丹羽虎之丞
太田 勝信 太田伊三郎
隱岐 儀八 加藤 義信
狩野 太八 吉野 勉
武田靜太郎 田中伊佐太
土橋 傳七 塚本宗太郎
塚田彌右衛門 根本 森造
中村 綱吉 山中 市藏
禰田 森太 木下 忠平
清水 一郎 森田謙太郎
須田猪三郎 杉本 豊記
△小清水村 (村長) 寺井 實范
大石 兼記 堀内 竹吉
田高田安吉 數原 京市
田中作次郎 藤原 慶藏
大場 七藏 島岡幾太郎

加藤宗二郎 中島 喜左衛門
根本政太郎 柏倉深次郎
菅原徳三郎 國定榮太郎
關根 忠助 渡邊 幸次
小野 吉右衛門 林 松太郎
△端野村 (村長) 佐藤 滿三
齋藤 正雄 荒川 喜作
幸崎 義一 長谷川光章
古賀 守太 今村 政治
新田定次郎 泉 萬次郎
寺崎 孫市 松崎 輝雄
日下 藤太 眞鍋 勝治
田中嘉一郎 岩崎 猶藏
岡村 廉 田島 一郎
石川 正雄

平田 義松 馬場軍十郎
森下 政吉 新保孫次郎
寺山 鶴藏 大場 光三
△訓子府村 (村長) 村瀬源太郎
平田末太郎 松永 初
林 留吉 植田 文七
岡田 六平 大場橋之助
守屋 眞澄 谷本泰三郎
紺野 倉藏 飯島勝太郎
喜多安太郎 片平虎之助
小山田善次郎 後藤 鐵雄
及川 榮雄 渡邊 卯平
吉田 重義 安田 秀吉
△置戶村 (村長) 大澤 敏雄
湊谷八重藏 鈴木宗兵衛
石山 勝 小川 丈藏
佐久間 與太郎 川村 保事
高内熊太郎 家田與三郎
佐久間 基 石井 幸八
後藤乙之進 笹尾 政助
相澤 久吉 加藤理三郎
藤内 儀平 柏原 龜雄
田井 儀平 富塚 公
△相内村 (村長) 河原 鶴造
小野 政雄 高橋且次郎
土岡 惠助 中山外龜男
菊地 龜與 渡邊 孝義
村田八次郎 森 續

中村 文藏 加城 政治
竹中 二郎 森 要造
秋葉新三郎 筑田徳三郎
松浦準一郎 竹倉 茂藤
田中 榮朔 高橋 福三
△留邊蘆町 (町長) 堀川 重敏
大江與四太 脇 宮次郎
西川 清吉 二木松 庄之輔
高橋 義行 畠山 眞平
山下 仁吉 山本 太八
土田 權作 中田外次郎
田邊近次郎 佐野準一郎
杉本 庄吉 菊地 茂七
中田六三郎 藤田 哲
石本 嘉吉 野村 鶴二
越智義一郎 桑澤 繁雄
若杉 忠治 野澤 喜作
近藤莊太郎
△佐呂間村 (村長) 荒木徳次郎
竹内 順一 橋 壽太郎
後田 次作 小熊 雄次
宮前 甚吉 大川 順太
香川喜太郎 濱田銀太郎
杉谷 安藏 佐藤 幸吉
河野 勝高 吉川久太郎
川島 平助 中川 龜太
大岩 玉一 岸本 茂
△常呂村 (村長) 原 紋藏

伊藤 一藏 池知 雄吉 篠原 香松 牛丸勝次郎
 原田 吾一 岡崎 重吉 鈴木 富治 中澤山五郎
 渡部甚三郎 高橋 清七 南 正義 酒井 佐一
 高橋 萬藏 高橋 仙藏 本多 正雄 出口助次郎
 高橋 橋一郎 高橋 荒太郎 井上 德嘉 中張 藤吉
 田邊又三郎 上杉 武雄 羽根田 市五郎 齋藤 準平
 久保田 於菟雄 山田 久七 帶力 助三 齋藤 準平
 安原 淺次郎 小林 千代松 小島 鐵治 佐々木 知治
 宮原 養一 新谷 廣治 高橋 源六 小野寺 牛右衛門
 生田原村 (村長) 船戸 多吉 井上 捨治 安藤 林右衛門
 姉崎 宗次郎 野崎 留作 三浦 清助 中村 島助
 堀江 廣吉 齋藤 喜三郎 長谷川 春治 小野 茂人
 中村 作次郎 齋藤 喜三郎 下湧別村 (村長) 森垣 幸一
 奧山 新之助 延原 今二 土井 重喜 落合 定雄
 黃木 義治郎 白鳥 八十二 島崎 卯一 中原 萬助
 橋本 房治 大平 定右衛門 橫山 勇 眞坂 淺吉
 大城 清右衛門 秋田 正次郎 伊藤 金一 新海 忠五郎
 會我部 官太郎 遠輕町 (町長) 三橋 寛五郎 武藤 友右門 國枝 善吾
 林 由一 市原 群治 武藤 富平 梶井 佐太郎
 清水 藤次郎 因 末次郎 多田 直光 小林 定次郎
 上原 哲平 奧原 金作 大澤 重太郎 南川 保一
 布田 富藏 橫山 立男 茶山 秀吉 渡邊 義一
 大庭 重次 菊地 明十郎 天野 新造 友澤 喜作
 岡田 重吉 飯村 六衛 島田 和三郎 近藤 義俊
 菅野 源七 橫山 正平 大口 丑定 近藤 義俊
 黒川 馬太郎 中山 德藏 池澤 憲一 笠井 耕藏
 安彦 久元 中屋 勇次郎 池澤 憲一 笠井 耕藏

眞田 幸人 倉林 金作 畑島 竹次郎 里見 五佐
 森本 忠二 亭 一郎 祖谷 幸三郎 山川 新吉
 菅 勇太郎 木村 京松 加賀 谷興市 齋藤 辨吉
 白旗 專松 高橋 昇吾 澤田 次四郎 上田 進
 成瀬 嘉三 高木 瀧十郎 田中 幸安 清水 與八
 柳原 定治 尾田 忠藏 三國友之助 米田 作太郎
 三國友之助 米田 作太郎
 〇騰振支廳
 △苫小牧町 (町長) 八卷 耕三 青木 又八 寺島 弘
 茂呂 年 高柳 武夫 足利 健之 井森 仙之助
 山本 藤治郎 鳥越 兼次郎 平野 仙松 大迫 春市
 武 米吉 北野 市藏 小西 儀平 河野 高慧 表 和作
 遠藤 資郎 瓜生 保治 齋藤 昇平 菊地 善吾
 高橋 龜太郎 齊藤 昇平 谷田 正雄 立花 八美
 渡邊 喜吉 中道 德藏 立花 八美 立花 八美
 栗田 正己 相武 吉治郎 格地 正都 近藤 武雄
 相武 吉治郎 格地 正都 近藤 武雄 杉本 福松
 山田 信治 阿部 金兵衛 深澤 正男 長井 弘六
 野中 豊作 澤野 信 小宮 良吉 中島 誠次
 高木 鎌五郎 柴田 丈次郎 古川 新吉 沼崎 一男
 厚真村 (村長) 龜井 喜久太郎 三上 蓮治 中興 鐵太郎
 大岩 信一郎 川上 健次郎 大江 虎一 渡邊 大吉
 筒井 善七 山崎 仙之丞 長谷川 宅藏 渡邊 大吉
 谷内 與三太郎 長谷川 宅藏 渡邊 大吉

△安平村 (村長) 山田 忠次郎 小野寺 慶藏 寺島 弘
 △西尾爲次郎 武田 宇助 角張 吉次
 西尾 爲次郎 武田 宇助 角張 吉次 倉淵 春平 尾崎 新吾
 佐相 忠一 宮田 春一 加藤 敏太郎 中村 耕平
 佐々 三男 川口 泰治 久保田 眞誠 岡田 三治
 △伊達町 (町長) 岡田 三治 片平 貞治 島田 與七郎
 淺見 權四郎 河野 五平 板垣 善之助 小野 誠治郎
 前田 峰吉 木村 文治郎 大平 寅二郎 遊佐 肅
 向井 山雄 松本 幸吉 遊佐 肅 小西 力藏
 鈴木 清 加茂 象一 松岡 利七 黒田 晏
 大童 眞澄 洞口 幾久之助 森 喜義 村木 英樹
 村木 英樹 村木 英樹 村木 英樹 村木 英樹
 △壯警村 (村長) 渡邊 亨 鎌田 國平 中村 佐一郎
 香川 壽男 木原 義作 館崎 民彌 野村 勝平
 荒井 與三郎 南條 喜三郎 西島 吉太郎 柴田 貫三

△瀧上村 (村長) 奥山 一雄 香取 鶴之介 神野 藤吉
 渡邊 清盛 妻鳥 五郎 長屋 文四郎 朝倉 義衛
 大澤 源逸 北村 喜平 橋本 留吉 後藤 萬記
 鈴木 彌三郎 横田 豊吉 日野 平藏 小林 春吉
 △興部村 (村長) 青木 金吾 大浦 彦平 阿部 鐵治
 瀧 佐寅之助 清水 利吉 米田 千松 田中 伊三郎
 昌森 德太郎 名苗 充三 河原 太次郎 前田 英一
 △西興部村 (村長) 野島 壽男 佐久間 廣好 野崎 政太郎
 村田 義三 作久間 佐久 齋藤 健二郎 天倉 富
 藤田 徳松 若林 喜衛 若林 喜衛 若林 喜衛
 △雄武村 (村長) 野坂 林八郎 有田 武衛 川村 六太郎

飯野 光藏 小谷 與作 湯淺 健治 岩倉 菊五郎 毛利 婉 藤澤 儀一郎
 加藤 直太郎 成田 貞雄 小田 新之丞 行澤 清美
 中山 高儀 渡邊 悟 尾關 芳市 菊地 鐵之助
 △虹田町 (町長) 那須 嘉市 森 萬治 坂井 六郎
 田所 篤三郎 金澤 健吉 遊佐 滿 川又 四郎
 岩佐 米太郎 岩崎 富太郎 宮崎 富太郎 川村 徳治郎
 榎原 林司 黒木 竹一 稻葉 百太郎 阿部 仲衛
 田邊 義秋 石原 庄太郎 磯野 實太郎 酒出 鶴治
 △豊浦村 (村長) 齋藤 益之 松岡 與七 加藤 惣之助
 宮崎 二郎 大谷 久米藏 正源 次作 三浦 勇五郎
 平井 早太郎 山本 安太郎 文字 常太郎 澤村 仙太郎
 根子 守邦 坂中 幸藏 佐藤 榮次郎 南出 浅吉
 小林 一雄 石神 鶴松 杉山 祐吉 三好 秀市

△洞爺村 (村長) 伊藤 政
 小笠原繁雄 安藤 延市
 宮田 三郎 牧野 健市
 根子森 繁 大廣 嘉平
 根本 義男 大西 彌吉
 福村喜三郎 安達 敏雄
 高谷 半治 上森 慶治
 △幌別村 (村長) 二階堂信次
 平島文次郎 志賀 裕
 南 恒平 前川善次郎
 宮武忠兵衛 井上 彦綱
 赤樫 福平 松浦治太郎
 古山 安澄 勝間 留吉
 香川 千治 豐岡佐一郎
 三浦彌代松 岩倉 誠一
 中牧 保 南 清吉
 日野 昇 坂井 清
 △白老村 (村長) 多羅尾政雄
 鈴木源太郎 久保田仙治
 吉原 新七 上山 千吉
 横山 薰 加藤 常治
 山手猪三郎 長谷川駒藏
 油川 道彦 森竹 竹市
 太田律三郎 林 毅
 塚見 瀧藏 相吉 松吉
 宮武藤之助 吉田 與助
 三好 竹勇 伊東 軍治
 ○日高支廳
 △右左府村 (村長) 占部 久重
 吉川 武敏 關本惣太郎
 松本 友吉 伊德 英治
 鹿島千代磨 小林喜代治
 矢野 豊吉 下笛 順吉
 櫻岡長次郎 豐田太治馬
 松浦熊三郎
 △平取村 (村長) 石川 東馬
 川上 正雄 櫻井 新八
 菊地 虎雄 五十嵐貞治
 船越 萬吉 石崎嘉一郎
 遠藤 一治 島野 貫一
 辻 彦次郎 河端 三郎
 奥村 助市 本庄 啓吾
 津川 貞一 仲山助十郎
 安田權兵衛 白瀬 鶴一
 清川 正七 田中鶴次郎
 △門別村 (村長) 菊地 貞
 岩寺 長吉 矢野 茂平
 小倉 寛由 矢田與惣次郎
 佐々木丑藏 磯浪 新造
 野崎 徳治 藤田 義男
 飯田外次郎 大熊 梅吉
 棚川 忠雄 鹿戸 才斗
 棚川 功 太田 弘道
 笹山 榮一 清兼光太郎
 三輪 久藏 山本 瀧平
 佐々木文吉 濱本安次郎
 △新冠村 (村長) 堂前吉之助
 中村與惣吉 武田 尙秀
 藤原初太郎 紙谷嘉太郎
 川越 和藏 我妻 勇作
 中地琴次郎 宮下丹次郎
 石田 常治 田淵 米吉
 △静内町 (町長) 吉田 貫一
 武岡 清 梅原己之助
 岡田 廉平 望月 六郎
 岡代 喜八 高橋 勝藏
 藤原雅三郎 藤澤祥太郎
 土屋 仙吉 道上松太郎
 船越 和夫 飛野 嘉一
 橋本 丞一 藤川仙次郎
 出羽 昌夫 多田 頼一
 神垣 政市 富岡 政吉
 吉田 傳吉 宇部初太郎
 鹿渡要太郎 伊藤倉五郎
 外山 春吉 伊藤倉五郎
 △三石村 (村長) 松浦 作藏
 林 未松 中村 信吉
 山村 秀 高野與次郎
 堀 久太郎 竹林龜太郎
 中村 太七 坂東 信之
 松山 正雄 伊地智祐吉
 廣田 時治 出口千代七
 畑端 平吉 前川 安雄
 △萩伏村 (村長) 長岡 隆一
 富岡 清 古森 治作
 所司寅之進 小池熊太郎
 小林善太郎 梅田徳五郎
 藤原 恒吉 福岡多磨橋
 三浦 重助 村下 義衛
 △浦河町 (町長) 萩 丹榮
 高津彌三吉 奥田惣兵衛
 岡本 吉平 久保佳太郎
 舩谷 樹藏 西口 右平
 濱田定次郎 網谷 安治
 本巢 長平 田口忠之助
 田中 清三 本巢宅次郎
 室田 末吉 谷 萬吉
 谷口由三郎 鎌田 三郎
 木村 秀重 關根 榮治
 齋藤 八郎 足利 平
 松山 巖 熊谷翁太郎
 山本 傳吉 小林哲太郎
 △様似村 (村長) 藤原 重
 荒澤 定吉 明井庄兵衛
 三上 重藏 小森 宗尾
 東田與太郎 佐藤八三郎
 一山 廣治 佐藤八三郎
 長森他三郎 笹島 連藏

高尾左太悦 早坂 捨藏
 天野 利三 田中 藤松
 清水 信一 早坂甚五郎
 竹田 兵助 田中梅次郎
 △幌泉村 (村長) 山崎 鏡藏
 小笠原安太郎 西川岩二郎
 犬山澄治郎 伊藤 新藏
 川村 重藏 吉田勘之助
 岩間幸次郎 高松 勇策
 佐々木熊治 中島伊三郎
 中野三太郎 關根 健藏
 山本 清司 長谷川卯之作
 廣島 勉 高橋 龜八
 市橋種治郎 神田玉太郎
 濱崎顯之助
 ○十勝支廳
 △大正村 (村長) 國上國太郎
 有澤竹次郎 山本 與増
 加茂新左衛門 八田 春吉
 直江 賢次 木原 利文
 林中 佐市 造田 剛
 島崎 淺吉 田中徳次郎
 古川榮次郎 谷川 清助
 谷口 外 原 信夫
 太田龜己治 佐山 美雄
 片岡増五郎 藤田竹次良
 高島 益義 阿部 精市
 田中 多作 川口熊次郎
 小原 三平 平岡 久吉
 △川西村 (村長) 窪田 四郎
 村元 勇造 池浦清次郎
 武田五三郎 森 長太郎
 佐藤 萬造 太田 吉郎
 奥山胞之助 駒場 丑松
 伊藤甚太郎 有城庄右衛門
 松原 滿芳 佐々木美夫
 八代 一衛 大窪謙太郎
 竹市 一己 篠田 米司
 △芽室村 (村長) 諸戸 義久
 山口 光實 北 勇
 岡崎 直義 安田助太郎
 加藤 民藏 柴田桑三郎
 廣山伊太郎 上田徳太郎
 前塚 茂一 兒玉 勝藏
 小里 太作 猪野毛高榮
 郷 壽吉 山上 覺彌
 野津 福雄 藤村 靖信
 八木庄太郎 横山 利郎
 高橋雄之助 貫田 喜作
 高田 喜知 林 外松
 中村 豊助 早川 孝吉
 △御影村 (村長) 福田 源治
 安宅 平八 竹中 善助
 竹田 茂一 齋藤 兵吾
 森田鹿之助 乾川辰五郎
 吉田直次郎 竹田 謙二
 傳寶源一郎 勝尾爲三郎
 坪井 彌助 森 浪次郎
 △清水町 (町長) 近藤 義郎
 那須 脩 佐久間久彌
 林 熊之助 藤井新太郎
 西出 岩松 菅原 義雄
 吉野喜太郎 高薄 常次
 松山金次郎 村中健次郎
 赤堀慶次郎 大塚 善一
 田村 常平 松尾 源市
 土岐千代治 及川重次郎
 太田 利市 杉森 諭作
 松平 信介 喜多見福吉
 坂上 民藏 兒玉文兵衛
 太田 季三 白石保太郎
 △新得町 (町長) 小崎 榮吉
 杉本 義行 乾 範 治
 和田庄次郎 今井 啓治
 高井 善一 辻村鐵太郎
 高橋 慶吾 松本 政則
 高橋藤次郎 古川 懷政
 金澤 亮 石畑 久成
 湯淺 貢 宗像 宣幸
 鹽見 直平 森 清次
 岩野淺次郎
 △鹿追村 (村長) 高橋 武松
 石塚 長藏 本田 捨吉
 日下 儀平 高橋兵太郎
 宮本 爲八
 堀川 五作
 海野 爲吉
 木幡 宏亮
 山口 善吉
 坂東 春吉
 森住 市三
 △士幌村 (村長) 古山 佐作
 岡部 金吾 増田 龜三
 齋藤 信敬 出村 庄助
 山本 孝作 小椋 國藏
 森本 捨吉 吉田 周作
 川崎 平内 吉田市太郎
 波多野銀市 後藤 貞吉
 伊藤久三郎 香澤伊勢藏
 堀部與三藏 部田徳次郎
 △音更村 (村長) 渡部 辰衛
 蓮佛 常藏 土井 廣祐
 福田 金太 清野 廣松
 久保 由平 岸 太六
 澤田太七郎 浦野儀三郎
 相庭 重助 杉山榮太郎
 飯島 種助 小高 春雄
 石田 香松 白木 文松
 黒田久太郎 田中 乙吉
 山川 森吉 脇原 清輔
 山角 信次 三浦 多八
 洞田 静一 平尾慎太郎

上村 吉藏
 △上土幌村 (村長) 門傳 金治
 西川 豐 小椋 兼松
 木呂子敬一 鈴木 泰助
 片寄 甚作 吉田武一郎
 寺門 小太郎 堀口 順太郎
 吉田 千代吉 青山 久吾
 田中 末吉 河村 荒一
 中島 貝一 福澤 豐三
 中森 太三郎 國本 守義
 伊藤 辰之助 清田 浪右衛門
 △幕別村 (村長) 猫山 常太郎
 長尾 所緣 折笠 休治
 九本 種七 小野 民平
 吉田 太吉 磯部 長三郎
 笹島 喜八郎 笹井 四郎
 金澤 空覺 彌忠 田榮吉
 芝木 榮治 丸山 治市
 島山 與作 横山 平兵衛
 中谷 林二 高島 伴吉
 足立 弘 池下 常太
 一條 吉三郎 角田 政平
 宗廣 光藏 加藤 唯藏
 山崎 外次郎
 △池田町 (町長) 那須 正夫
 若月 五十四郎 梅田 直一
 本田 譽一 高森 與三吉
 天城 章 野尻 久吉

坂本 源祐 坂本 榮一 增永 才松
 新津 信四郎 小松 由吉 佐藤 三四八
 山田 榮五郎 大村 勝一 米倉 基之
 平居 泰藏 諏訪 德次郎 山内 義行
 伊藤 澤太 中村 靜雄 鈴木 清治
 △本別町 (町長) 藤田 松之助
 作間 勝三郎 町田 稔 三宅 國太郎
 佐々木 吉藏 荒 深四郎 高岡 武一郎
 武田 島藏 高 定次郎 井上 菊也
 翠 治太郎 森 仁龍 福家 平治
 倉崎 克己 伊藤 知治 中澤 仙太郎
 伊藤 知治 小須田 左馬助 笠原 萩吉
 天野 晴清 荒木 辰造 上原 福一
 鈴木 勝太郎 森 三郎
 △西足寄村 (村長) 嶺 和衛
 桂 藤吉 新沼 彌五郎
 山本 雄四郎 松岡 八百藏
 大浦 剛 川上 貞通
 常丸 又吉 板倉 勘右工門
 羽磨 卯吉郎 梅森 和志利乙
 大竹 口勝孝 坂東 萬吉

岡崎 光三 遠國 三郎 石橋 德藏
 大貫 宗平 方川 三平
 △豐頃村 (村長) 大橋 佐七
 山崎 惣次郎 熊野 信吉
 杉山 藤之助 森治 右工門 嵐 義高
 館盛 吉次郎 岡田 龍助 山保 源次郎
 大江 龍流 種田 小三郎
 村尾 市三郎 櫻井 宗吾 種田 小三郎
 井村 辰吉 櫻井 宗忠 橫山 若狹之助
 磐井 辰吉 櫻井 權次郎
 △浦幌村 (村長) 野澤 文治
 谷田 健兒 森 信貞
 川畑 市松 小林 得人
 木下 德松 黑川 常行
 島山 勳 西田 五郎
 下田 治作 飛田 泰次
 安藤 重吉 田中 勇
 馬場 金之助 小田 權三郎
 阿部 專太郎 竹田 佐市
 松本 菊次郎 朝日 昇
 △大津村 (村長) 武村 宗太郎
 大友 音松 塚越 喜雄
 水澤 一郎 出村 清吉
 大井 富藏 山垣 昌一
 井下 一

中村 喜之助 阿部 勇美 松内 經三
 △廣尾村 (村長) 小池 清治
 元野 元吉 橋 仁三郎 千場 徹郎
 高松 彦三郎 中川 文藏 勝見 幸吉
 堀田 文藏 堀田 毅 釜谷 與三作
 竹内 守作 堀田 毅 池水 昌作
 林 虎一郎 保志 喜代太 我妻 清五郎
 根本 象太郎 高澤 榮松
 △大樹村 (村長) 土谷 奈治郎
 藤原 八百八 鳥井 卯三郎
 田中 清介 後藤 久四郎
 小松 玉吉 吉田 與市
 二口 久三 内田 省三
 西田 德市 深澤 有國
 三島 新市 遠藤 清作
 一圓 長三 木幡 長助
 今村 勇作 鈴木 幹彌
 島田 高平 堀川 吉藏
 木村 鶴吉 及川 靜
 渡部 好意 大和田 貞雄
 紺野 忠助
 ○釧路支廳
 △釧路村 (村長) 安藤 保雄
 喜田 勇 小笠原 勝男

鈴木 雅二 大村 末太郎
 佐藤 哲郎 森井 儀三郎
 江澤 慶治 菊川 太郎兵衛
 吉原 酬平 佐藤 清
 鹽澤 興市 大沼 重吉
 △鳥取村 (村長) 佐藤 一馬
 佐々木 林松 林 信夫
 小畑 龍吉 鶴野 瀨市
 小澤 次郎 佐藤 義夫
 木村 新二郎 宮田 清春
 佐藤 平三郎 鈴木 正一
 岡野 喜兵衛 豐田 千代作
 高橋 萬吉 原 勝治
 濱野 芳治 高澤 留松
 藤村 敏一 生田 目定次郎
 △昆布森村 (村長) 日裏 庄太郎
 遠藤 一郎 川田 專次郎
 片野 泰 富樫 菟三郎
 能登 嘉一郎 梶川 民三
 紺野 三吉 谷口 次作
 新保 鶴松 加藤 清吉
 木下 林四郎
 △厚岸町 (町長) 齋藤 齋市
 子野 日弘毅 汲田 新作
 五味 德太郎 新保 朝次
 安部 廣治 三井 義一
 岩崎 重太郎 阿部 庄太郎
 村林 竹治 柿崎 惣太郎

長谷川 末吉 久田 重藏
 岩間 岩藏 金澤 義太郎
 土岐 紀文 西村 退藏
 久田 重義 汲田 新作
 池田 次作 後藤 與吉
 田邊 國治 福浦 信太郎
 杉澤 精一
 △濱中村 (村長) 笠卷 慶太郎
 中田 永作 山田 榮助
 須佐 和助 藤澤 喜代治
 友井 英一郎 松村 安三
 佐川 澄月 倉田 藤四郎
 木幡 小多郎 丹羽 由三郎
 目黒 雄次 榎本 仁太郎
 太田 稔 中川 傳九郎
 能、勢 力 吉田 達衛
 柿木 繁 長谷川 九藏
 △太田村 (村長)
 平野 九一 土崎 安太郎
 小澤 清雄 佐藤 與一
 柿崎 仁一郎 萩原 伊左衛門
 奥田 仁太郎 佐々木 徳次郎
 神坂 義太郎 石澤 一生
 田村 富治
 △標茶村 (村長) 廣瀬 榮佐吉
 北村 休二郎 阿部 清右衛門
 田中 又八 安部 重左衛門
 石川 慶祐 内谷 權一郎

堀田 初太郎 渡部 榮次
 鎌田 秀之助 中野 渡末吉
 原田 常春 木下 勇
 小城 博彦 佐藤 正男
 大屋 四郎兵衛 山澤 熊太郎
 高橋 甚三郎
 △弟子屈村 (村長) 青木 貞行
 今泉 福太郎 土沼 助吉
 横山 留吉 三浦 末松
 西澤 政次郎 伊藤 義雄
 大坂 純三 千葉 文七
 齋藤 昇 中野 高十
 岩澤 興太郎 佐藤 精
 加藤 正春 羽田 喜一郎
 貝塚 秋三 切原 大藏
 小濱 豐藏
 △阿寒村 (村長) 服部 増太郎
 山浦 庄助 大森 春治
 木村 竹四郎 曾我 部友市
 小松 榮一郎 眞壁 巖
 内田 興市 伊藤 秀雄
 野澤 定太郎 吉田 武男
 高橋 淺吉 堀田 龜作
 島田 良策 猪狩 衛門
 立花 盛 神野 幸行
 大坂 彌七郎 中田 富次郎
 黒田 權兵衛 (村長) 小畑 鶴之介
 和田 信

細沼 子之松 河原 靜太
 松林 慶藏 植田 薫明
 小田 義正 及川 清作
 渡部 佐一郎 保田 諒庵
 瀨川 壽雄
 △白糠村 (村長) 赤根 喜四郎
 岩淵 勇 黒木 俊吾
 對木 龜次郎 棚野 嘉吉
 山本 政次郎 中島 憲治
 坂本 正能 結坂 四郎
 宮崎 利基 細谷 金太郎
 大石 實秀 荒磯 敏仰
 木原 周藏 川瀬 善太郎
 山崎 五郎 前川 政吉
 尾田 八右衛門
 △音別村 (村長) 川口 正義
 青田 清 徳地 種吉
 大石 儀平治 相澤 三五郎
 松本 龜之助 菅原 竹之助
 瀧山 新太郎 吾妻 卯吉
 佐藤 辰五郎 小野 重二郎
 河合 太三郎 宮崎 武美
 水野 準治 佐瀬 吉之丞
 小野 田信藏 田村 秀司
 △足寄村 (村長) 平澤 菊松
 薄井 小左衛門 大原 龍藏
 野中 常勝 小尾 由平
 薄井 寅次郎 鷲足 末治

神戶海上火災 保險出張所長	多田 眞吾	住友生命保險 札幌支店長	本澤 貞一	昭和生活相互 札幌支店長	島村喜三郎
日本海上火災 札幌駐在所長	藤井 民長	富士生命保險 札幌支店長	早川徳治郎	富國製糖株式 札幌支店長	高橋 昌義
日華生命支店長	淺石 敏	北海道生命保險 札幌支店長	龜谷重太郎	北海製糖株式 札幌支店長	井出 耕作
國華徵兵支店長	神山 雅孝	片倉生命保險 北海道支店長	工藤竹五郎	三星藥品株式 札幌支店長	濱中 榮作
三井生命支店長	坂 榮吉	野村生命保險 札幌支店長	櫻井 虎雄	札幌燒酎株式 札幌支店長	笠原 貞藏
大平生命支店長	飯島 信光	有隣生命保險 札幌支店長	折井 勘一	札幌化學(琴似) 札幌支店長	本田 敏一
福壽生命支店長	田中 半一	安田生命支店長	小田 義人	帝國生命保險 札幌支店長	小澤 濱次郎
日本簡易火災 保險出張所長	中村 良雄	前川生命支店長	筒井 和作	札幌支店長	高橋 俊章
明治生命保險 札幌支店長	丸井 旭	愛國生命支店長	中野 定二	住友北日本 札幌支店長	石黑 直之
大正生命保險 札幌支店長	香川 香太郎	千代田支店長	草野 順平	礦業所長	小池 寶三郎
大同生命保險 札幌支店長	木村 虎雄	板谷生命支店長	西本 景次	明治製菓株式 札幌支店長	松山 潛藏
太平洋生命保險 札幌支店長	飯島 信光	東邦火災保險 札幌支店長	龜井 幸一	王子製紙株式 札幌支店長	太田 武雄
大平火災海上 札幌駐在所長	安井 貴一	札幌支店長	岡 久次郎	江別工場長	深尾 直養
太陽生命保險 北海道支店長	大志田 長五郎	帝國海上火災 札幌支店長	小澤 喜一	同山林出張所長	榮口 正輝
第一徵兵保險 札幌支店長	山内 寛治	朝日海上火災 札幌出張所長	安藤 亮	大日本火災 札幌支店長	谷垣 修治
第一生命相互 札幌支店長	高杉 政治	共同火災保險 札幌駐東所長	宮崎 又郎	發電所所長	小熊倉次郎
東洋火災保險 札幌出張所長	高橋 吉彌	新日本火災海上 札幌支店長	岩崎 透	小樽木材株式 (琴似)會社社長	管野 嘉道

千代田生命保險 北海道支店長	草野 順平	北海製糖株式 札幌支店長	井出 耕作
板谷商船會社 社長	板谷 宮吉	三井生命保險 札幌支店長	坂本 勇松
犬上商船會社 社長	犬上慶五郎	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
北日本汽船會社 社長	森田初三郎	富國火災海上 保險札幌支店長	坂本 勇松
常務取締役	石塚清三郎	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
北海道拓殖銀行 札幌支店長	松野 健二	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	石村藤太郎	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	下田喜久三	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	伊藤家四郎	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	星野喜一郎	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	小 榮	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	吉末 三郎	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	堀内孫十郎	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	鈴木 伸夫	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	梅村時太郎	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	阿部 半平	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	高橋 哲	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	小林 謙作	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人
岩内支店長	大町 政利	安田生命保險 札幌支店長	小田 義人

北海道銀行 頭取	中山 豊	戸田物産支店 住友支店長	吉田宇三郎
安田銀行支店長	山根 高遠	北海道瓦斯 小樽支店長	豊島虎太郎
拓殖銀行支店長	木下 武彦	丸ノ口商店 北海製糖株式 札幌支店長	田付頑太郎
十二銀行支店長	名川 健吾	北海製糖株式 札幌支店長	野口喜一郎
中越銀行支店長	本吉 忠榮	清水商事社長	渡邊 干城
橫濱正金銀行 小樽支店長	菊澤 貞雄	三榮商店社長	清水孫四郎
函館貯蓄銀行 小樽支店長	入江 清治	北海製糖株式 札幌支店長	森 久則
泰北銀行頭取	藤山 良三	壽原商事社長	壽原英太郎
不動貯蓄銀行 小樽支店長	宮本朋一郎	北海道炭礦汽船 賣炭所所長	栗原 寛
北海道商工銀行 常務取締役	米道彌太郎	昭和石炭會社 小樽支店長	石井 良藏
北海貯蓄銀行 小樽支店長	石戸 政則	日本郵船支店長	松尾 豊實
三井物産會社 小樽支店長	西川 憲造	專務取締役	嶋谷 俊郎
三菱礦業支店長	古村 誠一	藤山海運會社 取締役	藤山 良三
三菱商事支店長	久志本常雄	小樽無盡會社 社長	壽原重太郎
北海製糖株式 常務取締役	有賀 篠夫	大成商事會社 取締役	杉江仙次郎
小樽集鱗會社 社長	稻葉林之助	拓殖無盡會社 小樽支店長	松井 元
湯淺貿易出張所 小樽營業所長	大村 周策	北日本無盡會社 小樽支店長	四宮重太郎
日産化學工業 小樽營業所長	京坂 重雄		伊藤光太郎

合同漁業會社 代表取締役	西村 有作
共成株式會社 常務取締役	宮下 外吉
湯淺木材支店 北海電力電氣 小樽支店長	植松 健
日本通運會社 小樽回漕所長	菅野 修藏
北海道運送株式 專務取締役	福留 只二
小樽運送會社 川崎汽船出張所 山下汽船出張所	寺田 省歸
小樽海運會社 小樽定山溪 自動車道會社	林 松枝
小樽郊外自動車 會社社長	石原 潔
丸井今井商店 大國屋小樽支店 曲キ河野吳服店	嶋谷 俊郎
三井生命保險 小樽支店長	中木伊三郎
富國火災海上 保險小樽駐在所	宮田 英次
安田生命保險 小樽支店長	金榮 西吉
安田生命保險 小樽支店長	河野林治郎
板谷生命保險 北海道支店長	坂本 順允

池澤商店代表者	池澤 憲一	大成株式會社	大岩庫之助	伊藤組木工工場	長谷川 亮	帶廣運送社社長	窪川 利長
山崎商店出張所	長谷川初治	北海木材會社	寺嶋 清司	北海道銀行美幌支店	伊藤 俊衛	帝國製麻會社	淺野吾三郎
北海道銀行	中野虎之助	蟹罐詰合同	稻垣 龍	帝麻製線所	高橋 節雄	十勝自動車會社	野村 文吉
紋別支店	賜目 克己	根室蟹罐詰會社	碓氷勝三郎	雄武若狹木工場	若狹 友治	大印自動車會社	名畑仁太郎
昭和劇場社長	古屋 正氣	北海道昆布輸出組合理事	川端平三郎	日本製業北陸鐵	石澤 久	社	
北洋水產工場	島谷由太郎	根室海產物會社	田中多三郎	千島製業會社	建部 弘	日本肥料店專務	高田 義雄
秋田木材會社	箕川千代治	貝類罐詰社長	山本國之助	帶廣、釧路市・十勝、釧路國	村井彌三治	同專務取締役	荒井 信治
津別運送社	岩倉 梅吉	共同運輸專務	瀧 千里	帶廣支店	河合 邦吉	同專務取締役	仁井 旭
北海木材工業	織作伊之助	興北產業社長	安藤 石典	十二銀行支店	吉川 一郎	同專務取締役	中木伊三郎
北海道拓殖銀行	梅木 郁藏	根室乘合自動車株式會社	佐野忠三郎	北門銀行支店	井出 光宅	同專務取締役	日野 元治
斜里支店	宮本 行雄	木村百貨店社長	木村兵右衛門	拓殖銀行支店	服部 信一	同專務取締役	松方 正熊
斜里農林拓殖	山内 輝正	千島製材(泊)	山本國之助	同第二支店	小山 良治	同專務取締役	窪川 利長
北見水電會社	柳田 鐵三	昭和美製材(泊)	田中政次郎	安田銀行支店	佐藤 龜太郎	同專務取締役	山本與七郎
斜里營業所	梅谷 周造	日本水產會社	前田 綱次	北海道製糖會社	菊池 武夫	同專務取締役	那須 正夫
根室港倉庫會社	布施 慎一	遠洋捕鯨會社	藤原 一	同取締役	丸山 潤三	同專務取締役	天城 章
根室定溫倉庫	小林 清	擇捉水產會社	中山 嘉藏	同取締役	奧野 小四郎	同專務取締役	桐村 高尙
株式會社	西垣 董一	別飛工場代表	村井 捨吉	同取締役	庄島 鹿六	同專務取締役	木田 正信
根室賣炭所	八木安太郎	栖原紗那支店	森泉 成一	同取締役	能瀬 亥三武	同專務取締役	加來 彦太郎
根室共同倉庫	太田 省三	知床製糖會社	吉野 直記	同取締役	鈴木 義春	同專務取締役	彌田 榮吉
安田銀行支店	山下 亮輔	丸力醬油醸造	石井 幸八	同取締役	藤本 長藏	同專務取締役	小島 濱一
根室拓殖軌道	柳田 鐵三	置戸石井木工場	石橋 留吉	同取締役	岡部 義雄	同專務取締役	津山 清秀
會社支配人		石橋木工工場		同取締役		同專務取締役	
根室汽船會社				同取締役		同專務取締役	
根室海運會社				同取締役		同專務取締役	

日室鐵業會社	西原 儀一	同事務主任	木村 昇	瓦斯會社社長	兩角 榮治	北海道拓殖銀行	齋藤 亞倫
十勝鐵業會社	桐村 高尙	同別保礦長	八頭司 佐六	同取締役	館 德藏	支店	小田島 重治郎
明治製糖會社	笠原 約瑟	同事務主任	中山 傳義	同取締役	渡邊 和吉	支店	高田 良作
清水工場	野口喜一郎	同事務主任	宮崎 芳作	同取締役	松本 敦雄	支店	高木 謙五郎
新田ベニヤ會社	淺野 一夫	同事務主任	清水 源作	同取締役	尾崎 政範	支店	大塚 良敦
廣尾電氣社長	船山 美雄	同事務主任	栗林 定四郎	同取締役	淺野 鐘太郎	支店	藤江 才助
同專務取締役	生本半三郎	同事務主任	淺井 春太郎	同取締役	新田 八郎	支店	小野寺 慶藏
同取締役	生本半三郎	同事務主任	清水 源作	同取締役	丸山 潤三	支店	田中 清一
極東煉乳會社	野村 文吉	同事務主任	久野 岩治	同取締役	丹波 勝次郎	支店	山田 武夫
清水倉庫社長	阿部 駿	同事務主任	板垣 幸吉	同取締役	德光 須々也	支店	磯田 一治
清水製材會社	林 欽治郎	同事務主任	鈴木 宗竹	同取締役	西川 政一	支店	小野寺 新平
株式會社清水座	生本半三郎	同事務主任	尾崎 政範	同取締役	河合 庄作	支店	志賀 智
清水自動車會社	阿部 駿	同事務主任	小林 勝助	同取締役	馬場 定市	支店	河野 高慧
清水魚菜市場	越村己之吉	同事務主任	坂田 藤五郎	同取締役	金澤 定市	支店	奧村 勇次郎
北海道拓殖銀行	林 喜平	同事務主任	奧田 清一	同取締役	馬場 佐治	支店	松浦 三平
十二銀行支店	前田 正晴	同事務主任	小西 政之助	同取締役	深谷 助太郎	支店	弓田 卯太郎
安田銀行支店	越村己之吉	同事務主任	渡部 重秋	同取締役	中村 小三治	支店	中本 省三
北海道銀行	小堀 巖	同事務主任	常松 一	同取締役	志賀 敏治	支店	江連 定一
開發所	大久保 武利	同事務主任	古川 一	同取締役	志賀 敏治	支店	伏木 林二
同庶務課長	杉浦 正資	同事務主任	三關 福一	同取締役	志賀 敏治	支店	太宰 孝吉
同賣炭專務	富野 清	同事務主任	白杵 常次	同取締役	志賀 敏治	支店	
王子製紙會社	間瀬 三郎	同事務主任		同取締役		支店	
鋼路工場		同事務主任		同取締役		支店	
鋼路鐵業所		同事務主任		同取締役		支店	

保田 藤作 大野 順末
大橋 德太郎 杉村 富作
秋山 五郎

中學校長

師範學校 上田 光曦
大泊 中學 中江 時助
豐原 中學 瓜田 友衛
眞岡 中學 谷内 讓
工業學校 田中正五郎

高等女學校長

豐原 高女 福山 惟吉
大泊 高女 中澤 信治
眞岡 高女 青木益太郎
泊居 高女 花田 康三

公立高等女學校長

敷香 高女 松尾 重壽
惠須取實科高女 河田 實
知取實科高女 長尾 政雄

實業學校長

豐原商業學校 山崎 正孝
落合商業學校 佐々木要藏
大泊商業學校 伊藤 亨
眞岡商業學校 北田 好夫
泊居商業學校 清水 敏一

知取工業學校 山本 兵三
敷香商業學校 金谷 菊松
惠須取商業學校 伊吹 健治
樺太廳水產學校 八島 興信

司法

樺太地方裁判所(豊原) 白田 潔
所長 喜多川 元
部長 樋山 良廣
監事 吉田 勝
監督判事 中島 大智

知取區裁判所 小林 善作
監督判事 五十嵐治孝
眞岡區裁判所 益子源四郎
監督判事 子安 喜市

刑務所

樺太所長(豊原) 津久井作司
眞岡支所長 淺川 齡吾
札幌地方專賣局樺太出張所

其他官署

稅關 大泊支署長 淺井 庫吉
眞岡支署長 船水 弘一

麻内局局長 七戸 福松
宗仁局局長 佐々木寛治
十和田局局長 林 寅藏
白主局局長 佐藤藤太郎
南名好局局長 石田 常勝
眞岡北濱局局長 伊藤 榮治
蘭泊局局長 橋本 忠雄
廣地局局長 伊與田爲資
逢坂局局長 廣瀬 貞
二股局局長 柴内 道三
野田局局長 谷川 時藏
小能登呂局局長 淺川 喜八
久良志局局長 穴澤 清藏
久春内局局長 田川 豊吉
珍内炭山局局長 安江 秀一
留久志局局長 會田 健吉
寶澤局局長 伊藤 義内
名寄局局長 古川 辰治
追手局局長 矢田部 崇
大榮局局長 羽生彦之進
大榮局局長 中島 富藏
鶴城局局長 太田 精一

名好局局長 堀口 芳松
安別局局長 菊田 雄藏
惠須取元町局長 小田 正作
大平局局長 板谷 勇一
西棚丹局局長 石内助太郎
塔路局局長 市村 多默
上惠須取局長 市村 多默
沃内局局長 蒲生 宗吾
諸津局局長 扇谷富次郎
天内局局長 大堀五左衛門
北小澤局局長 河上 佐元
元泊局局長 渡部 助治
登帆局局長 湯淺 喜一
知取局局長 三浦小四郎
馬群潭局局長 佐藤 慶藏
樺保局局長 山田 準造
知取濱町局長 山本 繁作
敷香局局長 大和 榮三
内路局局長 元山 多一
泊岸局局長 下村 利則
新問局局長 青木 金彌
上敷香局局長 飯塚潭之助
内川局局長 眞鍋 直市
保惠局局長 三谷 益雄
氣屯局局長 三浦 儀平

多來加局長 澤谷政次郎
散江局局長 平林 三男
野頃局局長 秋濱 勇
淺瀬局局長 寺山 善藏
小泊局局長 榊森 政吉
無線電信局 柳澤 廣市
大泊局局長 阿部 富吉
惠須取局長 廣吉
官幣大社樺太神社(豊原) 吉野 直人
宮司 吉野 直人
樺太護國神社(豊原) 吉野 直人
受持神官 吉野 直人
縣社豊原神社(豊原) 伴 雄三郎
縣社亞庭神社(大泊) 山田 信義
縣社眞岡神社 湖山 寛
社司 湖山 寛

市會議長 四日 榮造
同副議長 杉本 孝作
木村 政勝 駒村 健三
山口 淳雄 須賀清次郎
出口 乙吉 工藤久五郎
中山 清基 佐々木三之助
黒如龜太郎 筒井 皆衛
高橋彌太郎 關 捨六
等力 了 佐々木 豊一
太田 鎮雄 尾崎 與作
氏家 政治 作間 三男
林 春助 一柳 直一
井坂 林平 市川與一郎
柳本徳次郎 八卷 重郎
的場岩太郎 高田 安己
菅野 一 杉本 孝作
小田島末藏 田中 久雄

町村長と議員
村入 役長 大場節太郎
中井戸 芳太郎 常見 庄司
金高 勘六 吉岡 信雄
廣瀬 國康 安田善次郎
川畑 勘造 藤林 俊基
町田 房藏 寺井 憲雄

所長 本間榮太郎
大泊販賣所 拓植 五郎
眞岡販賣所 桑原留之助
泊居販賣所 熊谷 哲郎
惠須取販賣所 野村 台一
知取販賣所 野村 建司
敷香販賣所 大竹 正司
郵便局 伊與田章一
豊原局局長 山形 豊吉
大泊局局長 中山 吉秀
眞岡局局長 幸谷 健吉
泊居局局長 齋藤安太郎
惠須取局長 齋藤安太郎
特定郵便局 中島 市治
小泊局局長 田村 勉
並川局局長 田村 毅
川上炭山局長 福永 毅
豊原西一條局長 若林 三郎
豊原東五條局長 大橋清三郎
榮濱局局長 細入益太郎
美保局局長 吉田 忍
白浦局局長 三浦昌三郎
大谷局局長 小松 四郎
落合局局長 龜谷 忍
眞岡局局長 柿崎 一精
野寒局局長 高橋專三郎

小田寒局長 田中 冲
大泊楠溪局長 馬場 三雄
女麗局長 小川 靜
大泊榮町局長 目黒乙治郎
千歳局長 肥田 政彦
大泊本町局長 岡野 貞夫
長濱局局長 村松輝太郎
遠淵局局長 市毛子之介
彌滿局局長 後藤 一雄
札塔局局長 鈴木 文吾
富内局局長 葛西直之助
喜美内局長 樋口 弘平
留多加局長 鈴木桂次郎
雨龍局局長 清水雅一郎
内砂局局長 後藤 良衛
多蘭内局長 中山恭太郎
泥川局局長 中村 辰雄
大豊局局長 鈴木 春二
知志谷局長 瀬崎 巖
本斗局局長 曾根勘太郎
海馬島局長 西谷 武雄
内幌局局長 熊川 知義
南名好局長 石田 常勝

○ 兒玉 正雄
高橋源左衛門

村長(名譽職)
加藤要一郎

助 役
千葉多賀治

收 入 役
根本 一次

加藤要一郎
川中 福治

高橋熊次郎
梅野 武

本山 昂
岩村 喜作

福永 源吾
濱田 巖

谷川常太郎
富山 治

石川 象吉
今井鴻一郎

村 入 役
池野寅次郎

横澤 義徳
細入益太郎

前川 乙吉
大鋸英太郎

木村 九一
青木吉太郎

本間 慶一
高橋喜代吉

塚本月治郎
柴田 多助

田中 沖
前川 乙吉

榮濱郡白縫村
貫和 清松

秀城市 入 役
阿波 重雄

柳沼 才二
柳屋 武雄

井上勝治郎
杵淵 竹藏

鈴木順四郎
春日 成

内藤 兵作
河原仁太郎

○ 大泊郡大泊町
武田與八郎

伊藤 英吉
高杉 定義

龍田 泰
田邊庄次郎

白岩 龜二
尾形市兵衛

熊谷 堅藏
田邊庄次郎

大野 順末
伊藤 迪

小笠原 源次郎
板倉 敏雄

竹内 重吉
目黒乙治郎

吉田 清
吉川 平八

早川權兵衛
中村久五郎

村上 哲朗
梶 榮太郎

白尾 龜二
高橋一二七

佐々木勝造
永森 誠次

堂前 外吉
榑野七之助

岡野 啓朔
川尻 敬助

濱本 盛六
寺澤運治郎

○ 大泊郡千歳村
高橋安兵衛

番場 長八
青山 豊

長谷山竹藏
山下福次郎

志摩松次郎
吉田茂四郎

岸田榮太郎
保古 重信

田村 俊一
本多松次郎

○ 大泊郡深海村
富岡 彦松

小林勝太郎
矢口 長藏

佐々木豊喜
宇田居定一

會見市太郎
横内豊次郎

榑 林之助
泉 嘉七

田中豊太郎
植村文之丞

坂本三太郎
德澤 吉英

葛岡 丑吾
松田與太郎

平野 龜吉
磯部 芳藏

齋藤 留吉
牧野金五郎

大淵幸五郎
今由 松

中野萬之助
寺澤 太七

松田 政二
高島彌太郎

○ 長濱郡遠淵村
佐藤 寅三

酒屋 政吉
佐藤 政治郎

横山 幸一
市毛子之介

佐藤 海助
福井清太郎

小松宇一郎
大家長四郎

○ 長濱郡知床村
砂金養治郎

渡邊彦次郎
中山 吉郎

古川 勳
齋藤 寅一

笹川 治郎
小松芳右衛門

○ 富内郡富内村
根本 直吉

增井啓治郎
經澤十之助

坂本 力
花谷 淺次

○ 長濱郡廣地村
菅原 朗澄

柴田 民造
藤森 朗澄

○ 眞岡郡蘭泊村
長嶺 崇

森脇 唯芳
吉本 堅一

岡田八市郎
渡邊 正治

佐藤敬次郎
木村 安平

坂田 藤吉
築 岩多

樋口 留八
濱野 志道

○ 留多加郡留多加町
戸塚金治郎

高橋勝次郎
橋本吉次郎

服部 直治
岡部惣五郎

樋口 仁平
川田 守興

村松 忠和
國川 善一

生井澤 進
山下 梅司

大西直右衛門
古畑 種吉

堀 五郎太
長瀬 軍司

片山 貞
前田 由藏

山田初太郎
水野 象藏

仁木島卯之助
後藤雄之助

○ 留多加郡三郷村
松本 定藏

鈴木 幸多
中居市三郎

小林清太郎
飯沼 羽市

黒田長次郎
六田作次郎

河合 榮作
堀川 兵松

菅野 省三
神子鳥久治

清水雅一郎
辻 健二

松原 長松
佐藤榮三郎

鳴海 武男
西田 要作

後藤 良衛
伊藤仁三郎

佐々木長四郎
岡田 和助

山岡仁三郎
三上 重吉

池野重太郎
三上 重吉

○ 本斗郡本斗町
古川 重素

大谷 武行
森 清吉

萩野豊次郎
藤森 正隆

奥野長四郎
合田 淺吉

土門爲次郎
田中梅次郎

新目 直人
光野 乙吉

蓬萊谷 清
荒岡弓之助

成田善次郎
濱 桐太郎

藤田淺五郎
渡邊 茂一

山名菊太郎
秋葉 勝彌

佐藤鐵太郎
葛西貞次郎

城岡定太郎
吉澤恕一郎

壺井淺之助
渡邊 伯藏

佐々木憲藏
菅井理三郎

常包 恒太
小島 芳藏

後藤 弘治
柳谷隆太郎

石戸谷洗雄
笹島平太郎

木村萬次郎
今井市三郎

金光 勝助
伊東 文次

藤本 薫
京德 勇藏

○ 本斗郡好仁村
福家 勇

石井 宗美
笠島善太郎

小宮治郎八
藏本 米藏

石田 常勝
渡邊 源吉

熊谷 進
北瀬 與三

庄内利兵衛
鈴木與太郎

○ 本斗郡海馬村
猪原太一郎

池田 精七郎
池田 精七郎

山崎 彌作
佐賀 庄吉

河端清三郎
二見 寅吉

若松 榮吉
加路佐多雄

○ 眞岡郡眞岡町
鳥田 定一

今井 信三
小濱 嘉七

井本能治郎
高森 末吉

阿部 寅七
竹本淺次郎

寺岡 正巳
島田久四郎

田中惣左衛門
吉江友之進

板谷菊太郎
本谷留次郎

合田 亮三
宮本 留吉

可知五一郎
藤田 嘉平

水邊喜一郎
由田與三吉

○ 眞岡郡廣地村
關口柳三郎

柴田 民造
菅原 朗澄

○ 眞岡郡蘭泊村
長嶺 崇

川村 三郎
瀧澤由太郎

成田松三郎
笹森梅次郎

見春與三吉
田中源太郎

高田 松治
吉田 源藏

○ 眞岡郡蘭泊村
阿部 茂雄

吉松作次郎
川村 初藏

白旗喜代藏
志鷹 興

竹谷勇太郎
鎌田治三郎

吉田 豊治
田村勝之助

工藤 豊吉
船生挑七郎

○眞岡郡清水村

山口榮太郎 佐々木藤太郎 青塚與市郎 佐久間新六

○野田郡小能登呂村

道川 忠司 近藤 民藏 岩崎 衡 引地留四郎 吉田清五郎 坪井 浩爾 村田 乙吉 松本 俊一 佐々木卯平

○久春内郡久春内村

今仁梅太郎 石塚 勝治 齋藤龜五郎 赤妻林治郎 丹波 章治 穴田龍太郎

○名好郡惠須取町

石井德一郎 山本清之助 齋藤 梅松 鈴木 桑治 妹尾 森平 矢島 信也 矢島 亮一 黑石 三郎

○野田郡野田町

江良 潔 吉池 力行 川崎 一郎 牧口 友吉 寒河江仁吉 佐渡才之進 本田清三郎 西田 馨 山根 正次 山本 備 幸村 象吉

○泊居郡泊居町

丸茂 英賢 岡山英次郎 金正 勤藏 後藤藤太郎 川崎 吉松 魚谷象次郎 小畑 安吉 三上東九郎 衛藤 文雄 金田 要吉 濱田靜治郎 鈴木虎次郎 奥田 義隆

○久春内郡三濱村

坂本限治郎 三鹿慶次郎 佐々木清助 加川彌十郎 齋藤 松藏 石原 修一 盛 初太郎 菊地 孝一 左京 要馬 矢戸健次郎

○名好郡塔路町

川上 博

○野田郡野田町

田中勇太郎 長谷川又次郎 大庭 彦市 佐藤 年雄 佐藤 卯吉 深本 米藏 岩澤 大武 西田 正一

○泊居郡名寄村

鈴木虎次郎 奥田 義隆

○名好郡塔路町

川上 博

○三上市太郎

野川 瑞穂 阿部 正治 森岡 正之 秋山 初市 船木 浪藏 俞 荻 濂 弘田 好時 黒田 藤義

○元泊郡帆寄村

國木 政雄 村上熊三郎 畑井仁兵衛 山谷進一郎 齋藤 庄藏 村形三九郎 佐々木寸八

○野田郡野田町

松尾 鏡治 加地 秀次 松波 貫二 折戸 惣吉 柏木 藤吉 池田 正三 和平 茂次 佐古 慶二 大久保 藏之助 秋野 豊治 佐藤 政雄 堀 義雄 千葉 常雄 小野 重吉 清野 長松 仲屋 常吉 五十嵐 勇 卷坂大次郎 千葉長兵衛

○野田郡野田町

阿部金三郎 山岸 清藏 渡邊由太郎 上原 繁樹 中井 武雄 上原 定吉 大野善太郎 田森利之助 柴田 清丸

○名好郡名好村

落合 宇七 奥村 節藏 鈴木 義平 鶴見才三郎 久保田清一 藤澤猪三八 山口鐵三郎 金川 親治 堀口 芳松 村川 亮逸

○元泊郡元泊村

松田 一雄 竹田源次郎 長堀 柳市 野畑 庄吉 中里 寅吉 成松 正人 小林 四郎 島中與太郎

○野田郡野田町

松尾 鏡治 加地 秀次 松波 貫二 折戸 惣吉 柏木 藤吉 池田 正三 和平 茂次 佐古 慶二 大久保 藏之助 秋野 豊治 佐藤 政雄 堀 義雄 千葉 常雄 小野 重吉 清野 長松 仲屋 常吉 五十嵐 勇 卷坂大次郎 千葉長兵衛

○野田郡野田町

阿部金三郎 山岸 清藏 渡邊由太郎 上原 繁樹 中井 武雄 上原 定吉 大野善太郎 田森利之助 柴田 清丸

○元泊郡元泊村

松田 一雄 竹田源次郎 長堀 柳市 野畑 庄吉 中里 寅吉 成松 正人 小林 四郎 島中與太郎

○元泊郡元泊村

松田 一雄 竹田源次郎 長堀 柳市 野畑 庄吉 中里 寅吉 成松 正人 小林 四郎 島中與太郎

○野田郡野田町

松尾 鏡治 加地 秀次 松波 貫二 折戸 惣吉 柏木 藤吉 池田 正三 和平 茂次 佐古 慶二 大久保 藏之助 秋野 豊治 佐藤 政雄 堀 義雄 千葉 常雄 小野 重吉 清野 長松 仲屋 常吉 五十嵐 勇 卷坂大次郎 千葉長兵衛

○野田郡野田町

阿部金三郎 山岸 清藏 渡邊由太郎 上原 繁樹 中井 武雄 上原 定吉 大野善太郎 田森利之助 柴田 清丸

○元泊郡元泊村

松田 一雄 竹田源次郎 長堀 柳市 野畑 庄吉 中里 寅吉 成松 正人 小林 四郎 島中與太郎

○元泊郡元泊村

松田 一雄 竹田源次郎 長堀 柳市 野畑 庄吉 中里 寅吉 成松 正人 小林 四郎 島中與太郎

○野田郡野田町

松尾 鏡治 加地 秀次 松波 貫二 折戸 惣吉 柏木 藤吉 池田 正三 和平 茂次 佐古 慶二 大久保 藏之助 秋野 豊治 佐藤 政雄 堀 義雄 千葉 常雄 小野 重吉 清野 長松 仲屋 常吉 五十嵐 勇 卷坂大次郎 千葉長兵衛

○野田郡野田町

阿部金三郎 山岸 清藏 渡邊由太郎 上原 繁樹 中井 武雄 上原 定吉 大野善太郎 田森利之助 柴田 清丸

銀行・會社

樺太共同漁業 日本水産會社 眞岡販賣所 日本油脂會社 樺太同業會社 樺太同業會社 三井物産 香製材工場 平塚常次郎 横山 惠一 鹽澤虎馬雄 渡邊 照平 坂田藤五郎

高血圧 弱衰經神 動脈硬化



▽記憶・根氣が薄らぎのぼせ、めまひに悩む方
▽頭がボケ夜分眠れず耳鳴・肩凝りする方

前記の症状がナゼ起るか。其の原因を診じつめて見ると遺毒や感染毒に酒、煙草の毒等が加はり所謂「ふる血」となつて血液を濁し血行を妨げてゐるのがソモソモの始り。つまり脳の中心部が侵されると神経衰弱、動脈が衰へると硬く化して血圧は昇り僅な外氣の變動にもスグ負けて血管は破れ脳溢血、中風等の重症に倒れねばなりません。此の危険からどししたら逃れられるか。詳細は左記へハガキで申込まれよ。悩める方々早速無代着者百名に限り早速無

錠チルフ

價藥 一十分日一 三十分日二 五十分日五 十分日十

東京市京橋區京橋一の二
古醫學研究所
電話京橋(56)二五八四番・二六三八番
振替口座・東京六五三〇八番



新政治體制

◆近衛首相の聲明

今や我國は世界的大動亂の渦中に於て、東亞新秩序の建設といふ未曾有の大事業に邁進しつつある、この秋に當り世界情勢に即應しつゝ、能く支那事變の處理を完遂すると共に、進んで世界新秩序の建設に指導的役割を果す爲には、國家國民の總力を最高度に發揮してこの大事業に集中し、如何なる事態が発生するとも、独自の立場に於て迅速果敢、且有効適切に之に對處し得るやう、高度國防國家の體制を整へねばならぬ、而して高度國防國家の基礎は強力なる國內體制にあるのであつて、こゝ

國勢

に政治、經濟、教育、文化等あらゆる國家國民生活の領域における新體制確立の要請があるのである。

この要請は一内閣、一黨派、一個人の要請を遙に超えたる國家的要請であり、又何等か特定の政策の爲にのみ必要とされる一時的なる要請でも無く、必要に應じて如何なる政策をも強力に遂行し得る爲の恒常的なる要請である、今我國が、かくの如き強力なる國內新體制を確立し得るや否やは、正に國運興隆の成否を決定するものといはねばならぬ。

かゝる新體制に含まるゝものとしては、先づ、統帥と國務との調和、政府部内の統合及び能率の強化、議會翼賛體制の確立等が挙げられねばならぬ、之等の事項については、政府の立場に於ても鋭意その實現を期しつつある、併しながら、更に重要なものは、之等の基礎を爲す萬民翼賛の所謂、國民組織の確立であつて、こゝに準備會を招請し協議協力を求めんとするものも、

正にこの問題についてである。

國民組織の目標

この國民組織の目標は、國家國民の總力を集結し、一億同胞をして、生きた一體として、等しく、大政翼賛の臣道を完うせしむるにある、かゝる目標を達成するには、全國民がその日常生活の職場々々において、翼賛の實を擧げ得るやうにせねばならぬのである、思ふに從來の如く國民の大多數が、三年か四年に一度の投票により選舉に参加するのみを以て、政治と關係する唯一の機會とするが如き状態にあつては、國民全部が國家の運命に熱烈なる關心を持ち得なかつたのも寧ろ當然といふべきであらう。

國民組織は國民が日常生活において國家に奉公する組織なるが故に、それは經濟及び文化の各領域に亘つて樹立されねばならぬ、即ち經濟においても、文化においても、あらゆる部分がそれら、縦に組織化され、更に各種の組織を横に結んで統合す

るところの全國的なる組織が作られねばならぬ、今日經濟、文化兩方面に於て、政策を樹立する當局者が、國民の實際活動について眞の理解を有せず、又國民の側に於ても、國家の政策決定に無關心であり、かくて取締るものと取締られるものとが對立的關係に置かるゝ如き傾向あるは、正しく萬民翼賛の實を擧ぐべき組織なき處より生まるゝ缺陷である、かく考ふる時、いふ所の國民組織の眼目が奈邊にあるかは自ら明白である、即ちそれは國民をして、國家の經濟及び文化政策の樹立に内面より參與せしむるものであり、同時にその樹立されたる政策を、あらゆる國民生活の末梢に至るまで行渡らせるものなのである、かゝる組織の下に於て始めて下意上達、上意下達、國民の總力が政治の上に集結されるのである。

以上の如き國民組織が完成される爲には、一つの國民運動が必要である、元來、かくの如き國民運動は、國民の間から自發

的に盛り上つて来るべきであつて、政府が此種の運動を企劃指導し、又は之を行政機構化する事は、國民の自發的總力の發揮を妨ぐるの虞があるのである。併しながら、現下の情勢は、かかる運動の自然發生的展開のみを期待するを許さず、且又、下からの運動は動もすれば分派的抗争に陥り、眞實の國民運動となり得ぬ虞がある、茲に於て政府も亦この運動に對して當然積極的に之を育成指導する必要があるのである。

かく觀じれば、國民組織の運動は實に官民協同の國家的事業であり、全國的なる國民翼賛運動に外ならぬのである、而してそれは、單に狭き意味における精神運動ではなく、實に政治理想と政治意識の高揚を目的とするものである、これがために、廣く朝野有名無名の人材を登用して運動の中核體を組織し、そこに強力なる政治力と實踐力を結集せしむることが、この運動に不可欠の要件となるのである。

かくの如く、この運動は高度の政治性を有するものではあるが、それは斷じて所謂政黨運動では無い、政黨は抑々個別的分化的なる部分の利益、立場を代表することをその本質の中に藏してゐる、勿論部分なき全體は無いのであるから、政黨がその中に部分的要素を持つといふことのみを以て之を非難するは必ずしも當らぬ、殊に經濟活動の基礎が自由主義の原理にあつた時代においては、かかる政黨の存立もその意味があつたのであつて、我國に於ても、政黨が藩閥官僚勢力に對し民意を伸張したことは之を認めねばならぬ、併しながら同時に政黨の過去における行動が動もすれば、我議會協賛の本然の姿から逸脱する憾みの少くなかつたことも亦之を否定すべくもない。

國民組織の運動は、かかる自由主義を前提とする分立的政黨政治を超越せんとする運動であつて、その本質はあくまで舉國

的全體的公的なるものである、それは國民總力の集結一元化を促進することを目的とするものであり、従つて、その活動分野は、國民の全生活領域に及ぶものである、國民組織運動はその故に、假りに民間運動として始められた場合に於ても、既に本質上は、從來の概念に於ける政黨運動ではない、むしろ政黨も凡てを包括して公益優先の精神に歸せしめんとする超政黨の國民運動たるべきものである、況やこの運動が政府の立場に於て爲さるゝ場合には、それは如何なる意味に於ても政黨運動ではあり得ない、苟も廟堂に立つて輔弼の重責に任ずる者は、あくまで全體の立場に立つものであつて、自ら部分的對立的抗争性をその本質の中に含む政黨運動に従事することは許されぬものと考ふるのである。

ればと言つて所謂一國一黨の形をとることも亦到底許されぬ、何となれば一國一黨は一つの「部分」を以て直ちに「全體」となし、國家と黨を同一視し、「黨」に反對するものを以て國家に對する叛逆と斷じ、「黨」の権力的地位を恒久化し、黨首を以て恒久的なる權力の把持者となすことを意味するからである、かかる形態が他國に於て如何に優秀なる実績を示したりとはいへ、その形態を直ちに日本に於て認むることは、一君萬民の我國體の本義を紊るものと謂ふべきである、我國に於ては、萬民齊しく翼賛の責に任ずるのであつて、一人若くは一黨が權力によつて翼賛を獨占することは絶対に許されぬ、萬一翼賛の意思に於て異なるものありとすれば、それこそ、聖斷に仰ぐべきであり、一度び聖斷の下されたるときは、凡ての臣僚が「承詔必謹」の大義に歸一することが日本政治の眞の姿でなければならぬ、要之、新なる國民組織は、國民があらゆる部門に於て、大政

基本國策大綱

近衛内閣は昭和十五年八月一日、大變動機にある世界情勢

翼賛の誠を致さんとする國家的且恒常的なる組織である、素より之が完成は至難の事に屬するとはいへ、而も政府は之を以て時艱を克服するに最善の途なりと信ずる、昭和十五年二月十一日には畏くも、大詔を換發せられ、非常の世局に際し、我々臣民の處すべき道を明かにし給うたのであるが、政府は茲に、聖旨を奉戴し、挺身して、かかる國民翼賛運動の先頭に立ち、現下我國の直面する大試鍊を突破して、以て皇運扶翼の重責を完了せんとするものである。

世界は今や歴史的一大轉機に際會し、數個の國家群の生成發展を基調とする新たな政治經濟文化の創成を見んとし、皇國亦有史以來の大試鍊に直面す。此の秋に當り、眞に肇國の大精神に基づく皇國の國是を完遂せんとせば、右世界史的發展の必然的動向を把握して、庶政百般に互り、速かに根本的刷新を加へ、萬難を排して國防國家體制の完成に邁進することを以て刻下喫緊の要務とす。依つて基本國策の大綱を策定すること左の如し。

根本方針

皇國の國是は八紘を一字とする肇國の大精神に基づき、世界平和の確立を招來することを以て根本とし、先づ皇國を核心とし、日滿支の強固なる結合を根幹とする大東亞の新秩序を建設するに在り。

之が爲め、皇國自ら速かに新事態に即應する不拔の國家態勢

國防及び外交

現下の外交は大東亞の新秩序建設を根幹とし、先づ其の重心を支那事變の完遂に置き、國際的大變局を達觀し、建設的にして且つ彈力性に富む施策を講じて國運の進展を期す。

國內態勢の刷新

内政の急務は國體の本義に基づき庶政を一新し、國防國家體制の基礎を確立するに在り。之が爲め左記諸件の實現を期す。

- 一 國體の本義に透徹する教學の刷新と相俟ち、自我功利の思想を排し、國家奉仕を第一義とする國民道德を確立す。
- 二 強力なる新政治體制を確立し、國政の綜合統一を圖る。
- イ 官民協力一致各々其の職域に應じ、國家に奉公することを基調とする新國民組織の確立
- ロ 新政體制に即應し得べき議會翼賛體制の確立
- ハ 行政の運用に根本的刷新を加へ、其の統一と敏活とを目標とする官界新態勢の確立
- 三 皇國を中心とする日滿支三國經濟の自主的建設を基調とし、國防經濟の根基を確立す。
- イ 日滿支を一環とし、大東亞を包容する協同經濟圈の確立
- ロ 官民協力による計畫經濟の遂行、特に主要物資の生産、配給、消費を貫く一元的統制機構の整備
- ハ 綜合經濟力の發展を目標とする財政計畫並びに金融統制の確立強化
- ニ 世界新情勢に對應する貿易政策の刷新
- ホ 國民生活必需物資特に主要食糧の自給方策の確立
- ヘ 重要産業特に重、化學工業及び機械工業の劃期的發展
- ト 科學の劃期的振興並びに生産の合理化

チ 内外の新情勢に對應する交通運輸施設の整備擴充り 綜合國力の發展を目標とする國土開發計畫の確立

四 國是遂行の原動力たる國民の資質、體力の向上並びに人口増加に關する恒久的方策、特に農業及び農家の安定發展に關する根本方策を樹す。

五 國策の遂行に伴ふ國民犧牲の不均衡の是正を斷行し、厚生の諸施策の徹底を期すると共に、國民生活を刷新し、眞に忍苦十年時艱克服に適應する質實剛健なる國民生活の水準を確保す。

國防國家建設

世界情勢の變轉に基づく國防國家建設の必要と國防國家の歴史的發展

前世界大戰は前後五ヶ年に互る長年月を費し、一千萬の犠牲と四千億に上る國幣を灰燼に歸せしめた、大戰争であつた。しかし結局英佛側の勝利に歸したため、世界の覇權は依然英佛の

手に留まつた。戦争の結末としては、ドイツの持つ貧弱な植民地を處分し、國際聯盟監督下に弱小民族國家が生れたが、これも英佛の前衛的役割のものに過ぎなかつた。當時わが國は日英同盟の關係もあり、聯合國側に屬し、或ひは青島に、或ひはシベリアに兵を進め、相當の犠牲を拂つたのであるが、最終の結果として赤道以北の舊獨領たる南洋群島の外は何ものも得なかつたと云ひ得るのである。

いづれにしても前世界大戰當時のわが國は、全く戦争景氣に浮かれ、何等國家百年の大計を立て得なかつたばかりか、反對にますます歐米文化の糟粕だけをなめて後日の苦勞の種を作つたに過ぎなかつた。併しながら歴史の廻轉は早く、今再びこゝに歐洲戦争に際會した。我々としては、深く第一次大戰後に於ける國民的怠慢を反省すると共に、第二次大戰に於けるドイツの活躍の由つて來るところに鑑み、皇國百年の計としてこの際何が必要かを考へ、この目的達

成のための犠牲や勞苦を厭うてはならない。

今回の歐洲戦争は前大戰と同様、獨英の歐洲爭覇戦である。しかし今回はドイツの方が前回に比べて政治、經濟、軍事等すべてに有利に展開してゐる。その重大な原因の一つは、二正面作戦となるべきソ聯と妥協した外交的勝利、強敵フランスを見事にやつつけた軍事的勝利にある。

世界歴史を繙いて見た時、およそイギリスくらゐ永く世界の覇權を握り得た國はない。しかし今度は歐洲戦争と東亞に於けるわが支那事變と相俟つて、大英帝國の世界支配體制を搖がせ、盛衰世の習ひとはいふが、僅か二十年にしてかくも歴史が變轉するかと思ふ時、うたゝ感慨無量なるものがある。

而して戦後の平和は、昔のいはゆる自由主義に立脚する平和時代とちがつて、世界は強國を中心とする數個の國家群に分たれ、國家總力をますます昂揚し

て世界競争場裡に於て勝利を占めんと努めるものと考へられる。従つてこの強國なるものは從來の單なる一等國の觀念より飛躍した綜合的國家、つまり強國を中心とした數個の國家群が單位となるわけである。例へば歐洲はドイツを中心としフランス、ベルギー、オランダ、ポーランド、ノールウェー等の國がドイツ政府の計畫に従つて軍事、經濟等の分野を擔任することに

なるのではないかと想像される。

凡そ一國の獨立、永昌は、昔からいはれるところの富國強兵にある。今日では、強兵富國であると云つた方が適當であらう。とかく富國となれば弱兵となり、強兵となれば貧乏國であるといふやうに、うまく行かないのが世の中である。今こゝに國防國家の意義を考へる前に、先づ戦争に對する我々從來抱いて居つた考へ方を再検討してみることが必要であると思ふ。

從來我々は戦争なるものを、人類の平和生活を破壊する一時

的變體の現象であると考へてきた。そして戦争準備は擧げて軍人に一任してゐた。勿論純作戦的なことは専門の軍人でなければ出来ないのであるが、それが近代戦の趨勢では武力戦争の規模がすばらしく大きくなつて、それに參加する軍の兵力、軍の科學的裝備の數量が非常なものになつた。従つてこれに對する一國の産業力、延いては、經濟力、人的資源の良否等が、武力戦争の重要な要素となつた。

一方戦争の手段方法も、武力戦争に呼應して經濟封鎖戦や思想戦等が盛んに行はれる、複雑多岐な國家總力戦となつてきた。しかもそれはいざ戦争となつてから準備したのでは間に合はない平時から一朝戦争になつた場合にも差支へないやうに、ちやんと準備しておかなければならぬと云ふことが痛感されるやうになつた。現に今度の歐洲戦争にドイツでは、今日あることを覺悟して平時からちやんと準備をさし、怠りなかつたのであるが、フランスも英國もその準備

に立遅れた。

従つて、從來のやうに戦争になつてから、やれ動員だ、やれ戦時經濟統制だといつて始めてゐては遅い。平時から戦時と同じやうに國家の状態を整備しておかなければならぬと云ふのが最近國防國家論が擡頭して來たわけである。

戦争は一國を盛んにするか亡ぼすか、一國、一民族最大の運命を決するものである。従つてその教訓なるもの最大であつてこれが次の時代の人心を支配するやうになる。そこで今日までドイツが勝つた原因は何にあるかといふことが眞剣に検討されるのである。

それは戦争のため國家がよく整備せられて居つたことに歸着する。この教訓によつて各國共に次への世界情勢に對處するた

め、政治に經濟に文化に、再検討を加へて來る傾向が生れる。即ち國防を主眼として國家態勢を有機的に統一整備することに、これを人體に譬へると、身體の各組織がすべて一貫せる

神經指揮の下に有機的に活動してゐるといつた具合にするわけである。

今國防國家の理想型とはどんなものかと考へてみると、先づ第一に軍備が、質量共にその國是遂行を保障するに充分なるものであること、戦争遂行を容易ならしめるための政治が一元化され強力化されてゐること、經濟的には公益優先主義によつて組織され、國民生活が確保されるやうに運営されてゐること、資源的には自給自足が可能であること、工業的には軍需を充分に充足しうること、科學的には敵の意表に出で得る發明能力を有し、思想的には國民の精神を健全に發展せしめ得る資質を有することなど、廣義國防の要素が立派に整備せられた國家が理想型であると云へよう。

ソ聯と我が國の國防國家要素と我が國の特質

今、ソ聯邦に就いて見るに、彼は國防國家建設の創造者だけあつて、各種國防要素の充實整備に向つて邁進してゐる。實に

第一次、第二次、第三次の五ヶ年計畫なるものは國防國家建設そのものに外ならない。その擁する陸軍軍備は數量に於て世界第一であり、裝備の近代化も著々と向上してゐる。軍需資材は殆んどその領域に於て求め得られ、五ヶ年計畫遂行によつて軍需産業も今日では獨立し得るに至り、思想は獨特の共產主義教育によつて一應國民思想の統一に成功してゐると見なければならぬ。その特色の最たるものは、徹底せる專制政治によりスターリンが最強の政權力を把握してゐることである。スターリンの意のままにソ聯は動かざるを得ないことである。しかし、そこに又幾多重大なる精神的缺陷がある。人間を機械化し物質化し、人間の生活を無視し、わが家族國家の持つやうな強みを缺いてゐる。

次にアメリカを見るに、彼はその富力正に世界第一、世界はアメリカのものやうに考へてゐる。資源に富み、文化は發達し、科學は進み、國防は太平洋大

西兩洋のため極めて安定してゐるにもかゝらず、世界第一の海軍力を建造してゐる。國防國家的見地から見れば各種の要素に恵まれてゐる。

わが隣邦ソ聯と米國は、共に國防國家的に見て今日までのわが國よりは物的方面に於て優れてゐたことは争はれない。しかし今後わが東亞共榮圏が確立されたならば、各種要素に於て彼等に優るとも劣るものはない。特に精神的要素の優越せることについては、今更ら茲に述べる必要はない。又ソ聯や米國の如き複雑せる民族問題は極めて少い。わが皇道に即する民族政策は着々成功しつつある。朝鮮、臺灣、滿洲は既に皇化に霑ひ、今また新支那は建設せられんとしてゐる。この東亞民族が皇道を中心とし、東亞共榮圏を精神的に確立せしめることは、國防國家建設の見地から極めて重要な基本事項であり、ソ聯、アメリカのプロツクに對する唯一の強みといつてよい。

實共に失業をなからしめ、舉國の民がその知識技能に應じて最大の能率を盡し、國の經濟建設及びその運営に協力すべき體制を以て理想とする。

わが國の經濟が、明治以來歐米資本主義經濟體制をとり入れ企業自由なる發展によりわれも人も驚く程わが經濟力が飛躍的に向上し、産業が隆々として振興してきたことは蓋ふべからざる事實である。しかるに世界的情勢が轉變し、經濟がいよいよ經濟戰として廣義國防の重要な一單位を擔當するに至つて到底これを國民個々の自由に放任するを許し得ざるに至つた。即ち國防目的に副ふ如く國內産業を規制するの必要に迫られ、こゝにわが國が輕工業によつて立國しつゝあつたのを國防重工業國へと轉換しつゝあるわけであつた。又貿易をしてその戰時に於ける情勢に適應せしめることも速かに實現しなければならぬ。戰時敵國となる公算多きものに貿易を依存してゐるが如きは、國防國家建設上の一大弱點たるを

るものは、東アジア大陸と西太平洋の陸と海とに亘るもので、これを防衛するのがわが陸海軍の任務であるといふことにな

この東亞共榮圏確立を脅かすものが、隣邦であるソ聯であり米國であることも今さら説明の要はない。尙ほ英國もこれに加へなければならぬ。而してソ聯は世界第一の陸軍軍備を擁し米國もまた世界第一の海軍軍備を整備しつゝある。この二大強國に對し、われわれとして是不脅威不侵略の陸海軍を整備することが絶対に必要である。一方プロツク圈内治安の確保のための守備兵力も要る。かく治安警備を遂行しつゝ、世界第一の陸軍を有するソ聯、世界第一の海軍力を有する米國、英國に對しては、わが陸海軍力を充實しなければならぬから並大抵のことではない。

免れない。また國民の士氣維持の見地から國民の經濟上に於ける負擔は公平でなければならぬ。一方に於ては戰時成金が料亭、温泉地を横行してゐるのに、一方に於ては戰時經濟統制のため、その日の生活にも苦しんでゐるやうな状況を放任して置くやうなことは、敵國の思想戰攻撃の前にも弱點を作ることになる。利潤を抑制すれば企業心を抑へ従つて生産力が低下するとは、經濟心理として一應は肯定せざるを得ないが、これは近代人が自由主義に立脚する文物制度に教育され、生活してきたためであつて、この矯正こそ國防國家建設に於ける經濟原理である。しかしこゝに利潤を抑制するといふ眞意は、經營の合理化により、更に國家公益的に能率を向上すべきであるとの意であつていさゝかもマルクス流の考へであつてはならないことを附言する。

次に一國の有する戰爭資源の程度如何は、戰爭遂行上の重大

裝備によるに非ずんば戰勝を確保し得ない。かくの如く東亞共榮圏確立を保障するわが軍備なるものは、その量に於て、その質に於て、劃期的なものを必要とすることになる。世界第一の陸軍力、海軍力を有するソ聯や米國と軍備擴充競争をしていつたならば、到底わが國力が耐へ得ないではないかとの論も起るわけであるが、それは軍備の自主性によつて自ら限度を見出し得る。即ちソ聯の極東に用ひ得る戰力、米國の西太平洋に指向し得る戰力は、その總戰力に比し著るしく制限せられるところの地の利がある。

政治に關する體制 皇國政治の根本理念は申す迄もなく、天皇親政とわが家族制度の特長を十二分に發揮し、完全な家族的生命體を構成することにある。皇國の憲法は勿論それを基本として制定せられたものではあるが、その運営は時日を経るに従つて漸次歐米自由主義文化の模倣に墮し、政治に統

なる要素であることは、今さら喋々を要しないことである。特に近代戰は多大の物資消耗戰であるから、國防産業に要する資源、例へば石油、鐵、石炭、ゴム、錫、銅、磷等が絶対に必要となつた。そこでこれらを自己の勢力範圍に於て獲得しなければ戰時の國防上に重大なる缺陷があるわけである。

文化に關する體制 教育は人間をつくる。教育が一番大事であることは今さら説明を要しない。世界の現状維持國は教育を以

一性を失ひ、現下錯綜する内外の情勢には對應し得ないやうになつた、こゝに政治態勢を綜合強化し、敏速果斷、施政奉行の實を擧げることが喫緊の要務となつた。今次歐洲戰爭に於て優秀なる軍備を擁するフランスの敗北した一大原因はこゝにある。

如何に科學が進歩するとも、軍備に於ける第一の要素が「人」であることに變りはない。兵員の素質能力、即ち體力、氣力、兵業に對する能力の良否如何は戰爭勝敗の重要要素である。この點わが國は現在決して自慢は出来ない。これに對する國家諸般の對策、即ち國民體育の振興、醫療の施設人口増加政策等緊急の要務である。

經濟に關する體制 皇國經濟根本の理念は、皇道に即する經濟であることである。即ち萬民をしてその處を得しむべきわが國ごゝりに即し、全國民が經濟奉公に参加し得る制度組織でなければならぬ。中間搾取を除き、不勞所得を排し、名

てその國防の一つに利用してゐる。英國は、英語を世界に普及し自由平和に基調を置く政治、經濟、文化を以て近世世界を經營してゐたと云つてもよい。わが國には英國系の教育を受け、英國的考への者が一番多かつた。前大戰後流行したデモクラシー思想もその一つであり、天皇機關説もその一つである。また一方にはソ聯の共產主義系のものもあつた。これでは國防國家の内部に大きな精神的缺陷があるわけである。従つて學問學理を始め、宗教、哲學、科學藝術、思想等に關してもわが國独自の指導原理が生れなければならぬ。これはわが國の學者に課せられた重大な使命である。

められ、従来の第一師管、第二師管等の數字別による呼び方は東京師管、仙臺師管等と師團司令部の所在地名による呼び方に變更、朝鮮所在の第十九師管區はこれを羅南師團管區、第二十師管區は京城師團管區と呼稱されることとなつたのである。

一方これと共に従來聯隊區司令部は、必ずしも、一府縣一聯隊區となつてゐなかつたのであるが、新國防態勢に即應し、聯隊區司令部の業務と地方行政との合理的統一整備をはかるため新たに一府縣一聯隊區制を實施することとなり、その第一著手として横濱(神奈川縣)大津(滋賀縣)豊原(樺太)の三箇所に聯隊區司令部を新設すると共に更に従來、各府縣の縣廳所在地に設置されてゐなかつた次の七聯隊區司令部は、いづれも當該縣廳所在地に左の如く移轉されることとなつたのである。

(移轉先)

新發田聯隊區司令部

(新潟縣) 新潟市
松本聯隊區司令部

- (長野縣) 長野市
- 丸龜聯隊區司令部
- (香川縣) 高松市
- 都城聯隊區司令部
- (宮崎縣) 宮崎市
- 久留米聯隊區司令部
- (佐賀縣) 佐賀市
- 大村聯隊區司令部
- (長崎縣) 長崎市
- 高崎聯隊區司令部
- (群馬縣) 前橋市
- (陸軍省情報部)

資金統制計畫

資金統制計畫は、いふまでもなく現時體制下に於ける綜合國家總動員計畫の重要な一翼をなすもので、いはゆる「物」或ひは「人」の面に對して、「金」の面から、これ等と緊密に照合した資金の需要と供給に關する綜合的組織的計畫を立て、以て戰時國民經濟の遂行運営に遺憾なからしめんとするものである。

昭和十五年度の計畫作成に當つては、他の諸動員計畫と同様

に、支那事變の處理と國際新情勢への對處を以てし、更にわが國將來の發展に備へんとする幾多の重要な國策の遂行に即應せしめると共に、一方に於ては資金自體の立場からその需要と供給を視み合せて、現下の財政經濟事情に照應せしめることを企圖した。かくて本計畫は公債の發行と消化、事業資金の所要と調達、滿洲及び支那に對する資金の供給、並びに新たな資金の蓄積に關して計畫を概定すると共に、この計畫實現のため必要な各種の措置の大綱を定めたのである。

計畫の基本方針

十五年度資金統制計畫の策定に當つては、次のやうな基本方針を維持した。

第一に、曩に決定された物資動員計畫等に照應せしめ、物價の騰勢を阻止するため昭和十四年度の計畫に比し實質的に相當の緊縮を斷行すること。

昭和十五年度の物資動員計畫は、前年度の計畫に較べてかなり充分考慮を拂つて配分した結果、その最も重要なものが公債所要資金となつてゐる。

新たな國際情勢に對處し、國防の安固を圖るためには、軍備の充實を始め政府の緊急缺くべからざる施策に支障なからしめこれに應ずる財政支出を圓滑に調達することが絶対に必要であるが、その財源の大半を形成する國債の發行と消化が緊密に照合せねばならない。しかして公債の發行は、その全額消化を伴はない場合には、通貨價値の維持および物價水準の確保に障害を來たし、その影響の波及するところ誠に憂慮すべきものがあることは何人も周知の事柄である。わが國は支那事變發生以來、巨額な公債を發行したにかゝらず、よくこれを消化して經濟力の強靱性を遺憾なく發揮したのであるが、それでもなほ若干の不消化額は残り、これが累増して日本銀行の手持國債は昭和十五年六月末には二十億圓を超えてゐる。

昭和十五年度は、新規に發行

り嚴密に査定され、また相當量の縮少となつてゐるので、これに照應するためには、資金統制計畫も亦前年度に較べ實質的に相當の緊縮を執行しなければならぬ。これは大いなる發展途上にあるわが國の現状から見ても遺憾なことではあるが、物資と資金との均衡を保持し、物價の騰勢を阻止するため避くべからざることであり、わが國戰時經濟の健全な發展といふ見地からは是非とも實行しなければならぬことである。

第二に、所要資金は専ら蓄積資金を以て賄ひ通貨の膨脹を極力防止すること

公債の消化に要する資金、事業に必要な資金、滿洲及び支那へ供給する資金は、専ら銀行、信託および郵便局等の金融機關や、その他の諸部面に新たに蓄積される資金を以て賄ふことに努め、兌換券の膨脹等の信用操作で造出された資金を以て賄ふことは、完全操業または過度操業の現段階に於ては嚴に慎まねばならない。

する國債は全額これを消化し、更に進んで日本銀行手持國債の若干を消化する計畫を立て、従つて他面から見て、昭和十五年度國債發行額は消化可能額の限度に止めることを企圖してゐる。それで豫算において豫定されてゐる國債發行額六十億圓と現實の發行額との間に差額が生ずる場合には、これを歳出の節減及び留保、租税及びその他一般歳入の増加等によつて處理するやうに計畫を定めたのである。

國債消化に關する所期の目的を達成するには、各方面に於て前年度以上の國債消化額を引受けねばならないが、これが成否は、豫算の實行、物價政策の貫徹に重大な關聯を有するわけであるから、各官廳の諸種の具體的方策に對し、國民各位の積極的協力は言ふに及ばず、特に各金融機關および事業會社等の組織的協力を切望する。

事業資金計畫

東亞新秩序の建設に邁進しつつあるわが國現下の狀態に於て

第三に、公債所要資金と事業所要資金との間にも、日滿支各所要資金の間にも相互に適正な均衡を保持せしめること。蓄積された資金を資金需要の各部分に配分するに當つては、それ等相互の間に適正な均衡を保持することが肝要であり、これによつて始めて軍備の充實、生産力の擴充、大陸の建設、國民生活の戰時水準確保が支障なく併せ遂行されることになる。

第四に、資金の蓄積に當つては資金需要を充足する點のみならず、餘剩購買力吸收の點にも留意し、更に有效適切な措置を講ずること。今次の計畫に於ては、需要資金はすべて蓄積資金を以て賄ふ建前をとつてゐるが、民間に散布された資金を回收せんとするに當り、特に物資と脱み合せて極力餘剩購買力を吸収せんとする方針に鑑み、蓄積資金として概定された計畫額はこれを達成すべき最少限度の數額とし、更に計畫以上の蓄積額を得ることにあらゆる努力を捧げなければ

ならぬが、それに關しては更に特別な工夫を考案し、これを斷乎たる決意の下に敢行しなければならぬ。

第五に、計畫の實現を確保するため資金統制に於ける官民協力體制の整備強化を促進すること。

計畫は單に官廳で立案するだけでは机上案に終る。計畫は豫測であり可能であると共に、指令であり實現でなければならぬ。しかも、その指令が各官廳を通じて業務の實際を擔當してゐる民間諸機關に浸透し、その實現のために組織的に活動を展開するには、是非とも民間諸機關が緊密に組織化され、それを基礎として官民協力體制が整備強化されることが喫緊の要務といはねばならない。

公債計畫

右根本方針に基づいて畫定された資金は、需要供給共にその總額は約百二十四億圓となり、資金需要を公債所要資金、事業所要資金および滿支供給資金の三本建とし、それらの均衡に

は、軍需産業や基礎産業の生産力擴充に對して巨大な資金を要するものであるが、昭和十五年度の資金計畫中には、これが供給につき充分の考慮を拂ふと同時に、一般的には最近の物資の状況に鑑みて過剰投資を避け、既存設備の性能増進に努める方針をとつてゐる。従つて産業資金の所要は、原則として緊要な軍需産業、生産力擴充計畫産業及び國民生活の安定確保に缺くべからざる産業のみ認め、その調達に關しては自己金融の原則を一層徹底せしめ、株式、社債及び、借入金による調達は、右の軍需産業、生産力擴充計畫産業及び國民生活必需品産業以外には殆んどこれを認めないことにした。

と熱意が要求されるのである。 **對滿支供給資金** 新日本の經濟目標は日滿支を一帶とする綜合的組織的計畫經濟の確立にあるが、滿洲國に於て實施中の産業開發五ヶ年計畫は、日滿一體の生産力擴充計畫の一環をなすものであり、支那に於ける石炭、鐵鋼、棉花、鹽等の重要資源の開發と、これに必要な交通運輸の整備等は、東亞經濟建設の進展を如實に物語るものである。しかして昭和十五年度の資金統制計畫における對滿支供給資金は、右の産業開發に對應すると共に、日滿及び日支の貿易計畫及び國際收支計畫との關聯において計畫され、物資、物價、通貨等各般の事項を考慮して彼等の收支を調整し日滿支經濟の健全な發展を綜合的計畫に策定せんとしたのである。

資金蓄積計畫

右に述べられた資金需要に對應して、昭和十五年度の資金蓄積額は百二十四億圓と畫定された。これは必ず達成すべき最少

勞務動員調整

限度の數額であり、その成否は直ちに前記各種の需要資金の調達や、一般購買力の吸收に至大の影響を及ぼし、延いては現下の國の財政金融政策の圓滑な遂行を左右するものであるから官民一致して目的到達のためにあらゆる努力を拂はねばならぬ。特に各種金融機關等は蓄積目標額を設定し、これが達成を確保し、貯蓄組合はこれを整備擴充すると共に、一般に戰時國民生活の刷新を斷行し、これによつて生ずる餘剩購買力の吸收方策を講じ、なかんづく都市の股販産業および農山漁村の好況部面等、特に購買力吸收の必要があると思われる方面に重點をおき、以て蓄積計畫額以上の實績を擧げるやうに努めなければならぬ(企畫院)

勞務動員計畫は物資動員計畫その他の總動員計畫と相俟つて我が國の重大使命たる東亞新秩序建設を遂行するための「人」の

動員計畫であることは言ふまでもない。以下十五年度勞務動員計畫概要について述べよう。

まづ我が國勞務の需給狀況は滿洲事變を契機として異常な變化を示して來たが、殊に今次支那事變が勃發すると共に、勞務需給は著しく不均衡を來すやうになつたのであつて、今日、到る處に人の不足が叫ばれ、求人難が懇へられてゐるのは即ちこれがためである。

急激に勞務需要が増加したためこの需給の不均衡を是正し東亞新秩序の聖業の完遂に遺憾なきを期し、勞務の統制運用を圖る目的を以て、昭和十四年度より綜合的に勞務動員計畫を設定實施したのであるが、各産業部面に現はれてゐる實績等から見ても、勞務需給の逼迫度はますます加はりつゝあり、必要勞務の確保については、格段の措置を講ずることを要する事態に立到つた。また勞務の數量の確保が困難になつて來てゐるばかりでなく、最近では勞働力の生産

性、特に勞務者の資質の低下の傾向も加はりつゝある實情にあるが、これは刻下の要務たる生産力の飛躍的擴充にとつてはまことに憂ふべき現象であつて、速かにこれに對する萬全の方策を樹立しなければならぬのである。

從つて昭和十五年度の勞務動員計畫の設定に當つては、その根本方針を國家總力發揮に遺憾なからしめることに置き、特に軍需を充足すること、生産力擴充計畫を遂行すること、輸出を振興すること、國民生活の必需を確保することに要する勞務の需給調整を適確ならしめ、且つその勞務の質的増強を圖ることを主眼として勞務配置の適正、能率の増進等に關する各般の統制運用方策を刷新整備することとした。この方針に基づき、一般勞務者の需給調整に關する事項、技術者、熟練勞務者の需給調整並びに技術の振興に關する事項、勞働力の保全増強、能率の増進に關する事項等に互つてそれら具體的對策を設定した

のである。

一般勞務者の需給

一般勞務者の需給計畫については、昭和十四年は、内地だけについて設定したが、十五年度は、朝鮮、臺灣、樺太、南洋群島に於ても最近勞務需給の逼迫の度が増はりつゝある現狀に鑑み、それら計畫を設定して需給の計畫的調整を行ふこととした。これを内地について見れば十五年度は特に農林水産業の勞務需給をも計畫化することにしたのであるが、まづ農業以外の分としては、軍需産業、生産力擴充計畫産業及びその附帶産業、輸出及び必需品産業、運輸通信業並びに土木建築業に於ける需要増加數と、減耗の補充に要する員數とに、内地より滿洲に送出する開拓民の員數等を加へて、男女計約百十五萬と概定したのであつて、前年に比して多少の増加を見たのである。

この新規需要數に對しては、新規小學校、中等學校卒業生、未就業若者、女子無業者及び物資動員の強化、奢侈品の製造禁止

等の影響による離職者から極力これを充足することに努めるのであるが、なほ殘餘の不足は青少年雇入れ制限令の實施により勞務を削減する業務から出る勞務者、朝鮮からの移住勞務者を以て之を充足する方針をとつた。

右の中、第一に最も重要な勞務給源は新規な小學校卒業生であるが、その就職については適性に應じその配置を一段と適正化することが肝要であつて、これが就職の指導幹旋及び募集の統制をまず強化しなければならぬ。また中等學校卒業生も、最近時局産業に一般勞務者として就職する者の數が増加しつゝあるので、これが就職について一層指導の徹底を圖る必要がある。

次に就職の意思を持つてゐながら、未だ自己の職業を決定しないのである未就業若者や、一定の職業を有しない者は極力緊要な産業に就職せしめる必要があるが、特に結婚前の女子で就職し得る狀況にある、いはゆる女子無業者は、男子勞務の不足の要がある。

第四に十五年三月より必要勞務の充足を確保するため、勞務削減可能な業務については、青少年雇入れ制限令を實施してその雇入を制限してゐるのであるが、これ等の業務より出る勞務者を、従来の轉職率の實績等より推定して特に勞務の給源として見込み、これ等の業務から轉出する者は、なるべく緊要な産業に轉職するやう指導を加へることとしてゐる。

第五に勞務給源として考へら

れるのは、農業より供出の出来
る勞務者である。事變發生以後、
農村よりは應召、時局産業への
勞力供出等によつて相當多數の
勞力が引上げられてゐるが、特
に軍需産業等の擴充強化の緊要
性に鑑み、農村より時局産業の
勞務者を求めることはやむを得
ないのである。従つて十五年度
に於ても、相當數これを豫定し
なければならなかつたので、従
來と同様に農村方面の之に對す
る協力を求めなければならぬ
しかしながら農村については、
比較的勞力の餘裕がある處より
供出し、都會地に近接せる一部
の農村の如く、青少年が急減し
農業生産に支障を來す虞ある處
から供出するやうなことがない
やうに、その供出については全
國的に計畫化することにしてゐ
る。

以上の給源より供給される勞
力で、前記百十五萬人の新規需
要を充足することにし需給の適
合を圖つたが、右の給源中、未
就業者、無業者、勞務節減可能
なる業務の従事者等については
極力緊要産業に就職するやう特
別の措置を講ずると同時に、就
職の指導斡旋、募集の統制に當
つては、物資動員その他の總動
員計畫と同様、本計畫に於ても
一層重點主義を強化し、特に緊
要なる事業については、極力勞
務不足による支障なきやう特別
の勞力を拂ふことにした。また
勞務者の移動が勞務需給の調整
上に少からざる支障を與へてゐ
るのみならず、能率の維持増進
にも影響する處があるので、こ
れが防止の徹底を期することと
した。

次に十五年度の計畫に於ては
主要農林水産物生産の確保の重
要性に鑑み、その勞務について
は格別の考慮を拂ひ、前述した
やうに農村から農村以外に勞務
を供出するに當り、地方的偏倚
を避け、全国的に之が計畫化を
圖つた外、農業勞務者の減少に
對する補充のため新規小學校卒
業者中より所要の員數を確保す
ることとした。また特に農繁期
については、作業及び施設の協
同化、共同托兒、共同炊事施設
の充實、蓄力、機械力の積極的
利用の促進その他の方策に依り
農村内に於ける勞力使用の合理
化に努めると同時に、農村相互
間の集團的移動勞働の計畫化、
學生生徒の勤勞奉仕隊の供出、
商工業従事者の一時歸農等の都
市より農村に對する協力の計畫
的措置をも講ずることとしたの
である。

以上は内地に關する事項であ
るが、朝鮮、臺灣、樺太、南洋
群島については、大體内地と同
様の方針で需給計畫を設定した
のであつて、樺太及び南洋群島
に於てその勞力の一部を内地及
び朝鮮からの移住勞務者に求め
る外は、大體それ／＼その地域
内で自給自足し得る状況にある
のである。

この新規學校卒業者の割當制
度は、さし當り學校の擴充によ
り卒業者がどし／＼出るまでは
各地域、各企業の需要數、その

事業の緊要度及び技術者配置の
現狀等を検討して、一層その割
當の適正圓滑を期し、出來得る
限り技術者不足に因る支障を少
くしなければならぬが、その
他に於ても不就業技術者の就職
及び使用の勸奨斡旋の促進、技
術檢定制度の擴充等の方法によ
り技術者の補給の方策を講ずる
と共に、優秀熟練勞務者の格上
使用、同一系統企業間、親工場、
下請工場間等に於ける技術者の
融通、その他の能率的使用の方
策を圖らなければならぬ。

熟練勞務者についても、その
不足の程度は略々技術と同様で
あつて、十四年から特に工場事
業場技能者養成令を制定して熟
練勞務者の自家養成に努めてゐ
るが、これによつて熟練勞務者
が多數出るまでは技術者と同様
の措置を講じなければならぬ
い。尙ほ技術者、熟練勞務者に
ついては、萬やむを得ない必要
が起る場合に於ては徵用の手段
によることもあるであらう。
以上述べた如く、技術者、熟
練勞務者の不足が甚だしいにも

拘はらず、軍事上に於ても生産
力の擴充の上に於ても、わが國
産業の技術水準の向上は刻下喫
緊の要務である。従つて極力技
術者、熟練勞務者の短期養成を
圖ると共に、新入勞務者、經驗
勞務者、熟練勞務者、技術者等
從業者各層に對して綜合的且つ
組織的に技術教育の振作徹底方
策を講ずることとした。尙ほ技
術の公開、競技等の方策により
技術の振興を圖ることも亦必要
であるかと、これ等に關しても
措置することとしてゐるのであ
る。

技術者及び熟練勞務者について
は、格別重點を置きそ
の對策を可及的に具體化し各種
の方策を綜合實施して之がため
に萬全を期することとした。
まづ第一に勞務者の精神の陶
冶鍛鍊、規律の訓練及び生活の
刷新に關しては、寄宿舎の充實、
寄宿舎生活の指導の徹底を圖る
と共に、指導擔當者の養成、工
場家庭間の連絡の緊密化、健全
なる慰安等の生活指導施設の充
實等の方策により、戦時生活の
實踐を期することとしてゐる。
また體位の増強、災害の防止、
勞働過重の抑制等に關しては、
體育施設、保健衛生施設の整
備、特に新入勞務者に對する安
全教育の徹底、勞働時間、休日
休憩の合理化等の方途を講ずる
ことにした。なほ特に年少者や
女子の就職がますます増加しつ
ゝあるので、この方面に對する
特別の考慮と保護を加へること
にしてゐる。

次に能率の増進については、
技術の振興、教養訓練の徹底、
生活の刷新、保健衛生の充實等
の諸方策を綜合して、その實效

ることにしてゐる。労働力の保全増強、能率の増進を圖る上には、以上述べた諸方策が綜合して實施されなければならぬ。そしてその實效を確保するには、産業報國運動の擴充強化と勞務管理の刷新とがその樞軸ともなるから、勞務動員の遂行に協力させ、その使命の完遂を期するために強力なる産業報國運動の中央及び地方機構の整備確立を急ぐこととした(企劃院)

商業報國運動展開

商業報國運動については、既に全国各地の商業者によつて商業報國會等が組織され、積極的運動を展開してゐるものも少くないのである。しかし、長期建設戦下に於ける商業の重要性に鑑み、商業を國家總力戰體制へ動員する、いはゆる商業動員の爲めには、全商業者にいま一層の商業報國の實を要請されるのである。こゝに商業報國運動を全國的な組織ある運動とし、商業者自體の運動として展開することになり、官民を擧げてその

積極的進展と指導とに乗り出すこととなつた。

商業報國運動はわが國現下の客觀的情勢に基づく國家的な要求と、商業者の自主的更新の必然的要从から發したものである。従つてその本質上、國家の適切な指導の下に、商業者自體が自主的に推進して行く運動でなければならぬ。

本運動の目的は、商業報國の實踐射行によつて皇國の興隆に貢獻するために、商業理念の更新を期し、その具現方法として商業者の組織を整備して商業新秩序を確立するにある。

商業報國運動の綱領は左の通りである。
一 我等は商業本來の尊き使命に鑑み、商業報國の赤誠を披瀝し、實踐射行以て皇國の興隆に貢獻せんことを期す。
一 我等は營利のみを主眼とする商業の舊殻を打破し、公益的的使命を中樞とせる新しき商業倫理の確立を期す。

一 我等は、商業本來の職能を完遂せんが爲め、商業者の組織を整備し商業新秩序の確立を期す。

本運動の實行組織としては、全国各地に商業報國會を組織し商業従事者を全面的にその會員とし、店主は勿論、その家族従業員及び店員を擧げて、商業報國運動に動員せんとするのである。

商業報國會の組織は、既設の商業組合を中心とし、商業組合の設立されてゐない業種又は地區にあつては既存の商業者團體等を中心とする。或ひはまた地域的に報國會を組織する。何れにしても、運動の實踐上最も有效適切な組織體たることを目標として、その組織に當らねばならない。
また本運動の實踐上、商業青年層の動員は必須不可缺の問題であり、青年は次代の商業發展上重要な鍵をなすものであるから、原則として商業報國會には必ず青年部を設け、商業青年層の組織を結成し、商業報國運

動に青年層を全面的に動員するやうにしないでならぬ。その指導と實踐については格段の留意を以つて當られんことを切望する。

これらの商業報國會を會員として、各道府縣毎に道府縣聯盟を結成する。道府縣聯盟は商業報國會と緊密な連絡を保ち、統制ある指導の下に本運動の實踐徹底に萬全を期せんとするものである。

更にこの全國の各道府縣聯盟を會員として、商業報國中央聯盟を組織する。中央聯盟は本運動の實踐徹底の最高機關として全國的に指導、連絡、統制を圖り、政府及び國民精神總動員聯盟本部等と連絡、協力して全國的且つ商業全般に亘る運動の自主的、積極的、展開を期するのである。

わが國經濟の客觀的情勢に鑑みて必要な事項をとりあげ、實踐射行せんとするものであり、運動の本旨に徴して徒らに抽象的な御題目に終始することを避ける。(商工省)

胃腸栄養

わかかきと

【適應症】

各症食慾不振、腸胃内異常酸酵、胃腸力タル、胃酸過多症、胃アトニー、胃擴張、常習便秘、宿醉、結核、貧血、流行性感冒、浮腫、糖尿病、神經衰弱、脚氣、各型栄養障礙、發育不全小兒、便秘、粘便、下痢、惡阻、乳汁不足

各地藥店ニアリ...三十日量 一圓六十錢

會の兒育と養榮・京東・元賣發